弟が俺で姉がキュルケ

sigemoid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
弟が俺で姉がキュルケ

【Ｎコード】
Ｎ３７４３Ｔ

【作者名】
ｓｉｇｅｍｏｉｄ

【あらすじ】
神様の操作ミスによって死んだ主人公が“ゼロの使い魔”の世界に転生します。その世界で自分にできることを精一杯頑張ることをモットーに生きていく物語です。
この物語はゼロの使い魔の二次創作です。オリジナル主人公、オリジナル設定で、独自解釈、原作組の性格変更などが多々あります。それでもいいという方はぜひ見ていってください。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

初めて小説というには拙いものですがみなさんの二次創作に触発されて書いてみました。

かなりの駄文、多くの誤字、脱字などがあるかもしれませんが、よければ読んでいただきたいと思います。

プロローグ

端的に言うと俺は死んだらしい。

俺は佐藤焔（さとうほむら）。２５歳。中小企業でサラリーマンをやってて、趣味の釣りやゲーム、プラモ作りなどをして日々それなりに楽しく生活していたのだが、そんな俺に人生の転機というより終焉?が訪れた。

会社からの帰りに自転車に乗っていたら、車が歩道に乗り上げてきて避ける暇なく車とぶつかって、そこで俺の意識は途切れた。

次に目を覚ました時は地平線まで真っ白な世界にポツンとソファーとテレビなどが置いてある所にいた。そしてソファーに座っていたやつが立ち上がり、俺の方を向いて、

「君、今の状況理解できる。あ、心の整理とかは別で。」

「まあ、車に轢かれて死んだのかなと思います。」

「正解!君は今、世界の狭間にいます。」

「世界の狭間?あの世とか天国とか地獄じゃなくて?」

「そう。本来ならば閻魔君の所に行って天国か地獄のどちらに行くかきまるんだけど。
君の場合はちょっと特別なんだよね。」

「はあ。特別って何ですか?」

「本当なら君は後７０年後にこっちにくる予定だったんだけど・・・

」

「だけど？」

「ごめん。こっちの不手際で誤って君を殺しっちゃんだ。」

「はあ？ふざけんな！なんだそりゃあ。って言うかてめえ誰だよ！」

「私？神だけど」

「神だと？じゃあ、俺を生き返らせろよ！」

「それは無理。一度死んだ者は生き返らせることはできないよ。例えそれが神でもね。」

「まじか。まだユニコーンのプラモ作りかけなのに。それにまだ作ってないプラモも。ああ、第２次Ｚの後篇やりたっかったな。そういえば、夏のボーナスでシーバスタックルを買おうと思っていたのに。あ、夏にポケモンの映画見に行きたかったのに。それに・・・」

「ポケモン！？君、ポケモンやってるの！？」

「え、ええ。初代からブラック・ホワイトまでやってますけど。」

「あれ、面白いよね。ついつい、やりすぎちゃって下界の操作を間違えちゃったくらいだよ。」

（ん？今、変な言葉を聞いたような・・・。まさか）

「その下界の操作ミスって、まさか俺が死んだことじゃないですよね。」

「よく分ったね。」

「・・・あ」

「あ、じゃねえよ！あ、じゃあ！
てめえがポケモンに現をぬかしてたから。俺が死んだのか。ふざけんな！」

「ほんとにごめんね。そのお詫びと思って君をここに呼んだんだよ。」

「どういうことだよ。」

「君は普通なら後７０年生きられたわけだ。そこで次は2次元のような世界に転生させようということになったわけだ。」

「まじか！じゃあ、ガンダムの世界とかポケモンの世界とか魔法が使える世界に転生できるってことか！」

「そういうこと。しかも、今の記憶を持ったまま、という特典付き！」

「おお！すげー！さすが神！」

「照れるな／／／」

「で、どこに転生できるんだ？」

「ちょっと待って。いまから決めるよ。・・・こっちのテレビ画面

を見て。それで好きな数字を1から100の間で選んで。」

「なんで1から100なの？」

「君の頭を覗かせてもらって、転生可能な世界を抜粋した結果だよ。その中にはもちろんガンダムの世界やポケモンの世界があるよ。」

「ふーん。じゃあ、適当に1で。」

「わかったよ。じゃあ、画面見ててね。」

そういうとテレビ画面が切り替わり、大量の縦の線とその縦線を所々繋ぐ横線の画面に切り替わった。

「あみだくじ？」

「そう。いきなり、決定！・・・じゃあ、面白くないでしょ。」

「いや。べつにいいけど。」

画面のあみだくじは俺が選んだ1番からどんどんしたに降りて行った。そして、

「君は“ゼロの使い魔”の世界に生まれ変わることが決まりました。」

「ゼロの使い魔か。俺、アニメは見たけどよく覚えてないし、原作は読んだことないんだよな。まあ、なんとかなるか。で、生まれ変わった時の条件は？」

「そうだね。魔法が使える世界だから、魔法は使えるようにしておこう。ちなみに生まれるのは原作開始の１７年まえだよ。」

「原作開始の１７年前？ってことは原作で１７歳ってことか。おもいっきり原作に関わることになりそうだな。」

「そうでもないかもよ。もしかしたらド田舎で全然関わらないかもしれなし。まあ、そこは生まれてから確認してよ。」

「わかった。で、二次創作でよくあるチート能力とかは？」

「ないよ。」

「は？」

「だから、ないって。今回の別世界への転生に加えて前世の記憶ありで君の残りの人生７０年分をほとんど使っちゃったからね。」

「まあ、ないならないでいいけど。」

「あ、でも安心して君の潜在魔法能力は最高ランクになるように頑張るから。」

「ああ、そうかい。がんばってな。」

「その他に質問は？」

「そうだな。・・・あ、性別はどうなるんだ？」

「男でも女でもいいよ。どうする？」

「男で。いままで男で生きてきて、いきなり女になってもどうかと思うしな。」

「うん。他には?」

「とくにないな。あとは生まれてからなんとかするよ。」

「うん。じゃあ、最後にこっちからいいかな。」

「なんだよ?」

「・・・最初にヒトカゲ選んだらカスミが倒せないんだけど、どうしたらいい?」

「・・・知るか!なにいってｙ

「いってらっしゃ～い。」

神がそういうと俺の足元に穴が空き、俺はそこに落ちた。
落ちた穴がどんどん小さく途中、神が穴を覗きこんでいた。いたずらが成功した子供のような満面の笑顔で。

そして、おれの意識はそこで途切れた。

プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグが終わりました。

良ければ次も読んでいただければ幸いです。

ご意見、ご感想お待ちしています。

俺、ゼロの使い魔の世界に転生しました。（前書き）

こんにちは。こんばんは。2話目できました。

会話文は基本主人公が聞こえていることを書いています。
なので主人公に聞こえてなかったり、聞いてなかったり、なにかの要因で妨害されるとそれをわざと書かないようにしてあります。

読みにくかったらすみません。それでもいいと思える方は読んでみてください。

俺、ゼロの使い魔の世界に転生しました。

神に落とされてからどれくらい時間が経ったのかわからないが、真っ暗だった意識に少しずつ光が増え始めた。そして、

「おぎゃあ！おぎゃあああ！」

「お・・ま。・・しょはおん・・・・す。」

「こ・・・げん・・いいぞ。」

（うるさくてなに言ってるのかわからん。しかもなにか音が反響してるみたいで変に聞こえる。）

「つぎ・・とこのこで・よ。がんば・・したね。」

「この・・なかない・。どこかわる・・か？しきゅうディ・・トマジッ・をたのむ！」

「はっ！ディテク・・ジック！・・・からだにいじょうはみ・・ません。いた・・けんこう・・。」

（なんだまだ目が開けられなくて周りの状況が分からないんだけど。俺の周りが騒がしいことからどうやら俺が通常とは異なる反応をしているためになにやら慌てているようだな。）

「おぎゃあああ！おぎゃあああ！」

（そうか！生まれたばかりの赤ん坊は普通大声で泣くものだったけ。

そういえばテレビか何かでやってたけど、泣かなかったらお尻を叩いても泣かせていたな。じゃあ、今俺が泣かないのはかなりおかしいのか。これでも俺に尻叩きなどがされないのはたぶん貴族の子供をおいそれと叩けないからだろうな。だったら・・・）

「・・・おぎゃあ。おぎゃあああ。」

（この年？になって大泣きするとかはずかしすぎる。）

「おお！なきはじ・・したよ。よかった。しかしずいぶんゆ・・りしたあかちゃ・・すね。」

「・くさま。ふたかた・・げんきなおこさ・ですよ。」

「だんなさ・・よんできま・。」

「おぎゃああ。おｇｙ

（お？俺の父親になる人がくるのか。どんなｈ

いきなりバーンという音（扉が開いた音か？）とともに誰かが近づいてくるのがわかった。そしてその人物であろう腕が俺と同時に生まれたらしい誰かを抱き上げた。

「このこが・たしのあとをつぐ・か。おお、りりし・かおをし・・るではな・か。このこが・たしのよんば・め・むすめか。・・・とてもかわい・な。とくに・のくちもとなどおまえ・そっくりではな・か。」

「おぎゃあ。おぎゃあ。」

（なかなかダンディな声だな。つうか生まれたばかりの赤ん坊の顔なんてしわしわで凛々しいとか分んないと思うんだが。そしておそ

らく俺の双子の姉?である子に対する態度から親バカとわかるな。
っていうか3人も姉がいるのか。そして俺が長男か。いろいろ大変なことになりそうだな。)

「・し。きめた。おとこのほ・は・・るむろ・・とい・なに・よう。」

「おぎゃああ。おぎゃあ・・。」
(なんか。眠くなってきたな。今俺の名前が決まったようだが。よく聞き取れなかった。まあ、今後何度も聞くことになるだろうから、そのときに覚えればいいだろう。)

「そして、おんな・こ・きゅるけと・・な・・よう。」

「ぎゃ?・・・おぎゃああ。」
(ん?きゅるけ?ゼロの使い魔のメインにそんなやつがいたような。・・・まさかな。)

「・いなま・ね。あなた」

「おぎゅあ・・・。」
(今の俺の母親になる人の声かな?優しそうな感じだな。もう眠くなってきた・・・)

「だんな・ま。・・・やさまが・まれてつ・るぷすと・けもあんた・・すね。」

「・・・・・・おぎゃ?!・・・おぎゃああ。おぎゃああ。」
(・・・・・・は?!今誰かツェルプストーとか言わなかった。じゃあ、ここはあのキュルケの家なのか。キュルケに男兄弟とかいた

か？・・・わからん。もしかしたら俺が転生したことでなにか変ったのか？）

「うむ。おまえがじき・・しゅだぞ。ふ・・あ。」

「あなた。まだ・やいですよ。」

「おぎゃああ。おぎゃあああ。」

（まじかよ神さんよ。おもいっきり原作に関わるフラグ来てんじゃねえのか？どうすんだよ。俺は片田舎でまったり生活しつつちょっと魔法が使えるくらいでよかったのに。まあ、生まれを指定できなかったし、そこはしょうがないのか？・・・まあ、なんとかなるだろう。しかし、泣きっぱなしっていうのは疲れるな。・・・・もう意識が保て・・ない・・・）

「すう、すう。」

「あらあら。二人とも寝ちゃったのかしら。」

「これからどんな風に育っていくのか楽しみだな。キュルケ！ヴァルムロート！」

俺、ゼロの使い魔の世界に転生しました。（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

主人公の名前はかなり適当です。キュルケの弟＝火が得意＝じゃあファイアっていう名前にしよう。って感じです。

これから幼少期に入ります。

ご意見、ご感想があればよろしくお願いします。

滑舌（かつぜつ）を良くするには早口言葉が良いらしい（前書き）

こんにちは。こんばんは。

主人公が生まれてからいきなり2歳になりました。

前回は会話文は主人公が聞こえる範囲しか記載しないといいましたが、今回は声を発する側についてです。
こちらも会話文の中は基本人が声を発していることしか記載していないので、今回主人公が話している言葉が分かりにくいことがあるかもいしれませんがご了承してください。
小さな子供が頑張って会話していると脳内変換してくだされば幸いです。

ハルケギニアがハルゲニアになっている、主人公のミドルネームが女性性だと指摘を受けたので修正しました。

滑舌（かつぜつ）を良くするには早口言葉が良いらしい

「はじめまちゅて。わちゃし、て・つえ・・え・・・。てるぷすとーけちゃくしのば、べぇ、ばるむろーと・しゅてるん・ふりーどりひ・ふぉん・あんはるつ・てるぷすとーです。きょうはきていたーきありあとーござーます。」

「きゅーけです。ありがとーござーます。」

「おお。しっかりした子だな。どういたしまして。二人ともお誕生日おめでとう。」

「本当にしっかりした子達だ。うちの息子などもう４つになるのにまだ満足に挨拶も言えんというのに。ツェルプストー辺境伯は良いお子さんをお持ちになりましたな。」

「いえいえ。とんでもない。それにそちらのお子さんはすでに魔法の練習を始めたそうではありませんか。将来有望ですな。」

「いやいや。まだ始めたばかりで杖との契約もできていないようですがね。」

「謙遜なさるな。杖との契約は・・・

「そんな。そちらは何歳から・・・

（はあ。・・・話が長い。）

俺がツェルプストー家に生まれて2年経ちました。この2年間はい

ろんな意味で大変でした。

生まれたばかりの時は頭ははっきりしているのに体をまともに動かせなかったり、食事はこっちの世界には哺乳瓶というものがないのか母さんの母乳だし、しかも母さんはかなりの美人さんなのでかなり恥ずかしいと思ったり、でも次第に慣れて、いつしか（あ。この人、俺のお母さんなんだ。）って思えるようになったりしました。

そしておむつ換えが一番大変でした。こっちのおむつは布製（しかしかなり肌触りが良いので結構いいものを使っていると思われる。）なので、水分は吸収し切らないのでお尻が蒸れて気持ち悪くなるし、そのことを伝えようにも方法が泣くし、換えられてる最中は現実を直視できないくらい恥ずかしいやら情けないやらで、また泣いちゃいました。この記憶は黒歴史として早めに忘れられるように頑張りたいと思っています。

1歳の誕生日は家族だけのささやかなものだったのだが、それまで自分のことだけで一生懸命で分らなかったんだけど・・・。

俺、どうやら母さんが三人いるみたいなんだよね。ハルケギニアは一夫多妻制だったのか。知らなかったな、二次創作の中だけの設定かと思ってた。まあ、一応地球でも一夫多妻制はあったけど。で、俺の実の母さんと他に2人の母さんがいるんだけど、外見は実の母さんはオレンジ色っぽい髪と瞳の色で色白の肌をしていて、あとの二人が燃えるような赤い髪と瞳で褐色の肌をもっていることがわかった。もちろんみんな美人さんです。性格はまだ把握してない。

そうそうキュルケは双子の姉になるんだけど、他にも3人の姉がいるんだよね。3人の母さんにそれぞれの子供らしい。キュルケを含め4人とも可愛く、外見はみんな燃えるような赤い髪と瞳で褐色の

肌なんだよね。
父さんの外見が燃えるような赤い髪と瞳で褐色の肌だからかな。

俺はというと燃えるような赤い髪とオレジン色の瞳に日本人みたいな肌の色をしています。両親が美男美女なので外見はイケメンになるはず。ガッカリ王子みたいにならないように努力しよう！

そして今日は俺とキュルケが2歳になったので初めて大々的な誕生会を開くことになりました。

その際に数日前から母さん達に挨拶の練習をやらされました。

体は2歳だが、頭はもう25＋2歳なので覚えるのは簡単でしたが、ひとつ問題がありました。

それは2歳でいろいろ言葉がしゃべれるようになっても、まだ口の発育が十分ではないために、

「キュルケ、ヴァルムロート。こんにちは。って言ってごらんなさい。」

「こにゃーちゃー。」
（舌が全然まわらん。）

「ちゃー。」

「ありがとうございます。は？」

「あーがとーごぜーます。」

（思ったように声にならん。いままで気にしてなかったけど、まずいかな？）

「あーが・・・ます！」

「ふふ。仕方ないわね。次頑張ろうか。」

「ヴァルは結構ちゃんと言えてるな。キュルケは元気があっていいぞ。」

「かわいいわね～。」

（それでいいのか？母さんたち。まあ、2歳だしいいのかな。）

ちなにみ『ヴァル』は俺の名前『ヴァルムロート』の略でニックネームみたいなものだ。

そんなこんなで当日を迎えたわけだが、さすがに結構な数の人が来てるな。父さん辺境伯とか言われてたけど貴族としての位は結構高いのかな。

大かた挨拶も終わった頃、キュルケがうとうとし始めたので、

「ちちーえ。もーねむくなってきまーた。きゅーけもねむそー。」

「うん。もうそんな時間か。よく頑張ったな。えらかったぞ。ヴァルムロート、キュルケ。」

「あい。」

（はいっていえないのかよ、俺。）

「誰か、ヴァルムロートとキュルケを寝室に。」

「はい。かしこまりました。いきましょう。ヴァルムロート様。キュルケ様はこちらへ。」

「頼む。」

キュルケを抱きかかえたメイドさんと一緒に寝室（俺とキュルケ用）に行って、着替えさせてもらい、布団の中に潜り込んだ。

キュルケももぞもぞと布団の中に入ってきて。

「おやすみなさいませ。ヴァルムロート様、キュルケ様。」

一緒に来たメイドさんがきちんと布団をかけて、部屋から出て行った。

「おやしゅみ、きゅーけ。」

「おやしゅみ、ばる。あーがと。」

「ん。」

「・・・すう。すう。」

キュルケの寝息を聞きながら、なぜお礼を言われたのかや早く滑舌（かつぜつ）を良くしなければなどを考えつつ、俺の意識はどんどん途切れて行った。

なぜかとてもいい夢を見た気がした。

滑舌（かつぜつ）を良くするには早口言葉が良いらしい（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から主人公の会話も読みやすくなります。というか、小さな子がどんな言葉づかいをするかを考えるのが一苦労でした。まだまだですね。

ご意見・ご感想お待ちしております。

外伝：主人公の名前について（ストーリーとは関係ありません）（前書き）

こんにちは。こんばんは。

以前させていただいたプチアンケートの結果です。
いろんな方の意見を参考にしつつ、主人公の名前を改めて考えました。
自分の意見が反映されてないじゃないか！と思う方もいるかもしれませんが、ご了承のことお願いします。

外伝：主人公の名前について（ストーリーとは関係ありません）

主人公の名前変更について

主：この二次創作の主人公
作：二次創作の作者

主「なあ。俺最初ファイアって名前だったよな。」

作「そうだよ。」

主「なんでファイアって名前にしたんだよ？」

作「え？ツェルプストー家に生まれるって設定にして、調べたらツェルプストー家って『火の系統の名門』ってあったから。火＝ファイアーからとった。」

主「安直だな。」

作「まあね。だから、英語とかドイツ語とかそこまで考えてなかった。」

主「なんでドイツ語？」

作「なんでもツェルプストー家があるゲルマニアはドイツが元になっているらしい。」

主「そうなのか。」

作「だから、『ファイア』なんて英語の名前はおかしいって指摘を受けまして・・・」

主「だから、名前のプチアンケートをやったのか。」

作「そう。その間ドイツ語の名前とか調べてて、そう言えばスパロボってドイツ語が多いんだなって思った。」

主「アルトとかヴァイスとかか。というか、オリジナル達はだいたいドイツ語からとられてたな。」

作「そうそう。でも、さすがに機体名は付けなかったよ。アルトはなやんだけど。」

主「悩んだのかよ。てか、アルトって『古い』っていみじゃねーかー！『火』の関係の名前にするんじゃなかったのか？」

作「それなんだけど、別に『火』にこだわる必要はないのでは？って意見もいくつかあったので、ちょっと考えなおしてみた。」

主「それで？」

作「うん。冒頭で神が『ポケモン』やってたじゃん。」

主「ああ、やってたな。ヒトカゲをパートナーにしたとか・・・。まさか！」

作「いやいや、ヒトカゲは名前にしなかったよ。ヒトカゲは。」

主「よかったー。ん？ヒトカゲは？」

作「そう。『ラファドス』って名前にいったん決まりかかったんだけど。響きが怪獣っぽいからやめた。」

主「おい。その『ラファドス』ってなんのポケモンだよ。」

作「ファイヤー」

主「おもいっきし『火』じゃねーかー！」

作「まあね。あと、最初の『火』を単純にドイツ語でいって、『フォイア』にしようかと思ったけど。それも面白みがないしね。ホウオウとかでもよかったんだけど、ホウオウは世界共通で『Ｈｏ－ｏｕ』だからやめといた。」

主「そうか。・・・そういえば、『ファイエル』とかいうのも候補の挙がってたよな？」

作「うん。でも、この『ファイエル』って『フォイア』の読み間違いから生まれたんだって。」

主「そうか。で、結局何になったんだ？」

作「うん。『ヴァルムロート』にした。なんか響き的にもかっこいい感じだし。」

主「その『ヴァルムロート』って、なんなんだ？」

作「この『ヴァルムロート』は２つの言葉を組み合わせただけなん

だよね。アルトアイゼンみたいに。」

主「で、意味は？」

作「『ヴァルム』が暖かい、『ロート』が赤色って意味なんだ。」

主「つまり『ヴァルムロート』で暖かい赤色って意味か。」

作「うん。正しい言葉になってるか分からないけど。」

主「なんでこの名前にしたんだ？」

作「まあ、『火』を連想させる名前にしておきたかったし、ツェルプストー家の子供の中でお前だけオレンジ色の瞳をしてるんだぜ。それでそのオレジン色とかけてみた。」

主「そうか。まあ、いいんじゃねえの。」

作「というわけで、主人公の名前は『ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー』になりました。よろしくお願いします。」

主「よろしくお願いします。」

作「これから修正作業に入るよ。」

主「・・・頑張れ。そう言えば、俺ってあんまりフルネーム言わないから見逃してたけど、この『シュテルン』とかのミドルネームって意味あんのか？」

作「それ？『シュテルン』には『星』とかの意味があるよ。『フリードリヒ』は人の名前からとった。誰か忘れたけど。あと、『フォン』には『～の』って意味があるらしい。」

主「つまり、俺の名前は『アンハルツ領とツェルプストー領のヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ』ってことか？」

作「たぶんそうだと思う。」

主「『シュテルン』とか『フリードリヒ』とかなんか意味あって付けたのか？」

作「ああ、それ。最初キュルケのフルネーム『キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー』の『キュルケ』しか変えてなかったじゃん。」

主「ああ。」

作「そしたら、『フレデリカ』は女性の名前ですよって指摘されたんだ。」

主「俺最初女の名前だったの！？」

作「そう見たい。で、調べたら『アウグスタ』は女性に贈られる称号だって。」

主「まじかよ。」

作「あと『アウグスタ』には『小惑星』って意味があるらしいから、お前の名前に『シュテルン』をいれた。決してリューナイトの黒い

騎士のリューから採ったんじゃないよ。意味はたぶん同じだけど。」

主「ふーん。」

作「で、『フリードリヒ』は『フレデリカ』の男性名『フレドリック』とかじゃちょっと面白くないかなってそれっぽいの探して、これにした。」

主「そうか。まあ、これで男の名前になったのかな。」

作「たぶんそう。ではこの場を借りて。私のこの何気ない質問にご意見下さった皆様、本当にありがとうございます。今後もなにか間違いなどがあれば、どんどんご指摘してください。可能な限り善処していきたいと思います。」

主「本当にありがとうございました。また良ければ俺の物語を読んでください。」

主人公の名前の経緯

ファイア・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー

←

ファイア・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー

←

ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー

外伝：主人公の名前について（ストーリーとは関係ありません）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

本文中でも述べていますが、これからもご意見・ご感想よろしくお願いします。

微熱？のキュルケ（前書き）

こんにちは。こんばんは。

主人公の言葉はもう普通になりましたが、キュルケがまだ5歳ですからたどたどしい感じを出すために全部ひらがなで表しました。
まだ読みにくいという方がおられたら、すみません。

微熱？のキュルケ

「父上。僕とキュルケはいつから魔法を習い始めるのですか？」

俺がこんなことを父さんに聞いたのはもうすぐ5歳になろうかという時期だった。

なんでもここハルケギニアでは早いところは4歳、遅いと6～7歳と平均して5歳頃から子供の成長具合を見て魔法を練習し出す年齢を決めるらしいことが分かったからだ。

「そうか。ヴァルムロートもキュルケももうそんな年齢か。我がツェルプストー家では5歳の誕生日を迎えた次の日から魔法を習い始めることになっている。」

「それでしたらもうすぐですね。楽しみです。」

俺としてはもう少し早くから始めてもよかったのだが、キュルケのことを考えれば5歳というのは妥当だろう。

なにせこちらは前世の記憶ありという反則技で子供っぽく振舞ってはいるが、精神年齢はもう大人なんだし、純粋な子供として生まれたキュルケはやはり年相応なんだからしかたないし、俺もそれでいいと思っている。

「ヴァルムロートならもっと早い段階で魔法を教えても良かっただろう。しかしキュルケはまだ少し幼い感じがしたからな。どうせなら双子なのだし、一緒の方がいいと思い、お前たちは5歳からとした。お前だけでも早く始めたかったか？それは悪いことをしたな。」

「いえ。キュルケと一緒がよかったので、それで構いません。お気使いありがとうございます。」

「私はキュルケの方に気を使ったのだが、お前が礼をいうことではないだろうに。」

そう言うと父さんは何かを思い出したように、クックックッと笑いを押し殺しながら、

「お前たちはいつも一緒だしな。なあ、・・・キュルケの未来の夫殿。」

そうなのだ。この前母さん達に将来なにになりたい？なんてありきたりの質問をされた時、キュルケが、

「ばるのおよめさん！」

と答えたので、母さん達はきゃーきゃー言っていたが、それを聞いていた父さんが笑っていたが目が笑ってなかった。ちょっと殺気みたいなものも含んでいたように思う。

ちなみに俺は「父上みたいな人になって父上の後を継ぐこと。」と無難な答えを返しておいた。この答えに満足したのか父さんからの殺気も収まったようだった。

それ以前からキュルケはブラコンなのでは？と思う行動が多々あった。例えば、姉上達が必要以上に俺にべたべたしてくるとキュルケが怒ったり、４歳の誕生会の時では初めて同年代の女の子が来たの

だが、その子が挨拶をして最後に握手を求められたのでそれに応じようとしたらキュルケがその間に割り込んできた。なんてこともあった。

「あれは・・・子供の他愛もない冗談ですよ。」

「冗談かな?キュルケはなにかあるごとにそう言っているようだが。」

「・・・父上も姉上達から『大きくなったら、お父様のお嫁さんになるー。』とか、言われたことあるのではないですか?」

「そんな時期も確かにあったな。あの時は世界が輝いて、私の前に妖精が舞い降りたのかと思ったくらいだよ。」

(どんだけ自分の娘好きなんだよ!)

「それと同じですよ。ただ、その対象が父上か僕かの違いだけで。」

「・・・そうか。キュルケは私には言ってくれないのか・・・」

(そこまで落ち込むか?父さんの娘の溺愛もかなりのものだな。・・・前世では嫁や子供どころか彼女もいなかったから俺には分らないのかも。)

「いえ。まだそう決まったわけだはないですよ。・・・たぶん。」

「そうだろうか?・・・そういえば、今日はキュルケと一緒ではないのだな。めずらしい。」

「いえ。そうではなくt

「あーー！ばる、みーつけたー！」
「もう逃がさないよ。ヴァル。」
「こんなところにいたのね。覚悟しなさい。ヴァル！」
「ほら。姉さま、やっぱりこっち側にいたでしょ。」

「げ！もう見つかった。では父上、捕まってしまうのでこれで失礼します。」

「・・・うむ。まあ、頑張れよ。」

そういって俺はキュルケや姉上達のいる方とは逆の方向に走り出した。後ろから、キュルケ達が追ってくる音が響いていた。

「それでお前たちはなにをしているのだ？」

父さんは走ってくる娘達になぜ俺を追いかけているかを聞いていた。

「まてー。ばるー。あ、おとーさま、こんにちは。」
「あら、お父様御機嫌よう。」
「待て、ヴァルー。お父様、今急いでいるので失礼します。」
「あ。お父様、オークごっこです。失礼します。」

「怪我には気をつけなさい。」

「「「「はーい。」」」」

父さんは娘達のそっけない態度に軽くショックを受けながら、オークごっことは一人のオーク役が他の人を捕まえていくもの（鬼ごっ

こと同じもの）で数人のオーク役が一人を追いかけるものではなかったはずなのだがと思ったが、走り去っていく娘達を見ながらヴァルムロートがなにかやったのかと思い納得することにした。

微熱？のキュルケ（後書き）

ついに次から魔法の出番がやってきます。まずは杖との契約です。

姉が三人という設定なので文章内で書き分けができてないかもしれません。難しいですね。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

ガンダムはその時代の最新鋭機に与えられる名前（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は杖との契約だけです。魔法はまだ使いません。この辺から魔法に関してもオリジナル設定が満載になっていきます。

主人公のミドルネームが女性性になっていると指摘を受けたので変更しました。

ガンダムはその時代の最新鋭機に与えられる名前

朝起きて少し眠たい目をこすりながら、今日は記念すべき一日になるだろうと確信していた。

なぜならやっと魔法使いとしての第一歩・杖との契約を始めたのだから。

俺は5歳になった。とうとう魔法の練習が始まるかと思うとそのことで頭がいっぱいだった。

昨日の誕生会の席でも上の空でちょっと父さんに怒られたりした。そんな俺をキュルケが庇ってくれたり、キュルケに「ばる、おこっちゃ、だめー！」とか言われて父さんが本気で落ち込んだりしてた。父さん娘超好きだから嫌われたくないんだろうな。

ベットに入った後も楽しみすぎてなかなか眠れなかった。前世では幼稚園の遠足の時とか位で大人になってからそんなことなかったんだけど、体に合わせて精神年齢が下がったのかな？まあ、魔法なんてあっちにはなかったし仕方ないよね！

そして朝食が終わった後、早速父さんにキュルケと二人で呼ばれ、父の書斎に行った。

「ヴァルムロート、キュルケ。お前たちも5歳になった。今日から魔法使いひいては本当の意味で貴族として生きることになるぞ。いいな。」

「「はい。」」

「魔法使いの第一歩は杖との契約だ。これをお前たちに贈ろう。」

そう言って俺達に３０サントの長さの杖を手渡した。キュルケはもらった杖をぶんぶん振っている。

「これから杖との契約を行ってもらう。魔法の訓練はその後だな。魔法は杖がないとできないからな。」

「父上。どうやって杖と契約するのですか？」

「杖との契約はどんな方法で行っても良いが、基本は杖を両手に持ち、目を閉じて、杖を額に当て、語りかけるという方法だな。」

「どうなったら契約ができたとするのですか？」

「うむ。言葉で言い表すのは難しいが自分と杖がどこか繋がったような感覚になれば、杖と契約ができたといえよう。」

「父さんはどれくらいの時間で契約できましたか？」

「私のときは5日かかったな。」

「5日・・・ですか。」

「私は早かったのだぞ。一般的に杖との契約は大体7日から１０日かかるそうだし、遅い方になると２０日以上かかる子もいるらしい。まあ、ゆっくりやれ。」

「「はい。」」

そう言って俺達は部屋を出た。

（まじか。杖の契約にそこまで時間がかかるとは思いもしなかった。平均で1週間って、めちゃめちゃ時間がかかるじゃねーか！・・・でも待てよ。父さんは5日でできたんだからやりようによってはもっと早くできるかもしれないな。）

「どうしたの？ばる。」

「ん？魔法使うの楽しみだなって思ってたんだよ。」

「わたしもたのしみー！」

「じゃあ、頑張って契約しようか！」

「うん！」

（今日は天気がいいし、外でやってみるか。）

「キュルケ。お外でやろう。いい天気だし、きっと気持ちいいよ。」

「そーするー！」

俺達は外に出て、庭にある木の下に座って父さんが言っていたように杖を両手に持ち、額に当てた。キュルケも隣に座り、同じような格好で目をつぶっていた。

「つえさん。つえさん。・・・」

俺も目をつぶり、杖に心の中で杖に語りかけた。

（なんて語りかけりゃいいんだ？・・・もしもし～、杖さーん。・・・）

昼食の時間になりメイドさんが呼びに来るまでそうやっていたが、なんの進展もなかった。キュルケは隣で寝ていた。

昼食の時に母さんや姉さん達に杖との契約はどんな感じなのかを聞いたが、大体父さんと同じようなことを言っていたが、母さんの一人が興味深いことを言っていた。

昼食も終わり、さっきの場所で契約の続きを始めた。

今回は母さんの「杖と心が一つになった感じかな？」という証言から、杖との契約は精神的な結合を作ることであると考えた。

確かにさっきはただ杖に語りかけるだけだったので、今度は心を繋げるイメージを伴って杖に語りかけてみた。

（はじめまして。僕はヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと申します。これから魔法使いのパートナーとしてよろしくお願いします。そうだね、これから一緒にいるんだから名前をつけよう。君の名前はガンダムだ。いい名前だろ。ある意味英雄でそして最強に与えられる名前なんだよ。君はどんな魔法が好きかな。僕にどんな魔法を使わせてくれるかな？楽しみだね。僕は・・・）

空が赤くなり始めた頃、いきなりよくわかんないけど心というか感覚が杖の方まで広がったような感じがした。その不思議な感覚に戸

惑っている時、メイドさんが夕食の用意ができたと呼びに来た。

夕食時、父さんにそのことを言うと、

「本当か?ちょっと待っていろ、調べてみる。ディテクトマジック!・・・確かに杖にお前の魔力が繋がっているな。まだ1日目だというのにこんな短時間で、すごいぞ。ヴァルムロート!」

家族が俺のことをすごいとかカトリーヌよりすごいんじゃないかとか言いていると、

「ばる、もうできちゃったの?・・・う、わあああああああん!きゅるけおいてっちゃだめーーー!!わあああああああん!!」

とキュルケが泣きだしてしまったのでみんな何とも言えない雰囲気になってしまった。

「大丈夫よ。ヴァルはキュルケを置いて行ったりしないわよ。ね、ヴァル。」

(母さんナイスフォロー!)

「もちろんだよ!いつも一緒だよ、キュルケ。」

「ひっく、ひっく。・・・ほんと?ばる。」

「本当、本当。キュルケが契約できるように一緒に頑張ろう。」

「よかったわね。キュルケ。」

「うん!」

（おお！キュルケめっちゃ笑顔だな。父さんがキュルケのあまりの可愛さに昇天しかかってる。あ、母さんが殴って正気に戻した。）

そして俺はキュルケに俺がやった方法をなるべく分かり易く教えた。まあ、内容は自己紹介とか、杖に名前をつけたり、自分はどんな人だとか、どうなりたいかとかだけど。

そして次の日のお昼頃にはキュルケも杖との契約ができていた。

キュルケも杖に名前を付けたみたいだけど、どんな名前か教えてくれなかったな。

そんな俺達に父さんは嬉しいやら悲しいやらといった表情をしていた。おそらく自分の子供がこんなに早く契約できたことに喜んで、普通より契約にかかった時間が早かった自分をあっさり抜かされた悲しさからくるものだろうな。そんな父さんを見て母さんが「やれやれ」みたいなことを言っていた。

さあ、とうとう明日から魔法を教えてもらうぞ！

ガンダムはその時代の最新鋭機に与えられる名前（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ついについに次回から魔法を使い始めます。とってもまだコモンマジック＋αですけどね。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

魔法はイメージが大切（前書き）

こんにちは。こんばんは。

とうとう主人公達が魔法を使います。コモンマジックだけど。
フライは風の系統魔法、レビテーションはコモンマジックとこの二次創作ではさせていただきます。

カトリーヌの二つ名での言い方、属性魔法を系統魔法に修正しました。

魔法はイメージが大切

「ヴァルムロート、キュルケ。お前たちは昨日杖との契約が終わったのだから、今日から本格的に魔法の練習に入るぞ。朝食を食べ終わったら、練習場に来なさい。」

「「はい。」」

俺とキュルケは急いで朝食を食べ終えて、練習場に来ていた。

練習場は家の裏手のちょっと離れたところにあり、広さは縦１００メイル、横１５０メイルあり、ちょうど地球の小学校のグランド位の大きさだ。まあ、遊具とかないしもっと広く感じるけど。

そこへ父さんが誰かを連れてこっちに来た。

「早いな。ちゃんと準備はできているのか？」

父さんがそんなことを聞いてきたので、俺とキュルケは杖を頭の上に掲げた。

「うん。じゃあ、紹介しよう。今日からお前たちの魔法の先生になるうちのメイジだ。系統は主に火だが、他の系統もある程度使えるから、お前たちの先生にもってこいだろう。」

「アーム・ロ・レイルドです。よろしくお願いします。ヴァルムロート様、キュルケ様。火のトライアングルメイジでありますが、他の系統もラインスペルまでなら使用できるので、分らないことがあれば遠慮なく聞いてください。」

「「よろしくお願いします。先生！」」

「それでは後は任せるよ。しっかり鍛えてやってくれ。」

「はい。わかりました。」

「先生。まずは何をやるんですか？ツェルプストー家だから火の系統ですか？」

「確かにヴァルムロート様の言う通りツェルプストー家は火の系統の素質がある人がよく生まれるので火を極めることが多いのですが、それは個人の魔法の素質を見てから決めるのですよ。」

「そうなんですか。」

「それに最初はコモンマジックという簡単な魔法から練習して、それから系統の魔法に移ります。」

「こもんまじっくってなに？」

「はい、キュルケさま。コモンマジックとは系統に縛られない誰にでも使える簡単な魔法です。また魔法は精神力を使って発動、つまり魔法を出すのですが、コモンマジックはその精神力の消費、つまり魔法を使ったときの疲れやすさがもっとも少ないので魔法を初めて使い、魔法に慣れるのに適したものなのです。どうです。分るましたか？」

「わかったー！」

「それは良かった。ではコモンマジックの練習を始めますね。」

「「はい！」」

「まずはライトという魔法から練習しましょう。ライトは光を出す魔法です。夜や暗い場所で周りを明るくするのによく使うことになるでしょう。」

そう言って先生は杖を軽く振って、「ライト」と唱えた。すると、杖の先に光の玉が現れた。

「では、ヴァルムロート様、キュルケ様。私が今やったように杖を振って、ライトと唱えてみてください。その際に杖の先に光の玉ができるイメージを持っていてください。」

「「はい！」」

（イメージか。いまのは実物を見たからイメージしやすいな。）

俺とキュルケは杖を振って、「ライト」と唱えた。すると俺の方は先ほどの先生のものと同じくらいの光を放つ玉ができ、キュルケの方はぼやっとしているがそれでもちゃんと光の玉ができていた。

「すごいですね。ヴァルムロート様、キュルケ様。１回目で成功なさるとは。」

「でも、きゅるけのぼるのよりひかりがよわい。」

「それはおそらくまだキュルケ様のイメージが弱かったからだと思います。しかし、練習すればすぐに同じくらいになりますよ。」

「ほんと?よかった。わたしがんばる!」

「では次の魔法をしてみましょう。次はレビテーションです。そうですね・・・あ、あそこの小石を見ていてください。」

そう言われて小石をいていると、「レビテーション」の声と共に小石が俺達の目の高さまで浮き上がった。

「おお、すごい。」
「すごい!すごい!」

「では、ヴァルムロート様、キュルケ様。杖を振って、レビテーションと唱えてみてください。その際には小石が浮き上がるイメージを持っていてください。」

「「はい!」」

(イメージはできると思うけど・・・まあ、やってみるか。)

俺とキュルケはそれぞれ適当な小石に「レビテーション」と唱えた。

俺は先ほどの先生のように俺の目の高さまで浮かび上がるイメージをしたのだが、小石は腰のあたりまでで浮かび上がるのを止め、さらに先生と違い上下にふわふわして安定していないようだった。

キュルケの方は小石を地面から10サント程度浮かび上がらせていた。

「おお!レビテーションも1回目からできるとはヴァルムロート様

もキュルケ様も魔法の才能が御有りのようですね。」

キュルケは俺と自分の浮かべた小石を見比べて涙目になっていたが、

「キュルケ様。魔法は練習あるのみです。頑張りましょう！」

と先生がすかさずフォローを入れていた。先生はキュルケが俺と差ができると不機嫌になったり、泣いたりするのを父さんから聞いていたのかもしれないと思うほど、迅速な対応だった。

「では今日は最後にフライの魔法を習って終わりにしましょう。」

「もう終わりなのですか？」

「はい。魔法を始めた初日ですから本当はライトだけでいっぱいかと思っていたのですが、お二人に魔法の才能があるのでついつい進み過ぎてしまいますから。それにフライはコモンマジックではなく一応風の系統の魔法になるのでさきほどより精神力を消費しやすいのです。」

「風の系統ですか？系統がつく魔法はコモンマジックを練習したあとと最初におっしゃいませんでしか？」

「はい。ヴァルムロート様。確かに私は最初、系統魔法はコモンマジックの後に行うといいましたが、このフライは別なのです。」

「どーしてそれだけとくべつなの？」

「キュルケ様。その疑問ももっともです。このフライという魔法は風の系統に分類される、つまり風の系統のお仲間なのですが、風の

系統に素質のないものでも扱える、ほとんどコモンマジックのようなものなのです。」

「なるほどー。」

「では、まず私がやって見せますね。」

先生が杖を振り「フライ」と唱えると、先生の体が1メイルほど浮き上がり、俺達の周りをゆっくり回ってみせた。

俺とキュルケは言葉が出なかった。あとで先生が言っていたが、俺とキュルケの目がすごいきらきらしていたそうだ。まあ、しょうがないよね！

「これがフライの魔法です。イメージとしては自分の体がふわっと風に乗る感じでしょうか。それではやってみてください。」

「「はい！」」

俺とキュルケは少し距離をとり、先にキュルケが「フライ！」と唱えていたが、まったく体が浮かび上がる気配がなかった。そんなキュルケを見て先生が、

「キュルケ様。このフライは先ほどのライトやレビテーションとは難しさが全然違うので、烈風カリンは別として普通は7日、早くても2～3日かかるのであせらなくても大丈夫ですよ。」

と言っていた。そんなキュルケと先生のやり取りを横目に俺はこれからできることに感動さえ覚えていた。

（空を飛ぶイメージか。普通ならかなり難しいかもしれないな。・・・しかし！地球からの転生をなめんなよ！俺はドラゴ○ボール世代真っ只中だぜ！ようするに舞空術だろ。どんだけ子供の時イメージしたと思ってるんだ！夢にまで見たこの瞬間、転生してよかったー！）

「フライ！！」

そう俺が唱えると俺の体はまず５０サントほど浮き上がり、そして俺が思ったように空中をゆっくりとした速度ではあるが飛ぶことができた。

それを見ていた先生は驚いた顔をし、キュルケはすでに泣いていた。・・・ちょっと、調子に乗りすぎたかな？

先生と一緒にキュルケをなだめていたら、メイドさんが昼食に呼びに来た。とりあえず泣き止んだキュルケと先生にお礼を言い、今日の訓練は終わりとなった。分かれる時に先生が次のことを言っていた。

先生は午後から別の仕事があるらしく、魔法の練習は午前の間だけこの練習場で見てくれること。これはおそらく父さんが俺達に無理をさせないように気を使ったことだろう。

午後は自主錬をしても良いが、フライを練習するときはだれか大人のメイジに見てもらうこと。まあ、飛んでる最中に精神力が切れて落っこちたりしたら大変だからな。

キュルケは泣き止んだがかなり機嫌が悪いらしく昼食の時もムスっとしていた。母さんに「今日どうだった？」て聞かれて俺が「楽しかった！」と答えるとさらに機嫌は悪くなった。

昼食を食べ終えて、母さんに見てもらいながらキュルケとフライの練習をした。俺はアドバイスを出すだけで練習はキュルケに止められた。

もうすぐ夕食という時にキュルケの体が5サントほど浮かび上がり、そこでようやくキュルケの機嫌も直った。

夕食時、父さんにそのことを言うと、

「お前達は魔法の天才だな！！！」

と言って俺とキュルケを抱きしめた。

夜寝る時に今日の出来事を思い返して、なるべくキュルケにできないことはキュルケの前でやったりせずに、もしやる時は程度を抑えてやるということを考えていた。キュルケに泣かれたくないしね。

（まあ、無理かもしれないけど。なるべく努力するか。）

魔法はイメージが大切（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

次は系統魔法が登場します。

まあ、主人公は半分チートなのでどうなるか楽しみにしていてください。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

人生は自分の思ったようにはいかない（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回から系統魔法が登場です。とはいってもまだ素質を決める段階ですけどね。原作がどうやって系統の素質を決めているか分らないので、かなりテキトーなことを言っているかもしれませんが、そこはオリジナル設定ということで勘弁してください。

系統魔法が属性魔法になっていたので修正しました。

人生は自分の思ったようにはいかない

俺とキュルケがコモンマジックを習ってから3日経った。

その間、朝は先生からコモンマジックのロック、アンロックなどを教えてもらい、昼からは母さん達に見てもらいながらフライの練習をしていた。その甲斐あって、俺は小走り位の速度でフライができるようになったし、キュルケも俺より少し遅い速度だが自在に飛べるようになった。

今日はとうとう魔法の系統を調べる日だ。俺、ある系統に素質があることが分かったら、やりたいことがあるんだよね。

「今日は系統の素質を調べたいと思います。いいですか？ヴァルムロート様、キュルケ様。」

「「はい！」」

「魔法の系統には火、風、水、土の４つがあります。これを四大元素といいます。これにあと伝説の虚無という魔法があるのですが、これはまあ、いいでしょう。」

「なんでいいの？」

「そうですね、キュルケ様。虚無は伝説の中にしか存在しないと言われているからです。いままであの始祖ブリミルにしかできなかったとされています。だれもできないのだから、今は考えなくてもいいと思われます。わかりましたか？」

「はい。わかりました。」

「では、お二人がどの系統に素質が御有りになるかを調べてみましょう。」

「どうやって調べるのですか？」

「はい。実は魔法が使えるメイジは簡単なものなら自分の素質のない系統をも使うことができます。例えばこの間教えた風の系統のフライや火の系統の発火などがそれにあたります。ですから、自分がどの系統の素質があるかは、ドットスペルのもっとも簡単なものを唱えてもらって、それが発動するかどうかで調べます。わかりましたか？」

「「はい！」」

先生はうなずくと一本のろうそくを取り出した。そして地面にろうそくを置くと「発火」と言ってろうそくに火をつけた。

「まずは風の系統の素質があるかを調べます。お二人のお母様は風の系統の方ですし、かなり早くフライを習得されたので、もしかしたら風の素質があるかもしれませんね。ではウインドとろうそくに向かって唱えてください。風がろうそくの火を消すイメージをしてください。まずはヴァルムロート様からどうぞ。」

「はい！」

（っていうか、母さん風の系統のメイジだったのか。・・・風がろうそくの火を消すイメージで。）

「ウインド！」

そう唱えると杖の先からぴゅううと風が起こり、ろうそくの火を揺らして、そして消した。

「はい。次はキュルケ様。」

「はい！・・・ういんど！」

そうキュルケが言うとそよ風が吹いたがろうそくの火を消すことはできなかった。

「・・・はい。では次に水の素質を調べます。コンデンセイションと唱えてください。ちょっと私がやってみますね。・・・コンデンセイション。」

先生が唱えると目の前に小さな水の玉ができて、どんどん大きくなり、最後には直径３０サントの水の玉ができた。

「これは空気中の水を一つの場所に集める魔法です。水の系統の魔法はこれが基本となります。では、ヴァルムロート様、キュルケ様。今度は同時にやってみてください。」

「「はい。」」

（空気中の水蒸気を一か所に集めるようにすればいいのか。）

「「コンデンセイション！」」

そう俺とキュルケが唱えると、俺の方は直径3サントの大きさの水の塊ができた、先生がやったみたいに完全な球体ではなく表面がぐ

ねぐねしていて、少ししたら弾けてしまった。キュルケの方はほとんど反応していないようだった。

「・・・はい。では次に土の素質を調べますね。今度はアースハンドと地面に向かって唱えてください。これもまず私はやってみますね。・・・アースハンド。」

そうすると地面からにょきっと土でできた人の手のようなものが生えてきた。見た感じ、なかなかホラーな感じだった。キュルケも少し引いていた。

「では、このように地面から手が出てくるイメージでやってください。」

（そういえば、ドラクエでこんなモンスターがいたような・・・）

「「アースハンド！」」

すると、キュルケの方はもこっとほんの少し土が盛り上がった。俺の方はというと全く反応がなかった。

「・・・はい。では最後に火の素質を調べましょう。旦那様は火のスクウェアなのでお二人もかなり素質が高いと思いますよ。」

「父上は火のスクウェアだったのですか。」

「おとうさま、すごーい！」

「そうなんです！スクウェアクラスに成るには素質がなければ成れるものではないですからね！私も旦那様のようなすごい人に仕えら

れて、うれしいです！」

「「・・・」」

「おっほん。・・・ではファイアーボールと唱えてください。では私がまずやってみますね。・・・ファイアーボール」

そう先生が唱えると、杖の先から直径３０サントの大きさの火の玉が現れ、１０メイル飛んで地面に落ちて爆発した。爆発したところは焦げて少し穴ができていた。

「では、今のように火の玉ができてある程度飛んで地面に落ちるイメージでやってみてください。」

「「はい！」」

「じゃあ、いくよ。キュルケ。」

「うん！」

「「ファイアーボール！」」

そうすると、俺の杖の先に拳大の火の玉ができて5メイルくらい飛んだところでポンっと音を立てて空中でなくなった。キュルケの方は同じくらいの大きさの火の玉ができ、４メイル程ふわふわ飛んだ後地面に落ちて、小さく爆発した。爆発した地面は少し焦げたくらいだった。

「・・・はい。わかりました。」

「先生。僕達の系統の素質はどんな感じですか？」

「どーなの？」

「はい。ヴァルムロート様は風、水、火の素質がありますね。風は弱いですが、水と火はかなりの素質を秘めていると思われます。風の方も今後の訓練しだいでしょうか。キュルケ様は風、土、火の素質があります。風と土はわずかですが、火の素質はヴァルムロート様と同等であり、キュルケ様の方がおそらく繊細な操作ができるようになります。キュルケ様は火だけを伸ばしていった方がいいかもしれませんね。」

そう聞いて俺はｏｒｚと両膝と両手を地面につけた。

「ばる、どうしたの。わたしのほうがひのそしつがあったのがいやなの？でも、おなじくらいなんだし、いっしょにがんばろ！」

（くそっ！なんてことだ！まさか土の系統の素質がないなんて！これじゃあ、俺のプラモ計画が実現できないじゃないか！！せっかく、土に素質があったら、あっちで作れなかったガンダム系、マクロス系の機体、レッド・ミラージュやガオガイガーやサーバインやオーガモンとか、アルトアイゼンやヒュッケ・バインやグルンガストなどのスパロボのオリジナルのロボットなどなどを錬金したり、あわよくばゴーレムとかにして、コクピットとか作って、乗り込んで「ヴァルムロート、行きまーす。」とかやりたかったのに！！神のばかーーーー！！！！！！）

そんなことを俺は心の中で叫んでいた。

人生は自分の思ったようにはいかない（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

ちなにみガンダムとかって〇で伏字にした方がいいのですか?良かったらご意見をお聞きしたいと思います。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

偉大な先人？の言葉（前書き）

こんちには。こんばんは。

今回は主人公なりに考えた魔法の設定とかです。

バカやってます。

偉大な先人？の言葉

魔法を習い始めて１年が経ち、６歳になった。

魔法の素質で土系統がなかったことで数日凹んでいたけど、そんなときある人の言葉が頭をよぎった。

「俺が！俺達が！！ガンダムだ！！！」

そうだよ！作れないなら、俺が！ガンダムに！！なってやる！！！と新たに夢を胸に抱き、立ち直った。

それから休まず練習をしましたが、俺とキュルケはいまだにドットクラスです。まあ、原作の魔法学院も生徒のほとんどがドットだったと思うので、そんなに簡単にクラスが上がるとは思っていませんでしたが。

でも原作開始時点で確かルイズが１６歳、キュルケがそれより年上で１７～８歳だったと思うのであと１０年くらいの時間があるんですよ。その１０年で原作組に付いて行っても死なない程度に強く成ってればいいかな。くらいで考えています。

ちなみにツェルプストー家のキュルケの双子として生まれた時点で原作組には関わらないという選択肢はなくなりました。だって、キュルケが原作組だしね。だったら、逆に思いっきり関わって原作ルートとは別の道を通ってやろうと考えたわけです。

そこで自分やキュルケを守る手段としての魔法をよく知っておこうという考えに至りました。

以下、今できる魔法がどういうものかを自分なりに考えた結果です。まあ、ドットだしできることは少ないけどね。

コモンマジックについて。

まず最初に習った「ライト」は光源を生み出す魔法だ。

この光源、実は触れても熱くないんです！

飛んで行けとイメージすると1メイルくらい飛んでいくが、すぐに消える。

おそらく俺からの魔力を元にして光を生み出しているんだろう。だから、俺からの魔力の供給がなくなれば消えるってことかな。

そして「ライト」はいまではイメージすることで光源の明るさをかなり調節できるようになった。最大で目がくらむくらいで、最小が豆電球くらい。

次に「レビテーション」は物を浮かす魔法だ。

いまは自分と同じくらいの重さのものしか浮かすことができない。浮かせられる高さは約2メイルくらいが限界だ。

この魔法の原理は浮かせたい物に地面と反発する魔力を帯びさせることで浮かせ、移動させるときは行きたい方向と逆の向きに対して反発する魔力を帯びさせればいい。

このイメージで「レビテーション」を行うと漠然と浮かべーとイメージするよりより強い力が出せる。しかしこれはただイメージが強くなったためとも考えられるので、保留とする。

次の「ロック」、「アンロック」はドアや箱のカギを開け閉めする魔法だ。

この魔法はカギ自体の構造を知らなくても良いみたいで、どんなものでも「ロック」と言えばカギが閉まるし、「アンロック」と言えばカギが開く。

しかし、この魔法は意外な欠点がある。それは自分より強いメイジがかけた「ロック」を「アンロック」で外せないことと、逆に「ロック」をかけても自分より強いメイジが「アンロック」を行うとカギが開いてしまうことだ。

ただし同じくらいの強さのメイジがかけた「ロック」ならば「アンロック」で開けることが可能だ。

これは母さん達やキュルケと実験して分かったことだ。

次に「ディテクトマジック」は魔力を探知したり、なにか物を調べたりする時に使う魔法だ。

今はまだ大まかなことしかわからないが、人にかけるとその人の構造や魔力の流れとかが分かったり、物にかけるとその物の構造や物質が分かり、周囲の空間にかけると隠れている人やそこにかけられた魔法を見抜くことができるようだ。

かくれんぼを姉さん達とやった時に使われたんだけど、まじチート！無理ゲーだった。それからかくれんぼで「ディテクトマジック」は禁止にした。というか、遊びのときは魔法そのものを禁止にした。

しかし、物や人の構造が分かってもそれがどのような機能を持ち、どのように働いているのかとかは分からないので、水の回復魔法とかで最初に使う時は自分の体の構造と異なっている場所を探すことだけに使われているらしい。もったいない。

あと「念力」とかいう魔法がある。

これは主に扉を開け閉めしたり、遠くのものを取ったりするのに使うんだけど、最初は「レビテーション」」との違いが分からなかった。

「念力」と「レビテーション」は両方とも物を浮かせたり、動かしたりできるが、「念力」は俺が動かしたり、持ち上げられる物しか動かしたり、浮かせたりすることしかできないが、動きはかなりスムーズでそこそこ早い。「レビテーション」は「念力」より重い物を浮かせることができるが、動きがゆっくり。

このことから「念力」は手の延長のような魔法だという結論に至った。まあ、軽いものは「念力」、重いものは「レビテーション」を使うといった感じになるだろう。

ちなみに「念力」は手の延長なのでものや人などを絞めつけたりできない。

系統魔法について。

火の系統は「ファイアーボール」を主に練習している。

というか今ドットなので他にできることがない。

しかも今の精神力の多さ、つまり魔力量では直径３０サントの火球を２０個くらい出したところで尽きる。ドットは魔力量も少ないのだ。

ある時、自分で出した火球を触ってみた。自分で出したんだし熱くないかな。とタカをくくっていたのがまずかった。

・・・めちゃめちゃ熱かった！

「あっじいーーーー！！」

と叫んで、転げ回った。

すぐに先生や家の中から母さん達が飛んできて、文字通りフライで。で、すぐにヒーリングと秘薬で直してくれたので痕も残らなかったが、当然めちゃくちゃ怒られた。母さん達の言いつけで夕飯抜きにされた。

夕飯を抜かれたのはいいとして、キュルケに泣かれたのでバカなことをしたと、深く反省した。

水の系統はまだあまり練習していない。精々「コンデンセイション」をして水の扱いに慣れる程度である。

しかしこれがかなり難しく、以前調子に乗りすぎて水の玉を大きく作りすぎて、水の玉が割れて、頭から水浸しになったことが数回あった。

それでまずはコントロールからと「コンデンセイション」で水の玉を作っても割れないように訓練している。

ある程度コントロールできるようになった時、この水の玉の表面がかなりの弾力を持っていたので、もしかしたら水の上を歩けるかも！と今思えば浅はかな考えで噴水の水に向かって「コンデンセイション」を唱え、上に乗っかった。

もちろん無理だった。落ちた。すぐに近くにいた姉さん達に救出された。また母さん達に怒られた。怒られている最中、父さんが遠い目をしていた。まさか父さんも同じことをやったことがあるのか？

風の系統は使える魔法が「フライ」「ウインド」「ストーム」の3つになった。

「フライ」は1年経った今では走るのと同じくらいの速度で飛べるようになり、おそらく魔力が続く限り上昇することができるだろう。

どこまで上昇できるか試したいが、やったら今度は怪我だけではすまない気がするのでやめておいた。

「ウインド」は2～3メイル離れたろうそくの火を辛うじて消せる程度で、あまり進展はしていない。

ちなにみ庭で「ウインド」の練習をしていたら、母さんが通りかかって、わざとでないのだが、運悪くスカートめくりのようになってしまった。中は見えなかったが。母さんが「わるい子ね。」みたいな目で俺を見たが、誤解なんだ！母さん！っていうことがあって以来、練習は誰もいないことを確認している。

「ストーム」は最近先生に教えてもらった。

竜巻を作る魔法なのだが、俺がやっても精々小さなつむじ風程度のものしかできず、攻撃としては全然使えないものだ。

要練習なのか。それとも風の系統の素質がその程度なのか。判断が難しいところだが、まだ決めつけるには早すぎるだろう。

以上が今の状況かな。まだまだだね！

系統魔法で水は思いっきり補助系の魔法って感じだし、風は一番魔法の種類があってもちろん補助系の魔法もある。土も錬金とかあるけど、火は攻撃系の魔法しかないんだよね。まあ、聞いたところによるとファイアーウォールくらいか？でもこれも戦闘用だろうし。

なんか考えてみようかな。

偉大な先人？の言葉（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

皆さんにお聞きしたいのですが、
主人公の「ファイア」という名前が英語的な感じでドイツをモデルにしたゲルマニアだったらドイツ語的な感じの方がいいんじゃないの？と指摘を受けています。

私は火の系統魔法の「ファイアーボール」の「ファイア」からとったのですが、ドイツ語的に「フォイア」にした方がいいでしょうか？

した方がいいという意見が多くあればまだ序盤ですし、変更することを検討します。

このアンケート（もどき？）は５月３０日の０：００までと期限を付けさせていただきます。

上記のアンケートは終了しました。皆さんのご意見参考になりました。ありがとうございます。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

文系か理系か聞かれたら、理系。（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回はハルケギニアの座学について書きました。
オリジナル設定を多く含んでします。

文系か理系か聞かれたら、理系。

「ご機嫌麗しゅうございます。ヴァルムロート様、キュルケ様。では、今日の授業を始めましょう。」

「「はい。お願いします。」」

天気のいい昼下がり、俺とキュルケは家庭教師の先生にハルケギニアについて習っていた。

俺とキュルケに家庭教師が付いたのは、魔法を教わり始めたのとほぼ同じ時期だった。家庭教師は2~3日に1回来て、昼の3~4時間座学を教えてくれる。そして、家庭教師が来るようになってから2年経った。

最初はハルケギニアの文字を習った。

ハルケギニアの文字は見た目が英語に似ていた。日本語とは似ても似つかないし、初めは覚えられるのか不安になったが、そこは「見た目は子供、頭脳は大人」を地で行く、というか肉体はそのまんまの年齢だし、覚えるの早いね。スポンジみたいに知識をどんどん吸収するね。

そうそう、俺今日本語で考えているように見えるけど、実はこれハルケギニア語なんだよね。

すごいね、子供！聞いてるだけで言葉を覚えちゃうんだから。

だけど、ハルケギニアにない言葉は日本語のままだけどね。例えば

ガンダムとか。

そのうちに、単語を習って、簡単な文章を読めるようになった。昔は母さん達やメイドさんに絵本とか読んでもらってからね。

簡単な本（絵本とか）なら読めるようになったので、家の書庫に行って本を読んでみようとした。

しかし、全然読めなかったね。習ってない単語が多すぎて、何が書いてあるのか分からなかった。試しに、辞書を父さんに貸してもらって、読んでみようとしたけど、今度は辞書の方に何が書いてあるか分からなかった。

転生前に英語で書いてある英語のための辞書を使ったことがあるけど、辞書では英語の単語の意味が英語で書いてあるので、その文章の中の英語の言葉の意味を調べるために、英和辞典を使わなければいけなかったことを思い出した。今の俺では覚えている単語数が少なすぎた。

というわけで、いまは大人しく家庭教師の勉強に教えてもらっている。

他には簡単なハルケギニアの歴史を習った。ハルケギニアの歴史は６０００年前から始まっていた。

そう。始祖ブリミルが現れてからの歴史だ。

教えてもらった歴史の中のブリミルは伝説化しているようで、６０００年の間話が伝わる際に話に尾ひれどころか背びれや胸びれが付

いてすごいことになっていた。

話半分で聞き流していたが、いくつか本当だと思われる話があった。

ブリミルが現れる前にもハルケギニアに人は住んでいたが、魔法は使えなかったが、エルフは先住魔法を使用していた記録があること。

このころの記録はあまり残ってないらしいが専門家などの研究により、ある程度は分かっているようだ。

その中で魔法を使えない当時の人達のエルフに対する態度が「触らぬ神にたたりなし」と言った感じで、魔法という対抗手段がない分、今よりも大きな恐怖の対象だったようだ。

いつからともなくブリミルなる人物が現れて、人に系統魔法を教えたこと。

６０００年前の記録に前触れなくブリミルという人物の名前が挙がるようになったそうだ。どこで生まれたとか、どこで育ったとかの記録は一切ないらしい。今日、ブリミル教では「ブリミルはいきなりこのハルケギニアに降り立った」と教えているらしい。宗教にもなってるし、神みたいな存在だな。いや、実在した人物だから現人神なのかな。

この人物が系統魔法に適正のある人達に系統魔法を教えて回ったと記録にあるようだ。しかし、虚無は教えたという記録はないらしい。

ブリミルは系統魔法と虚無魔法、両方使用可能であったであろうということ。

ブリミルは強力な使い魔を連れて系統と虚無、両方の魔法を使っていたという話が口伝の伝説として多くの地方に残っていたようだが、実際はどうなのかな？伝説の中にブリミル１人でエルフの大軍を追い払ったとかあったし。

ブリミルの３人の子供が作った国が今のトリステイン、ガリア、アルビオンであり、ブリミルの弟子が作ったのがロマリアであること。

これは今でも続く王家がそうなのだから、本当なんだろう。

でも、なんでブリミルの弟子が作ったロマリアのブリミル教がブリミルの子孫の各国王家よりでかい顔してんのかな？

俺転生前から行きすぎる宗教は胡散臭いんだよね。ただ生活の一部として宗教があって、なにか遭った時に心の支えになる。くらいでいいと思うんだ。例えば、地球のキリスト教なんて、キリストが実際いたかもわからないし、一神教で最後にキリスト教の人のみ神が救うとか、人類全て救わない神なんて器量が少ないんじゃないのか？それに、ア○リカのキリスト教徒なんて半分以上が進化論を信じてなくて、神様が生物を全て作ったて信じてて、嘘の進化論を教えるから子供を学校に通わせないとかいう人まで出る始末、宗教に頼ってたら人の進歩なんてないね。と思ってた。まあ、日本人はとくに宗教に疎いからそのせいかもしれないし、日本なんか付喪神とか八百万の神とかどんだけ神いるんだよ！って感じだったしな。

そんなわけで転生した今でもブリミル教にあまりいい感情を持って

ないんだよな。

そうそう。俺がいるこのゲルマニアって国はブリミルの子孫が興した国じゃないんだよね。

都市国家とか周辺の地域が集まってできた国で、しかも、他の国とは違い金があれば魔法が使えない平民でも貴族になれるらしい。だから、他の国より低く見られてて、なにかにつけて「だからゲルマニアは野蛮なんだ」とか言われてるらしい。ばからしい。

あと俺今、7歳なんだよね。7歳といえば日本では小学1年生、算数の足し算とか引き算とか簡単な計算を習ってる時だと思うんだけど、まだ数字を習ったくらいで全然算数を習う感じがない。これからやるのかな？

算数だったらそんなに違いがないと思うから、文字を習うよりはるかに簡単だと思うんだよな。

早くやらないかな。算数。

文系か理系か聞かれたら、理系。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

今回、設定などは考えていたのですが、それを文章にするとなったら、かなり時間がかかってしましました。難しいですね。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

白と赤（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回はオリジナル魔法が出てきます。

てててーててーててってててー♪

体の奥から力が湧いてくる感覚を感じながら、頭の中にＦＦのファンファーレが鳴り響いていた。

魔法を習い始めて3年経った。

俺とキュルケのメイジのランクは「ドット」から「ライン」になった。

「すごい。5倍以上の魔力がある・・・。」

「やったわね。ダーリン！」

「おめでとうございます。ヴァルムロート様、キュルケ様。もうラインになってしまわれるとは。やはり、お二人は魔法の才能が御有りですね。私としても教えがいがあるというものです。」

先生も喜んでくれていた。

でも、初級ともいうべき「ドット」から中級の「ライン」に上がるまで3年もかかってしまった。もっと簡単に上がると思ったのに。

この調子だと次の「トライアングル」になるのに最低でも3年以上はかかるな。

メイジのランクを簡単にいうと。

１つの魔法しかできないメイジを「ドット」例：火、水など

２つの魔法をかけ合わせられるメイジを「ライン」例：火火、火水など

３つの魔法をかけ合わせられるメイジを「トライアングル」例：火火火、火火水、火水風など

４つの魔法をかけ合わせられるメイジを「スクウェア」例：火火火火、火火火水、火火水風など

以上の４つがある。５つとか６つの人はいないらしい。かなり例外的な方法はあるらしいが。

あと、ランクが１つ上がると、俺が言ったネタでないが、実際かなり最大魔力量が増えるし、同じ魔法を使っても、威力が違ってくる。

そして、今まではファイアーボールとか簡単な魔法しか使えなかったが、これからは火の系統魔法なら二つかけ合わせることができるようになったので魔法に幅が広がるだろう。まだ、多少だけどね。

そう。火の系統なら２つをかけ合わせることができる。

大事なことなので２回言いました。

今の俺は火のメイジとしては「ライン」なのだが、水や風のメイジとしては実はまだ「ドット」なのだ。

1つの系統が上がったら他の系統も上がるんじゃないの？

なんだろうね、この感じ。例えるならスパロボの武器一括改造ではなくて、1つ1つ個別に改造するみたいなもの？

とにかく俺の場合、火、水、風のそれぞれの系統にそれぞれランクがあって、今回は火のみランクアップしたって感じなのかね。まあ、主に火を練習してたっていうのもあるのかも？

早速、先生に火の「ラインスペル」を2つ教えてもらいました。

1つはファイアーボールの強化版「フレイムボール」。

これはほぼファイアーボールの上位互換の魔法で、威力が上がり、自動追尾機能が追加された。ファイアーボール涙目。

かなり使い勝手がいいが、この自動追尾機能はあまり小回りが利かないみたいで大雑把に動くのでちょこまか動く目的にはあまり当たらないだろう。

もう1つは「ファイヤーウォール」。

これは火の壁を作り出す魔法で、壁の高さや厚さは結構自由に変えられる。

これは主に対象を逃がさないようにする炎の檻のような使い方をするのが一般的だそうだ。

ここで俺がいままで考えていたことの1つを試してみようと思う。

火の魔法はなにも火球を作りだしたり、火の壁を作るだけではないはずだ。

物に熱エネルギーを与えることだって可能なはずだ！

ということで、さっそく試してみた。

まず、杖から長さ1メイルの円柱の空間に熱エネルギーを与えて、空気中の分子が激しく動くのをイメージして魔法を発動させる。

ドットランクのときも試してみたんだけど、どうもドットだと細かい魔法の調節とかができないみたいで、小さい火炎放射みたいなのができただけで終わった。

そして、今、俺の杖の先には赤い光を放つ剣のようなものができていた。

そう、この魔法はビームサーベルを作るものだ。

どのくらいの威力があるかその辺の石で試してみた。

うん、かなりの切れ味だな。切れたといよりは超高温で溶かしたって感じだけど、ビームサーベルってこんなものだよね。

でもこれ、実際やってみるとかなり魔力の消費が激しい。常に調節した火の魔法を出し続けているようなものだからかな？

そんなことを一人で思っていると、

「・・・ヴァルムロート様。その魔法、どこで覚えたのですか？」

と、先生が驚いた顔で聞いてきた。

「え？僕が今考えたのですが。何かいけなかったでしょうか？」

俺は先生から何かよくわからない雰囲気を感じながらそう言った。

「・・・ご自分で思いついたのですか？ちなみに、「ブレイド」という魔法はご存じですか？」

「ブレイド？いいえ、知りませんが・・・」

そう言うと、しばらく先生は黙った後、

「すごいです！ヴァルムロート様。まさか、この年でラインランクになるだけでなく、新たな魔法を考えついてしまうとは！まさに天才という言葉がふさわしいです！」

とか、すごい勢いで言われ、

「すごいじゃない。さすが私のダーリンね！」

とキュルケは感心して、ほめてくれていた。

「天才なんて・・・。そんなんじゃないですよ。照れますね。」

そうそう、最近キュルケは俺と同じじゃなくても泣かなくなったし、むしろほめてくれるようになっていた。

以前、泣いた時に母さんと何か話してて、その後からこんな感じになったんだけど、なにか心境の変化があったのかね。

あと、キュルケが俺を呼ぶ時に「ダーリン」なんて言い出したのもそのときからだ。いまだにキュルケは俺の嫁になる気があるのかね？もう8歳だから分別付きそうなんだけど。

ちなにみ俺が「ダーリン」なんて呼ばれて、黙っているのはもう何を言っても無駄だからだ。

初めの1か月は「ダーリンっていうなよ。恥ずかしいな。」とか「僕達、兄弟なんだよ？」とかいろいろ言ってみたけど、キュルケの「いいじゃない。私がそう呼びたいんだから。」という言葉に俺は何も言えなくなった。

もちろん家族にも抗議してもらおうとした。母さん達は俺が何を言ってもニコニコしてるだけだし、姉さん達は口をそろえて「キュルケの好きに言わせておけばいいのよ。」なんて言ってくる始末。唯一父さんは何か言いそうにだったが、母さんの「あ、な、た・・・」に黙ってしまった。

それ以来もうこれに関して何も言わないことにしている。家のお抱えメイジやメイドさんなどの使用人も暗黙の了解として扱っているようだ。なんだかな。

なんて物思いにふけっていると、先生がブレイドも教えてくれるという話になった。

「本来なら、ブレイドはもう少し後で教える予定でしたが、まあ、いいでしょう。」

「ブレイドとはどのような魔法なのですか？」

「はい、説明したします。メイジは本来なら後方からの魔法攻撃や支援を行うので戦いの時に前線には出ません。しかし、敵などが前線を突破したり、前衛となる者がおらず、自分1人で戦う時の接近戦の魔法として使用されるのが「ブレイド」です。」

そう言って、先生は「ブレイド」と唱えた。すると先生の杖の周りに淡い赤色を発する光の刃が現れた。

「これがメイジの接近戦用の魔法「ブレイド」です。先ほどのヴァルムロート様の魔法と良く似た形状ですが、ブレイドは杖に魔力を纏わせ、それを刃にしているのに対し、ヴァルムロート様の魔法は杖の先から魔力の刃が出ていたようですし、見たところヴァルムロート様の魔法は火の系統魔法で構成されていたようです。「ブレイド」は確かに系統魔法なのですが、いまだにどの系統に属しているか分からないものなのです。」

「ふーん。系統がいまだに分からないなんてブレイドって不思議な魔法なのね。」

「そうですね、キュルケ様。では、ヴァルムロート様、キュルケ様、やってみてください。」

イメージは杖の周りに魔力の刃を纏う感じで、

「「ブレイド！」」

すると、キュルケのブレイドはほぼ赤一色の魔力の刃ができ、俺のブレイドは、

「これは珍しい。まさか白いブレイドができるとは・・・」

と俺のほぼ真っ白なブレイドを見て、また考えこんでしまった。

「白いブレイドなんてきれいね。さすが、ダーリンね。」

「ありがと。キュルケのは赤一色でとてもキュルケに似合ってるよ。」

「もう！ダーリンたら！」

なんてお互いに褒めあっていたら、

「おお、すみません。ヴァルムロート様、キュルケ様。つい、考え込んでしましました。」

「どういうことですか？やはり、白いブレイドは珍しいのですか？」

「はい。ブレイドは使用者の素質のある系統の色が反映されるのです。例えば、私は淡い赤色でした。これは火が一番強い素質を持ち、あとの3系統もある程度素質があるので赤色が薄くなって、その結果淡い赤色となっています。キュルケ様は火の素質が強いのでほぼ

赤一色のブレイドができています。」

「では、私の白色はどうなんですか？」

「これは私の憶測になりますが、おそらくヴァルムロート様の火、水、風の素質がほぼ同じであると考えられます。そして、今ヴァルムロート様はラインランク、将来はスクウェアになられても可笑しくはない素質を秘められています。」

「つまり、水と風も素質としてはスクウェアまで上げることが可能。ということですか？」

「はい。そうなります！」

「それだったら、キュルケもスクウェアになれる可能性もあるのかな？」

「そうですね！本当にすごいことです！」

「すごいわ！ダーリン！夫婦揃ってスクウェアなんてそうそういないわ！」

いやいや、夫婦じゃないから。と心の中で突っ込みを入れながら、賑やかに今日の練習は終わった。

昼食時に家族にそのことを言おうとした時、いきなり父さんが、「今日はめでたい日だ！小さいながらパーティをするぞ！」とか言うと、いつもより豪勢な料理が出てきた。もう、家族は俺とキュルケがラインになったことや俺がオリジナル魔法を作ったこと、そしてスクウェアになれる素質があることを聞いていたようだった。

それだけでなく、家ですれ違う使用人達にも「おめでとうございます。」とか言われて、すでに知れ渡っているようだった。

これは頑張って、スクウェアにならないとまずいな。

ちなみにビームサーベルは今のところ封印した。

ブレイドと比較して、威力はビームサーベルの方が約1．5～2倍強いのだが、消費魔力量が比較にならないくらいビームサーベルの方が大きいのだ。いや、でかすぎる！ブレイドの消費魔力を5としたら、ビームサーベルは20以上なのだ。しかも、ブレイドは発動時のみ魔力を消費するのだが、ビームサーベルは常に魔力を消費するので長時間使用するほど差が開く一方だった。

火を元にしたら、他の系統もかけ合わせられそう（火を元にしたら水や風をかけることがたぶん可能）なので、もっといいのを考えてやる！

白と赤（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

今回ブレイドという接近戦の魔法が出てきたので、次から接近戦の訓練も始めます。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

悪を断つ剣なりってか？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回、主人公が剣を習い始めます。
でも、戦いの場で主人公が剣を持つわけではありませんし、剣状の杖と契約し直すこともしません。杖は一般的な形状の杖、ガンダムのままです。

悪を断つ剣なりってか？

「父上。私に剣を教えてください。」

ラインランクのメイジになった次の日、俺は父さんに剣を教えてもらえるように頼んだ。

「どうした？ヴァルムロート。お前はメイジだ、別に剣は覚えなくてもいいのではないか？」

確かに、このハルケギニアのメイジ、とくに位の高いメイジになればなるほど、戦いの前線とは遠くなり、後方で砲台として魔法を使うことがほとんどで剣を扱う機会はほぼ皆無だろう。

しかし、これはちゃんとメイジの盾となる前衛がいて初めていえることだ。俺がこれから関わっていくことになる原作でそれはあまり期待できない。なんたって少数でしかもほぼ学生だけで行動することになるからな。ワルドやシェフィールドみたいな強力な敵と戦わなくてはいけないかもしれないときに、ただ突っ立って魔法を詠唱していたのではいい的になるのがオチだ。

前衛ができるのは精々サイトくらいしかその前衛をこなせるやつがいないし、そのサイトはルイズを守るので精一杯だろう。

そこで俺がサイトとともに前衛をこなせれば、キュルケや仲間の生存率も上がってくるだろう。原作では死んでない（サイトはほぼ死にかけた）が、この俺がいる世界ではどうなるかわかったもんじゃないしな。

でも今の俺では圧倒的かつ絶望的に実力が足りない。

だから俺自身を鍛えることが必要になってくる。なら、それは早い方がいい。しかし、体の成長が進んでないときから体を鍛えると、逆に体の成長に悪影響があるってどこかで聞いた気がするので、いままで待っていたんだ。『ブレイド』も覚えたしな。

「父上の仰ることももっともです。メイジが剣を使うなんて、野蛮だという風潮があることは存じています。しかし、折角『ブレイド』とい接近戦用の魔法も教えていただいたので、きちんと使いこなせるようになりたいのです。」

「『ブレイド』はほとんど使用することはないと思うが。・・・そういえば、お前が考えついた『ビームサーベル』だったか？あれも剣のようなものだったと聞いたな。」

「はい。ほぼ『ブレイド』と同じ扱いのものと考えてもらって結構ですが、あれは魔力消費が大きいのであまり使わないでしょう。」

「そうなのか？・・・まあ、いいだろう。お前のことだ、何か考えがあるのだろう。よし、シュバルツ隊からだれかお前に剣を教えるように言っておこう。昼食を食べたら、兵舎の訓練場まで来なさい。」

「はい！父上、ありがとうございます。」

父さんの言っていたシュバルツ隊っていうのは、うちの警備やツェルプストー領地に現れた亜人などの討伐を行う兵士の集団のことだ。ちなみに、隊名は毎回隊長になった人の名前を付けられらしい。

昼食を食べている時に母さん達に今日から剣を習うことを言ったら、

「そうなの？」
「体きたえるの？」
「あらまあ。」

と言って、キュルケを見て、なんでキュルケを見るのかは分からなかったが。

「「「ヴァルも男の子ねー。」」」

とか言っていた。確かに俺は男だが？

姉さん達は、

「いいんじゃない？」
「いーなー。キュルケは。」
「騎士になるの？」

とか言っていた。いや、姉さんいまのところ騎士になる予定はないですよ。

「ダーリン。私も一緒にいっていい？」

「いいと思うけど。面白いことなんてないと思うし、さすがにキュルケもに教えるとか言わないだろうし。そうですよね、父上？」

「そうだな。ヴァルムロートは男の子だから、許可したが、キュル

ケはだめだぞ！」

「ダーリンは今日から剣を習い始めるから心配なの。見るだけでもダメ？お父様？」

「まあ、今日だけならいいだろう。でも、今日だけだからな。あまり関係のない者がいると兵達の邪魔になるといけないからな。」

「ありがとう！お父様！」

・・・父さん、娘に甘々だな。

昼食が終わって、父さんと兵舎の訓練場に来た。すると、誰かこっちにきた。

「旦那様、ヴァルムロート様。どうされました？」

「ああ、今日からヴァルムロートに剣を教えることになったからな。シュバルツにその話はしているはずだが。」

「はっ。そのことは伺っております。すぐに隊長を呼んできます。」

「頼む。」

そういうと、その兵士は兵舎に戻っていき、こんどは違う人が現れた。年齢は父さんと同じくらい、何度か父さんと一緒にいるところを見たことがある人だった。

「旦那様、ヴァルムロート様、お待ちしておりました。」

「うむ。ヴァルムロート、この人が今日からお前に剣を教えてくれるシュバルツだ。」

「きちんと自己紹介をするのは初めてですね。私はシュバルツ・シュヴァリエ・ブルーダーと申します。シュバルツ隊隊長をやらせていただいております。よろしくお願いします。」

「はい。よろしくお願いします。」

「では、シュバルツ。今日からヴァルムロートをよろしく頼む。ばしばししごいてやってくれ。」

「はっ！了解しました。」

そういうと父さんは戻っていった。入れ違いにキュルケがやってきた。

「ダーリーン！良かった。まだ始まってなかったのね。」

「これはキュルケ様、どうなされましたか？」

「キュルケ、本当に来たのか。」

「もう、つれないわね。これは、ブルーダー隊長さん。御機嫌よう。今日はダーリンの見学にきたの。だめかしら？」

「いえ、構いませんが。あまり近いと危ないかもしれないので少し離れて見学していただけますか。」

「ええ、いいわよ。頑張ってね、ダーリン。」

「ああ、頑張るよ。」

そして剣の練習が始まった。俺が習うのは片手剣の扱い方だ。『ブレイド』も『ビームサーベル』もその形状から片手剣が一番合っていると思ったからだ。まあ、参式斬艦刀とか使うのなら大剣とかでもいいんだけど、ないしね。

持ってみると金属でできている刃渡り６０サントくらいの片手剣は思った以上に重かった。実際の重さは３～４リーブル（１．５～２キロ）なんだろうが、それでも８歳の俺には重すぎた。俺、もしかしてもやしっ子？

「重いですか？ヴァルムロート様。」

「・・・はい。これは私には重いです。」

「そうですか。ではこちらで練習しましょう。」

そういってブルーダー隊長は木でできた片手剣を渡してきた。それがあるなら初めから、そっちを出せよ！とか思った。

「これなら、なんとか私でも持てます。」

「では、まず木剣で練習し、ヴァルムロート様の筋力が上がったら、こちらの剣でやることにしましょう。」

「はい。それでお願いします。」

そこからはまず剣の持ち方、立ち方、移動の仕方を習い、次に切り、突きなど基本的な剣の扱いを習った。

教えてもらっている間、ブルーダー隊長は人が変わった?ように、むしろこっちが本当か。と思うような厳しいものに変わった。

「甘い!その持ち方ではすぐに相手に剣を奪われてしまうぞ!」

(しゃべり方変ってるぞ。)

「はい。」

「声が小さい!もう一度!」

「はい!」

「腰が高い!もっと腰を落とせ!」

「はい!」

「腰が入ってない!それでは剣に振るわれてるぞ!剣は振るものだ!」

「はあ、はい!」

「なんだ!その突きは!ふらふらするな!」

「はあ、はあ、はい!」

「・・・今日はここまでにしましょう。」

「はあ、はあ、・・・はい！」

「今日、ヴァルムロート様にお教えしたのは剣を扱ううえでごく基本的なことだけです。おそらく戦場に出たら今日教わった通りにできることはほぼないでしょう。しかし、日々の基本の練習が戦場で命を救ってくれることも多々ありますので、決して疎かにしないで置いてください。」

「はあ、はあ、はい！心に留めておきます。」

「では、今度から剣の練習にいらしたら、兵舎にある詰所まで来てください。だいたい私はそこにいますので。他の兵達にも伝えておきます。」

「はあ、はい、よろしくお願いします。」

「次からは最初にこの訓練場の外周を４周走って、腕立て、腹筋、背筋、屈伸による筋肉トレーニング、それから今日お教えした基本の反復練習をしましょう。今日はお疲れ様でした。ヴァルムロート様。」

「あ、ありがとうございました。」

「今日はまたダーリンに惚れ直したわ。」

「え？でも、かっこ悪かっただろ？鉄製の剣も持てなかったし。」

「ううん。かっこよかったわよ。」

「そうか。ありがと、キュルケ。」

兵舎から家に戻っている最中キュルケが情けなかったであろう俺を励ましてくれた。俺のためにも、キュルケのためにも頑張ろう！

悪を断つ剣なりってか？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これから主人公は魔法、剣術、座学と習いながら、成長していきます。

まだ、攻撃魔法しかできないので次は回復魔法ですね。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

主人公が回復役。これってありですか？（前書き）

こんちには。こんばんは。

今回は主人公が回復魔法を習います。
いままで攻撃魔法ばかりでしたからね。

主人公が回復役。これってありですか？

「コンデンセイション！」

俺がそう唱えると、目の前に水の玉が出来上がった。その形はまんまるで以前のように不安定ではないし、ちょっとやそっとのことでは割れないようになった。上には乗れないけどな。

「・・・よし。これで『コンデンセイション』はほぼマスターしただろう。じゃあ、次だな。」

俺が魔法を習い始めて４年経過した。今のところ火の系統がラインクラス、水と風の系統はドットクラスだ。

いままで攻撃用の魔法しか習ってなかったけど、そろそろ回復魔法とか習ってもいいかな、と考えた。現代地球の医療知識（テレビからの情報）と回復魔法が合わされば、もしかしたらカトレアさんを助けられるかもしれなし。・・・下心はないよ！

「先生。私に回復魔法を教えてください。」

「回復魔法ですか？すみません。あいにく私は水系統も含めて攻撃用の魔法しかできないのです。」

「そうなんですか・・・」

「そうだ。ヴァルムロート様のお母様に頼んでみるのはいかがです

か？」

「母上ですか？たしか母上は風系統のメイジだったのでは？」

「すみません。言い方が悪かったですね。アニ様のことです。」

（アニ様？・・・ああ！一番年下の母さんのことか。）

俺の母さんはマリーナ第1夫人（年齢不詳おそらく一番上）、カティ第2夫人（年齢不詳）そしてアニ第3夫人（年齢不詳おそらく一番下）の3人いる。ちなみにマリーナ母さんが俺の実の母親だが、後の2人も自分の実の子供のように接して来てくれる。

母さん達の年齢が不明なのは、以前母さんに年齢を聞いた時「女性に年齢を聞くなんて、教育を間違えたかしら。」とかニコニコしながら歩いてくるときの威圧感はやばいものがあったので、それ以来聞いてない。

「アニ母上は水系統のメイジなのですか？」

「はい。特に回復魔法を得意とされているので、後で聞かれてみてはいかがですか？」

「そうですね。そうしてみます。」

昼食時、アニ母さんに回復魔法を教えてほしいといったら「いいわよ。」と即答してくれた。

そして今日は家庭教師の人に早めに切り上げてもらって、アニ母さんに回復魔法を教えてもらってます。

「それでは、アニ母上。よろしくお願いします。」

「もー。他人行儀ね、ヴァル。いいわ、始めましょう。」

「はい。」

「回復魔法はね、まず『ディテクトマジック』で相手の怪我しているところを探るの。そして、その部分が正常な部分とどう違うのか調べるのよ。」

「母上、どうやって正常な部分との違いを調べるのですか？」

「そ～ね。自分や怪我していない人の体かしら。まあ、経験を積めばここがこう違うとか分かるようになるわよ。」

「そういうものですか。」

「そうねー。それに大体切り傷とかだから見た目で分かるものも多いわよ。」

「なるほど。」

「次にそこに回復魔法をかけるの。呪文は『ヒーリング』よ。」

「『ヒーリング』ですか。」

「でも、『ヒーリング』だけじゃ、大きな怪我は治せないのよねー。」

「では、その時はどうするのですか？」

「そこで必要になるのが、・・・じゃじゃ～ん！秘薬ー。」

と言って母さんはおもむろに液体が入った小瓶を取り出した。

「それが秘薬ですか？」

「そうよ。秘薬と合わせて『ヒーリング』を行うとすごく回復するようになるわ。例えば、切られた腕を繋ぐとか。」

「それはすごいですね。でも、繋ぐだけなんですか？例えば、切られた腕が傷口から生えてくるとかできないのですか？」

「それは無理ね。その場合は傷口が塞がるだけで新たに腕は生えてこないわ。」

（「これも次元連結システムのちょっとした応用だ。」みたいなことはできないのか。）

「なるほど。だめなんですか。」

「それに切られた腕を繋ぐのはよっぽど高価な秘薬じゃないとできないわ。そう、『水の精霊の涙』くらいじゃないと。」

「『水の精霊の涙』とはなんですか？」

「ラグドリアン湖に棲む水の精霊が分けてくれる水のことらしいわ。とても数が少なくてかなり高価だと聞くわ。」

「そうなんですか。それでどんなイメージで『ヒーリング』をすればいいのですか?」

「そうねー。怪我しているところに向かって『傷よ、くっつけ~。早く治れ~。』とかイメージしてるわね。」

「・・・そうですか。分かりました。」

「これで後は一人で出来るわね。もし秘薬がいるならいつでも言ってね。」

「はい。そうさせてもらいます。」

「頑張ってね、ヴァル。」

これで回復魔法がどんなものか分かったな。あとは実戦あるのみか。しかし、念じただけで怪我が治るとかちょいチートか?でも、原作でカトレアさん結局治ってなかったような?

よし!魔法はイメージが大切だ。「良くなれ~」って念じるだけじゃなくて、怪我の部分が自然治癒していく過程をイメージすればもっと効率が上がったりするんじゃいかな?練習がてらちょっといろいろ試してみよう。

でも普通の生活をしていてそう怪我人に出会うことはないので、兵舎の訓練場で怪我した人の治療をさせてもらった。ほぼ擦り傷とかだったけど。

回復魔法『ヒーリング』を使用する時に試してみたのは、

1. イメージはハルケギニアで一般的な「怪我治れ～」で秘薬は未使用
2. イメージは怪我が自然治癒するもので秘薬は未使用
3. イメージはハルケギニアで一般的な「怪我治れ～」と効果の低い秘薬
4. イメージは怪我が自然治癒するものと効果の低い秘薬
5. イメージはハルケギニアで一般的な「怪我治れ～」と効果がちょっとだけ高い秘薬
6. イメージは怪我が自然治癒するものと効果がちょっとだけ高い秘薬

とりあえず、この6つの方法を比べてみた。

結果は、回復効率順に高い方から6、4、5、3、2、1となった。しかし、4と5はほぼ同じであった。もし秘薬の効果がもっと高いものを用いれば4と5は順序が違ったであろう。

これらの結果から、やはり『ヒーリング』を行う際でも明確なイメージは大切だということとより効果の高い秘薬を用いた方がいいという結論に至った。

人体の明確なイメージは自分の体を『ディテクトマジック』しまくって、どんな構造をしているか知る必要があるな。

あと、『ヒーリング』自体の効果はメイジのクラスが上がれば、自然と上がるだろう。

そうそう。ここ最近『ヒーリング』ばっかり使っていたので、おかげで水の系統がラインクラスになった。

でも、こっちの水のスクウェアクラスのメイジでも治せないカトレアさんの病気ってなんだろう？

主人公が回復役。これってありですか？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

主人公が回復役と聞くと、アークザラットのアークを思い出します。
後半はポコでしたけど。

次は領地経営に参加します。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

領地経営に参加することになった。の巻！（前書き）

こんにちは。こんばんは。

領地経営参加です。ちょっと強引ですかね。
私に領地経営のノウハウなんてないので間違ったことや矛盾を書いてしまうかもしれませんが、生暖かい目で見守ってください。

領地経営に参加することになった。の巻！

「ヴァルムロート。お前ももう１０歳だな。」

「？、そうですね。」

「家庭教師に聞いたが、お前は算術の成績が良いそうだな。」

（ああ、あの小学低学年レベルの算数のことか。）

「はい。まじめに勉学に励んでいるおかげでしょうか。」

最近やっと座学に算数が入ったんでけど、それが簡単なものしかやらないのだ。まあ、１０歳だし、しょうがないのだけど。それでも、いまだに足し算と引き算くらいで、掛け算とかはまだ習ってない。

「もう。ダーリンたら、謙遜しちゃって。お父様聞いてよ。ダーリンたらすごいのよ。家庭教師より先に答えを出しちゃうんだから！」

「そうなのか？ヴァルムロート。」

「いえ。たまたまですよ。」

「・・・そうか。少し早いかも知れんが、ヴァルムロート。お前領地経営に参加してみないか？」

「え？私はまだ１０歳ですよ。いいのですか？」

「ああ、本当はもう少し後と考えていたのだが、お前は物分かりもいいし、算術にも強い。分からないことはこれから覚えればいいだ

ろう。」

「まあ、父上がそう言うのなら、参加してみます。」

俺のその言葉にいままで黙っていた母さん達が、

「頑張りなさい、ヴァル。」
「ヴァルならできるわ。」
「あまり無理をしないでね。」

姉さん達が、

「頑張るのよ、ヴァル。」
「すごいわねー、ヴァル。」
「・・・私に算術教えてほしい。」
「応援してるわよ。ダーリン。」

なんか約1名ほど異なる激励の言葉ではなかったけど、俺は領地経営に参加することになった。

俺は今父さんの書斎の前に来ている。父さんから領地経営について教えてもらうためだ。

「父上、ヴァルムロートです。」

「来たか。入れ。」

「はい。失礼します。」

「ヴァルムロートこっちに来て、座れ。」

「はい。」

「それでは領地経営について教えよう。」

「よろしくお願いします。父上。」

「領地経営は領地を管理することと平民から税を収集することに大きく分けられる。」

「はい。」

「まず領地の管理では、領地内にある町や村に生き、そこの治安や農業の様子を見ることや村から被害報告があった時は亜人やオーク鬼、盗賊団などの討伐を行う。」

「・・・盗賊ですか。人も殺すことになるのですね。」

「ああ、悲しいことだが、これも他の平民を守るためだ。すぐに割り切れるとは思わんが、覚悟しておけよ。」

「はい。分かりました。」

「次に平民から税を収集することだが、我が領地では平民からの収集する税とトリステインとの国境を商人達が渡るときに払う税の二つを取っている。」

「『我が領地では』ということは、国境に接していない領地では平

民からの税のみ、というわけですか。」

「そうだ。平民から税を収集する方法は直接収穫物を納めるか、商業などで稼いだお金を納める2つの方法がある。」

「どのくらいの税率なのですか？」

「平民が全体の6割、国境を超える時は7割だな。」

「6割！半分以上ですね。それで平民は生活できるのですか？」

「ちゃんと生活出来ているぞ。ゲルマニアでは商人が金で領地を買い、貴族になることもあるからな。他の国ではそうはいかん。それに6割はハルケギニアではかなり少ない方だぞ。隣国のトリステインでは税を7～8割取るところも多いぞ。」

「そうなのですか。」

「ちなみにどうやって税率を決めているのですか？」

「基本的にその領地を任されている貴族に一任されるな。国境はそこに接する2つの領地を持つ貴族同士で決められる。」

「他国の貴族と交渉できるとは父上はすごいですね。」

「あっはっは。もっと褒めていいぞ。いずれお前もその後を継ぐのだからな。いまから精進するようにな。」

「はい！それで私達の領地と接しているトリステイン側の領地の貴族は誰なんですか？」

そう俺が父さんに聞くと、あからさまに嫌そうな顔をして、その名を発するのも嫌そうに。

「・・・ヴァリエールだ。」

ヴァリエール・・・。ああ、ルイズの家か。そう言えば、原作で最初の方はルイズとキュルケって家柄からお互いを嫌ってた様だからな。やっぱり、父さんも嫌いなんだ。

「父上はヴァリエール家は嫌いなのですか?」

「『嫌いなのですか?』だと?そんなの嫌いに決まってるだろうが!あのくそヴァリエールが!自分の好きだった女を取られた程度で騒いで、器が小さいのだよ。しかも、いつも細かいことをねちねちと・・・」

「父上はヴァリエールさんと一緒にいた時期があるのですか?」

「一緒とかいうな!ただ、私がたまたまトリステインの魔法学院に留学したときにそこにいただけだ。」

俺がなんで父さんは留学とかしたのかな?とか思っている間、父さんは「あのとき俺が・・・」とか「今度会ったら決着を・・・」とかなんか物騒なことを言っていた。本当に嫌いなんだな。というか、父さんとヴァリエールさんの間にも何か問題が発生しているようだな。特に女がらみで。・・・そろそろ次に進むか。

「父上。・・・父上!」

「あのばｋ・・・、おお、すまん。で、なんだったかな？」

「国境についてです。父上がすごい、というところでした。」

「ああ、そうだったな。国境周辺の領地には『公爵』や『伯爵』などの地位の高い貴族が選ばれる。ちなみに家は『辺境伯』といって、王族やその親族からなる『公爵』を除けば一番高い位なんだぞ。」

「家ってすごかったんですね。」

「うむ。本来なら今頃お前に許嫁の一人でもいるころなのだが、・・・キュルケがああだからな。」

「キュルケはすごく家族愛が強いですからね。」

「・・・そうだな。あれを家族愛というのならな。キュルケもその気になれば、男を選び放題なのだがな。」

（それって、原作のキュルケだよな。あと、８年くらいあるからそうなる可能性もあるけど。）

「父上はそんなキュルケがよかったですか？」

「そんなの嫌に決まってるだろう！というか、誰にも嫁にいってほしくない！いつまでも家にいてほしい！」

（あれ？たしかツェルプストー家って恋に積極的じゃなかったのか？それともこれが父親の心情なのかな？）

「少し落ち着いてください、父上。それにもし嫁に行くとしてもまだ先の話ですよ。」

「ああ、すまない。今日はここまでにしよう。・・・そうだ。お前にこの本を渡しておこう。」

父さんは立ち上がり、後ろの書棚から1冊の本を取り、俺に渡した。

「これは何ですか？」

「領地経営に書かれた本だ。基礎的なことが書いてあるのでお前のためになるだろう。」

「ありがとうございます。」

「うむ。お前にはそのうち、1つくらい村を任せてみようと思う。どこにするか決まったらまた食事の時にでも言おう。」

「ちょっと待ってください。もう1つとはいえ村を任せるのですか？」

「何事も実戦あるのみだ。分からないことがあれば、遠慮なく私に聞け。」

「・・・分かりました。頑張ってみます。」

「頑張れよ。ヴァルムロート！」

領地経営に参加することになった。の巻！（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

次はいよいよ領地経営開始です。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

領地経営始めました。1年目（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は領地経営というか村の運営？の話です。

領地経営始めました。1年目

「ヴァルムロート、お前に任す村が決まったぞ。」

父さんに領地経営を最初に習ってから、1週間経った夕飯の時に突然父さんがこう言いだした。

「え!?もうですか?あれからまだ1週間しか経ってないですよ。」

「ヴァルムロート、この前渡した本は読んだか?」

「あの領地経営について書かれた本ですか?一通り読みました。」

父さんに渡されたあの本は半分くらいは領地経営について書いてあったが、後の半分はこれまでの収集した税の内訳やその使い道などが書いてあった。

「ちゃんと読んだのか、えらいぞ。内容は理解できたか?」

「はい、だいだいですけど。」

「ならいい。では、明日その村の視察をするぞ。」

(いやいやいや。早すぎだろ!)

「明日ですか!?少し早急なのでは?」

「そうか?いずれするのだから、早い方がいいだろう。もう村にも明日行くと連絡してある。」

「・・・そうですか。分かりました。」

「お父様、私もついて行ってもよろしいですか？」

「キュルケ？」

「キュルケも行きたいのか？しかし、何もない村だぞ。」

「別にいいじゃないですか、あなた。別に危険もないでしょ。」

「・・・そうだな。まあ、いいだろう。」

「ありがとう！お父様。」

（さすが、父さん。娘に甘い。）

「そんなわけで翌日の朝になりました。」

「何言ってるの？ダーリン。」

「いや、何でもない。ちょっと緊張してるだけだよ。」

「今日は視察だけでしょ。大丈夫よ。」

「うん。分かってるんだけどね。これからその村の人たちの運命を僕が決めていくことになると思うと・・・」

「もう！ダーリンは気にしすぎ。これから始まるんでしょ。ゆっくりやっていけばいいのよ。」

「・・・ありがとう、キュルケ。少し気が軽くなったよ。」

「二人とも揃っているな。」

「あ、おはようございます。父上。」

「おはようございます。お父様。」

「おはよう、ヴァルムロート、キュルケ。さあ、出発するぞ。」

「「はい。」」

俺達は用意されていた馬車に乗り込んだ。

「父上、村まではどのくらいの時間がかかるのですか？」

「そうだな。昼ごろまでには着くだろう。」

（大体３～４時間ってことか。馬車の時速が約１０Ｋｍ／ｈだとして、ここから３０～４０リーグってところかな？）

「結構時間がかかりますね。」

「お前が行き来しやすいように、これでもなるべく近いところにしたんだぞ。」

「そうなのですか。御気使いありがとうございます。」

「良かったわね。ダーリン。」

「父上、そこの村はどんな感じの村何ですか？」

「うむ。これからお前に任せることになる村は平民が４８人住んでいる小さな村だが、最近開拓されたところなので、村を大きくするのも潰すのもどうなっていくかはお前次第だな。」

（父さんなんか微妙にプレッシャーかけてないか？）

「・・・頑張ります。」

「お父様！あまりダーリンをいじめないでください。」

「そういうわけではないのだが。」

「そうだよ、キュルケ。父上は僕に期待しているからわざとあんな言い方をしたんだよ。」

「そうなのですか、お父様？」

「そうだよ、キュルケ。期待しているぞ、ヴァルムロート。」

「それで父上、そこの村にはもう名前が付いているのですか？」

「いや、まだ付いていないな。なにかいい名を考えたのか？」

「はい。『ヴァイス』という名前を考えました。」

「『ヴァイス』か。」

「ダーリン、この名前に何か意味があるの？」

「ああ、『ヴァイス』は何色にも染まっていない真っ白なところ、始まりの村という意味を込めたんだ。」

（まあ、ポケモンの『マサラタウン』から取ったんだけど、俺の領地経営はその村から始まるからいいと思うんだよね。）

「いい名だな。では、これからその村は『ヴァイス』としよう。」

「真っ白。・・・これからその村をダーリン色に染めるのね！」

（そういうことは考えてなかった。）

「・・・ああ、そうだね。」

馬車の中で『ヴァイス』ができた経緯や村の周辺の様子について聞いていると、ほどなくして村に着いた。なんでも、村ができたのは新しく村を作るということで2～3ヶ月前から村人を周辺の村から集めて、ここ最近ようやく形になったらしい。・・・父さん、まさか俺に任せるつもりでこの村を作ったわけじゃないよな？

「着いたぞ。ここが『ヴァイス』だ。お前に任す村だな。」

「ここが・・・」

すると、村の奥から一人の老人がこっちに向かってきた。

「御待ちしておりました。ツェルプストー様。本日は遠路はるばる

ようこそいらっしゃいました。」

「うむ。」

「父上、この方はどなたですか？」

「もしや貴方様がヴァルムロート様ですか？私はこの村で村長を任されました。シーボルトと申します。」

「はい。私がヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーです。あ、こっちは姉のキュルケです。」

「む。・・・こんにちは。」

「ヴァルムロート様、キュルケ様、これからよろしくお願いいたします。」

「こちらころお願いします。シーボルト村長。」

「シーボルト。この村はこれから『ヴァイス』という名前になったので、これからそうするように。」

「『ヴァイス』ですね。分かりました。村の者に伝えておきます。ところで何か意味があるのですか？」

「うむ。真っ白でそこから始まる村という意味らしい。ちなみにこれを考えたのはヴァルムロートだぞ。」

「これをヴァルムロート様がですか。『ヴァイス』という名前を考

えてくださり、ありがとうございます。」

（父さん、なんか俺が言ったのよりかっこ良くなってるよ。）

「いえ、私が領地経営に携わるのはこの村が初めてなので、共に頑張っていきたいと思い、この名前を付けさせていただきました。ご迷惑でしたか？」

「いえいえ、とんでもありません。これから、この『ヴァイス』という名前に恥じない村にしていきます。」

「よろしくお願いします。」

「では、ツェルプストー様、ヴァルムロート様、キュルケ様、これから村をご案内いたします。こちらへどうぞ。」

こうして村長に『ヴァイス』を案内してもらった。やはり、４８人の村なので小さな村だったが、以外と若い人が多くいて驚いた。なんでも、村人を募集する際に家を用意するという条件をつけたら若い人が多く集まったらしい。夢のマイホームってことか？

あと、村を見て回ってる最中に思ったけど・・・くさいね！

キュルケも「ちょっと臭うわね・・・」とか言ってたけど、ちょっとじゃないよ！かなり臭うよ！

家を見ると窓の下のところに糞尿が山になってたね。これはどうにかしないと・・・

・・・もしかして、家も俺の知らないところで糞尿が近くに捨てられてるのか？ますますどうにかしないと。

肥溜め作るか？それなら肥料も作るか？でも、どうやって糞尿使って肥料を作るんだ？腐葉土とかと混ぜればいいのか？要研究だな。

そんな感じで俺の初めての視察は終わった。

「シーボルト村長。また近いうちに来ますので、その時もよろしくお願いします。」

「また来られるのですか？分かりました。お待ちしております。」

「さあ、いくぞ。そろそろ帰らないと家に着くころには暗くなってしまうぞ。」

「はい。それでは。」

帰りの馬車の中で父さんが俺に話しかけてきた。

「ヴァルムロート、どうしてまた『ヴァイス』に行くのだ？」

「はい。村のあちこちに糞尿があり、臭いが酷いものだったのでそれをどうにかしたいと思いまして。」

「そうねー。確かに臭かったものね。でも、どこの町や村でも同じじゃないの？」

「そうだな。どうするのだ、ヴァルムロートよ？」

「はい。まずは糞尿を１つの場所に集めたいと思います。村の外れに地面に穴を掘って、糞尿が地面に浸透しないようにしたいと思っています。」

「うむ。たしかにそれなら村の中は臭くなくなるかもしれんな。」

「あと、その糞尿を肥料にできないかと考えています。」

「ヴァルムロート、肥料とはなんだ？」

（なに！？まだ肥料って概念がないのか？まずった・・・）

「・・・肥料というのは豊富な栄養を持った土のようなものです。この肥料を用いれば、作物がよく育つと、東の国の本に書いてありました。肥料を使えば、作物の生産性と品質が上がるのではないかと思います。」

「そんな本が家にあったか？」

「いいえ、この前町に出たときにたまたま出店に並んでいたのをちょっと見させていただいただけですよ。」

「そうか。こんどその本を見かけたら購入しなさい。」

（なんとか誤魔化せたか？）

「はい。そうします。」

「でもダーリン。糞尿を使うってちょっと不潔なんじゃないかしら？」

「たしかにそのまま糞尿を畑に撒いたら、不潔かもしれない。でも、森の腐った葉っぱがあるところの土と混ぜることで糞尿自体が土になって、肥料になるってその本に書いてあった様な気がする。」

「糞尿が土になるなんて、まるで錬金みたいね。」

「そうだね。」

「ヴァルムロートはすでにいろいろ考えているのだな。これから『ヴァイス』がどうなるのか楽しみだな。」

「本当にすごいわね。さすがダーリンね！」

「これから頑張ります。・・・ところで、父上。１つお聞きしたいのですが。」

「なんだ？」

「家の糞尿の処理はどうなっているのですか？まさか、窓から捨てている、とかではないですよね。」

「安心しろ。家は使用人に近くの森まで捨てに行かせているぞ。しかし、糞尿を使った肥料か。もし、お前の村でこれがうまくいけば、領地の他の村や町でもやらせてみよう。そのためにもヴァルムロートには頑張ってもらうぞ。」

「分かりました。成功するように努力します。」

こうして俺の領地経営が始まった。とりあえず、数日後に土メイジを1人借りて『ヴァイス』に行った。畑の近くに穴を掘ってもらって、壁を固定化してもらった。これで『肥溜め』が完成した。すごいね、土メイジ。生活面では土メイジってかなりチートな能力を持ってるよね。錬金や固定化、あとゴーレム生成とかゴーレム生成とかゴーレム生成とか。

村長に村人を集めてもらって、この『肥溜め』に糞尿を集めるように伝えた。貴族命令で違反すると厳しい処分がある、と言っておいた。本当に処分はしないつもりだけど、貴族の恐ろしさを知っている平民ならこの命令を破る人はいないだろうし、まあ、必要悪って感じかね。

あと、肥料についてはおおむね理解してもらったと思う。まあ、作り方はこれからなので、ある程度糞尿が溜まってから、森から土や枯れ葉なんかを持ってきてもらって、配分をいろいろ変えて作ってもらって、一番いい配分を決めることにする。

今年はとりあえず肥料作りをしてもらって、来年から肥料を使ってみることにしよう。

そういえば、どれくらい肥料を撒けばいいかも決めないとな。それも来年だな。

父さんが言っていた成果が出るまで数年かかりそうだけど、まあ、父さんもすぐにできるとは思ってないだろうし、気長にやろう。

俺は今父さんの書斎の前に来ている。

「父上、ヴァルムロートです。」

「お前か。よし、入れ。」

「はい。失礼します。」

「『ヴァイス』の方は順調か？」

「そうですね。糞尿の臭いは改善されましたが、肥料の成果が出るのはもう数年かかると思われます。」

「そうか。で、今日は何か他の用事で来たのだろう？」

「はい。父上に頼みがあってきました。」

「なんだ？」

「父上・・・」

「トリステインのヴァリエール家と友好を結びませんか？」

領地経営始めました。1年目（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

今回いつもより少し長くなってしまいました。
最後の方はちょっと駆け足だったかな？
あと、このときまだ農業するのに肥料を使っていないという設定にしましたが、もし原作で肥料を使っている、もしくは元になったヨーロッパの時代ですでに肥料が使用されていたということでしたら、これはオリジナル設定ということにしておいてください。

基本的に領地経営を詳しくやるつもりはありません。しかし、やってるなかで矛盾やおかしなことをいろいろ書いていると思いますので、その時は御指摘してくださると助かります。

次はとうとう原作のメインヒロインのルイズが登場します。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

出張！カトレア動物王国！（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は前回の引きの続きです。

あと、今回は話が長いです。２つに分ければよかった・・・

出張！カトレア動物王国！

「トリステインのヴァリエール家と友好を結びませんか？」

俺がこのセリフを言ったら父さんがどんな反応しようと、かなり大変なことになるのは分かり切っていた。いや、分かってるつもりになっていた。

でも、カトレアさんを治療して、そして治せる可能性が少しでもあるなら、今からでもカトレアさんの様子を見ておけば対策も立てやすいし、それにいざ俺が治療するぞ！って時にヴァリエール家の方々から反対されたんじゃあ、出来るものも出来なくなるし、両家の友好フラグの１つでも立てといた方が良いんじゃないかな、と考えたんだけど。まあ、治せない可能性の方が高いんだけどな。

「・・・ヴァリエールと仲良くだと？」

父さんがわなわな震えている。

「そんなことを言うとは、お前はヴァルムロートではない！・・・お前は誰だ！」

（ちょっ！父さん何言ってんの？）

「何を言っているのですか！僕はヴァルムロートですよ！」

「・・・はっ！まさか、ヴァリエール家の密偵か！？」

（密偵、スパイかよ！）

「父上、落ち着いて！僕がヴァリエールの密偵なわけがありませんよ！」

「くそ！ヴァリエールめ！まかさ息子に『フェイスチェンジ』した密偵を送り込むとは・・・」

「落ち着いｔ」

「黙れ！私は冷静だ！」

（そう言う人は大抵冷静じゃないよ・・・）

「落ち着いて、僕の話を・・・」

「『ヴォルケイノー』！」

父さんが何か魔法を唱えた。すると、父さんの前に火の玉が現れ、それがみるみる大きくなり、２メイル以上の巨大な火の玉になった。

（あれは、やばい！）

俺は反射的にその場所から横に飛び退いた。

次の瞬間、その巨大な火の玉は爆発し、俺のさっきまで立っていた場所に爆発した炎が通り抜けた。

その爆発した炎は俺の後ろにあった扉や廊下の一部、廊下の向こう側の壁などを一瞬にして燃やし尽くした。

（あぶねー！体鍛えてなかったら、今ので死んでた・・・。ありがとうございます！ブルーダー師匠！でも、まさか魔法をぶっ放してくるとは予想外だった。）

今ので書斎に母さん達や家の使用人、警備の兵が来て、まだ暴れようとする父さんをなんとか落ち着かせてくれた。まさに九死に一生だった・・・。

「それでなぜあんなことを言ったのか訳を話してみろ。」

両脇を母さん達に抑えられた父さんが不機嫌そうに聞いてきた。書斎はさっきので使用不可になったので、今は食堂で家族みんな集まって、さっきの話の続きをしています。

「はい。まず僕が偽物でないことはもう分かって頂けましたよね？」

「それはもういい。」

ここに来るまでに何度も何度も『ディテクトマジック』をかけられて、本当に『フェイスチェンジ』した偽物ではないか確認された。

「お父様をあんなに怒らせるなんて、ダーリンは何を言ったの？」

事情を知らないキュルケがそう聞いてきた。母さんや姉さん達もうなずいている。

「僕はさっき父上に『トリステインのヴァリエール家と友好を結びませんか?』と言ったんだ。もちろん、父上が良く思わないとは考えていたけど、まさか魔法を放たれるとは予想外だったよ。」

「トリステインのヴァリエールって、あのヴァリエール?」

「そう。あのヴァリエール。」

すると母さんや姉さん達が『まあ父さんが切れてもしょうがないわね。』みたいなことをそれぞれ言っていた。切れ方が予想の右斜め上だったけど。

「まったくだ!我がツェルプストー家はヴァリエール家と数百年前からの因縁を抱えているのだぞ!それなのに今更友好など!言語道断だ!」

父さんはすっかり頭に血が上って、全く取り付く島がない。

「まあまあ、あなた。ヴァルの言うこともちゃんと聞いてあげましょう。」

「・・・そうだな。一応お前のいい分も聞いてみようじゃないか。ヴァルムロート言ってみろ。」

(ありがとう、母さん。ナイスフォロー!)

「はい。簡単に言えば、ヴァリエール領との通行税が高すぎるのでそれを少なくしてはいかがかですか?というものです。」

父さんに領地経営を教わった時に貸してもらった本の後半はこれまでの税収に関することだった。そこにうちとヴァリエールとの通行

税もあったのだ。

「ねえ、ダーリン。ちなみにどれくらい高いの？」

「そうだね。他国との通行税がだいたい６割、同じ国の他の領地だと５割ってところかな。それがうちとヴァリエール領の通行料は８割だったんだ。これはちょっと高すぎるかなって思って。」

「たしかに他と比べれば高いわね。」

「たしかに他のところの通行税と比べてヴァリエール領との通行税は高いが、それは今に始まったことではないぞ。それになぜそれがヴァリエールと仲良くすることに繋がるのだ？」

「はい。以前父上に領地経営を教わった時に通行税の税率は基本的にそこに接する２つの領地の貴族が取り決めると聞いたので。もし、通行税の税率が下がれば、一時的に税収は落ちるでしょう。しかしそこの物流が増えれば、最終的に通行税の税収が増えます。さらに領地内に物がより多く流通するようになれば、それだけ領地内の経済が回り、通行税だけでなく、結果的に税収全体が増える可能性があります。」

「確かにそのように出来たらいいだろうが、難しいぞ。それにヴァリエールとの因縁は数百年前からのものだからな。仮にその件にこちら側がよくてもヴァリエールがいいと言わないだろう。」

「確かに今言ったことは理想論ですが、どうなるかはやってみないと分かりませんし、ダメでもともとなら、成功した時に儲けものというものでしょう。あと、ヴァリエール家ですが、そちらも難しいですよね。もしかしたら、先ほどの父上のような反応をするかもし

れません。」

「・・・うむむ。」

「ですから、これまでの両家の因縁を父上の代で断ち切って、その友好の証として、通行税を引き下げる、というのはどうでしょうか？」

「しかし、そう簡単にはいかんだろう。」

「そうですね。しかし父上もヴァリエール家の当主もお互いに領地に利益がでるのは何かが分かる理解がある人同士だと僕は思っています。」

「しかし、だな・・・」

「「「あなた!!」」」

「なんだ!?お前達?」

「ヴァルがこう言っているのですから、考えを改めてみてはいかがですか?」

「ダメでもともとでしょ。やってみたらいいじゃない!」

「だめだったら、また元に戻せばいいのよ。」

「でも、だな・・・」

母さん達にいろいろ言われているが、それでも渋る父さんにマリー

ナ母さん（俺の実母）が一言言い放った。

「あなたはこんなに器の小さい男だったのですか！」

「・・・器が小さいだと！？」

「ええ！感情に任せて任された領地の利益になることをしないとは、ずいぶん器の小さい男だったと言ったのです。」

「・・・分かった！ヴァリエールでも誰とでも友好を結んでやろうじゃないか！」

「それでこそ、私達の夫ですよ。」

「かっこいいよ！」

「惚れ直すわね。」

・・・俺達、娘息子は蚊帳の外だ。

しかし、俺が言えたことじゃないけど。父さん、母さん達にはかなわないんだな。上手いように誘導されてるよ。

そして俺がヴァリエール家との友好を提案してから、１ヶ月経った。その間、父さんはヴァリエール家と国境の通行税についてやり取りをしていた。どんどん父さんの機嫌が悪くなっていくのがちょっと怖かった。

そして、ようやく明日国境沿いの町で会合することになった。ちなみにこの町は国境沿いといってもトリステイン側（先方が譲らなかった）で、ここまで来るのに国王に鷹便出して許可貰ったり（ようやく普通の税率にするのか。とか書いてあったらしい）、馬車で３日かけて来たり（お尻痛い）と、いろいろ大変だった。

父さんに聞いた話だと、この町はヴァリエール家から馬車で半日くらいの近さで、あちらは４人でくるらしい。ヴァリエール家当主とカリーヌ夫人とあとは誰だろ？

ちなみにここに来たのは父さん（まあ、今回の主役だしな）と母さん（今回は俺の実の母さんだけ、父さんのストッパー役）、俺（なぜか。この件の発案者だからか？）そしてキュルケ（めったに来ない町で買い物がしてみたらしい。父さんは結構ごねたが、母さんが一蹴した）の４人だ。

町に着いた時、夕飯にはまだ早い時間だったので、母さんとキュルケが買い物に行くと言って俺は巻き込まれた。父さんはお尻をさすりながら、部屋で寝ると言って部屋に行った。

２人の買い物につき合っている時、動物がたくさん入っている馬車や檻が付いている馬車が数台、俺達が泊まる宿とは別の宿のそばにあった。

「なにかしらね？」

「たくさん動物がいるし、見せ物屋でもやるんじゃないの？」

（移動動物園か？）

「なんだろうね？」

馬車の周りにはたくさんの人がいて、特に子供が大興奮しているようだった。俺達は買い物の途中だったので特に気にすることなく通り過ぎた。

で、翌日町長の家の一室を借りて、両家が対面しました。

こっちは父さん・母さん・キュルケ・俺の４人で、あっちがヴァリエール家当主・たぶんカリーヌ夫人・ピンクの髪で胸があるからたぶんカトレアさん・カトレアさん？より小さいピンクの髪の子供はルイズか？の４人だった。

って、カトレアさん！？カトレアさんって絶対安静とかじゃないの？違うのか？もしかしてこの世界だとカトレアさんは病気じゃないのか？

それで、結論から言うと会合は決裂した。まさかヴァリエール家当主があんなにも頭が固いとは、それに一緒に来ていたカリーヌさんも猛反発だったな。なんかルイズも一緒になって反対してたけど、意味分かってるのかね？唯一カトレアさんだけが、ヴァリエール家の方々を抑えようとしてくれてたね。まあ、無理だったけど。

それで会合が終わって、母さんとキュルケはむしゃくしゃするから買い物に行くと言いだし、今度は父さんも巻き込んで買い物に出かけた。

「見てください、お母様！このお店！ゲルマニアにはない色の服を扱っていますよ！」

「まあ！本当！あなた、ヴァル。ちょっと見てきますから、そこにいてくださいね。」

このやり取りが１０軒くらい続いた。母さんとキュルケが買い物に満足し、俺と父さんがげんなりしていた。そして、１１軒目の店に母さんとキュルケが入って行った。もちろん俺と父さんは外に残された。

「どれだけ買い物するつもりなのでしょうか？それにしても父上、まさかヴァリエール家当主がここまで頭が固いとは思いませんでした。もう少し柔軟な考えができる人かと思っていたのですが・・・。」

「私もに分からん。それにしてもそうだな。まあ、元々トリステインの貴族は自分のプライドを優先するやつが多いからな。」

「通行税の引き下げできませんでしたね。」

「ああ、陛下も気にかけていてくださったのに、申し訳ないな。」

「「はあああ。」」

と、俺と父さんがため息をついていると、

「誰か、誰か水メイジはおらんか！」
「カトレア！大丈夫ですか！カトレア！」
「ちい姉さま！ちい姉さま！」

「父上、あれは・・・」

「うむ。ヴァリエール家の者達だな。かなり慌てているな。」

（たぶんカトレアさんが倒れたんだな。やっぱり病気なんだ・・・）
「水メイジを探しているとなれば、カトレアという方に何かあったのかもしれませんね。父上、ちょっと行ってきます。」

「お前が行く必要はないのではないか？お前も先ほどのヴァリエールの態度が気に入らなかっただろう。」

「そうですが、困っている人を見過ごしたら、人としてだめだと思います。だから、行きます。」

「そうです。ヴァル、かっこ良く助けてきなさい。」

「母上！」

「かっこ良いところを見せてね。ダーリン。」

「キュルケ！」

「良し！ヴァルムロート、行って来い！」

「はい！」

俺は人だかりができ始めたところに走って行った。

「すみません！どいてください！ヴァリエール公爵様、どうしました？」

「お前はツェルプストーのところの！お前に用はない！」

「しかし、カトレア様が倒れられたのですよね。私に診させてもらえませんか？」

「ツェルプストーのせがれに私の娘が任せられるか！」

「あなた！今はそんなことを言っている場合じゃありませんよ！」

「うむ・・・。しかし、こいつはまだ子供だ。カトレアの治療ができるとは・・・」

「ちい姉さま！誰でもいいから、ちい姉さまを助けてよ！」

（らちあかねえ。）

「ちょっとすいません。『ディテクトマジック』」

ちょっと強引にカトレアさんに『ディテクトマジック』をかけさせてもらった。見たところ、呼吸がかなり速いし、手を胸にやって息苦しそうだし、これって『過呼吸』ってやつか？あと、『ディテクトマジック』をかけて分かったけど、すこし気道が狭いのかな？あ

とは・・・って、そんなことより今はカトレアさんを助けないと！

（『過呼吸』って、確か口と鼻を紙袋で覆って、自分の息を再び吸わせれば良いんだよな。でも、ここには紙袋とかないし・・・あ！そうだ！）

「カリーヌ様、カトレア様の顔を覆うような半球状の空気の層を作り出すことはできますか？」

と、手のジェスチャーを付けながら、カリーヌさんに聞いた。

「ええ！できますわ！」

「では、お願いできますか？」

「おい！それがなんｎ

「あなたは黙ってて！はい！できましたわ！」

俺は懐から杖と秘薬を取り出した。そして、秘薬の蓋を開けて、

（さすがに速いな。あとは呼吸しやすいように気道を少し広げて、さらに横隔膜の動きを緩やかにするイメージで）

「『ヒーリング』」

すると、大体2分くらいでカトレアさんの呼吸が落ち着いてきて、顔からも苦痛が消えたようだった。

「これで大丈夫でしょう。」

「おお！カトレア、大丈夫か？」
「カトレア！もう苦しくはありませんか？」
「ちい姉さま、もう大丈夫？」

「お父様、お母様、ルイズ、心配かけてごめんなさい。最近体の調子が良かったから、油断していました。」

「ヴァルムロート。カトレア嬢はもう大丈夫なのか？」

「あ、父上。はい、とりあえず大丈夫です。しかし・・・」

「ヴァル、どうしたの？」

「ヴァリエール公爵様、カトレア様の御病気は以前から患われていたのですか？」

「・・・うむ。そうだが、お前には関係ないことだろう。」

「ヴァリエール！お前というやつは！」

「父上、いいのです。・・・やはり、先ほど『ディテクトマジック』をかけた時に、胸の中にある空気をためる袋のなかに正常ではないはずの袋状のものがありました。おそらくこれが以前からカトレア様が患われている御病気の原因でしょう。今回の症状はおそらく遠出したことと、今回の会合などにより体と心に負担がかかったことにより、運悪く起こってしまったものと考えられます。」

「・・・だから、私はカトレアが今回の会合に付いてくるのは反対だったんだ。今度からはもう遠出はさせないぞ。」

「わかりました。・・・ヴァルムロートさん、先ほどは助けてくださり、ありがとうございました。」

「いえ、大事がないくでよかったです。」

「そろそろ家に戻るぞ。カトレアの様子もちゃんと診てもらわないといけないからな。」

「さっさと帰れ、ヴァリエール。」

そんな中、カリーヌさんが俺をじっと見ていた。なにかを考えているらしく、はたから見たら俺、睨まれてます。正直、かなり怖い。

「あなた。ツェルプストー領との通行税の件ですけど、税率の引き下げをしてはいかがですか？」

「カリーヌ！？何を言っているのだ？」

「「お母様！？」」

「ただし、１つ条件をつけて、ですけど。」

「父上、これは良い機会かも知れませんよ。」

「うむ。私としては願ってもないことだが・・・。それで、カリーヌ夫人、その条件とは？」

「いえ、簡単なことですわ。あなたの御子息が私の娘カトレアの病

気を完治させる、というものですわ。」

「な！」

「カリーヌ！バカなことを言うな！高名なスクウェアクラスのメイジでさえだめだったのだぞ！それなのにこんな小僧になにができるか！」

「おい！ヴァリエール！うちの息子をバカにするなよ！１０歳にして、すでにラインクラスのメイジなんだぞ！そっちの小さい方は大体同じくらいの歳だろう。そっちはどうなんだ？」

「ぐ・・・、ド、ドットだ。」

「うちのキュルケも１０歳でラインクラスだ！うちの方が優れているじゃないか！」

（・・・ルイズはたぶん魔法失敗しまくってんだろうな。公爵さんはちょっと見栄を張ったな。ルイズうつむいてるぞ。）

「父上、その位で・・・」

「何を言っている！お前がバカにされたんだぞ！これが怒らずにいられるか！」

「ふん！ルイズは大器晩成なのだよ。いまにそっちを追い抜くぞ！」

「「あなた！少し、お黙りなさい！」」

母さんとカリーヌさんのダブル母さんで父さんと公爵さんを黙らせた。俺もビビったよ。

「それで貴方、ヴァルムロートといったかしら。どうなの？カトレアの治療ができそうかしら？」

「・・・期限などはあるのでしょうか？」

「期限は・・・、そうね、貴方が諦めた時かしら。」

「・・・もしお受けして、それで私が諦めた時はどうするのですか？」

「そうね、貴方の命、かしら？」

「カリーヌ夫人！それはあまりにｍ」

「あなたは少し黙っててくださいな。ヴァル、どうなの？できそう？無理なら、今ここでちゃんと言っておくのよ。」

（カトレアさんの治療ができればいいな、くらいで考えてたのに、まさか失敗の代償が俺の命とか、・・・どうするよ？でも、期限はないし・・・）

「カリーヌ様、本当に期限は私が諦めた時なのですか？」

「そうね。・・・あ、あと、治療が間に合わなくてカトレアに何かあったときね。」

「・・・分かりました。お受けいたします。」

「そう。ありがとう。」

「ヴァルムロート！お前、大丈夫なのか！？」

「なんとかなりますよ、父上。」

「あなたもこれでいいかしら？」

「うむ。カリーヌがここまで言うのなら・・・」

「ちい姉さま・・・」

「あ、あの、よろしくお願いします。ヴァルムロートさん。」

「はい。頑張ります。カトレア様。」

「『カトレア様』なんてやめてください。呼び捨てでいいですよ。」

「しかし、それでは。・・・では、カトレアさんでお願いします。」

「しょうがないですね。今はそれでいいですよ。」

「カリーヌ、カトレア、ルイズ。もう帰るぞ！」

「ダーリン！・・・私というものがありながら、他の女にデレデレするなんて・・・」

「キュルケ！？いやいや、デレデレとかしてなかったろ！」

「ダァァリィィン・・・」

（父上、母上、キュルケに何か言ってあげてください。）

「ちょ、父さん母さんなんか言ってやってよ！」

「あら？ヴァル、その言い方・・・」

「・・・私達ももう宿に戻るぞ。明日の朝出発だからな。」

「父上！母上！」

「ねえ、ヴァル？もう1回、さっきの呼び方して？」

「だーーりーーん！」

「分かったよ、母さん！これでいいでしょ！とにかくキュルケを止めてえええ！」

あれから父さんとヴァリエール公爵とで話し合った結果、通行税が8割から、なんと5割になりました。父さん頑張りすぎだろ！

後で父さんが話してくれたことによると、税率の引き下げは以前からヴァリエール家も考えていたそうで、でも今までの確執から言い出せないってところにこっちから話があったので、渡りに船って感じだったらしいんだけど、直接会って顔を見た瞬間にいままでの嫌い意識が一気に出たらしい。まあ、父さんも初めそんな感じだったから、魔法ぶっ放さないだけましだったのかも。

いろいろあったけど、通行税の引き下げができてよかった。まあ、これから上手く運用して物流を増やせるかかこれからの問題なんだけどね。

後、カトレアさんの件なんだけど、『ディテクトマジック』でちらっと見た感じでは肺以外に異常はないようだ。あの肺の中の袋状のものをどうにかすれば、カトレアさんも良くなるだろう。今度会った時に詳しく診せてもらって、あと今までにどんな治療をしたかを聞いておこう。頑張ろう。カトレアさんのために。・・・それ以上に俺の命のために！

まあ期限は無いに等しいし、なんとかなる！・・・か？

出張！カトレア動物王国！（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

これからちょいちょいヴァリエール家が出てくるようになります。
あと、冒頭で父さんが出した魔法はオリジナルのものです。火のスクウェアクラスの魔法が調べられなかったので。

御意見・御感想よろしくお願いします。

一討伐行こうぜ！（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は初めて討伐にいく話です。
正直、戦闘シーンは難しくて、かなり簡略していると思います。
皆さん、脳内補完しながら読んでください。

一討伐行こうぜ！

「ヴァルムロートよ、今度のオーク鬼の討伐に付いてきなさい。」

「・・・はい？」

「はっきり返事をしなさい。この間ヴァリエールに啖呵を切った時はもっと勢いが良かったぞ！」

（そんなに勢いよく啖呵切ったけ？）

「はい！付いて行きたいと思います。」

「よろしい。」

「・・・それで父さん、なんでいきなりオーク鬼討伐するなんて話になっているのですか？」

この間うっかり両親のことを「父さん母さん」と言ってしまってから、母さん達はこの言い方を気にいってしまい、父さんも「家族しかいない時は私のことを『父さん』と読んでもいいぞ。」と言い、姉さん達も「お父様お母様達だけなんてずるい！私たちももっと気さくな感じで呼んでよ。ねえ、ヴァル？」とか言ったので『姉さん』と呼ぶことになった。

「うむ。お前もそろそろ１１だ。メイジのランクもラインになっているので、そろそろ『実戦』というものを経験した方がいいと思ってな。」

「そうですか。」

「ちょうど、領地内の村から『オーク鬼を近くの森で見た』という報告があり、調べさせたところ、その村の森にオーク鬼が十数匹の群れがいることが分かったので、討伐することに決めたのだ。」

「なるほど。・・・そのオーク鬼は元々そこにいたのではないのですか？」

「いや、前にその村に視察に行った時はそのような報告はなかった。おそらくどこからか群れで移動してきたのだろう。」

「食糧でも探して移動してきたのでしょうか？」

「おそらくな。このままだと村に被害が出るのは確実だろう。」

「それは急がなければいけませんね。それで何時出発するのですか？」

「3日後だ。」

「3日後？もっと早い方がいいのでは？」

「討伐にいく兵士を選んだり、移動の間の食糧などの準備をする時間が必要なのだ。」

「父さん、キュルケは連れて行かないのですか？キュルケもラインメイジですよ。キュルケを仲間はずれにするのはどうかと思いますが？」

「確かに今回はキュルケを仲間はずれにしているだろう。しかし、

実戦となればたかがオーク鬼といえ何が起きるか分からないのだ。
そこに実戦に不慣れなものがいると全体の戦力が落ちる。だから、
キュルケを連れていくのはお前が実戦をある程度こなしてからだな。
」

「そうですか。分かりました。」

それから3日経った。その間にキュルケにこのことを話したら、「
私も行く！」と言ったが、父さんに説得されて、キュルケはしぶし
ぶ待っていることを了承した。

「それじゃあ、行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」
「頑張ってね。」
「気を付けてね。」
「ヴァル、初陣だからって緊張しすぎないでね。」
「怪我するなよ。」
「お土産よろしく。」

「お父様、次は絶対に一緒に連れて行ってね！」

「分かった、分かった。では、行ってくる。」

母さんや姉さんやキュルケ達に見送られながら、朝家を出発した。
討伐に行くのは俺と父さんを含めた１５人で、うち１０人が剣士で

5人がメイジという編成になった。その中にはレイルド先生やブルーダー師匠もいた。

その村には途中の町で1泊して、次の日の昼過ぎに着いた。村は200人ほど住んでいるようだったが、最近オーク鬼が近くに出るようになったせいかあまり活気があるとは言えない様子だった。村の向こう側に森が見えた。おそらくあそこにオーク鬼が出るのだろう。

村に着いたら、村長が出迎えてくれて、今の現状を詳しく話してくれた。それによると、まだオーク鬼による村人の被害はまだ出てないようだが、オーク鬼が出るせいで森に狩りや山菜採りなどができずに困っているということだった。

そして村にある宿屋の1階の食事をするスペースを借りて作戦会議をした。

まあ、作戦と言っても、明日の朝、森に入り、数人が先行してオーク鬼の居場所を突き止める。ただし、オーク鬼が見つかっても見つからなくても偵察は帰りも含めて30分で一度隊に戻ることを決めた。オーク鬼が集まっているところにメイジが魔法を放ち、討ち漏らしたオーク鬼を剣士と一緒に倒していくというものだった。俺は後ろから魔法を放てばいいらしい。

その日はそれで終わり、俺と父さんは村長の家で寝ることになった。

（とうとう明日か、少し・・・いや、かなり緊張するな。）

「・・・じゃあ、父さん。お休みなさい。」

「ああ、お休み。明日は早いぞ。ちゃんと寝ておけよ。」

「はい。でも、緊張して眠れるかな？」

「誰でも最初はそんなものだ。そのうちに慣れるさ。」

「そんなものかな？」

「そんなものだ。しかし、寝不足で魔法の威力が落ちることがないように、無理にでも寝ておけよ。」

「分かったよ、父さん。今度こそ、お休みなさい。」

「お休み。」

ベットに入って、目をつぶり、羊の数を数えているうちにいつの間にか寝ていた。

空がすこし明るくなってきた頃、俺は自然と目を覚ましていた。おそらく緊張のせいで眠りが浅くなっていたのだろう。部屋の外からはすでに起きている人がいるらしくパンの焼けるいい匂いがしていた。

俺はベットから起きて、服を着替えて部屋の外に出て行った。

「あ、おはようございます。ヴァルムロート様。今朝食の準備をしておりますので、少々お待ちください。」

「分かりました。おはようございます、父上、もう起きていたのですか。」

「おはよう、ヴァルムロート。もうそろそろ誰かに起こしに行かせようと思っていたところだ。」

「そうですか。朝食を食べたらすぐにでも森に行くのですか？」

「ああ、オーク鬼は早朝は集まって寝ていることが多いからな。」

「つまり、そこを一網打尽にするということですね。」

「そうだ。だから、素早く朝食をすましたら、すぐに森に入るぞ。」

「はい！」

運ばれて来たパンとスープを手早く食べて、昨日は宿に泊まったレイルド先生やブルーダー師匠達と合流して、早速森に入って行った。

足の速い兵士数人がそれぞれ偵察に出てからまだ２０分くらいしか経っていないが、１人の兵士が戻ってきて、オーク鬼が集まっている場所を見つけたと報告してきた。他に偵察に出でいた兵士もそれから１０分くらいしたら、全員戻ってきた。

匂いで気付かれないように風下から報告があった場所に行くと、少し森の中の少し開けたところにオーク鬼が１７匹眠っていた。

そしてオーク鬼討伐が始まった。

「『ウォーター・シールド』」

まず水メイジが『ウォーター・シールド』をオーク鬼がいる場所の向こう側に発生させた。これはオーク鬼の逃げ場を奪う壁と火の系統魔法から森を守る壁の２つの意味があると作戦会議の時に聞いた。

そして、すぐに俺と父さんを含む４人のメイジによる攻撃が始まった。

「「「「『フレイム・ボール』」」」」

当然現れた水の壁と飛んでくる火の玉にオーク鬼達は半数がすでに息絶えていたようだった。風下にいるのでオーク鬼の焼けるくさい臭いが漂ってきて、すこし気分が悪くなった。

「「「「「「「「「「グオオオオオオオオオオオ!!!!」」」」」」」」」」

しかし、残り半数はうまい具合に魔法をやりすごしたり、仲間のオーク鬼を盾にして、こっちへと雄たけび迫ってきた。

「迎え撃てー！！」

「「「「「うおおおおおお！」」」」」

父さんの掛け声とともに今まで待機していた兵士達が一斉にオーク鬼に向かって行った。

オーク鬼の大きさは約２メイルあり、さらに手に大きな棍棒のようなものを持っており、おそらくまともに１対１で戦えば、いくら戦い慣れしている兵士であっても苦戦するだろう。

しかし、今はオーク鬼1匹に対し1~2人の兵士で動きを止め、もう1人でトドメを刺すといった感じで、順調にオーク鬼の数を減らしていった。

そんな光景を戦闘の後衛から見ていた俺はすっかりこの『実戦』が終わったと思っていた。

（ふう、最初はどうなるかと思ったけど、大したこと無かったな。）

「・・・これで終わりかな？」

その時、後ろで草の擦れる音が聞こえ、次の瞬間、「グオオオオオ！！」という雄たけびと共に俺の横の地面が爆ぜた。

その衝撃で俺は2~3メイルごろごろと転がった。

「う・・・。なんだ！？」

「ヴァルムロート！逃げろ！まだオーク鬼がいたんだ！」

俺が顔を上げてオーク鬼を確認したのと、父さんのこの声を聞いたのはほぼ同時だった。

俺とこのオーク鬼の距離は俺が吹っ飛ばされた2~3メイルしかなかった。オーク鬼は近くで見ると、とても大きく感じた。まあ、実際に倍くらいの大きさがあるのだが。

父さんや他のメイジはどうするか迷っていた。魔法をするにはオーク鬼に俺が近すぎるし、万が一俺に当たらないともかぎらない。ま

た『ブレイド』という接近戦用の魔法もあるが、そもそもメイジは接近戦をあまり考慮していないので、自分達がはたしてオーク鬼に接近戦でかなうのかということから動けないでいた。

そして、その接近戦を行う兵士達はいまだ他のオーク鬼と戦っており、すぐに援護に来れるようではなかった。

しかし俺は杖を構えて、

「『ブレイド』！」

その次の瞬間にオーク鬼が俺に向かって横殴りに棍棒を振った。棍棒から逃げるように横飛びをしながら『ブレイド』でガードしたので、なんとか直撃は避けられたが、それでも数メイル後ろに飛ばされて、着地するときに足を挫き、尻もちをついてしまった。

「いつっ！・・・って、うわぁ！」

そんな俺にオーク鬼は容赦なく襲いかかってきた。大ぶりした棍棒を転がって避けて、オーク鬼の横っ腹を『ブレイド』で切りつけた。

「グオオオオオ！！！」

「うそ！まじかよ！」

『ブレイド』でオーク鬼に切りつけた部分は少し切れて血が出るくらいで、まったく致命傷やましては怯ませることもできず、ただオーク鬼を怒らせただけだった。

「ここから離れ、いてっ！」

足を挫いていて、しゃがんでいる状態からうまく立ち上がることができなくて、もたもたしてしまった。

（『今』の俺じゃあ『ブレイド』をうまく扱いきれないし、切れ味も良くない！しかも、オーク鬼が以外と足が速くて逃げることも出来ない！この距離じゃ『フレイム・ボール』をしてもすぐ死ぬわけじゃないからその間にやられる可能性もある。しかも、最悪自分の魔法の爆風に巻き込まれる！どうすれば・・・）

「・・・俺はガンダムになれないのか・・・」

動きが鈍くなった俺にオーク鬼が今度こそ俺を仕留めようと棍棒を振り上げた。

（・・・ガンダム・・・。そうだ！）

「『ビームサーベル』！」

俺はありったけの魔力で『ビームサーベル』を使った。

杖の先から巨大な赤い光の剣が形成され、それは眼前まで迫ったオーク鬼の棍棒を消滅させ、その延長線上にあったオーク鬼の上半身も消し去っていた。

「あは、は・・・。すごい、ぜ・・・お、れ・・・。」

『ビームサーベル』の激しい魔力消費とオーク鬼を倒したことによる緊張の糸が切れたことで俺は気絶してしまった。

次に俺が目を覚ましたのは村の村長の家のベットの上だった。足の捻挫はすでに治っていた。水のメイジの人が治してくれたんだろう。

起きて部屋を出たら、レイナル先生やブルーダー師匠がいて、すっごく謝罪された。でも、先生や師匠がいままで俺を鍛えてくれなかったら、死んでたかもしれない、というか死んでたから、「これからも俺を鍛えてほしい」と言ってこの場は収まった。でも、2人が「今まで以上の訓練でヴァルムロート様を最強に・・・」とか話し合っていた。今後の魔法と剣の訓練が少し怖くなった。

父さんには「戦場では最後まで気を抜くな！」と怒られた。その後に「1人でオーク鬼に勝つとはすごいな！」と褒めてくれた。

村は祝勝会みたいなのが開かれていて、村の人達にとても感謝された。その間、なぜか俺の二つ名が『炎剣』になっており、「炎剣のヴァルムロート様」とか言われた。

翌日の朝、村を発って、途中の町で1泊し、次の日にようやく家に帰れた。

家に帰って、父さんが皆に討伐のことを話した。俺がオーク鬼に襲われて、それでも『ブレイド』を使ってオーク鬼の棍棒を防いだり、『ビームサーベル』でオーク鬼を半分消し飛ばしたことを話していた。

俺はあの時、かなりの間オーク鬼と戦っていたような感覚だったが、

父さんの話から察するには１０秒にも満たない時間だったようだ。
あれか、人間が危機状態に陥った時に時間がゆっくり進むように感じるってやつか？

その話を聞いた母さん達は「次はもっと周りに気を配りなさい。」とか言われ、姉さん達は「オーク鬼を１人で倒すなんて、すごいわね！」と褒められ、キュルケからは「ダーリンはやっぱり凄いわね。でも、次は私も絶対に付いて行くからね！」と宣言された。

父さんは「次はもっと兵士を増やして・・・」とかキュルケがくるときのことを考えているようだった。

あと、俺の二つ名になった？『炎剣』はなかなか良い評価だった。
ツェルプストー家は火の系統が得意な家系だから二つ名に『炎』が付いてるのが良いし、『剣』っていうのも強さを表しているみたいで良いらしい。

『炎剣』って、十中八九『ビームサーベル』から来てるんだろうな。

少しはガンダムに近づけたかな？

一討伐行こうぜ！（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

もし戦闘シーンについてもっとこうした方が臨場感とかが出るよ！という方法などがあれば、御意見よろしくお願いします。

あと、これからもちょいちょい戦闘シーンがあるんですけど、タグの「Ｒ１５」とか付けた方がいいんですかね？よろしければ、こちらも御意見してください。

御意見・ご感想よろしくお願いします。

光でなく神の方なのはセリフがそれっぽいから（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は前半は必殺技開発の話になっています。

光でなく神の方なのはセリフがそれっぽいから

「俺のこの手が真っ赤に燃えｒ、あっちいぃぃぃぃ！！！」

すぐに軽い火傷になった自分の右手に秘薬を使って『ヒーリング』をかけた。

「熱かった・・・。しかし、炎を纏うのは無理か？いや、もう少し温度を落とせば・・・、でも温度を落としたら、攻撃には使えないな。精々、ちょっと熱い位までしか纏えないだろうし・・・。仕方ない、ゴッドフィンガーは諦めるか・・・」

「・・・いや待てよ。手を水でガードしたら、もしかしたら・・・」

「俺のこの手が真っ赤に燃える。勝利を掴めと轟きｓ、あっちいいいいいい！！」

すぐに魔法を解除して、『ヒーリング』を使った。

「水がお湯になりやがった・・・。やっぱり、炎を纏うのは無理か・・・」

初めの討伐から戻って分かったことだが、火の系統がトライアングルランクになっていた。つまり、今の俺は火がトライアングル、水がライン、風がドットというランクになっている。

火のランクが上がったのは、おそらく『実戦』で死ぬ様な思いをしたからだろう。でも、なんで水と風は上がらないんだ？もう一度あれをやれとか言われても、絶対にやらないぞ。

それでとりあえず火がトライアングルになり、火を元にすれば３つまでなら魔法を足せるようになったので、オリジナル技というか必殺技を考えていた。しかし、他の人の前でやると、今みたいに怪我とかして家族に止められそうなので、１人の時間を見つけては近くの森に行き、そこでこっそりやっている。

しかし、あまり時間が取れないので思うように必殺技開発は進んでいない。

「次はなにを試してみようかな。・・・Ｖ－ＭＡＸレッドパワーとか・・・。いや、全身火傷で死にたくないからやめておこう。」

俺はようやく登り始めたばかりだからな。この果てしなく遠い『必殺技』という坂道を。

そんな日々を過ごしていたら、ある日の昼食の時に父さんが話があると言った。

「皆に話がある。今朝ヴァリエールから手紙が来た。」

「そうなのですか。それで、どのような内容なのですか？」

「うむ。今度カトレア嬢の誕生会が開かれるそうだ。是非、ヴァルムロートを連れて参加してほしいとのことだ。」

「僕ですか？」

「ああ、おそらく誕生会でお前を呼び出し、その後カトレア嬢の治療について話があるのではないかな。」

「確かにダーリンはカトレア様を治療するって約束したものね。それで出来なかったら、代償は命とか、ちょっと無茶よね。」

「そうだな。我がツェルプストー家とヴァリエール家は数百年に渡り、にらみ合ってきた。過去トリステインとゲルマニアの戦争で両家がぶつかったことも多くあったと聞く。まあ、いまは両国に停戦条約が結ばれているので、武力による対立がなくなった今でもいろいろいざこざが絶えなかったからな。」

（いざこざ・・・主に恋愛関係か？）

「まあ、カリーヌ様は両家の友好に対するツェルプストー家次期当主である僕の本気度を試したんじゃないかな？本気で命まで取るとは思えないし。（そうだといいな・・・）」

「そうかしら、私の目には本気で言っているように見えたけど・・・」

「まあ、本気にせよ、試したにせよ、そう言ってしまったこと自体が問題だな。このことで両家の間はいままでより悪くなったと考えるものもいるだろう。しかし、ここで失敗したら殺すと言われたヴァルムロート本人がカトレア嬢の誕生会に参加すれば、両家の間は良好になってきているという印象を他の誕生会に参加している貴族

に与え、殺すとかの件はなにかの間違いかもしれないと思わせるかもしれない。なにせ、いままで全く交流がなかったのが、いきなり領地間の通行税を引き下げたり、誕生会に参加するようになったのだからな。」

「なるほど・・・。ん？ということは僕の誕生会の時はヴァリエール家の人を呼ぶのですか？」

「ああ、そうなるな。まあ、これを機に本格的にヴァリエールと友好を深めていくのも悪くないだろう。」

「それでお父様、まさかダーリン１人で行かせるなどと言いませんよね？」

「もちろんだ、今回は私とヴァルムロート、マリーナそれにキュルケの４人で行こうと思う。」

「この間の会見に行った人ですね。」

「ああ、まずは顔を知っているものが行った方がいいと思ってな。あと、ヴァルムロート、キュルケ。」

「なんですか、父さん？」
「なに、お父様？」

「カトレア嬢の誕生日は１週間後に行くことになる。それまでに誕生日の贈り物をちゃんと用意しておけよ。」

「はい。分かりました。」
「分かりましたわ。」

この後姉さん達が「私達も行きたかった。」とか言って、父さんが少し困っていたが、俺はカトレアさんになにを誕生日プレゼントとしてあげるか悩んでいた。

光でなく神の方なのはセリフがそれっぽいから（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回は話を分けたので短いと思います。
必殺技は今後開発を続けていくのでそのうち登場します。

次はカトレアさんに会いに行く話です。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

はたして『紙』はオーパーツ足りえるのか？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回はカトレアさんに渡すプレゼントの話です。

すみません。今回カトレアさんは出てきません。

はたして『紙』はオーパーツ足りえるのか？

「やっぱり花とかがいいんじゃない？」

「花ですか？でも母さん、花って普通すぎないですか？」

「でも、もらった方は嬉しいのよ。」

「でも、花なんてすぐに枯れるし・・・」

「それなら『固定化』の魔法をかければいいのよ。」

「『固定化』・・・。僕ができないから盲点だった。」

「『固定化』をかければずっときれいなままですし、壊れにくいのよ。」

「なるほど。・・・キュルケはもうカトレアさんに何を贈るか決めたの？」

「ええ！最近ゲルマニアで人気の化粧品を贈ろうと思うの。カトレア様って17歳でしょ。そういうのに興味がないわけがないと思うの。」

「なるほど。とても女性らしいね。」

「でしょ！」

（化粧品は・・・俺は何が良いのか分からないから却下だな。）

「ありかとう、母さん達、キュルケ。もう少し自分で考えてみるよ。」

「「「頑張りなさい、ヴァル。」」」

「うん！」

カトレアさんの誕生会に行くことに決まってから2日経った。あと5日しかないのにカトレアさんに贈るプレゼントを全く思いつかないので母さん達に意見を聞いてみた。

今日は虚無の曜日で魔法や剣術の鍛錬は休みなので、中庭の芝生に上で寝っ転がって考え中だ。

「花ねえ・・・」

「花なんか何を贈っていいか分からないよ。バラとか？いやいや、バラは誕生日に知り合いに贈るのはちょっと、いや、かなりキザなんじゃないか？」

「いや、待てよ。カトレアさんって動物が好きだったよな。だったら、なにかペットになるような動物を贈れば・・・って、今の段階ではカトレアさんとそんなに親しくないのにカトレアさんが動物好きって俺が知っているとか分かったら・・・カリーヌさんが何してくるかわからんな。」

「・・・だあああ！！何を贈ればいいんだー！」

そうやって頭を抱えて、ゴロゴロ転がっているとふとある草が目に

入った。

「ん？四葉のクローバーか、俺を幸せにしてくれ・・・」

「・・・そうだ！四葉のクローバー！これだ！これにしよう！」

「どうする？このまま『固定化』したんじゃ、ただの草だぞ。」

「四葉のクローバーで俺にある思い出は・・・押し花！よく本とかに挟んだっけな。」

「押し花は良いとして、それだけじゃ弱いな。どうする？」

「押し花と言えば・・・しおり！本に挟んで取り出しやすいように上の方に紐もつけるといいかも。」

「・・・でもこのハルケギニアってあんまり紙って見ないな。本も羊皮紙っていうので出来てるらしいからな。」

「・・・紙、作るか？たしか鉄腕ダッシュとかでみたことあるから簡単なものならできるはず。」

「マリーなんとかさんも言ってたしな。『パンがなければ、ケーキを食べればいいのよ。』って。」

「よし！そうと決まれば、さっそく行動だ！」

※ここまでの会話は主人公の独り言です。

まず、俺が思い描くしおりの完成形は縦12サント、横5サントで真ん中に四葉のクローバーの押し花があって、上の方に穴が開いていて、そこに平べったい紐が通ってる、って感じかな。

押し花は布をもらってきて、四葉のクローバーを布で挟み、さらに板で挟み込んで上の石を置いて2~3日放置しといたら良いだろう。念のため2、3個作っといた。

問題は紙だが、和紙みたいなのは比較的簡単に出来るはずだ。

まずは紙の材料探し。とりあえず、その辺の草や木の枝などを集めた。

次は集めた材料を水洗いし、細切れにした。
どんなものができるのか分からないので、草や木の枝をそれぞれ全部細切れにしたものと草の場合は葉と茎と根に、木の枝の場合は皮と中身とに分けてそれぞれ細切れにしたものを別々に桶に入れておいた。『ブレイド』で細切れにしたので、少々腕が疲れた。

次に細切れにした材料をそれぞれ水でドロドロになるまで煮詰めた。時間があまりないので、魔法を使ってお湯を作り、『コンデンセイション』の要領で圧力をかけた。
この魔法、実はトライアングルスペルで『火火』で火力を水が沸騰するくらいに調節し、『水』はまんま『コンデンセイション』を使っている。

ドロドロになった材料をそれぞれの桶に入れ、網状のものの上に縦12サント、横5サントの木の枠を置いたものでドロドロになった材料を厚みが均等になるようにすくった。
紙をすくう網状のものと木の枠はレイルド先生に錬金で作ってもらった。レイルド先生は「なんでこんな変なものを？」みたいな感じだったが、ちゃんと作ってくれた。しかも、『固定化』までかけてくれた。

すくった紙の水気を弱い熱風でなくして、数枚の布で挟んで、さらに板で挟み込んで上に石を置いてプレスした。

そうして7枚の紙ができた。それぞれの出来は、

？草全部：色が緑だが、ところどころ色が薄い部分がある。根のところか？

？草の葉：緑一色だな。

？草の茎：色は緑一色だが、ところどころに繊維の残りみたいなのがある。これはこれで味があるな。

？草の根：色は白っぽい。

？枝全部：色は茶色。草よりは紙質が固い感じ。

？枝の皮：色は？よりも茶色。皮が元々茶色だったからか。

？枝の中身：色は白っぽい。これは枝の中身が白っぽかったからだな。

「・・・緑色の四葉のクローバーの押し花を際立させるためには緑色より濃い色は却下だな。」

ここで?.?.?.?.?が候補から落ち、?.?が残った。

「・・・触った感じだと枝で作った方がしっかりしてるな。よし、これにしよう!」

そうして?の枝の中身で作ることに決めた。

しかし、まだ時間もあるのでいろいろな木の枝でつくってみることにした。

早速森の中を駆け回って、いくつかの木の枝を採取して、紙にしてみた。

どうやら、桑という木の枝が一番白っぽく紙ができることが分かったので、これでしおりを作ることにした。

四葉のクローバーの押し花は大体良く出来ていた。まあ、挟んでいただけだけど。

しおりを作る際に最初はすくった紙の上に押し花を置いたが、ちょっとでこぼこになっていまいちだった。次紙をある程度すくった後に押し花を上に置き、さらにその上に軽く紙をすくうことで紙の中

に押し花を入れ、余計なでこぼこがでないように出来た。いくつか押し花作っておいて良かった。

「明日からヴァリエール家に向けて出発するが、贈り物は選んだか？キュルケは早々に準備出来ていたようだが。ヴァルムロートもここ数日何かやっていたな。どうだ？準備できているのか？」

「はい。今日カトレアさんに贈る物ができたところです。」

「ダーリンは何をカトレア様に贈るの？」

「しおりを贈ろうと思うんだ。」

「栞ねえ。ちょっと地味じゃないの？」

（まじか・・・地味か・・・）

「・・・カトレアさんって体が弱くて家の中にいるから、よく本とか読むかなと思ったからしおりにしてみたんだ。」

「ヴァルは普段の生活の中で使えるものにしたのね。」

「・・・そうそう。使ってもらったら、こっちも嬉しいし。」

「まあ、良いだろう。」

次の日、馬車に揺られながらヴァリエール家を目指して家を出た。
まあ、ヴァリエール家まで4日かかるのでまったり行こう。あまり急ぐとお尻も痛くなるし。

そして家を出発してから2日経った。

「ヴァルムロート、キュルケ、2人ともカトレア嬢への贈り物はちゃんと持ってきているか？」

「あなた、それ出発のときにも確認したではないですか。」

「うむ。・・・では、どんなものにしたのかちょっと見せてくれないか？」

「そうね。それは私も見てみたいわ。」

「じゃあ、まず私の贈り物から見せるわね。・・・これが今ゲルマニアで人気の化粧品よ！」

「キュルケ、それはどんな効果がある化粧品なの？」

「お母様、それはね・・・」

母さんとキュルケが化粧品の話で盛り上がっている。なんか髪の艶が良くなるとかいうものらしい。キュルケも『かみ』関係か。

「・・・それでヴァルムロートはどんなものにしたんだ？」

「そうね。私も見ていないわ。」

「私もダーリンが何を選んだか興味あるわ。」

「選んだというか、作ったんだけど。・・・これがそのしおりだよ。」

3人が俺の作ったしおりを覗きこんで、固まった。

「これはお前が作ったのか？」

「このしおりはヴァルが作ったの？」

「これダーリンが作ったの？」

（え？そんな不細工な出来じゃないと思うけど・・・）

「そうだけど・・・」

「ヴァル、この真ん中のクローバーは絵なのかしら？」

「ううん。これは本物の四葉のクローバーだけど。」

「四葉？」

（あれ？四葉のクローバーの幸せ伝説は無いのか？）

「う、うん。クローバーって普通三つ葉でしょ。四葉のクローバーを見つけると幸せになれるっていう伝説があるって東の国の本に書いてあった。」

「四葉のクローバーにそんな伝説があったのね。」

「でもダーリン、この四葉のクローバーはぺっちゃんこよ？本当に絵じゃないの？」

「これは押し花って言って、花とか草をぺっちゃんこにしたものを紙の中に入れたんだ。」

「ヴァルムロートよ、今『紙』と言ったな。その紙はどこから手に入れた?」

「え?作ったんだけど?」

そういうと父さんは頭を抱えた。

(え!?何かまずかった?)

「父さん?」

「レイルドからお前が不思議な紙のようなものを持ってきて『固定化』をかけさせたと聞いたので、まさかと思ったが・・・ここまでのものとは」

「確かに私達が知る紙より薄いし、色も白し、なにより表面がさらさらで書きやすそうね。本当にヴァルが作ったの?」

(漂白剤があればもっと白くなるんだろうが・・・)

「本当に僕が作ったんだよ。」

「紙を作れるなんて、ダーリンってすごいのね!」

「キュルケ、これはすごい、なんてものじゃないんだぞ。場違いな工芸品を除けば、いままでこのハルケギニアにこのような紙は無かった。それに押し花なるものが紙の中に入ってるのも前代未聞だ!」

(まるでオーパーツだな。)

「あはは、父さん、大げさだな。そんな大したものじゃないですよ。」

「大げさなものか！この紙も作ったと言ったな。」

「うん・・・」

「正直にどうやって作ったか教えなさい。」

（・・・俺、またやっちゃった？肥料に引き続き、またちょっとだけ文明レベルを超えちゃった？調子に乗りすぎたか？）

「これも東の本に載ってたのをたまたま読んで・・・」

「覚えている内容を教えなさい。」

「・・・はい。」

こうしてヴァリエール家につくまでの残り2日間、父さんに紙の作り方を教え、家に紙の試作品やしおりの試作品があると話したら、誕生会から戻ったらすぐにでもしおりを父さん達の前で作り、それをゲルマニアの皇帝陛下に献上するとかいう話になった。そんな大層なものじゃないんだけどな。

あと紙の作り方はメイジが関わらなくても出来ることが分かった（今回は時間がないのでいろいろ魔法を使った）のか、領地内のしかも『ヴァイス』で試験的に紙の生産を行うことになった。これは『ヴァイス』の村人募集をしないといけないかもな。

そんやことをやっていると、ついにヴァリエール家に到着した。

はたして『紙』はオーパーツ足りえるのか？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

ハルケギニアの一般的な紙はおそらくパピルスとかと同じもので、本とかはもっぱら羊皮紙を使用していると思います。そんなところに和紙みたいのが入ったら、オーパーツですかね。実際昔のヨーロッパで中国からの紙の伝来でパピルスも羊皮紙も使われなくなったらしいですから。

本当はカトレアさんに会って、いろいろするところまで行きたかったのですが、なかなか難しいですね。

次は本当にカトレアさんに会います。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

突撃！カトレア動物王国！（前書き）

こんにちは。こんばんは。

やっとカトレアさんに会いに行きました。

突撃！カトレア動物王国！

ついにヴァリエール家に到着した。

「・・・家もでかいけど、ヴァリエール家はなんか城って感じですね。」

「あいつは公爵だからな。それなりの家構えもするだろう。」

馬車が正門に止まったところ、執事であろう人が出迎えてくれた。

「遠路はるばるようこそいらっしゃいました。貴方様がツェルプストー辺境伯様で間違いないでしょうか？」

「いかにも。本日はカトレア嬢の誕生会に招待されて来た。こっちが妻のマリーナと息子のヴァルムロート、娘のキュルケだ。」

「今日は御越し頂きありがとうございます。こちらが会場になります。」

「うむ。」

こうして屋敷の中の会場に案内された。さすが公爵家の娘だということか結構人も多いし、それに２０歳前後の若い人も目立つな。

そういえば今回カトレアさんは１７歳の誕生日でハルケギニアでは結婚適齢期に入っているから、カトレアさんに近づこうとする人が多いのかな？

「これはツェルプストー辺境伯様、マリーナ様、キュルケ様、ヴァルムロートさん、本日は私カトレア・イヴェット・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの誕生会に参加して頂き、ありがとうございます。」

「お誕生日おめでとうございます、カトレア嬢。」
「カトレアさん、お誕生日おめでとうございます。」
「カトレア様、お誕生日おめでとうございます。どうぞこれを受け取ってください。」
「カトレアさん、お誕生日おめでとうございます。これ誕生日プレゼントです。」

「まあ、キュルケ様、ヴァルムロートさん、ありがとうございます。後で開けてみますね。」

「長年因縁のあった両家が・・・」
「やはりヴァリエール家とツェルプストー家の仲が友好になったという話は本当だったのか？」
「いや、しかし物騒な噂を聞いたぞ？」
「しかし、この光景を見れば・・・」

俺達が挨拶を交わしている間、周りの貴族がざわついていたようだった。

この後つつがなく誕生会は進んだが、途中でカトレアさんは体調を考慮して、自身の部屋に戻ったようだった。

カトレアさんはいなくなるまで、周りの若い貴族が何度も話かけていたが、すぐに離れていった。離れる時、ちらっとカリーヌさんを見た人がいるところ、どうやらカリーヌさんの纏う雰囲気に耐えられなくなったようだった。

誕生会がそろそろ終わるという時、ヴァリエール公爵とカリーヌさんが話しかけてきた。

「ツェルプストー辺境伯、今日は楽しんでいただけたかな？」

「ああ、存分に楽しませていただいた。それに周りの貴族に両家の友好具合を見せつけることもできただろうからな。」

「そうだな。これで無駄に両家を刺激しようと考えるものは少なくなっただろう。」

「こちらとしても、折角結んだ友好を壊されたらかなわないからな。」

「それで、ツェルプストー辺境伯よ、今日は家に泊まっていかないか？」

「いいのか？私達としてはありがたい申し出だが、何かあるな。」

「そう勘繰るな。・・・と言いたいところだが、ある。」

「なんだ？」

「この前、お前の息子のヴァルムロート君にカトレアの治療を頼んだだろ。それで今回カトレアを診てもらおうと思ってな。」

「それはいいのだが、こう言っているがいいのか、ヴァルムロート？」

（まあ、十中八九そうだと思っていたけど。）

「はい。構いません。・・・そうだ。ヴァリエール公爵様、１つ御聞きしたいのですがいいですか？」

「なんだ？」

「今回カトレアさんの様子を診るのは私だけなのですか？」

「いや、カトレアの誕生日の後は毎年高名な水メイジにカトレアの様子を診てもらっている。一応今年も呼んでいるぞ。」

「そうですか。」

「なんなら別々に行うか？」

「いえ、ヴァリエール家が私にも治療を頼んだことはあちらも知っているでしょうし、別々にカトレアさんを診るとなるとあちらが良い気がしないでしょう。それに私はそのメイジに聞いてみたいこともありますので、一緒で構いません。」

「そうか。では、そのように行うとしよう。」

「それで、ヴァリエール公爵様、今からカトレアさんの様子を診に行くのですか？カトレアさんは誕生会の途中で自室に戻ったみたい

ですけど。」

「いや、カトレアを診てもらうのは明日だ。だから、家に泊まってもらうように提案したのだ。」

「分かりました。それでよろしいでしょうか、父上？」

「ああ、いいぞ。」

「母上とキュルケもいいですか？」

「私はいいわよ。お母様は・・・」

母さんはカリーヌさんと意気投合しているようで、わいわいと話していた。

「・・・マリーナもいいだろう。では、ヴァリエール公爵、今日は世話になるな。」

「いや、こちらから頼んだことだからな。ゆっくり出来るように気を配ろう。」

「よろしくお願いします。」

で、ゆっくり休むことになった。

「で、ここはどこだ？」

ちょっとお手洗いを探していたら、自分の部屋がどこか分からなくなった。

「これは・・・迷子ってやつか！でかい家なんだから標識くらいあればいいのに！」

「・・・あんた、なにやってるの？」

「ん？・・・えっと、ルイズ？で合ってるんだよね。」

「合ってるわよ。あんたは・・・ヴァルムロートだったわね。」

「まだ1回しか会ってないのに良く覚えてたな。」

「名前を覚えるのも貴族にとって大事なことよ。」

（・・・俺、あんまり人の名前って覚えが良い方じゃないんだよな。）

「すごいな、ルイズは。」

「ふ、ふん！当然のことよ。・・・でも、なんで名前が呼び捨てなの？」

「いやだった？今度からルイズ様って言おうか？」

「それでもいいけど。なんか気持ち悪いわね。」

（気持ち悪いって・・・ちょっとショックだぞ。）

「じゃあ、どうすればいいかな？」

「・・・ルイズでいいわ。その代り、私もあんたのことヴァルムロートって呼ぶから。」

「分かったよ、ルイズ。」

「それで最初に戻るけど。ヴァルムロート、なにやってたの？」

「え？・・・あ、そうそう。お手洗いに来たら、自分の部屋が分からなくなったんだ。」

「・・・迷子なのね。そんなの誰がに聞けばいいじゃない。」

「でも、周りに誰もいないんだけど。」

「今日はちぃ姉さまの誕生会の後片付けで忙しいのかしら？・・・しょうがないわね。付いてきなさい。」

「案内してくれるの？ありがとう、ルイズ。」

ルイズに部屋まで案内してもらった。どうやら反対の方向に行っていたようだ。

「ここよ。」

「ありがとう、ルイズ。本当に助かったよ。」

「・・・ヴァルムロート。明日ちぃ姉さまの様子診るって本当？」

「うん。そうだよ。」

「ちぃ姉さまに変なことしたら許さないんだからね！」

「変なことなんてしないよ。」

「じゃあ、絶対にちぃ姉さまの病気を治してよね。」

「うん。診てみないと分からないけど、今すぐは無理でも、治せるように頑張るよ。」

「・・・そう。頑張ってよね。」

「あろがとう。じゃあ、おやすみ、ルイズ。」

「・・・おやすみ。」

そう言って、俺は部屋の中に入った。

（ルイズってカトレアさんのことめちゃくちゃ好きなんだな。キュルケとためはるくらいかな。よし、カトレアさんを治せるように頑張ろう。いや、絶対に治してやる！）

そんなことを考えながら、眠りについた。

翌日、朝食を頂いた後、早速カトレアさんの様子を診ることになった。

今カトレアさんの部屋にいます。

そう、カトレアさんの部屋、つまり、カトレア動物王国です。

いろんな動物がいます。犬とか猫はまあ普通、鳥やキツネみたいなのはいいとして、

「なんで虎とか熊がいるんですか！？」

初めてこの部屋に入った俺は虎や熊に襲われないかびくびくだ。

「なんでって、怪我しているのを助けたら、懐いたの。それでも一緒にいるのよ。」

「襲われたりしないのですか？」

「あらあら、心配しなくても大丈夫よ。皆優しい子達よ。」

ニコニコしながらカトレアさんが答えてくれた。

いま、ここにいるのは俺、カトレアさん、ヴァリエール公爵、カリーヌさん、そして1人のメイジだ。

「はじめまして、私ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと申します。今回からカトレアさんの治療に加わりました。水メイジとしてはラインランクですが、よろしくお願いします。」

「そう、貴方がツェルプストー家の。私はカミーユ・シュクレ・ル・リッシュです。水のスクウェアメイジで主に回復魔法に精通してい

ます。よろしく。」

カミーユさんは名前と違って優しそうな人で良かった。ちなみに女性です。これなら殴られることもないな。

カミーユさんの様子からすると、ヴァリエール公爵さんから話があって、すでにカミーユさんも俺が手伝うことに納得してくれているようだ。水メイジとして高名な人と聞いていたから、説得するは大変だったかな?それとも人が良さそうだから、あっさり了解してくれたのかな?

とか俺が思っていると、カトレアさんの部屋の扉が開いた。

「お父様!お母様!ツェルプストーにカトレアを診させるというのは本当なのですか!」

「エレオノールか、昨日話した通りだ。」

「まだ私は納得していません!」

「でも、エレオノール。あなたもカトレアの病気が治った方がいいでしょ。」

「そうですけど・・・。でも、よりによってあのツェルプストーなんかに!」

「エレオノール。ヴァルムロート君はヴァリエール家とツェルプストー家の長年の因縁を断ち切って、両家の仲を友好にさせようと提案するような奇抜な考えを持っている。彼は水のラインメイジだが、もしかしたら、カトレアの治療についてもなにかいままでにない考

え方を出してくれるかもしれん。」

「でも、それでカトレアが良くなるとは限りませんわ！」

「しかし、今よりもカトレアが治る可能性が上がるかもしれん。それにカトレアもヴァルムロート君に診てもらうのに賛成している。」

「・・・そうなの、カトレア？」

「はい、お姉さま。私はヴァルムロートさんなら大丈夫だって信じてますから。」

「それはいつもの勘？」

「はい。」

「・・・カトレアが納得しているのなら、私がいくら言っても始まらないわね。分かりました。ツェルプストーか治療に参加することにもう何も言いません。しかし、私もここで見させて頂きます。いいですよね、お父様。」

「ああ、問題ないだろう。」

「では早速カトレア様の様子を診させて頂いてもいいですか？」

「ああ、頼む。」

「じゃあ、ヴァルムロートさんも一緒に。」

「はい。」

「「『ディテクトマジック』」」

カトレアさんの体を『ディテクトマジック』で診る。

この間もちょっと診たけど、カトレアさんも右肺に袋状のものがある。それ以外に病気の原因になるようなものは見つからなかった。

「ふう。今は体調の方はいいみたいね。でも、やっぱり胸の中の空気が入るところに普通では存在しない袋状のものがあるわね。」

「カミーユさん。カトレアさんのこの異常はいつからあるんですか？」

「そうね。私が初めてヴァリエール家に呼ばれた時からあったわね。」

「カミーユさんは何時呼ばれたんですか？」

「もう１５年以上前になるわね。」

「そうですか。では、なぜカミーユさんは呼ばれたんですか？安静にしている分には特に体に異常があるようには見えないのですが？」

「私が呼ばれたのはカトレア様がひどい熱を出されて、その治療を他のメイジが行った際に熱は下がったけど、この空気が入るところの異常な部分が治らなかったからなの。」

「カミーユさんもそこの部分を治そうとしたんですよね。」

「ええ、ヴァリエール家の伝手を使って、秘薬の中でも最高とされる『水の精霊の涙』を使って治療を試みたけど、ダメだったわ。」

（最高の水メイジしかも回復特化が最高の秘薬を使ってだめなら、魔法の正攻法はだめだろうな。）

「そうですか。カミーユさんでもだめらな、僕がやっても同じですね。」

「おそらく、そうね。」

「・・・そうだ。カミーユさんはカトレアさんが熱を出しているに治療を行ったことがありますか？」

「ええ、あるわね。」

「そのときはこの異常な部分はどんな感じでしたか？」

「そうね・・・。そう言えば、異常な部分にすこし傷みたいなのがあったかしら？このとき異常の部分がとくにひどかったわ。でも、熱を治した後はその傷みたいのも一緒に治ってたわね。」

（熱が出るのは異常な部分が原因かな？でも異常な部分が回復魔法で一緒に治るのか、それじゃあ通常の回復魔法では手の出しようがないな。）

「カトレアさんにも聞きたいのですが、どういう時に体に変調がありますか？」

「そうね。いつもより体を動かした時に咳が出たり、魔法を使うと体の具合が悪くなったりするわね。」

（咳が出るのは異常な部分が肺を圧迫してるからか？魔法を使うと具合が悪くなるのは・・・魔力を消費によるストレスで体の免疫機能が低下したからか？）

「安静にしていたら体の調子はいいのですか？」

「そうね。比較的いいわね。」

「でもね、ヴァルムロートさん。異常な部分がちょっとずつだけど大きくなってるの。最初に診た時よりも倍くらいの大きさになっていると思うわ。」

「そうなんですか！」

「どうだ？ヴァルムロート君、なにかいい考えが浮かびそうかね。」

（年々大きくなってるのか。でも、肺以外に異常が見られないから、ガンとかじゃないみたいだな。ガンでしかも転移しまくってたら絶対に治せなかったかも。）

「そうですね・・・。すでにカミーユさんが試していますが、現状の回復魔法ではカトレアさんを治すのははぼ無理のようですね。」

「・・・そうか。」

「・・・ヴァルムロートさん、諦めるのですか？その時は・・・」

「やっぱりツェルプストーなんかにはカトレアの治療なんて無理なのよ！」

「・・・そうですか・・・」

「そうね。悔しいけど、無理だったわ。」

（怖！）

「カリーヌ様、私はまだ諦めるとは言っていません。あくまで『現在の回復魔法では無理』と申し上げたのです。」

「「「「「どういうことだ（ですか）？」」」」」

「おそらくカトレア様の病気の元になっている胸の中の空気が入るところの異常な部分と分かっていますが、回復魔法は効かない。」

「なぜ回復魔法が効かないのかしら？体にとって異常な部分なのに。」

「それはおそらくカトレア様の異常な部分は生まれつきのものだからだと考えられます。」

（まあ、ガンだったら後発性だから生まれつきじゃないんだけど、今回は関係がないからいいか。）

「生まれつきの病気・・・そんなものがあるのか？」

「はい。確率はかなり低いですが。普通なら生まれてすぐか、精々2～3歳で謎の病気として死んでしまうでしょう。しかし、カトレア様は貴族で十分な治療を受けてこれたので大丈夫だったのだと思われます。」

「・・・そうなのか？」

「たぶんですけど。」

「しかし、ヴァルムロートさん。生まれつきの病気だとなぜ回復魔法が効かないのと思うの？」

「それは回復魔法の回復過程が関係していると思われます。私独自の考ですが聞きますか？」

「もったいぶらずに、早く話しなさいよ！」

「エレオノール、そんな口のきき方はだめですよ。それで、その考えとはどのようなものですか？」

「はい。まず1つは回復魔法は魔法で怪我を治しているものではない、ということです。」

「「「「「？？？」」」」」

「分かりずらいですよね。これは回復魔法はあくまで自然に怪我が治る補助をしている、と考えてください。つまり、自然に治らないものは回復魔法では治らないということです。」

「待ってくれ、ヴァルムロートさん。あなたの考えでは大抵の病気は放っておけば治ることになる。しかし、実際に熱を出して、回復魔法を使わなければ、そのまま亡くなる人もいる。それはどう説明するんだ？」

「はい。それも本来なら回復魔法無しでも治るものだと思います。しかし、人の体には病気に対する抵抗力があります。しかし、不健康な生活をしたり、気持が滅入っていたり、歳を取ったりするなどの原因により体の抵抗力が下がることがあります。回復魔法はこの体の抵抗力を増進することで病気を治すと考えています。」

（でも、これではどうやってすぐに治してるかが分からないんだよな。なんだろ、その回復魔法かけてる部分だけ超スピードになってるのかな？）

「なるほど、それなら多少理屈が通っていますね。」

「納得して頂きありがとうございます。私がこの考えを持ったのは『無くなった腕は再生しない。』と聞いたからです。もし、回復魔法が万能なら無くなった腕が後からでも再生されるはずですから。まあ、切り離された直後であれば元の腕とくっつけて回復魔法を唱えれば、腕はくっつきますが、それでもスクウェアメイジと最高級の秘薬が必要だと聞いています。ここまで来ると、自然に治るのは難しいですが。」

（でも、外科的に骨や神経、血管、筋肉、皮膚を繋げれば、時間はかかるけどくっつくんだよね。）

「・・・そうか！生まれつきの病気では自然に治るものではないから、回復魔法も効かない。そう言いたいのですね。」

「はい。その通りです。」

「しかし、ヴァルムロートさん。では、どうやってカトレアを治療するのですか？」

「・・・そうですね。今のところ考えられるのは、１つは『現在の回復魔法』以外の回復魔法を試す。もう１つは異常な部分を体の外に出す。ですかね。」

「しかし、その２つの方法はどうやって行うのですか？」

「そうですね・・・・・・エルフに頼む、とか？」

（エルフの精霊魔法がどんなものか分からないけど、系統魔法よりかなり強力らしいからな。それに転移の魔法もあるらしいし。）

「エルフ！そんな恐ろしい奴らにうちのカトレアを任せるものか！」

「まあ、そうですよね。それに引き受けるとは考えづらいですし。」

「それならどうするの？」

（まあ、ぶっちゃけ外科的な手術なんだけど、大丈夫だよな、あの袋状のもの外に出しても。現代日本でも薬で治らないものは大抵外科手術だからいけるよな？）

「そうですね・・・。後者の方法で私達に出来る方法を考えてみます。」

「ヴァルムロート君、よろしく頼む。」

「しかし、方法を思い付いても、それを実行するために準備したりとか要りますから、最低でも2～3年以上はかかると思ってください。」

「最低でも2～3年・・・。カミーユさん、うちのカトレアはそれまで大丈夫なのかな？」

「そうですね。これまでの感覚から申し上げますと、おそらく大丈夫だと思います。それになにかあったときに為に常に私が滞在しておきましょう。」

「本当かね！それは助かる。それではカミーユさん、ヴァルムロート君。カトレアのこと、よろしく頼む。」

「私からもお願いしますわ。」

「絶対にカトレアを助けなさいよね。」
「よろしくお願いしますね。カミーユさん、ヴァルムロートさん。」
「「はい！」」

診察も終わり、そろそろ家に帰るために馬車に向かっている途中にカトレアさんに会った。

「カトレアさん、どうしたんですか？」
「昨日皆さんからもらった誕生日プレゼントを開けていたら、あなたからのがあったから、お礼を言いに来たの。」
「いいですよ。誕生日プレゼントですから、それにキュルケも贈ってますし。」

「キュルケさんにはもうお礼を言ったわよ。それにしても４つの葉のクローバーなんて珍しいわね。」
「カトレアさん、これは『四葉のクローバー』と言って、見つけた人に幸せがくるっていう話があるんですよ。」
「そうなの！？」
「ええ、これでカトレアさんにも幸せが来ますね。」
「いいの？そんなものを私の誕生日プレゼントとして渡して。」

「いいんですよ。お守りみたいなものだと思ってください。あと、この４つの葉はそれぞれ『希望』・『誠実』・『愛情』・『幸運』を表しているらしいですよ。」

「そうですか。」

「ええ、カトレアさんの手の中に『希望』があるので期待して待っててください。」

（ちょっとキザっぽいセリフだな。俺の柄じゃないけど、まあ、いいか！）

「ええ、期待しています。でも、あまり無理はしないでくださいね。」

「はい。分かりました。」

「それではここまでのようですね。ご家族が呼んでいますよ。」

「ダーリーン！早くしなさーい！」

「それでは、カトレアさん、お体に気を付けてください。では、またお会いしましょう。」

「ええ、またお会いしましょう。」

こうして俺の最初のヴァリエール家訪問は終わった。

「ダーリン、なんかカトレア様といい雰囲気になってなかった？」

「え？そんなことはないと思うけど。」

「ふーん。」

「ヴァルムロート、帰ったら『紙作り』を早速見せてもらうからな。」

（忘れてた・・・）

「はい。分かりました。」

突撃！カトレア動物王国！（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

回復魔法の設定はたぶんオリジナルです。無くなった腕が再生したら、「これも次元連結システムのちょっとした応用だ。」になってしまいますね。

次は領地経営その2です。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

領地経営始めました。2年目（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は村の経営の話です。

ヴァリエール家から帰ってすぐに紙を作ってみせた。
作っている最中、父さんは終始関心していたようだ。
出来た紙に『固定化』の魔法をかけて、近いうちに皇帝陛下にこれを進呈するとか言っていた。それ、マジだったのか・・・。

数日後、いろいろ用件があるので数人のメイジを連れてヴァイスの視察に出かけた。

「これはヴァルムロート様、ようこそいらっしゃいました。」

「こんにちは、シーボルト村長。」

「お話は手紙で大体把握しております。ささ、こちらへどうぞ。」

「ありがとう。村長と話してくるので貴方達は宿で待っていてください。」

「はい。分かりました。」

「ではヴァイスのこの1年での成果と今後について話し合いましょう。」

「はい。分かりました。」

「まず肥溜めを作ったことによる村の臭いはどうなりましたか？」

「はい。村の中の臭いはかなり改善されました。村の中の空気もさわやかになった気がいたします。しかし肥溜めや肥料作りをしている場所の周りはやはり臭いですね。」

「肥溜めの臭いはしょうがないですが、穴の上に蓋でもしてみますか？」

「そうですね。早速蓋を作って、それでしばらく様子をみてみましょう。」

「肥料作りの方はどうなっていますか？」

「はい。最初は勝手が分からず糞尿と森の土の割合など手探りの状態でしたが、『発酵』でしたか？それを行わせる為に乾燥させないようにして一定の間隔毎に混ぜれば、糞尿や落ち葉などを土にすることができました。」

「そうですか、土になりましたか。その出来た土が肥料というものです。」

「あれが肥料ですか。でも、すごいですね。あんなに臭かった糞尿は肥料になるとほとんど臭わなくなりましたよ。最初はこの臭いのを畑に撒いて大丈夫なのかと他の村人から言われましたが、その心

配はなくなりましたね。」

「そうですか。それはなによりです。次はこの肥料を使って作物を育ててみてください。ただ、肥料をどのくらい使えばいいのかは分からないので、畑の一角を使わせてもらって実験的に肥料の量を変えて同じ作物を育ててみてください。その際に育てる作物は数種類用意しておいてください。」

「分かりました。次の作付けの際に行います。育てる作物は小麦、トウモロコシ、ジャガイモなどでいいでしょうか？」

「いいと思います。他にも試したいものがあれば試してみてください。」

「分かりました。他にも候補を考えておきます。」

「お願いします。そう言えば今年の作物の収穫量や作物の質はどうでしたか？」

「そうですね。ここの畑で育てるのは今年が初めてですが、他の場所と比べても例年通りだと思います。作物の質も他の場所と同じくらいですね。」

「そうですか。来年も同じくらいできれば、それがここの平均的な収穫量と質ということになりますね。」

「はい。問題がなければ今年と同じくらいの収穫量と質が見込めると思います。」

「肥料を本格的に使用するのは再来年になると思いますが、使った

時にこの収穫量や質が上がればいいですね。」

「はい。そう思います。」

「では次に今度この村で紙の生産を試験的に行うことになったことはすでに手紙で知らせていますが、どうですか？人は集まりましたか？」

「はい。その件に関して父・母・息子・娘の４人家族、父・母・娘・祖母の４人家族、夫婦２人の３組の家族、計１０人がこの村に住むことになりました。いずれの家族も若い世代ですね。」

「そうですか。若い家族が来るのは家をこちらで提供しているからでしょうかね。まあ、これでいままで以上に村に活気が出るといいですね。」

「はい。手紙には『紙製作所』という建物を作ると書いてありましたが、どのくらいの大きさでどこに作りましょうか？」

「そうですね。建物の大きさは家を２つ繋げた位で、立てる場所は森と水場が近いところが良いのですが、いいところありますか？」

「それなら村の北側が森に近いですし、畑のために引いた水路もあります。そちらに建てられてはいかがですか？」

「いいですね。では、そこに紙製作所を建てるとします。」

「分かりました。」

「紙を作るのは主に新しく来た家族に教えますが、その家族が紙を

作る方法を一通り覚えたら、他の村人にも作り方を覚えてもらいますのでそのつもりでいてください。」

「分かりました。紙を作る方法はヴァルムロート様が直接教えるのですか？」

「そうですね。最初は私は直接教えますが、後は本に簡単にまとめたのでそれを参考にしてもらいます。」

「本ですか・・・失礼ですが、平民には字の読み書きが出来ない者もおりますのが、どうしましょうか？」

（これは将来的に学校みたいなのが必要か？子供も多いし・・・）

「・・・そうですか。ちなみに村長は読み書き出来ますか？」

「はい。私の他に村の何人かは読み書きができます。」

「なるほど。では、時間がある時などは読み書きができる人ができない人に教えてあげて下さい。今後何かある時に今回のように説明を本にして渡すことがあるかもしれませんので。」

「分かりました。出来る限りやってみましょう。」

「はい。でも、本業に支障のない程度でお願いします。」

「そうですね。分かりました。」

「あ、そうだ。紙の製作はまだ試作段階でツェルプストー家が管理するので勝手に売ったりはしないようにして下さい。他の領地に紙の売り込みを行いたいですからね。その代り、うちから給料を支払

わせて頂きます。紙の製作がうまくいくようになれば、紙製作所の増築などを行いたいと思います。そして、後々は出来た紙をそちらで取り扱ってもらいたいと考えています。」

「本当ですか！？それを聞いたら村の者も意気込んで紙作りを行うでしょう。」

「畑の方も疎かにしないでくださいよ。」

「はい。分かっております。」

「では今回はここまでですかね。いまから一緒に来たメイジに紙製作所の建設について話し合うので、宿の方に行きます。出来次第、入居した家族に紙作り方を教えたいと思います。その時は村長もいらしてください。」

「分かりました。どれくらいで紙製作所ができますでしょうか？」

「2～3日あれば、できると思います。その後紙の作り方を教えるので、４日位滞在することになりますね。」

「その間どちらにお泊りになられますか？」

「宿を使わせてもらいます。いろいろ打ち合わせとかもあるので、その方が都合が良いですから。」

「分かりました。そのように手配しておきます。」

「お願いします。」

紙製作所は2日で建てることができた。材料を持ってきていたといえ、やっぱり土メイジは土木・建築関係ではチートだな。

紙をすくう物は縦３０サント、横４０サントの紙を作れる位の大きさの物を3つ錬金してもらった。これもそのうち1から魔法を使わずに作ってもらうつもりだ。

森で紙を作るために木材を切りだして、それを使って紙作りを実戦してみせた。時間の短縮のため魔法を使ったが、それが時間をかければ魔法を使わなくても出来ることを説明した。

しかし、魔法なしではどれくらい時間がかかるか分からないので、そこはいろいろ試してもらうことにする。

あと、この家族達に近くの森の管理をしてもらうことにした。あまりに木を切りすぎて森が無くらないように新しく木の苗を植えてもらったり、木が育ちやすいように効率良く光が当たるように調節するなどをしてもらうことにする。紙作りだけ頼んで給料をあげてたら他の村人から不満が出るだろうし、自然からの搾取だけでは自然破壊に繋がるしな。

肥料を使った農業も紙作りもまだ始まったばかりだし、もっとこのヴァイスを大きくしていきたいね。

村の収入が増えたら、次は学校か寺子屋を作って子供の学力アップをしようかな。学があればそれだけ付ける職の幅が広がるしね。商人とかになって村の発展に貢献してもらってもいいね。

領地経営始めました。2年目（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

糞尿を使った肥料は臭いがすごいらしいのですが、きちんと発酵させれば臭いが弱くなるらしいです。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

医療と魔法の融合？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

カトレアさん治療のその１です。

医療と魔法の融合?

「う～ん・・・カトレアさんの治療はどうやろうか?」

カトレアさんの異常な部分は魔法では効き目がないので、俺はその部分を取り出したらいいと考えているんだけど。

どうやって取り出そうか?

・・・地球でやったらおそらくこんな感じになるのかな?

?:最初にＣＴなどを使って患者の異常な部分の正確なデータを採る。

?:?で得たデータを基に医療チームで段取りを話し合う。

?:患者を手術室に入れ全身麻酔をかける。

?:肺に関わるところなので人工心肺装置を付ける。

?:胸を切開し、肋骨の間から肺が見える状態にする。

?:肺と異常な部分を切り離し、体外に出す。

?:あとは肺と皮膚を縫合し、人工心肺装置を外す。

?:経過を観察し、良好なら退院出来る。

まあ、俺が適当に考えているだけで他にもいろいろするんだと思うんだけど、考えつくのはこんなものかな。人工心肺装置うんぬんはいるか分からないけど。

これをハルケギニアで実現しよう。

コンセプトは『素人考えの医療知識を魔法でカバー』だ！

？について

これは『ディテクトマジック』っていう便利な魔法があるので可能。

？について

これは段取りを考えるのがほぼ俺なのであとはカミーユさんとかの意見を聞いてみるとかになるな。

？について

手術室と全身麻酔か・・・まあ、考えとこう。

？について

これはどうしようか・・・そもそも実際の手術で本当にこれを使うか分からないし。回復魔法で酸素を多めに血液の中に入れるように出来ないかな？

？について

皮膚を切るのは『ブレイド』の威力を抑えれば、メスみたいに出来

ると思う。

?について

切るのは『ブレイド』でも出来るけど、組織を切るわけだから出血するのが難点だな。素人がちんたらやるから下手したら大量出血で御臨終とかなりそうで怖いな。

出血させないで組織を切り離すのか・・・レーザーメスとか?魔法で出来るかな?

?について

これは高価な秘薬と『ヒーリング』があれば全然問題ないと思う。しかも皮膚などがくっつく時間がほとんど要らないからな。ほんと魔法はすごいよ。

?について

2~3日様子を見ればいいと思う。そもそも安静にしていれば特に問題がなかったんだし、転移とかがある病気じゃないっぽいし、術後の経過は良好になると思うな。

こう考えると、手術室と全身麻酔と魔法のレーザーメスについて考えれば、いいのか。

魔法のレーザーメスは火の系統魔法を駆使すれば出来ると思うので、おいおい考えるとする。

あとは手術室と全身麻酔か。

近々カトレアさんの誕生会があるからヴァリエール公爵やカリーヌさんやカミーユさん達とそこのところ話し合ってみるか。

「なにげにあれからもう1年なのか・・・。月日が経つのは早いな。」

しかし1年でまだ方法の大まかなところしか出来てないのはどうなのか?、それともこれで結構進んでいるのか?、が分からないところだな。

医療と魔法の融合？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回はかなり短いですが、本当は次の話と1つだったのですが、ちょっとづつ書いていたら時間がかなりかかっているので、分割して掲載することにしました。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

キュルケにされたのは『往復ビンタ』（前書き）

こんにちは。こんばんは。

カトレアさんの治療の話です。

まだ治療自体はしませんよ。

キュルケにされたのは『往復ビンタ』

「カトレアさん、お誕生日おめでとうございます。」

「ありがとうございます。ヴァルムロートさん。」

やってきましたヴァリエール家。今回は家族総出で来ました。うちとヴァリエール家の人々は俺とキュルケの誕生会にヴァリエール家を呼んだので大体顔見知りになってます。カトレアさんは体調を考慮して来られなかったけど、手紙と誕生日プレゼントをもらった。

今回の誕生日プレゼントは凝った物じゃなくて、カトレアさんが飼ってる?動物の遊び道具を作ってきました。犬にはフリスビー、猫には猫じゃらしなど。でも虎とか熊の遊び道具は思いつきませんでした。次に考えてこよう。

今年もヴァリエール家で一泊しました。今回は迷子とかにはなってないですよ。

翌日、ヴァリエール家の一室にて

「では、カトレアの治療についての話し合いを始めよう。」

今この場所にいるのは俺、ヴァリエール公爵（司会進行）、カリーヌさん、カミーユさんと

「どうしてカトレアさんがここにいるのですか?」

「あらあら、どうしてって。これは私のことですから、居てもおかしくはないでしょう？」

（インフォームド・コンセントとでも思えばいいのかな？）

「まあ、それはそうですね。」

「でしょう？」

「まあ、カトレアさんは本人のことだからいいとして、なんで父上と母上とキュルケまでいるのですか？」

「ん？お前がどのような働きをするかを見てみたくてな。」

「お父さんと同じよ。頑張って、ヴァル。」

「周りがヴァリエールだけじゃ、ダーリンがさみしいと思って。」

「・・・ここに居てもいいですかね、ヴァリエール公爵様？」

「まあ、問題無いだろう。」

「ありがとうございます。」

「では、ミス・リッシュ。カトレアの様子はどうだ？」

ミス・リッシュはカミーユさんの名字だよ。念のため。

「はい。カトレア様のここ1年は特に問題はありません。しかし、やはり小走りなど軽く運動をされただけで咳などが出て、すこし体の調子が悪くなりますね。安静にしていれば治ります。」

「そうか。ではヴァルムロート君、カトレアの治療についてなにか

考えたことはあるかね？」

「はい。やはり手術にて異常な部分を体から取り除くのがいいと考えます。あ、手術というのは回復魔法のみで治療が困難な時に行う方法のことを僕が勝手に名付けました。（と、言うことにしておこう。）」

それで手術の方法について説明した。

手術室については、これでもかっていう位の清潔な部屋だと説明した。

全身麻酔については、全身麻酔という言葉は出さなかったが、手術を受ける人が不用意に動かないように寝てもらって、さらに痛みを感じなくさせることだと説明した。

「・・・ヴァルムロート君。君はカトレアを治療しようとしているのだよね？」

「はい？そうですけど？」

「・・・そうか。では、治療しようとするのに胸を切るとはどういうことか詳しく教えてくれないかな？」

おお・・・。ヴァリエール公爵がちょっと怖い感じになってるぞ！いや、それよりもさっきから何も言わないけどカリーヌさんのプレッシャーみたいなのをひしひしと感じるのが怖い！

「それは先ほど説明したように異常な部分を体の外に出すために仕方ないことなんです。そのあと高価な秘薬と『ヒーリング』で治すのでおそらく大丈夫です。」

「・・・『おそらく』？」

（カリーヌさん怖いよ、下手したらここで殺されそうな感じだよ！）

「・・・絶対とは言い切れませんが、僕が出来る精一杯をします！」

「そうですか。では、その言葉を信じることにしましょう。しかし、治すために傷つけることを考えるなんて面白いことを考えますね、ヴァルムロートさんは。」

「確かにヴァルムロートは新しい魔法を考えたり、他の子とは違うなにかを持っているのかもな。」

「そうね。ヴァルは面白い子よね。」

「ダーリンは面白いだけじゃなくてすごいのよ！」

「新しい魔法を考えつくのですか。ヴァルムロートさん、今度私と手合わせしてみませんか、？」

「あはは・・・。いえ、僕なんてカリーヌ様の足元にも及びませんよ。それ相応の実力が付いた時はお願いします。」

（生きる伝説なんかと戦いたくねえええぇ）

「うおっほん！話を戻して、カトレアの治療において今考えなければいけないのは手術室に眠らせて痛みを感じさせないことか。これになにか考えがあるものは意見を述べてくれ。」

「ヴァリエール公爵様、眠らせて痛みを感じさせないことについてなのですが。」

「ミス・リッシュ、なにかいい方法があるのかね。」

「はい。これには『スリープクラウド』を使えばいいのではないでしょうか？」

「カミーユさん、『スリープクラウド』って相手を眠らせる魔法ですよね？それで眠らせても、痛みは感じなくなるのでしょうか？」

「確かめたことはないけど魔法が切れるまで起きないから大丈夫なんじゃないかしら？」

「なるほど。・・・それでは試してみますか。」

「？」

「カミーユさん、僕に『スリープクラウド』をかけてくれませんか？すぐに起きるくらいに軽くでいいので。」

「ええ、わかったわ。」

「それからキュルケ、僕が魔法にかかったら頬を強くつねってみて。」

「・・・わかったわ。本気でつねるわね。」

「う、うん。頼むよ。・・・それではカミーユさんお願いします。」

「それではいくわよ。『スリープクラウド』」

「・・・はっ！どうでした？」

「うむ。まったく反応がなかったな。」

「ええ。ぐっすり寝てましたね。」

「かわいい寝顔だったわよ。」

「本当に起きないんですね・・・」

「・・・頬大丈夫か？ヴァルムロート。」

「痛そうだったわ。」

「あれで起きないなんて・・・」

大体１０分位寝てたみたいだけど。両方のほっぺたがじんじんする。ちょっと熱を持っているみたいだな。・・・俺、何されたの？

「・・・まあ、これで『スリープクラウド』を使えば大丈夫そうですね。」

「ああ、そうだな。・・・後は手術室か。これは部屋を綺麗に掃除すればいいのか？」

「そうですね。それは絶対ですがもう少し何か欲しいですね・・・」

「そうなのか？では、どうすればいいのだ？」

（アルコール消毒でもするか？でもワインはあっても純粋なアルコールの作り方は分からないし・・・ん？待てよ、ワインからアルコールを分離出来ないのか？酒って蒸留したらアルコール度数が高く

なっていくよな。なんだったかな?名前は忘れたけどアルコール度数９６%とか意味分からん酒があったよな。冗談で飲んだ時は息が出来なくて死ぬかと思った記憶が残ってるぞ。・・・このハルケギニアに蒸留技術はあるのか?）

「・・・父上、お聞きしたいのですがワインより辛いというか飲んだ時に喉がかーっとなるお酒ってありますか?」

「なんだ?いきなり訳分からんことを言って。『ブラントヴァイン』という酒があるが・・・ヴァルムロート、お前にはまだ早いぞ!確かに酒を飲みたくなるような難題に当たっているが。」

（お、あるのか。それは『ブランデー』みたいなものか?）

「父上、その『ブラントヴァイン』の作り方は分かりますか?」

「・・・ヴァルムロート君、今は酒の話は関係ないのではないかね?」

（さすがに唐突すぎるか。・・・まあ、そうだよな。）

「いいえ、実は関係があるのです。ヴァリエール公爵様。」

「「「「「「「「「どういうことだ（ですか）?」」」」」」」」」

「お酒と怪我についてなにか聞いたことはないですか?特に平民で。」

「・・・そういえば、平民の兵士が負傷して水メイジがいない時にお酒を吹きかけて凌いだ、と昔聞いたことがありますわ。」

「カリーヌ、それは本当か!?しかし、なぜ傷口にお酒を吹きかけるのだ?」

「それは知りませんが、ヴァルムロートさんなら知っているのではないですか?」

「そうなのか?ヴァルムロート君?」

(この世界は水メイジがいれば速攻で傷が治るから消毒の概念がほとんどないんだろうな。)

「はい。これはメイジもいないような田舎で聞いた民間療法なのですが、味の濃いお酒を傷口に付けると傷が膿まずに綺麗に治ると言われています。」

「なるほど。しかし、それをカトレアの治療に使うのか?水メイジがいるから必要がないのではないかね?」

「確かに回復魔法を使えばほとんどの病気を治すことが出来ますが、回復魔法は僕の見解ですが体の自然治癒力を増大させるものと以前話しました。カトレアさんは長年の療養で体力などが健康な人と比べて低いと考えられます。もしかしたら今回の手術の時に清潔にしていなければ別の回復魔法の効かない病気になるかも知れないので、念には念をしていきたいのです。」

「今回の手術にはそのような危険もあるのか!?」

「可能性の問題ですが、ないとは言い切れません。なにせ初めて行うことですから、先ほども『絶対とは言い切れない』と言いました。ですからその危険を可能な限りなくすために出来ることをなんでもやっておきたいのです。それにその危険を少なくするための手術室

ですから。」

「そういうことか。分かった。・・・ではツェルプストー、『ブラントヴァイン』の作り方を知っているか？あいにく私はワインしか飲まないので、その『ブラントヴァイン』というお酒を知らないのだ。」

「そうなのか？まあ、今度良い『ブラントヴァイン』を贈ってやろう。・・・確か『ブラントヴァイン』はワインを熱して、その時に得られる蒸気を再度冷やして液体にする、この過程を『蒸留』とか言うらしいが、それで出来るお酒だったな。なんでも『蒸留装置』なるもので作られているらしい。」

（おお、『蒸留装置』があるのか！これでかなり高濃度のアルコールをワインから分離出来るかもしれないな。）

「なるほど。ではその『蒸留装置』を使ってどのくらいワインを蒸留すれば怪我を治療する時にもっとも有効なのかを調べてみましょう。」

「ヴァルムロート君、よろしく頼むよ。あと他に何かないかね？」

「あ、そうだ。カミーユさんにちょっとお聞きしたいのですがよろしいですか？」

「何かしら？」

「カミーユさんがカトレアさんの様子を診る時に心臓の動きとかも見ていますか？」

「ええ、見ているわよ。それがどうかしたかしら？」

（誰かに心電図の代わりをしてもらわないとな。）

「はい。手術の時に誰かにカトレアさんの心臓の動きを見ていてもらいたいのですが、おそらく手術の時にカミーユさんには別のことを頼むので、今度からでいいのでカトレアさんの様子を診る時は誰かメイジを連れて行って、その人に普段のカトレアさんの心臓の動きの様子を知っていてもらいたいのですが頼めますか？」

「私は別に構わないけれど、それを頼むならヴァリエール公爵様に言うのではなくて？」

「そうでしたね。ヴァリエール公爵様、すみません。今の件は許可して頂けますか？」

「うむ。カトレアの治療に必要なら拒む理由はないが、メイジの系統はどうする？治療に関わることなので水メイジにしておくか？」

「『ディテクトマジック』を長時間かけ続けられるメイジなら特に系統は問題ないので、そちらで誰か選んでください。」

「そうか。分かった。誰か選んでおこう。・・・他に何かないか？」

「僕は無いですね。」

「ミス・リッシュはどうかね？」

「私も無いですね。」

「では、今回はこのくらいで終わっておこう。そろそろ昼時だな。ツェルプストー、昼食をうちで食べてから出発するか？」

「いいのか？では、そうさせてもらおうか。」

「そうしろ。」

昼食を食べた後、カトレアさんがクックベリーパイを焼いてくれたのでそれをみんなで食べた。

「これカトレアさんが作ったのですか！？すごくおいしいです！」

「ちぃ姉さまが作るクックベリーパイはハルケギニア１おいしいのよ！」

「あらあら、ルイズったら褒めてもパイしか出ないわよ。はい、クックベリーパイ。」

「わー、ありがと！ちぃ姉さま。」

「確かにおいしいわね。・・・私も何か手料理を作れるようになった方がいいのかしら？ダーリン、私頑張るわ！」

「え？ああ、頑張れキュルケ。」

そして俺達はゲルマニアに帰る時間になった。

「それではまたな、ヴァリエール。元気でな。」

「ああ、ツェルプストー、お前もな。」

（なんか父さん達って以外と仲がいいんだよな。学院が一緒だったっぽいし、『好敵手』と書いて『とも』と読む、みたいな感じに今はなってるのかな？）

「それではカトレアさん、パイ御馳走様でした。お体に気を付けてくださいね。ルイズもまたな。」

「いえいえ、お気遣いありがとうございます。ヴァルムロートさんも帰りの道中気を付けてくださいね。」

「カトレア様、今度あのパイの作り方を教えてください。ルイズもまたね。」

「あら、そうね。今度一緒に作りましょうか。またいらしてくださいね。」

「あ！キュルケずるい！ちぃ姉さま私も一緒にやります。・・・って、なんであんた達私にはため口なのよ！それになんでキュルケまで『ルイズ』って呼び捨てにしてるのよ！」

「だって、ルイズは友達だし・・・あ、もちろんカトレアさんも友達ですよ。でも年上なので敬語を使わせて貰っていますが。」

「だって、ダーリンがそう呼んでるから私もそうしたのよ。それにルイズだって私のことを『キュルケ』って呼び捨てにしてるじゃない。お互い様よ。」

「ぐぬぬ・・・いいわ！私を『ルイズ』って呼ぶのを許してあげる。

その代り、私もキュルケを『キュルケ』って呼び捨てにするから。」

「もう言ってるじゃない・・・まあ、それでいいでしょう。」

「ふふふ・・・」

「ふふふ・・・」

「何やってんだ？お前ら・・・」

「・・・ヴァルムロートさん、今度来た時はゆっくりお茶でもしながら、お話しましょ。」

「ええ、構いませんよ。」

「その時はあなたのことをいろいろ聞きたいわね。」

「僕のことですか？まあ、いいですけど。」

「うふふ、次が楽しみね。」

（カトレアさんってヴァリエール領から出たことがないらしいし、外のことをいろいろ聞きたいのかな？）

「ええ、楽しみですね。あ、父上が呼んでますね。それではカトレアさん来年の誕生会でお会いしましょう。」

「はい。」

カトレアさんの治療について今後俺がやらなければいけないのは、

?『ブレイド』で皮膚や肺を切開するので、その手加減を知ること。

?魔法でレーザーメスを再現させ、その扱いに慣れること。

?酒からアルコールを蒸留分離し、消毒用アルコールを作成すること。

他にもあるだろうけど、とりあえずこれを主にやっていこう。特に?が魔法を長時間使用することになりそうだから、しっかりとやっていこう！

でも、これの練習って主に動物実験だよね。

・・・カトレアさんが知ったらものすごく怒りそうだよな。

キュルケにされたのは『往復ビンタ』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

いや～、素人が手術のことなんて考えるのは難しすぎですね。
魔法があって初めて成り立つものですね。ええ、ご都合主義ですね。

とりあえず、主人公はカトレアさんの治療の練習に魔法（必殺技開発とかもある）と剣術の訓練と座学と領地経営とかいろいろやることがてんこ盛りですね。原作が始まるまではこれがライフワークになります。まあ、習い事が多い中学生みたいなもんだと思ってください。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

そういえば時速約３０ｋｍ／ｈって結構早いな（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は魔法についての話です。
魔法の解釈についてはオリジナル要素がいくつかあります。今回もその１つですね。

そういえば時速約３０ｋｍ／ｈって結構早いな

「ヴァルムロート様は『フライ』で飛ぶのがかなり速くなりましたね。」

「ああん。ダーリン待ってえ。」

（キュルケ、お前は何変な声出してるんだ。）

「はい。練習のたまものです。」

今の俺の『フライ』の飛行速度は５０ｍ走をやると大体６秒で飛ぶことが出来る。

ただこれ以上は今のところ早くなる様子は無いな。今の『フライ』の飛行速度は俺が全力で走るのとほぼ同じなので、俺の脚がもっと早くなれば少しくらいは早くなるかもしれないが、あまり意味は無いかもそれない。

時速でいうと今が約３０ｋｍ／ｈなので、それが約３２～３３ｋｍ／ｈになったところでさほど変わらないだろうからな。馬には勝てないし。

「・・・しかし、この『フライ』をやっている間は他の魔法が使えない、というのはちょっと不便だよな。」

『フライ』は基本的に移動しか出来ない魔法だ。しかも人が移動する速度とほぼ同じ。ドラゴンボールみたいに空中で高速戦闘のレベルを要求するわけじゃないけど、まあ、出来るならやるけど、空を飛びながら魔法を使えたら、それだけで手数が増えそうなんだけど

ね。

「ヴァルムロート様にこれを御教えして良いのか、少し戸惑いますが・・・」

「何ですか？レイルド先生？」

「『フライ』の途中に系統魔法を使うことは、一応出来るのです。」

（なん・・・だと・・・）

「・・・え！？出来るのですか！」

「うそっ！？２つの魔法を同時に使うことは出来ないのではなかったのかしら？」

「はい。『フライ』を含めたいくつかの魔法はその魔法を使っている間も他の魔法を使うことが出来るのです。」

（おお、まじか！）

「レイルド先生、『フライ』以外にも魔法を同時に使えるものがあるのですか！？」

「ええ、私も教えてほしいわ。」

「その前に『火』『水』『風』『土』の４系統の中でどれが一番強いと一般では言われているか知っていますか？」

「そんなの『火』の系統魔法に決まっているわ！すべてを燃やし尽くせる火に敵うものなんてないわ！」

（キュルケ・・・なんか原作でもこんな会話聞いたような気がする。）

「『風』、ですよね？」

「ちょっとダーリン！なんで『風』なのよ！『火』は最高の威力を持つ魔法があるのよ！」

「まあ、そうなんだけどね。それで先生どうなんですか？」

「キュルケ様には残念かもしれませんが、一般には『風』の系統が一番強いと言われています。」

「先生！それはなぜなんですか！納得がいきません！」

「これにはいくつか理由があります。まず1つは風系統の魔法には攻撃魔法の他に補助系魔法が多数あります。相手を拘束したり、防御のための魔法も存在します。」

「う、確かに『火』の系統魔法は攻撃魔法がほとんどで補助系魔法はほとんどないわ。でも、魔法一撃の強さでは『火』の方が強いはずよ。」

「確かに1対1で戦えば、他の系統でも『風』に勝てるでしょう。」

「だったら！」

「しかし、その1対1が途中で1対2や3、それ以上になった時は勝てる見込みはほとんどないでしょう。」

「どういうこと？途中で仲間でも呼ぶのかしら？そんな卑怯なもの

に負けたくはないわ！」

「いいえ、1人が2人や3人、それ以上に増えるのです。」

「どういうこと？」

「それは『ユビキタス』という風系統の魔法が、自分の分身を作り出す魔法だからです。この魔法はスクウェアスペルの魔法なのでめったに見ることは無いでしょうが、この『ユビキタス』が風系統を最強たらしめているのです。」

「『ユビキタス』・・・確かに1対複数はきついわね。」

「しかし、『ユビキタス』自体を使うメイジはそうはいません。私が知る限りでは『烈風カリン』が使っていたと聞いたのが唯一ですね。なかなかスクウェアクラスのメイジはいませんし、スクウェアメイジになったとしても必ずしも『ユビキタス』が使えるようになるわけでは無いですから。」

（偏在か、もし敵が使ってきたら厄介だな。・・・って！ワルドって偏在使うんじゃなかったけ！？）

「レイルド先生。その『ユビキタス』で増やせる人数は無限なんですか？」

「いいえ、そうではないようです。私も聞いた話なのですが、どうやらそのメイジが持つ魔法の潜在能力で何人作れるかが決まるそうです。スクウェアクラスで『ユビキタス』が出来るメイジは2～3人作るのが普通らしいですね。」

「そうなんですか。」

「ええ、そうなんです。・・・なんでこの話をしたのでしたっけ・・・あ、そうそう。『フライ』の他に2つ同時に使える魔法があるという話でしたね。今話したように『ユビキタス』の魔法を使っていながら、その魔法を使ったメイジや分身した存在はその後普通に魔法を使うことが出来るのです。」

「なるほど、2つ同時に使うことが出来る魔法があるということは分かりました。最初に戻るのですが、なぜレイルド先生は僕にそのことを教えるのをためらったのですか？」

「それはですね・・・『ユビキタス』はほとんど利点しかないような魔法なので良いのですが、『フライ』で他の魔法を使うことが出来るのが問題なのです。」

「？どう問題なのですか？」

「そうね、どういうことかしら？」

「これには主に2つの問題があります。1つは『飛ぶ速さ』です。先ほどお二人に『フライ』を行ってもらいました。確かに『フライ』で飛ぶのはお二人ともなかなか早い方だと思います。」

「ありがとうございます。」

「しかし、早いと言ってもそれは人が『フライ』で飛んだ場合です。飛ぶのなら、ワイバーンや風竜を使った方がもっと早く飛ぶことが出来るのです。『フライ』で飛んでいては良い的になってしまうでしょう。」

「なるほど。」

「もう1つは『集中力』です。たださえ『フライ』という魔法を使っているの別の魔法を使うとなるとかなりの集中力を必要とします。もし、何かの理由、例えば相手からの攻撃など、で途中で集中力が切れてしまった場合、『フライ』も維持できなくなり、そのまま地面に落ちてしまうでしょう。」

「それは・・・いやね。」

「この2つの理由から『フライ』を行っている時に別の魔法を使うことはお勧めできないので、お二人にお教えするのを迷ったのです。特にヴァルムロート様は好奇心旺盛でいらっしゃるので教えると必ず実行すると思いました。」

（良く分かってるな。）

「あははは・・・」

「確かにダーリンは絶対にやるわね。」

「・・・まあ、危険が無いところで行うのは特に問題は無いですけどね。くれぐれも危険がある場合でしようとは思わないでくださいね。そういう時は素直にワイバーンや風竜などの飛べる幻獣に乗るか、船を使ってください。」

「・・・その二つが無くて、他に方法がない場合はどうしましょうか?」

「・・・はあ、その時は仕方ありませんが、なるべくその様な場合にならないようにして下さい。」

「そうですね。分かりました。」

「・・・でも、ダーリンはそういう場合になりそうな気がする。」

（原作を知ってる分、あまり笑えないな・・・）

「あはは、まさか。」

「大丈夫じゃないですかね。ゲルマニアとトリステインは今は停戦条約が結ばれていますし、他の国も特に動きは無いようですし。」

「そうよね。最近は大きな戦争もないし、大丈夫よね。」

（そういえば、タバサの父さんが殺されるのって何時だろう？というかジョゼフはもう王に即位してんのか？）

「レイルド先生、ゲルマニアの南側はガリアに接していますが、ガリアでは何か動きは無いのですか？例えば・・・そう、ガリアの王が変わったとか。」

「ガリアですか？いえ、そのような話は聞いたことはありませんが。」

（隣国の王が変わったら、すぐに分かるだろう。ということはまだジョゼフは王になってないし、タバサの父さんもまだ殺されてないってことかな。まあ、殺されるのが分かってても俺には何も出来ないんだけどな。）

「そうですか。ガリアはハルケギニア1大きな国なので、その動向には気を付けていなければいけない、と領地経営で教わったので聞いてみました。」

「そうですか。ヴァルムロート様は御立派ですね。」

「いえ、そんなことは無いですよ。」

「・・・御謙遜なさるのも良いですが、他の貴族がいる時にあまり謙遜がいきすぎると下に見られますよ。時には誇ることも大事ですよ。」

「そうですか・・・今後気を付けますが、これは性分なのでなかなか変わらないかもしれないですね。」

「そうね。必要以上に威張らないのがダーリンの良いところだけど、時にはもっと積極的になってほしいわね。ね！」

「え、ヴァリエール家のことや魔法や剣術の訓練とか結構積極的だと思うんだけど、他になにかあったけ？」

「もう！ダーリンのいけず！・・・私のことはどう？」

「え？キュルケのこと？・・・確かに最近は虚無の曜日に一緒に買い物に出かけることが少なかったかも、今度買い物に行く時は付いて行くよ。」

「本当！じゃあ、次の虚無の曜日に町に行って買い物をしましょ！」

「ああ、分かったよ。」

「・・・コホン。お話は終わりましたか？」

「「あ、すみませんでした。」」

「まあ、今日はもう時間ですし、いいですよ。それでは、また明日。」

「「ありがとうございました。」」

「・・・そうか、2つ同時に使える魔法があるのか。今度いろいろ試してみないとな。」

「ん?ダーリン、何か言った?」

「いや、何でもないよ。」

「そう?ならいいけど、あまり私に隠し事をしないでよ。」

「わ、分かったよ。」

「まずは『フライ』でどこまで出来るのか、だな。」

そういえば時速約３０ｋｍ／ｈって結構早いな（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

原作でも偏在状態で魔法を使ってたと思うので、魔法と条件をそろえれば２つの魔法を同時に使えるんじゃないか？ということで今回の話になりました。
次回はこの続きで私なりに出来る魔法と出来ない魔法を考えたものを載せていくつもりです。

あと、馬はサラブレットではないのですが、アラブ馬とかいうのがサラブレットの原型？らしいので、サラブレットより遅い位で時速約３０～４０ｋｍ／ｈかなと考えています。移動速度の速い幻獣の風竜やヒポグリフ（ヒポは馬の倍速いらしい）は時速約６０～８０ｋｍ／ｈかな、と考えています。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

二兎追う者ははたして何を得られるのか？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

魔法の同時使用についての話です。
今回も長くなりそうなので分割しました。
まずは『フライ』との同時使用についてです。

二兎追う者ははたして何を得られるのか？

先日レイルド先生から2つ同時に使える魔法が存在することを教えてもらったので、今出来る魔法で出来ないかいろいろ試してみることにした。

「じゃあ、まずは『フライ』」

俺は地面から1メイル程度浮き上がった。あまり高く飛んでもし『フライ』が切れ、地面に落ちて怪我するは嫌だからな。

「まずはコモンマジックから試してみるか。『ライト』」

杖の先に光源が現れた。明るさは普段とあまり変わらないようだ。

「おお！本当に出来るのか！すげえ！次は、『ディテクトマジック』」

俺を中心に半径3メイルの範囲を探知した。・・・何も無かったけど。

「『ディテクトマジック』の効果範囲をもっと広げられないかな？・・・まあ、それを考えるのはまた今度だ。次は、『レビテーション』」

その辺に落ちている小石を動かしてみた。

「問題ないな。じゃあ、『念力』」

これもその辺に落ちている小石を動かしてみた。

「よし。これも出来るな。・・・もしかして、『フライ』中に『レビテーション』や『念力』で自分を動かしたらもっと早く飛べるんじゃね？」

やってみた。

だめだった。

「出来んか・・・。」

どんな感じだったかと言うと、走っている時に自分服を自分の腕で引っ張っているようなものという例えが一番近いかもしれない。

「それじゃあ、次は系統魔法だな。最初はこれだ。・・・『ファイアーボール』」

俺は放った『ファイアーボール』は弧を描き地面に当たり爆発した。

「よっしゃ！じゃあ、次は・・・『フレイムボール』」

しかし、魔法は発動しなかった。

「え！？なんで魔法が出ないんだ？ちゃんとイメージしたつもりだったのに・・・もう少し『フレイムボール』のイメージを強くしてみるか・・・『フレイムボール』！」

今度は『フレイムボール』がちゃんと発動し、火球が飛んでいった。

「よし、って!?うわっ!」

しかし『フライ』が切れて俺は地面に落ちてしまった。

「おかしいな?『フライ』はちゃんと飛んでいるイメージをしたままだったのに、なんで落ちたんだ?」

試しにもう何回か『フライ』で飛んで『フレイムボール』をやってみたが、『フライ』は維持できるが『フレイムボール』が発動しないのと、『フレイムボール』は発動するが『フライ』が切れるかで、『フライ』と『フレイムボール』を同時にすることは出来なかった。

「なんでだろ?『フライ』中に普通に『フレイムボール』をイメージしただけだと『フレイムボール』は発動しないし、かといって『フレイムボール』のイメージを強くすると今度は『フライ』が切れる・・・『フライ』中に『フレイムボール』は出来ないのか?」

「・・・いや、そう決めるのは早急だ。他にもいろいろ試してから考えをまとめよう。」

「次はこれだ。『ファイヤーウォール』!」

すると地面に炎の壁が現れた。

「・・・出来るには出来たが、イメージしたのより壁が低いな。それになんか火の勢いが弱い気がする。」

「そういえばあまり意識してなかったけど、『ファイヤーウォール』って『火』をかけ合わせることで大きな壁になっていくような気が

する。ちょっと試してみるか。・・・まあ、『火』をかけ合わせるっていっても俺のイメージだし、実際そうなってるか分からないけどな。」

「とりあえず『火』１つの時は『ファイアーボール』位のイメージで、それ以降は１つ前のイメージに足していく感じにしよう。」

『火』が１つの場合：壁の高さは１メイル位で、壁は少し薄い、向こう側が少し見える。火の勢い少し弱い。

『火』が２つの場合：壁の高さは２メイル位で、壁はさっきより厚い、向こう側は見えない。火の勢いは強い。

『火』が３つの場合：壁の高さは２．５メイル位で、壁は厚い。火の勢いも強い、ガスバーナーみたいに、ゴオオオって感じだ。

「ほう。やっぱりイメージの違いが出るな。まあ、『フレイムボール』も『ファイアーボール』を強くしたイメージだし、当然と言えば当然か。」

「しかし、これをやってみて分かったけど、俺が普段イメージする『ファイヤーウォール』って『火』は２つの場合だったんだな。１番使いやすいのかな？」

「でも、『フライ』中に出たのは『火』が１つの場合とほぼ同じだったな。イメージは２つの場合の時と同じだったはずなのに。」

「よし。今度は『水』の魔法を使ってみるか。・・・まずは『コンデンセイション』」

すると、俺の目の前に小さな水の玉が出来たかと思うとどんどん大きくなって最終的には直径1メイル位のもの水の塊が出来上がった。

「これは出来るのか。じゃあ、これはどうだ。『ウォーターボール』」

説明しよう！『ウォーターボール』とは、『コンデンセイション』で集めた水の塊から大小様々な水の玉を発射する水のラインスペルだ！威力は圧力を強く加えてやれば直径２０サントの水の玉一発で大人が2～3メイル吹っ飛ぶ位の威力だ！・・・たぶん。人には試したことは無いからな。

集めた水の塊から水の玉は発射されず、水の塊は不安定にぐねぐね動いただけだった。

「これも出来ないのか。じゃあ・・・」

ほかにも『水』の系統魔法を試してみたが、『スリープクラウド』はそよ風に吹かれれば消える位の小さなものしか出来ず、『アイスウォール』と『ウォーターシールド』は共にドットスペル程度のものしか出来なかった。

“ドットスペル程度のもの”としたのは『アイスウォール』と『ウォーターシールド』はどうやら『ファイヤーウォール』と同様にかけた数によって大きさが変わるようだった。まあ、『水』はラインランクなのできちんと試せたわけではないが。

「後は『風』か。すでに『フライ』という風の系統魔法を使ってるんだけど、出来るのかね？まあ、ものは試しだ！『ウインド』」

風がびゅうっと吹いた。威力は精々スカートめくりが出来るくらいだろう・・・はあ。

「お？出来るのか。ではこれは？『ストーム』」

小さな風の渦が出来た。砂が少し巻き上げられていた。

「・・・『風』は他にできるものがないんだよな。『風』はドットランクだし。」

「うーん、出来る魔法と出来ない魔法があるな。・・・俺のイメージが足りないのかな？ＤＢやＯＯの空中戦みたいなのをイメージしながらやってるんだけどな。他に考えられることは・・・」

そして『フライ』と他の魔法の同時使用について次のようなことを考えた。あくまで俺の考えであって本当かどうか分からないし、間違っている可能性の方が大きいだろう。

？俺の集中力が足りてない説

いかにアニメや漫画を見ていて、それを基にイメージを膨らますことは出来ても、実際に体験したことでないので、そういうところで集中力に欠けるということ。つまり集中力を上げることが出来れば

ラインやトライアングルの魔法も使えるかもしれない。

?“今”はドットスペルまでしか使えない説

そもそも『フライ』は『風』の系統魔法で、俺は今『風』がドットランクなので『フライ』との同時使用の際は他の魔法もドットまでしか使えないということ。しかし、『風』のランクが上がればそれに応じて使える魔法のランクも高くなるかもしれない。

これだったら『風』のスクウェアメイジが最強だよな。・・・はっ!まさかこれも『風』最強説の一因なのか!?

?“今”はドットスペルまでしか使えない説2

こっちの考えは同時使用できる魔法はその魔法を使うメイジの最低ランクに制限されるということ。なにが言いたいのか分かりにくいが、俺の場合は『火』はトライアングル、『水』はライン、『風』はドットなので、魔法の同時使用の際はドットスペルまでしか使えないということ。

でもこの考えだと俺は『土』はほぼ0なので、同時使用は出来ないということになるんだけど。・・・まあ、ほぼ0で、完全に0ってわけじゃないから出来るのか?

?『フライ』中ではドットスペルまでしか使えないんだ説

単純に『フライ』という魔法を使用している間は他の魔法はどんなメイジだろうがドットスペルまでしか使えないということ。

もしこれだったら『フライ』中に魔法を使う意義みたいなものが薄れるな。

「あ、そう言えば、『フライ』は空中で突っ立てるだけだったな。動きながら出来るかどうかもやってみるか。」

やってみた。

「・・・さらに難しくなったな。『フライ』の移動をイメージしながら、魔法のイメージもしないといけないからな。これは？の“俺の集中力が足りてない説”が1番ありそうか？まあ、『風』のランクが上がればおいおい分かるかもな。」

「・・・まあ、『フライ』に関してはこんなものかな。次は他の魔法で同時使用が出来ないか試してみよう！」

二兎追う者ははたして何を得られるのか？（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

次は他の魔法との同時使用についての話をする予定です。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

ヴァルムロート式魔法分類（前書き）

こんにちは。こんばんは。

魔法についての話です。

ヴァルムロート式魔法分類

『フライ』で同時使用のことを調べた数日後、

「今日は別の魔法で同時使用が出来るか試してみるか。」

同時使用が可能な魔法でレイルド先生が言っていたのは『フライ』と『ユビキタス』の２つだったが、もしかしたら他にも同時使用が可能な魔法があるかもしれない。

という考えからとりあえず俺が使える魔法を総当たりで試してみようと思った。

で、今俺が使える魔法は

・コモンマジック
ライト、ディテクトマジック、レビテーション、念力、ロック、アンロック

・火の系統魔法
発火、ファイアーボール、ファイヤーウォール、フレイムボール、ビームサーベル

・水の系統魔法
コンデンセイション、ヒーリング、スリープクラウド、アイスウォール、ウォーターシールド、ジャベリン、ウォーターウィップ、ウォーターボール

・風の系統魔法
フライ、ウインド、ストーム、サイレント、エアシールド

・・・こうしてみると結構あるな。『フライ』を除いて２３個か。ロックとアンロックは同じと考えていいだろうから、２２個を調べるか・・・あ、『ブレイド』忘れてた。２３個だな、これは１日じゃ終わらないな。

「頑張れ、俺！負けるな、俺！」

そして１０日が過ぎた。自由鍛錬の時間や虚無の曜日を使いながら少しずつやってみた。

「今日はこれまでのまとめをしてみよう。」

「まとめってなに？」

「げっ！なんでキュルケがいるの？」

「げっ！って、レディーに対して失礼ね。でもダーリンだから許しちゃう。私がここに来たのは最近のダーリンって一人でこそこそ何かやってて、ちっとも私に構ってくれないんだもん。それで何をやってるかきになっちゃって。」

「この間一緒に町に買い物に行ったろ？」

「私はいつも一緒がいいの！」

「・・・まあ、いいか。キュルケに聞かれてもマズイことはないだろう・・・たぶん。」

「それでダーリン、なんのまとめをするの？」

「ああ、１０日位前の魔法の授業でレイルド先生が『フライ』や『ユビキタス』の魔法は他の魔法と同時に使えるって言ってたろ？」

「そうね。あれには驚いたわ。」

「それで早速聞いた次の日に『フライ』で魔法を同時に使えるか試したんだ。あ、これ先生には内緒な。あんまりやるなって言ってたし。」

「いいけど、先生はダーリンがいろいろやってるって気付いてるんじゃないかしら？」

「・・・そうかな？まあ、何にも言ってこないし大丈夫だろう。危険なことも無かったし。」

「そうなの？・・・それで最初に戻るけど、まとめってなに？」

「先生の話を聞いて『フライ』や『ユビキタス』以外に魔法を同時に使えないか調べてたんだ。そのまとめを今からしようかと思ってたんだ。」

「それがここ最近一人でこそこそやってた事なのね。でも、ダーリンって『アカデミー』で調べるみたいなことをしてたのね。」

「似たようなことかもね。まあ、僕のはお遊びみたいなものだけどね。」

「それでなにが分かったの？私にも教えてよ！」

「いいけど、あくまで僕の考えであって間違ってることもあるだろうから、他の人に言いふらさないでよ。」

「分かったわ！私とダーリン、２人だけの秘密ね！」

「そうだな。２人だけの秘密だな。・・・それじゃあ、始めるぞ。」

「ええ！」

「まず魔法には魔法が発動した時のみ魔力を消費するものと魔法が発動している間ずっと魔力を消費し続けるものの２つのタイプがある。前者を“独立型”、後者を“依存型”と仮に名付けよう。」

「独立型と依存型？つまりどういうこと？」

「まず独立型は僕が出来る魔法で調べたところ、火の系統魔法では『ファイアーボール』。他は水で『ジャベリン』だな。」

「依存型は？」

「依存型は僕が出来る魔法で調べたところ、火の系統魔法だと『発火』、『フレイムボール』、『ファイヤーウォール』だな。水だと『ジャベリン』以外、風は今のところ全部かな？あ、『ブレイド』もだ。」

「それってほとんどじゃないの？それにどうして『ファイアーボール』と『フレイムボール』に違いがあるの？」

「いい質問ですね！それは『ファイアーボール』に無くて『フレイムボール』にあるものが関係しているんだよ。」

「え？『ファイアーボール』に無くて『フレイムボール』にあるもの？なにかしら？」

「分かりそう？」

「・・・だめ、分からないわ。ねえ、何かヒントを頂戴。」

「ヒントか・・・２つの魔法を出した後何が出来るかを思い出せば分かるんじゃないかな？」

「魔法を出した後？・・・あ！分かったわ！『フレイムボール』は魔法を出した後でもある程度操ることが出来るわ。でも『ファイアーボール』は出来ない。これの差ね！」

「そう！『ファイアーボール』はイメージした通りにしか飛ばないけど、『フレイムボール』はある程度操ることが出来る。魔法が出した後に操れるって言うのが依存型の特徴でもあるんだ。」

「それで依存型が多いのね。」

「で、この独立型と依存型の２つに分けたのはある理由からなんだけど、分かる？」

「2つに分けた理由？もしかして、魔法が同時に使えるかどうかに関係しているのかしら？」

「その通り！・・・で、どっちが同時に魔法を使えると思う？」

「依存型だと数が多いしこんな便利なことを教えないわけがないから、独立型ね。」

「正解！独立型は魔法を出した後に別の魔法をしても前に出した魔法は消えないんだ。おそらく『ユビキタス』は独立型の魔法に分類されるんじゃないかな？使えないから分からないけど。」

「そうなの？それに本当に魔法を同時に使えるのかしら？」

「ああ、本当だ。試しに『ファイアーボール』を連発してみれば分かるよ。」

「そう？じゃあやってみるわ。」

「イメージは空の方に向かって一直線に飛んでいくようにして。地面にぶつかるイメージだと次を出す前に爆発して確認出来ないからね。」

「わかったわ。・・・『ファイアーボール』」

「すぐに同じようにイメージして！」

「・・・『ファイアーボール』！って、本当に出たわ！」

「でしょ！」

「あ、『ファイアーボール』が消えたわ。」

「魔法には効果時間みたいなものがあるからね。込めた魔力の量で持続時間が変わってくるみたいだよ。」

「そうなの？じゃあ、魔力をたくさん込めたら持続時間が長くなるのね。」

「そうだけど、それだけ集中しないといけないから、あまり実戦向きじゃないかもね。」

「そうなの、残念ね。・・・でもそれだったら前衛に守ってもらえばいいじゃないの？」

「まあ、それが理想だけど、もしメイジだけだったら速い方が有利だろ？」

「・・・そうね。なるべくメイジだけの状態にならないようにしたいわ。」

「まあ、持続時間の話は置いといて。さっきので分かったと思うけど独立型は魔法を同時に出すことが出来るんだ。そして独立型の魔法を出した後だったら依存型の魔法を出すことだって出来るんだよ。・・・すぐに消えるけど。」

「それでもすごいわ！・・・あれ？」

「ん？どうしたキュルケ？」

「ねえ、ダーリン。風の系統魔法は“今ダーリンが出来る全ての魔法”が依存型なのよね。」

「ああ、そう言ったけど？」

「それじゃあ、『フライ』も依存型の魔法なのよね。」

「そうだけど？」

「でも、依存型は魔法を同時に出すことが出来ないんでしょ？おかしくない？」

「ふふふ・・・」

「ど、どうしたの？ダーリン？」

「そう言われると思っていたよ。俺もその考えに行きついた時、依存型なのに魔法の同時使用が出来る矛盾に悩んだよ。」

「それでどうしたの？」

「そこで僕は３つ目の“独立依存型”を考えた！」

「独立依存型？」

「ああ、名前の通り、依存型でありながら魔法を同時に扱うことが可能な魔法の分類だ。今のところコモンマジックと『フライ』がこれになるな。」

「へえ、コモンマジックもなのね。」

「ああ、コモンマジックは単純な魔法なだけに魔法の同時使用には何の抵抗も無かった。まあ、そのかわりコモンマジックだから魔法としての威力はあまり期待できないから、活用するには一工夫要るだろうけど。」

「そうなの。でも、『フライ』が魔法を同時に使えるんでしょ！」

「そうだけど、これもかなり集中力がいるみたいで僕はまだ『フライ』中ではドットスペルくらいしか使えないんだ。」

「あら、そうなの？難しいわね。」

「まあ、ぼちぼちやっていくよ。使う機会はそうないと思うけど・・・」

「先生ももしもの時以外使うなって言ってたし、その方が良いわね。」

「ああ、そうだな。とりあえずまとめはこんなものかな。」

「そうなの。私はまさか『ファイアーボール』が同時に使えるとは思わなかったから驚いたわね。」

「・・・キュルケ、最初にも言ったけどこのことは」

「分かってるわ、ダーリン！だって、」

「「２人だけの秘密」」

「でしょ？」

「ああ、その通りだよ。」

（別に問題ないとは思うけど念のためだな。）

「そうだ！」

「ん？どうしたキュルケ？」

「もう1人でこそこそするのは終わったんでしょ？」

「そうだな・・・魔法の同時使用については終わりかな。」

「なんか気になる言い方ね。まあ、いいわ。今度の虚無の曜日にまた買い物に行きましょ！」

「え？この間行ったじゃん？」

「この前はこの前、今度は今度なの！いいじゃない、一緒に行きましょう！」

「まあ、いいけど。」

「決まりね！・・・今度はどこのお店に行こうかしら？」

（オリジナル魔法の開発はぼちぼちやっていくか・・・）

「どこでもいいよ。キュルケが行きたい所で。」

「ん？そうだ。町に行ったら酒屋に行ってみるか。」

「ダーリン！お酒はまだ早いわよ！もう少し大きくなってからじゃないと。」

（もう少しでいいんかい。）

「僕は飲むわけじゃないよ。ちょっと頼み事をしにね。」

ヴァルムロート式魔法分類（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

この二次創作では『ファイアーボール』には魔法発動後の操作、ホーミング機能はない、という設定になっています。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

領地経営始めました。3年目（前書き）

こんにちは。こんばんは。

領地経営の話です。

3年目に突入。

「領地経営を初めてから3年目か・・・。今回から肥料を実際に畑に撒いてどれだけ収穫量が増えるかを試すことが出来るな。まあ、それも今回の話し合いの結果にもよるけどな。」

俺は今ヴァイスに向かう馬車の中で外を見ながら3年目はどのように進められるか考えていた。そろそろヴァイスの村が見えてくるころだ。

「お、見えてきたな。・・・ん?あそこって放牧してたっけ?前来た時は確か畑だったような?」

「ヴァルムロート様、ようこそいらっしゃいました。」

「こんにちは、村長。話し合いはちょっと休んでからでいいですか?」

「ええ、もちろん構いません。では、私の家にどうぞ。」

「ありがとう。護衛の人達は宿で休んでいてください。」

「はい。分かりました。他の者にも伝えておきます。」

「お願いします。」

「ヴァルムロート様、お茶です、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

「いえいえ。」

「・・・あ、そうだ。来る時に畑がちらっと見えたんですけど。前畑だった所に家畜が放牧されてましたけど、どうしてなんですか？」

「ああ、あの畑ですね。あそこは今年から放牧をする畑と決まっているんですよ。同じ畑で作物を育てているとそのうち育ちが悪くなって作物が育たなくなってしまうので、春に小麦などを撒く畑と秋に大麦などを撒く畑と作物を作るのを止めて放牧する畑の３つを２～３年毎にローテーションしているんですよ。」

「なるほど・・・。あれがそうなのですか、本で読んで知ってはいましたが、実際に見たのは初めてだったので勉強になりました。」

「そうですか。それは何よりです。」

「では、そろそろヴァイスについての話し合いを始めましょうか。」

「そうですか。分かりました。」

「では、まず今年の作物の収穫量はどうでしたか？」

「はい。今年の昨年とほぼ同じ位の収穫量でした。あと、先ほどお話した畑のローテーションですが、この土地は初めてなので２年間

でそれぞれの畑を回していこうと思います。」

「2年ですか、・・・ローテーションさせる年数はここに住んでいる人の方がよく分ると思うのでお任せします。」

「そうですか。しっかりやらせて頂きます。」

「お願いします。では次に肥料の量の検討はどうなりましたか?」

「肥料を使うときちんと育つ作物が増えました。それに肥料を使わないものよりも良いものが出来やすいようです。」

「そうですか。思った通りですね。」

「しかし・・・」

「ん?何か問題がありましたか?」

「・・・肥料が少ない時は特に問題はないのですが、多すぎると作物が枯れてしまうようなのです。」

「そうなんですか!?撒けばいいというものではないんですね。・・・いきなり本番でやらないで正解でしたね。」

「・・・本当にそうですね。」

「それで畑に撒く肥料の量ですが、そうですね・・・。良い作物が採れる一番少ない量でやってみましょうか。多すぎると問題がありますが、少ない分には特に問題は無いみたいですし。」

「そうですね。分かりました、それでやってみることにします。」

「お願いします。あ、紙作りは今どんな様子ですか？たまにうちの者が回収に来ているので紙の出来具合なんかは分かるのですが、作業自体の様子は分かりませんからね。」

「紙作りはあの3家族を中心に良くやっていると聞きます。」

「そうですか、それは良かったです。もし、独占しているようならどうしようかと思いましたよ。」

「それはヴァルムロート様が最初に言われたので、そういうことをしようとは思わないでしょう。・・・ちなみに紙の出来はどうでしょうか？」

「ええ、最初の頃比べると最近のはそこそこいい出来だと思います。なにか問題があるとか言ってましたか？」

「いえ、私の方にはなにも無いですね。」

「・・・そうですか。後で紙製作所の方に寄ってみます。」

「そんな！でしたら今から呼んできましょうか？」

「それには及びません。それに実際に作業しているところを見たいですから。」

「分かりました。それでしたら私もお伴致します。」

「そうですか？別に見に行くだけですからいいのですけど・・・」

「いえいえ、是非お伴させてください！」

「まあ、そこまで言うならいいですけど。」

「ありがとうございます。」

「では他になにかありますか？」

「そうですね・・・」

「・・・では、今回の話し合いはこれで終わりましょうか。」

「はい。ありがとうございました。」

「では、早速行ってみますか。」

「紙製作所ですね。分かりました。」

紙製作所は村長の家から北の方角に位置している。小さい村だし歩いてすぐに着いた。

「こんにちは。今日も精が出ますね。」

「これは村長、おや？ヴァルムロート様まで一緒ですか！今日はどのような用事でいらっしゃったのですか？」

「こんにちは。紙作りの様子をちょっと見に来ました。もう紙作り

には慣れましたか？」

「はい。最初はいろいろ大変でしたが、今は少しはましになったと思います。」

「そうですね。そちらから回収した紙を見せてもらっていましたから、その様子が少しは分かるような気がしますよ。」

「ええ、思いのほか紙をすくうというのが難しくて、最初はなかなか厚さが均等な紙をすくうことができませんでしたから。しかし、それも今では均等な紙を作ることが出来るようになりましたよ。」

「そのようですね。しかし、1枚1枚が均等でもそれぞれの紙の厚さにばらつきがあるようなので、今度はそこに気を付けて紙をすくうようにして下さい。あ、出来たら紙はより薄くすくうように心がけて下さい。」

「作る紙の厚さを同じように、そしてより薄くすくうですか・・・分かりました、やってみます。」

「ええ、お願いします。・・・そうだ！紙作りで何か困ったことはありませんか？なんでもいいので言ってみて下さい。それが今後に役に立つことかもしれませんし。」

「困ったことですか？そうですね・・・」

「・・・あの、ちょっといいですか？」

「はい。そこの御婦人、なんですか？」

「はい。最初、ヴァルムロート様に紙を作る方法を見せてもらった時は魔法を使っていたので時間はそうかからなかったのですが、それを魔法なしで行うと時間がかかるということが分かりました。特に材料を軟らかくするために煮る工程に時間がかかるのですが、どうにかなりませんか？」

「なるほど、煮て材料を軟らかくするところですか・・・」

（ああ、あれは魔法で圧力をかけて煮たから普通にやると時間がかかるものなのか・・・）

「はい。材料を細かく切ったりしているのですか、それでも時間がかかります。なにかいい考えはないですか？」

「そうですね・・・」

（この世界の技術で圧力鍋なんて作って、下手したら爆発するんじゃないか？）

「・・・羊皮紙だったら、石灰で軟らかくなるのに・・・」

「え？羊皮紙って石灰で軟らかくなるの？」

「そうなんです。しかしヴァルムロート様は紙の作り方は知っているのに、羊皮紙の作り方は御存じ無かったのですね。」

（俺がいた時代の地球、しかも日本には羊皮紙なんてなかったんだよ。作り方なんて知るわけがない！）

「あはは・・・貴方は羊皮紙の作り方を知っているのですか？」

「はい。こちらに来る前は羊皮紙を作る工房で働いていましたので。」

「そうなんですか？なぜこの村に来ようと思ったのですか？」

「それは違う場所で一旗揚げようと思い、この村に来ました。他の人も理由は同じようなものだと思いますよ。」

（家付き、仕事ありの高待遇で集まっただけじゃないってことか・・・）

「そうですか、頑張ってください。それにしても、石灰か・・・試してみるか。」

「石灰をですか？」

「ええ、材料を煮詰める時に石灰を混ぜてみてください。・・・あ、石灰はこちらで用意するので、石灰が着き次第やってみてください。」

「そう言うことでしたら、分かりました。」

「ありがとうございます、ヴァルムロート様。」

「いえ、未来への投資ですよ。気にしないでください。」

「それで試した結果はどうしましょうか？」

「そうですね・・・定期的にうちの者が紙を回収に来ていると思うので、その時に石灰を使ったらどう変わったかを手紙で知らせてください。」

「・・・申し訳ないのですが・・・」

「え?何か問題でも?」

「はい。私は字が書けないのです。ですから、手紙はちょっと・・・」

「そこの御婦人は字は書けますか?」

「いえ、私も・・・」

「・・・村長は字、書けますよね?」

「はい、書けます。・・・私が代わりに手紙を書きましょうか?」

「お願いできますか?」

「ええ、もちろん!」

「それでは、村長が代筆してくれるので内容は村長に話してください。」

「はい。分かりました。お願いします、村長。」

「ええ、任せなさい。」

「では、石灰のことお願いしますね。」

「「はい!」」

ヴァイスの入り口にはすでに馬車を用意してあって、もう帰る準備が整っていた。

「では、村長。僕はそろそろ帰りますね。」

「今日はお疲れ様でした、ヴァルムロート様。またの御越しをお待ちしております。」

「村長もお疲れ様です。ではまた。よいしょっと・・・じゃあ、馬車を出してください。」

「はっ！」

うちの帰る道中、馬車の中で俺はヴァイスが少しずつ成長しているな、と思った。

そして帰ったら石灰をある程度購入してヴァイスに送らないといけないなと考えていた。

「・・・でも、石灰っていくらぐらいするんだろ？もしこれが成功しても石灰が高価だったら別のものを考えないとな。」

石灰を水に溶かすと石灰水になる。石灰水って空気をぶくぶくってやると白く濁るやつだよな。たしかアルカリ性の水溶液だったはずだ。

石灰自体に羊皮紙を軟らかくする効果があるのか？それともアルカリ性の水溶液だったら何でもいいのか？

もし後者なら、代用できるものは・・・

「・・・灰か？」

そんなことを考えながら家路に着いた。

領地経営始めました。3年目（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

前領地経営の話を書いた時に「台本を読み合ってるみたい」という意見をもらったので、今回は気を付けて書いてみましたが、どうでしょうか？
すこしは改善していればいいなと思います。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

普通の日本人にとって動物をさばくって結構衝撃的だと思う（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回はカトレアさん治療についての話です。カトレアさんは出ませんが。

普通の日本人にとって動物をさばくって結構衝撃的だと思う

今年もカトレアさんの誕生会に呼ばれたので、馬車に乗ってヴァリエール家に移動中だ。

今年の誕生日プレゼントは服だ。

しかしカトレアさんの服ではない。ペットの着る服だ。サイズも小型犬から虎とか熊まで着れる物を用意したし、鳥でも着れるちょっと特殊なものも用意してみた。デザインはキュルケや姉さん達と考えて可愛いものにしている。喜んでくれるかな？

そうそう、ちょうど1年前にカトレアさんの治療について話し合って、俺がやらないといけないことがいくつか出来た。それが、

？『ブレイド』で皮膚や肺を切開するので、その手加減を知ること。

？魔法でレーザーメスを再現させ、その扱いに慣れること。

？酒からアルコールを蒸留分離し、消毒用アルコールを作成すること。

この3つをまずやっていこうと決めたんだったな。

そしてこの1年俺がやったことは、

？『ブレイド』で皮膚や肺を切開するので、その手加減を知ること。について

まず『ブレイド』の魔法の刃の大きさを変えられるように練習した。今ではイメージすれば、刃の大きさを1メイルから数サントの幅で帰ることが可能だ。まあ、これはそんなに難しいことではなかった。

そして皮膚を切る感覚を知るために調理場に行って鶏や豚、羊などをさばかせてもらうと厨房に行ってコック長にこのことを言った時初めは断られたね。

「ヴァルムロート様、いけません！このようなことは貴族がするようなことではないです。」とか言われて。

まあ、当然と言えば当然なんだが・・・でも何度もお願いしたら、しぶしぶ教えてくれるようになった。

新鮮な材料を使うためにお肉関係のものは生きたまま購入していたので、さばく時いきなり殺さずに生きたまま首の動脈を切って血を抜く作業がかなり酷かった。暴れるから押さえつけるんだけど、最初は激しく暴れるのがだんだん弱くなって最後は動かなくなるので悲しくなってきたね。そのあとに首を落としたりしたし。

まあ、そんなことを思っていたのも最初だけだったんだけど、・・・あ、どうでもいいとかじゃなくて、ただ単に慣れただけでちゃんと感謝しているよ、いつもご飯のときは心の中で「いただきます。」「御馳走様でした。」を言っているし。

次に皮を剥いだり、鶏だと羽をむしったりした。皮を剥ぐ方法は肉と皮を『ブレイド』を使って切り分けていくんだけど、最初は皮に肉が付いてきたり、肉の方が切り刻まれたりしたけど、今ではある程度綺麗に剥ぐことが出来るようになった。鶏の羽はただむしった

だけだ。

・・・この皮で羊皮紙が作れるのか・・・まあ、俺は作らないけど。剥いだ皮は羊皮紙を作っているところに売っているらしい。綺麗に剥ぐとちょっとだけ色を付けてもらえるとか。

次は内臓を取り出すんだけど、最初思いっきり『ブレイド』を差し込んでお腹を開いたら、内臓まで切れちゃってぐちゃぐちゃになって使いものにならなくなっちったんだ。ごめんね、羊さん。

しかし、この調子でカトレアさんの手術をやっていたら開始と同時に殺してたね。・・・マジで危なかった、俺も死ぬところだった。実際やる時は常に『ディテクトマジック』を使いながらするからそんなことはないと思いたいけど、やっぱり技術がないと難しかったりするだろうしな。

分かってることと出来ることは別物だしな。

で、内臓を取り出して、鶏の場合はこのときに皮を剥がした。

剥がした鳥の皮は貴族の料理にはあまり出してないみたいなので、ほとんど賄い料理として使われているようだったので、鶏皮をフライパンでカリカリに焼いて軽く塩コショウをして食べた。

鶏皮おいしいです・・・でもこれ食べてると日本酒が欲しくなるな。ハルケギニアには米とかないのかな？

で、最後に関節を切断してバラバラにすると、もう以前の面影はなくただの肉の塊になった。さらに細かくするとスーパーとかで見る１００ｇ何円とかの肉になるな。

最初はうまくさばくことが出来なかった（いろいろ躊躇していた）が、今では家のコック長も納得するほどのさばきっぷりだ。

まあ、こんな感じで肉を切るという感覚はだいたい分かったし、動物のさばき方を覚えた（これはおまけだな）。

・・・ただそういう動物と人間の皮膚の固さとかが同じかどうかわからないのが問題か。

そう言えば、１年やったけど牛を見ることはなかったな。牛自体はいるみたいだけど、あんまり食べないのか？

？魔法でレーザーメスを再現させ、その扱いに慣れること。について

レーザーメスを再現すること自体は意外と簡単だった。火火で極一点に集中することでレーザーメスのようなものが出来るようになった。ただラインスペルなのだが、これは使っている間細かいところにずっと集中していないといけないので、意外ときつい。とりあえず名前は『レーザー』と安直に付けておいた。

なので、この扱いに慣れるためにさばいた後の肉からすじをとるときに『レーザー』を使って肉とすじを分けた。最初は集中し過ぎて１０分位しか出来なかったが、今では要領を抑えたので２～３時間位なら楽にいけるようになった。

ただこのときに些細な問題が発生していた。

それはこの『レーザー』は火の系統魔法で、肉をすじを分けると肉

の表面が少し焼けてしまって香ばしい臭いが出てしまう。するとその臭いにつられるようにお腹がすきやすくなるというなんとも些細な問題だった。ついついつまみ食いをしてしまいそうになったよ。・・・してないけど。

?酒からアルコールを蒸留分離し、消毒用アルコールを作成すること。について

これはハルケギニアにも蒸留酒があるということだったので、父さん御用達の酒屋に頼んで蒸留する回数を増やしてもらうようにした。たしかもっともアルコール度数が高い酒は７０回以上蒸留して出来るものだったとおぼろげながら覚えている（前世の時にググっていた）ので、とりあえず７０回蒸留してもらった。

酒屋の人は７０回も蒸留することに驚いていたな。・・・まあそりゃそうだな、普段２～３回位の蒸留回数だろうし、それを７０回とか正気か！？って感じだろうな。それでも父さんの口添えで作ってもらえることになった。

それで７０回蒸留した後のものを樽１個分（直径約７０サント、高さ約８０サント）作ってもらうことにした。本当はこんなにいらないと思うけど事前の検証実験とかあるし、多い分には問題ないだろうと考えたからだ。

出来たのはほぼ１年後だった。７０回蒸留するものを最終的に樽１個分だし結構時間かかるな。なにかもっと簡単なものはないものかな？

値段は１５０エキュー掛かった。まあ1年かかったからな。・・・ちなみに１５０エキューは平民の年収とほぼ同じ位だ。この掛かったお金は必要経費としてカトレアさんの治療が成功した後にヴァリエール家に請求しておこう。

これでたぶん９６％のアルコールを得ることが出来たはずだ。しかし、思ったよりこれが出来るのが遅かったので消毒に適した濃度を調べるまでは出来なかった。今度やらないといけないな。

そろそろヴァリエール家だ。

・・・今年もカトレアさん治療についての話し合いがあるだろう。その後でカトレアさんには内緒でヴァリエール公爵に『ある提案』をしないとな。

「・・・はあ、ちょっと気が滅入るな。」

普通の日本人にとって動物をさばくって結構衝撃的だと思う（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回話の多くを動物のさばき方で占めてしまいましたが、実際にさばくところを見たらかなりの衝撃でしょう。日本はグロテスクなところはテレビではモザイクですし。あ、エロいものもですね（笑）

私はマウスとカエルと魚くらいしか自分でさばいたことはないですが、人体解剖は2回見学させてもらったことがあります。その時は衝撃というか興味津津という感じで別の意味で衝撃的でしたね。

中世ヨーロッパでは牛は貴重な労働力だったそうで、歳を取って働けなくなった牛くらいしか食べる機会が無かったらしいです。

今の日本では普通に暮らしているとウサギなんて食べませんが、どうなんですかね？ネットではおいしいという意見が多いみたいですけど。

ご意見・ご感想お待ちしております。

これはある意味『トロッコ問題』になるんだろうか。（前書き）

こんにちは。こんばんは。

カトレアさん治療についての話です。

今回は長くなると思って前の話と区切ったのに、以外と長くなってしまいました。

これはある意味『トロッコ問題』になるんだろうか。

カトレアさんの誕生会はつつが無く終わった。

その後でカトレアさんの部屋に招かれたら早速挙げた服を動物達が着ていた。熊なんかリアル熊のプーさんになっているぞ。これではちみつの入った壺があれば完璧だな。

「この子達に可愛い服をくださってありがとうね、ヴァルムロートさん。」

「いえいえ、喜んでもらってうれしいですよ。」

(でもカトレアさん自身にもなにか贈った方が良かったかな?)

「・・・うふふ、来年も楽しみにしていますね。」

「ちい姉さまの飼っている動物は服を着てなくても可愛いわ。・・・けど、その可愛さをさらに引き立てる服を贈るなんてやるじゃない、ヴァルムロート。」

「それにしても動物に服を着せるなんて良く思いついたわね、ダーリン。」

(地球じゃ普通になってたから俺は変とか思わなかったけど、やっぱりちょっとずれてるのかな?)

「・・・別に不思議じゃないだろ。騎士の馬やグリフォンとかはなんか羽織ってるし。」

「確かに着飾ってはいるけど、それでも服って感じじゃないでしょ。

」

「なんか長い布を上にかけただけって感じだものね。」

「そうかな？」

「ふふ、ヴァルムロートさんは面白い発想をいつもしてるのね。」

「あはは、そうですかね？」

「たしかにダーリンは時々変なことをしてるわね。」

「えー。変って酷いな、キュルケ。」

「ねえ、キュルケ。ヴァルムロートってどんな変なことをやってるの？教えなさいよ。」

「それは私も知りたいわね。教えて下さる？」

「そうね・・・」

そうしてなぜか俺の過去の暴露話が始まった。

「うちの中庭にも噴水があるのだけど、その噴水に『コンデンセイション』の魔法をかけてその上に乗ろうとして噴水に落ちたことがあるわ。私は実際に見たわけじゃないけど、お姉様がその一部始終を見ていたの。」

「あらあら。」

「あはは、ばかねぇ。」

「その他にもファイアーボールに自分から手を突っ込んで火傷したこともあったわ。・・・ねえ、ダーリン。どうしてそんなことをしたの？」

「え、自分で出したファイアーボールなら熱くないかと思って手を入れただけだけど。」

「「それはないわね。」」

「ですよねー。」

「うふふ、ヴァルムロートさんは面白いわね。」

「私達が魔法を教えてもらっている先生にフライを使っている時に他の魔法を使えるって聞いたらすぐに試していたみたいね。先生は危険だからやめておけとも言ってたのにね。」

「あらあら、先生が危険と言ったことをやったの？そういうことはしてはいけませんよ、ヴァルムロートさん。」

「いえ、先生が危険と言ったのは戦闘中などの元々危険なときにやるとさらに危険度が高まりますよということですよ？試してみる分にはそんなに危険は無いはずですよ。・・・たぶん。」

「それでもだめですよ。その先生もヴァルムロートさんやキュルケさんの身を案じての言葉ですから、あまりないがしろにしてはいけませんよ。分かりましたか？」

「・・・はい、今後善処します。」

「善処ではなくて、やらないようにして下さいね。」

「・・・・・・」

「・・・ルイズどうしたの？」

「・・・え！？なんでもないわ！ねえキュルケ、他には何かないの？」

（ルイズは魔法がきちんと発動しないんだろうな。やっぱり爆発ばっかりしてるのかな？）

「いやいや、それくらいだろ。他になんか変なことしてるのか？」

「そうね・・・そういえば最近ダーリンが厨房に入っていくのを時々見かけるけど料理でも習ってるの？」

「いや、料理は習って無いな。ただ動物のさばきk」

（・・・は！なんだ、このプレッシャーは！）

「あら？どうしたの？続きは？」

（カトレアさんなんか黒いオーラみたいなのを出しそうな雰囲気になってるぞ。顔は笑ってるけど・・・まさか俺が無用な殺生をしていると思われたのか！？）

「・・・動物のさばき方を教えてもらってだけです。さばいた動物はちゃんと料理されて食事に出ていますよ。」

「なんでヴァルムロートは動物のさばき方なんて教えてもらってるの？そんなのは厨房の人にでも任せておけばいいのに。」

「まあ、いろいろ事情があるんだよ。」
（カトレアさんのプレッシャーは消えたようだな、良かった。）

「いろいろ、ねえ。」

「ねえ、ダーリンってちょっと変でしょ。」

「確かに少し変わっているかもしれませんね。」
「ちょっとじゃなくてかなり変なんじゃないの？」

「・・・変か。」
（だとしたら、もう少し自重した方がいいのか？）

ただの雑談がちょっと自分の変さを考えることになってしまった。

今年も1泊して、次の日にカトレアさんの治療についての話し合いがあった。出席者は去年と同じメンバーだ。

「ではカトレアの治療についての話し合いを始めよう。まず私から、去年ミス・リッシュに代わりカトレアの心臓の動きを診る者を選んでほしいということだったので、その後早速我が家の水メイジから選んだ。その者に毎朝体調を診ると共に心臓の動きも診てもらって

いる。・・・これでいいのかね？」

「はい。問題無いと思います。」

「そうか。ではその者にはこのまま続けてもらうことにする。それでヴァルムロート君の方はどうかね？」

「はい。傷口が綺麗に治るワインの蒸留回数を調べると言うことでしたが、それではいくつもの蒸留回数が違うワインを用意しなければいけないので、どうせなら一番濃いワインを作ってからそれを水で薄めてみようと思います。」

「・・・『思います』ということはまだそれを行ってはいないのですね。」

（怖っ！怖いよカリーヌさん！あまり睨まないで下さい。）

「はい。仰る通りまだ手掛けていません。言い訳ですが、一番濃いワインを作ってもらうために蒸留する回数を７０回としたら、出来たのがつい先日だったのです。帰ったらすぐにでも取りかかります。」

「そうですか、分かりました。まだカトレアの病状に変化が無いとは言えなるべく早くしたことに越したことはありませんからね。お願いしますよ。」

「はい。頑張ります。」

「しかし、７０回も蒸留させると言い出した時は同行した私も驚いたぞ。」

「そうなのか？私は酒はあまり飲まないから７０回というすごさが分からないのだが、蒸留するのに１年も時間がかかる大仕事だということは分かった。」

「ああ、普通の蒸留酒である『ブラントヴァイン』などの蒸留する回数は２～３回だからな。７０回というのがとてつもないのもだと分かるだろう。こんなに蒸留させたのはヴァルムロートが初めてじゃないのか？」

「それを聞くと７０回といすごさが際立つな。・・・しかしなぜ“７０”回なんだ？もっと蒸留する回数を減らしてはいけないのか？切り良く１００回とかではいけなかったのか？」

「それはですね、ヴァリエール公爵様。蒸留できる１回の量やそれにかかる時間などを調べた結果、１年で７０～８０回蒸留することが出来るだろうという考えたからです。確かに蒸留回数を減らせば時間はそこまでかからなかったでしょうが、それでもしうまくいくものが出来なかったらやり直しになってしまうかもしれないので今回は時間がかかりましたが７０回としました。」

（７０回が妥当なのは現代地球の知識とは言えないからな。それにハルケギニアの蒸留技術では実際に計算しても１年で蒸留できるのは７０回位だったしな。多いことに越したことは無いんだけど、お酒からの蒸留ではどんなにやっても９６％が限度らしいし。）

「そこまで考えての７０回だったのか。分かった。その件は引き続き頑張ってほしい。」

「はい。頑張らせて頂きます。」

「次にこの１年のカトレアの様子についてはミス・リッシュから話

してもらおう。」

「はい。カトレア様はこの1年特に遠出などはされてないので、大きく体調が崩れるということもなく安静にしていれば問題は無かったですね。異常な部分は去年より少し大きくなっていますが、それについての健康被害は出ていません。私からは以上です。」

「今回はなにか新しいことはあるかな？」

「・・・ちょっといいですかヴァリエール公爵様。」

「ん？何かあるのかね、ヴァルムロート君？」

「はい。しかしこれはカトレアさんやキュルケにはちょっと聞いて欲しくないので少し席を外してもらっても構いませんか？」

「カトレアやキュルケ嬢には聞かれたくない話か。」

（これから話ことは非人道的なことだからカトレアさんにも聞いてもらったらきっと反対するだろう。キュルケを退席させるのは俺の嫌なところを見て欲しくないからかな。まあ、自分勝手なことだけど。）

「ええ、まあ。」

「・・・いいだろう。カトレア少し席を外しなさい。キュルケ嬢はヴァルムロート君の話が終わるまで席を外してもらってもかまわないかな？」

「・・・はい。わかりました、お父様。」

「・・・どうしてもだめなの？ダーリン？」

「どうしてもってわけじゃないけど、なるべくキュルケには聞いて欲しくない話だからな。お願いできるかな？」

「・・・しょうがないわね。でもどうして私達に席を外させたのかはいずれ話してもらうからね。」

「そうだね。時期が来れば話すよ。もちろんカトレアさんにも話ますから。」

「それならいいわ。行きましょうか、カトレア様。」

「そうね。キュルケさん。」

そうしてキュルケとカトレアさんは部屋から出ていった。

「それでヴァルムロート君、カトレアとキュルケ嬢に席を外させてどんな話があるというんだい？」

「そうだな。私もそれは聞きたいな、ヴァルムロート。」

「はい。私はカトレアさんの手術に向けて今までは動物を使って『ブレイド』の使い方などを練習してきて、『ブレイド』の扱いなどはかなり上達したと思っています。しかしそれは動物に対してなのです。」

「・・・つまりヴァルムロート君はこう言いたいのかね、今度は人で練習したい、と。」

「・・・はい。そういうことです。」

「まあ！そんなことを考えていたの？ヴァルムロート。」

「そう言うことになるね。いずれ動物だけではだめだとは薄々思っていたんだ。」

「そうなの。それでキュルケに席を外させたのね。嫌なことを聞かせたく無くて。」

「まあね。人を救うために他に人の命を持て遊んでいるみたいに思われるかもしれないし。もちろんそんなことは無いのだけど。それにカトレアさんに席を外してもらったのはそれもあるけど、一番はこの提案を一番反対するだろうと思ったからなんだ。」

「確かにあの子がいたらきっと反対したでしょう。カトレアは命を大事にする子ですからね。」

「僕もそう思います。しかし、今回カトレアさんに行う手術は体を切り開かないと出来ないものです。回復魔法があるとはいえ人体のどこは切っても大丈夫で、どこは傷つけてはいけないとかを良く分かっていないまま手術を行うのはかなり危険だと考えて、それで人体実験を行うことを考えたんです。」

「たしかに失敗しましたでは済まさせんからな。」

「ええ、その時はヴァルムロート君の首が飛ぶことになりますからね。」

「それで事前にカトレアさんに行うようなことを別の人で試してその後を半年位観察を行いたいのです。」

「そうか。それで半年というのは？」

「いえ、特に意味があるわけではないのですが、手術後にそれ位生きることができて『ディテクトマジック』でも問題が無いようならばそれ以後も問題なく過ごせるかな？と考えました。」

「なるほど。それでその人体実験を行うための人はどうやって集めるつもりなんだい？」

「まさか平民から選ぶつもりではないでしょうね？」

「いえ、さずがにこの様な非人道的な行いに罪もない平民から選ぶはずがないですよ。平民あっての領地、そして貴族ですから。」

「ふむ。『平民あっての領地、そして貴族』か。そう考えるのは貴族では珍しい、いやほとんどいないだろう。ツェルプストーお前がそう教えたのか？」

「いや、私ではないな。しかし平民はむやみに扱うなとは教えているがな。」

「そうか。そこのところは別の機会に是非話し合ってみたいものだな。」

「え？ええ、分かりました。それでこの人体実験を行うための人は盗賊などの死刑が決まった罪人から選ぼうと考えています。」

「なるほど。死刑が決まった罪人なら元々死ぬのだからその前に人体実験をさせてもらおうということか。」

（罪人には人権は無いぜ！というつもりは無いけどな。同じ症状の患者がいればベストなのかもしれないけど、それができないのでベターな選択をするしかないしな。）

「はい。それでヴァリエール公爵様には人体実験をするための人を集めて欲しいのですが、お願いできますか？」

「・・・うむ。盗賊が出た時はなるべく殺さずに捕えるように言っておこう。」

「ありがとうございます。」

「それでどういう人をなるべく捕えた方がいいのかね？やはりカトレアと同じ女性の方がいいのかな？」

「そうかもしれませんが、別に男性でも構わないと思います。確かに女性と男性では体格や体力などに違いがありますが、とにかく人数をある程度確保して欲しいのです。特に盗賊などは男性がほとんどで女性はあんまりいないと思いますし。」

「そうか、分かった。とりあえず何人位いた方が良いのかね？」

「そうですね、僕も何人いたら大丈夫とは言えないので、捕えたらその都度手紙などで報告してくれませんか？そしたら僕がこちらに伺いますから。」

「そうか？分かった。捕えることが出来たら連絡しよう。」

「お願いします。ヴァリエール公爵様。」

「しかし、お前がその様なことを考えていたとはな。人の死に触れさせるにはまだ早いと考えていたんだがな。」

「ツェルプストーよ、昔から言うではないか“男子三日会わざれば刮目して見よ。”と。」

「私は1日も目を離した時はないぞ。」

「そうか。まあ、子供の成長は私達が思っているよりも早いということだな。」

「・・・そうかもしれんな。」

ちょっと場所が代わってヴァリエール家の厨房ではクックベリーパイが焼ける良い香りが漂っていた。

「ダーリンの聞かれたくない話って何でしょう?それにカトレア様の話なのにカトレア様自身を退け者にするなんて、どう思います?カトレア様!」

「まあまあキュルケさん、落ち着いてね。ヴァルムロートさんにはヴァルムロートさんなりの考えがあるのよ。・・・でもキュルケさんは大事にされているのね。」

「どういうことですか?」

「私が席を外されたのはそこに私がいるときっとヴァルムロートさ

んの提案に反対するからでしょうね。」

「え？カトレア様のためにやっていることなのにダーリンが提案することはカトレア様自身が反対する様なことなんですか！？」

「まあ、私の勘なんですけどね。」

「女の勘ですか？」

「うふふ、でもヴァルムロートさんがキュルケさんを退席させたのはきっとそんな提案をする自分を見て欲しくないから、かな？」

「それも女の勘ですか？」

「そうかもね。でも顔には出していないけどヴァルムロートさんがキュルケさんを気遣っていたのは確かね。愛させているのね、羨ましいわ。」

「ま、まあ、私とダーリンは相思相愛ですから、と、当然ですわ。／／／」

「うふふ、照れちゃって可愛いわね。私ｍ」

「ちぃ姉さま！クックベリーパイをお焼きになっているの！私の分はありますか！？」

そこへルイズが厨房にクックベリーパイの臭いを嗅ぎつけてやってきた。

「あら、ルイズ。廊下を走ると危ないわよ。クックベリーパイが出

来たらルイズとお姉様を呼びに行こうと思ってたのよ。皆で食べましょう。」

「はい！ちぃ姉さま！」

「・・・ぷっ。臭いに釣られて来るなんてルイズったら犬みたいね。」

「むー！何よ、キュルケ！いいじゃない、ちぃ姉さまのクックベリーパイはとってもおいしいんだから仕方ないのよ！」

「ありがとう、ルイズ。・・・そろそろ良いみたいね。ルイズはお姉様を呼んで来て頂戴。」

「うっ、はい。分かりました。読んで来ますね。」

「あ、ルイズ、来るのは会議室にね。」

「分かりました！」

そういうとルイズはまた廊下を駆けていった。

「もうあの子ったら・・・」

「ふふ、カトレア様もルイズにすごく愛されてますね。」

「ええ可愛い妹よ。それじゃあ、キュルケさんはパイを運ぶのを手伝ってね。」

「ええ、分かりました。でももう話し合いは終わったのでしょうか

？」

「多分もうそろそろ終わりだと思うわ。さあ、行きましょう。」

「まあ、カトレア様がそういうなら。」

俺の出した人体実験の件をヴァリエール公爵様と父さんもに了承してもらい、今回の話し合いがお開きになった時にキュルケとカトレアさんがクックベリーパイと紅茶を持ってやってきた。

それから少し遅れてルイズとエレオノールさんもやってきて、お茶会になった。

カトレアさんが作ったクックベリーパイはやはりおいしかった。

お茶会が終了して、俺達はヴァリエール家を後にした。

「ねえ、ダーリン。」

「ん？何？」

「今回聞かせてくれなかった話、いつか教えてね。」

「・・・ああ、そのうち教えるよ。」

「大丈夫、どんなことでも私はダーリンを嫌ったりしないからね。」

（何!!もしかしてキュルケは俺がどういう話をしたか検討が付いているのか!?）

「!!・・・あ、ああ。カトレアさんの治療が終われば必ず話すよ。」

「ええ、分かったわ。・・・ダーリン、大好きよ!」

「うわっ!キュルケ!お前父さんと母さんがいるところで何言ってんだよ!・・・（まあ、俺も好きだけど。）ぼそっ」

「えぇ、ダーリンなんて言ったの?もっと大きな声で言ってよー。」

「いやいや!何も言って無い!言って無いぞ!」

「・・・ふう、これではヴァルムロートが嫁を連れてくるのは絶望的かな。」

「ちょ、父さん!」

「そうね。やっぱり・・・」

「母さん!『やっぱり』って何!?」

こんな感じで今回は賑やか（？）に馬車に揺られた。

家に帰ったら俺はすでに疲れ果てていた。早くアルコールの濃度とかを調べないといけないのになあ・・・。

これはある意味『トロッコ問題』になるんだろうか。（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回のサブタイトルにもなってる『トロッコ問題』は誰かを助けるために他の誰かを犠牲にしてもいいのか？というものです。まあ、皆さん知っていると思いますが。

今回の話の中で主人公はカトレアさんを助ける為に盗賊などの罪人を犠牲にすることに決めましたが、元平和な国日本の一般人にはきつい決断だと思います。書いている私がその立場だと出来るかどうか。

でも相手は元々死刑になる罪人だしこの場合は『トロッコ問題』には当てはまらないと考える人もいるかもしれませんね。

それにハルケギニアは戦争あるし、盗賊討伐とかでは殺しもしかたないって感じでしょうしね。まあ、人間を解剖しようという人はそうそういないと思いますが。

それに原作に入ると戦争の中を生き抜くんだから人を殺さないということは出来ないですよね。でも人を殺すのをこんな形で慣れていく主人公はそういないのでは無いですかね。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

赤くて3倍・・・シャアじゃないよ！（前書き）

こんにちは。こんばんわ。

必殺技開発の話です。

赤くて3倍・・・シャアじゃないよ！

「・・・ふふふ、あーはっはは！出来た！出来たぞ！見よ！我が奥義を！！俺がガンダムだあああ！！！」

もしこの時に俺の様子を見たら頭が可笑しくなったんじゃないか？と思われる位に俺はテンションが上がっていた。

きっかけは数日前いつもの必殺技を考えている時だった。

今回は原点に戻って最初に作った『ビームサーベル』について検討していた。

この『ビームサーベル』は発動している様子は『ブレイド』の魔法に良く似ているが、異なる点がある。

『ブレイド』の攻撃半径は精々1メイル位で威力は肉などの軟らかいものは問題無く切れるが、石などの固いものを切断出来るほどではない。

それに比べて『ビームサーベル』は攻撃半径は最大5メイル位まで（トライアングルランクの今現在）で石などの固いものも切断することが可能だ。俺がこの魔法をあまり使わないようにしているのは『ブレイド』に比べて魔力消費がケタ違いに多いせいとその威力の高さから使う場面が限られるというのがある。討伐などの集団で戦う時に味方を巻き込みそうだしな。

しかし俺はこのとき『ビームサーベル』の威力を全開にして思ったことは、

「これが最大か？あの時はもっと大きいのが出来ていたと思ったけど・・・」

あの時とは、初めてオーク鬼の討伐に行った時のことだ。

俺が九死に一生を得たオーク鬼の上半身を消し去ったあの時のビームサーベルの威力は当時はラインランクだったが、今のトライアングルランクで出しているものより大きかったと思った。

『ビームサーベル』は圧縮して威力を高めるとか、同じ大きさでも質を高めることで威力が上がるとかはないようなので、単純に大きい方が威力が高い。

なので普通は同じ魔法を使った際はランクが高い方が威力も高いはずなんだが、どうも違っているようだ。

「思いで補正か？大きく思っているのは俺の美化させた思い出で実際はもっと小さかったとか？」

思いで補正、良くあることだな。前世の時は昔通っていた小学校に友達と遊びに行った時（校庭でキャッチボールなど）は意外と校舎が小さく思えたものだしな。・・・それはちょっと違うか？まあ、いいか。

「・・・でも森の中でオーク鬼と戦って俺の『ビームサーベル』の光が村の高台から見えたって聞いたから、最低でも森の木よりは大きくなったってことだろ？」

周りの木々を見て大体の高さを算出してみる。

「・・・大体目線を斜め４５度のして目線の先に木の先端が来るようにして・・・俺の身長が１６０サント位だから目の高さは１．５メイルってとこか・・・」

木の周りをうろうろ、後ずさり、後ずさり・・・イテッ！木の根に足引っ掛けた・・・

「・・・よし。木の高さは１５～２０メイル位かな。ということは最低でも２０メイルの大きさになったってことか・・・」

『ビームサーベル』は大きさに比例して魔力消費も大きくなる。だからそれだけの大きさのものだとすぐに魔力切れを起こして直後に倒れてしまったのも当然だったのかもな。

「しかし、今全開でも５メイル位が限界で２０メイルなんて出来ないし、そもそも数秒で魔力を使い切る位のものなんてどうやっても出せないぞ？うーん、なにか特殊な条件が必要なのかな？」

特殊な条件、つまり今は無くてあの時にあったもの・・・

オーク鬼？・・・確かに今ここにはいないがオーク鬼自体が魔力を増大させるとか聞いたことないし、それだったら今頃オーク鬼はメイジに狩りまくられて全滅してるんじゃないのか？・・・オーク鬼はないな。

そう言えばあの時は足を挫いていたな。・・・いや、さすがに検証のためとはいえ自分で足は挫かないよ！まあ、体が傷つくか・・・どうだろう？それだと戦争のたびにそういう体験した人がいそうだけど、どうなんだろうか？あとで父さんにでも聞いてみよう。

あとは命の危険が迫っていたことだな。でもこれは戦争するときも当てはまるな。これも聞いてみるか。

・・・あ、でもここ数十年は戦争らしい戦争は無かったな。まあ、念の為だし、ダメ元で聞いてみよう。

早速父さんに聞いてみた。

「いや、そんな話は聞いたことは無いな。」

「そうですか。・・・残念です。」

「私に挙がってくる話は結果位だから、そういう個々の話が聞きたいのなら、シュバルツに聞いてみたらどうかな？」

「なるほど。そうしてみます。父さん、ありがとうございました。」

「・・・ヴァルムロートは今回は何をしているんだ？また変なことをしているんじゃないだろうか？・・・まあ、変なことと言っても危険なことじゃないだろうし大丈夫だろう。何かあれば言ってくるだろうし。」

兵舎でシュバルツ先生に話を聞いてみた。

「そういう話でしたら聞いたことがありますね。」

「え!?本当ですか!」

「はい。私が直接見たわけで無いのですが、、昔騎士団にいた頃に他の騎士から話を聞きました。」

「どんな話ですか!」

「確か・・・新米のメイジが初陣で敵に囲まれて危ない時に信じられない様な威力の魔法を繰り出して生還したとか、一人では絶対に倒せない様な竜を倒したとか、まあ、その時私は騎士団に入ったばかりで緊張していたのでそういった冗談で緊張を解そうとしたものだと思いますが。」

「なるほど。・・・新米・・・初陣・・・。そういった話で戦闘経験を積んだ人の話は無いのですか?」

「いえ、それは聞いたことはありませんね。」

「・・・経験があると、ない・・・。なるほど。」

「あの、ヴァルムロート様。どうしてこんな話を?」

「いえ、ちょっと参考に。先生、ありがとうございました。」

「いえ、参考になったのなら結構です。・・・参考?」

シュバルツ先生の話と俺の体験の共通点は、ずばり新米メイジで初陣、さらに命の危険があったということかな。

確かにシュバルツ先生にその話をした人は緊張を解そうとして冗談として話したのかにれないが、実際に起こったことが口伝のように伝わった可能性もある。ほら、事実は小説よりも奇なりっていうし。

おそらく新米メイジと初陣のコンボは戦闘に不慣れで戦うことに対して心構えが出来ていないということだろう、その未熟さで命の危険に陥ったことにより軽いパニック状態になりいつもは無意識に制御している魔力を解放した、別に言い方では魔力の暴走か？、ために通常では考えられない威力の魔法が使えたものだと推測する。

戦闘経験があったら命が危険に曝されても、冷静に現在の状況とその時に自分に出来る最善の策を考えてるのでパニック状態にはならないだろうしな。あと経験があると、ある意味で諦めもいいかもしれないしな。

シュバルツ先生の話では魔力切れは起こって無いようだからいきなり魔力切れした俺の魔力が少なかったのか、『ビームサーベル』の魔力消費がでかすぎるのか。

・・・後者だったらいいな。前者だとちょっと凹む。

まあ、その話は置いておいて、極限状態において普段以上の体の働きというのはどこかで聞いたことは無いだろうか、いや、ある！俺も話でしか聞いたことは無いが“火事場の馬鹿力”ってやつだな。

“火事場の馬鹿力”も火事などの極限状態において普段は体に負担がかかるために制御されているのを解放し、１００％の力が出せる

のもだったと思う。

つまりこのハルケギニアでは普段制御されている魔力が極限状態において１００％発揮される可能性があるということか！？

「・・・それなら疑似的に極限状態を作り出せば、簡単にパワーアップが可能ということか。極限状態か・・・どうやって作りだそうか？火事場の馬鹿力っていうし、火に包まれてみるか？・・・あ！魔法を使ったら、他の魔法を使えないかもしれないけど、まあ、とりあえずやってみるか！」

という安易な考えから、体全体を火で包み込んでみた。ちなみに以前ゴットフィンガーをやろうとして散々火を扱ったので、どれくらいなら体が耐えられるかは分かっていた。体に影響が無い位の温度でやってみた。

ちなみにこの状態では火を纏っているといっても体の周りに暖かい空気があるだけで、赤くなったりはしていない。

「うーん・・・ちょっと熱い位だけど、体に変化はないっぽいな。火事場の馬鹿力でもあるから身体能力も上がりそうなんだけど。」

試しに走ってみたが、いつもと変わらなかった。

「これじゃあ、だめか。もうちょっと温度を上げてみるか。はっ！」

体に纏った火の温度が上昇した。体の周りが淡い赤い光に包まれた。

「あつっ！これは温度を上げすぎたか？でも、なんか興奮するっていうか、やる気が出るっていうか。アドレナリンが過剰にで出るの

か!?なんかテンションが上がってくるぜ!」

試しに走ってみると、驚くほど早く走ることが出来た。

「はあ、はあ、はあ、ま、魔法を解除。・・・ふう、なるほど、温度は、あれくらいが、良いのか。」

俺が膝に手を置いて休もうとした瞬間、手の平と膝に激痛が走った。

「いてっ!・・・あ、良く見たら、服や全身の皮膚が軽く焼けてるな。・・・上手に焼けましたーってか、いやいや、これはまずいだろ。」

俺はすぐに携帯していた秘薬（安物）と『ヒーリング』をかけて、全身の軽い火傷を治した。

「ふう、これで大丈夫だろう。・・・でも、服はどうしようもないな。あとで謝ろう。しかし、身体能力は上がったけど毎回火傷してたらダメだよな。・・・そうだ!回復も一緒にやっていけばいいんだ!火の制御にラインスペルを使っているから回復に水を1つ足せるな。火が主になってるから水の回復はそこまで威力が無いかもしれないけどやらないよりはましだろう。」

そして水の回復を加えてやってみた。

「・・・おお!体が焼けて無い!これならいけるぞ!次はこの状態で魔法が使えるかどうかだな。」

魔法を使うのはイメージが大切だ。その点俺は転生者なので他の人よりイメージしやすい点で有利だ。

「イメージするのは常に最強の自分だ。・・・って、これは違うか。」

イメージするのはある言葉で全身が赤くなって性能が3倍になるガンダム達だ。あ、トランザム特攻ではないぞ！

「イメージはデュナメスで、目標を狙い撃つ！『ファイアーボール』」

すると、俺のかざした杖の前に通常の倍以上の大きさの火球が形成され、飛んでいった。爆発音がするといけないと思ったので、空に向けて放ったが、これを地面に向けていたらどれほどの威力だっただろうか。

「はあ、はあ、出来た！あ、あれ？」

俺が魔法が出たことに喜んでいるのもつかの間、魔法は勝手に解除されてしまった。

「はあ、はあ、ど、どうしたんだ？魔法が勝手に、はあ、解除されたぞ？ま、まだ魔力には余力が・・・いや、結構厳しいか。はあ、はあ、もしかして疑似的な極限状態だから、はあ、倒れる寸前だから無意識に強制的、ストップをかけたのか？」

俺はかなり魔力を消耗していた。もうファイアーボールですら1発打つ程の魔力もない。

「帰って、夕飯まで部屋で休もう。」

俺は部屋に戻って、ベットに横になって考えていた。

「とりあえず疑似的に極限状態を作り、そのお陰で身体能力の向上と魔法の威力、はまだみてないけどおそらくこれも向上しているだろう。それにしてもこれほどまでに疲れるとは思わなかったけど。」

「しかし、『ファイアーボール』１発でこれほどまでに疲れるのか？いくら極限状態で放ったからと言っても、ドットスペルだぜ？・・・そういえば、放つ前から魔力を消費し続けていたような・・・いや、そうだな。魔法を使用しているのに他の魔法が使えると言うことはこれは“独立依存型の魔法”か。」

“独立依存型の魔法”とは使用中に魔力を消費するが、同時に他の魔法を使えると言うかなり便利な魔法の分類だ。（まあ、俺が勝手に分類しただけだが）

「魔法を発動して、自分でボケて突っ込みして、イメージして『ファイアーボール』を放つのに約１０秒ちょっとか。結構、いやかなり短いな。その後にこの魔力の消耗具合か。・・・短期決戦用だな。」

・・・短期すぎるけど。

「明日はもうちょっとちゃんとどれくらい身体能力や魔法がパワーアップしたかを確かめてみよう。」

夕飯まではまだ時間がある。

「少し寝るか。・・・あ！まだ名前を付けて無かったな。もちろん

名前は『トランザム』だ！」

次の日から少しづつ『トランザム』の出来ることを確認していった。

なぜ『少しづつ』なのかというと、限界までやるとふらふらになって魔法や剣術の訓練に差支えるからだ。昨日は虚無の日だから無理出来たんだけどな。

で、確認したことをは次のようなことだ。

身体能力の向上について

足の速さはなんと５０メイルを４秒位で走れるようになった。普段は６秒位。

腕力も普段は持ち上げられない大きな石を持ち上げられるようになった。

ジャンプ力も普段より２倍位になった。

魔法の向上について

魔法は試してみると『コンデンセイション』などの魔法の溜め時間が大幅に短縮されて、さらに見た目の大きさが約２倍、これにより体積はおそらく３～４倍になり、威力もそれ相応になった。一度大きな音（爆発音）を立てて慌てて使用人が様子を見に来たことがあ

った。

『ビームサーベル』も威力が向上した。普段は全開でも５メイルが限度だが、『トランザム』状態では普通にやってもなんと！１５メイル位になった。しかしその後の疲労が半端ないことに・・・。今回は全開ではやっていないが、全開ではどれほどの大きさになるだろうか。楽しみだ。

今回の大きな収穫は『フライ』だ。普段は走るのと同じ位で５０メイルを６秒位つまり時速約３０リーグなのだが、『トランザム』状態ではなんと！５０メイルを２秒弱！つまり時速に直すと時速約１００リーグ（つまり１００ｋｍ／ｈ）になるのだ！

正直これには俺も驚いた。はっきり言ってこれはハルケギニアにいるどの生物よりも速いんじゃないか！

・・・いや、言い過ぎた。

地球でもこれより速い生物はいたわ、隼とか。だからこのハルケギニアでも時速１００リーグより早く動く生き物はいるだろう。

あ、生き物じゃないけど、零戦があったな。あれってどれくらいの速度が出るんだ？まあ、飛行機だし１００ｋｍ／ｈよりは速いだろうな。

・・・あ、それにジョゼフが使う『加速』の虚無魔法はどれくらい速いんだ？もし『トランザム』より速かったら使われたら終わりだな。なにか対策を考えておかないと。

まとめると、身体能力は約2倍、魔法は約3倍向上したようだ。
ここまでは『トランザム』におけるメリットの話だった。

そしてここからは『トランザム』のデメリットの話だ。

まず身体能力が向上するのは好ましいが、普段なぜ体は１００％の力を出していないのかを考えれば、体におけるデメリットはすぐに分かる。

それは筋肉や骨、関節にダメージがいかないようにしているためだ。『トランザム』を使って体を動かした後の筋肉はかなりのダメージを受けていて、軽い時は酷い筋肉痛、重い時は肉離れを起こし、骨に至ってはいままでに骨折は無いものの走ったりすると足の骨にひびが入り、普段持てない様な重いものを持てば関節を痛めるなどがあった。

『トランザム』の時は常に回復が行われているとはいえ、それは表面の火傷の回復で精一杯で内部の筋肉などの回復までは出来ていない。

そしてこれももっとも厄介なのは『トランザム』発動中だと痛みがほとんど無いということだ。これのせいで『トランザム』が切れた後に激痛に見舞われることも多々あった。なんとか回復したが。

次に魔法に関してだが、『トランザム』は独立依存型の魔法だ。つ

まり発動中は常に魔力を消費し続けている。しかもトライアングルランクの俺の魔力であっても今は１０秒そこらで限界になる。これは動いていなくても１０秒だ。

でもこれで魔法を使うともっと短くなるんじゃないかと思ったが、どうかな？俺の感覚だと『トランザム』状態では他の魔法も軒並み消費魔力が上がっているようだし、おそらく短くなるだろうが、どれくらい短くなるかは分からない。

今回は確認のために他の魔法を発動する数秒しか『トランザム』を使っていないので分からない、というのが本音だ。そもそも１０秒って分母が小さいしな。

最後にさっきも考えたことだが、とにかく発動時間が短い！

たった１０秒そこらってお前戦いをなめてるだろ！とか言われそうだな。決闘とかだったら一瞬で勝負が決まりそうだからいけそうだけど、戦争とかになったら無理だな。普通に魔法使ってる方が生存率が高そうだな。

あと『トランザム』の後が隙だらけになるのも問題だな。体にダメージがあって満足に動けず、魔力もドットスペルすら唱えられないくらいまで消耗するとか、どんだけだよ！

こうして『トランザム』のメリットとデメリットを比べると、戦闘スキルとしてはデメリットの方が大きいかもな。でもリスクがでかい分だけリターンも大きいけどな。

『トランザム』は必殺技だ。

・・・必殺技、つまり“必ず殺す技”だ。ここぞ！という時だけ使うことにしよう。

それにデメリットもメイジのランクが上がればある程度は改善するかも知れないし、とりあえずスクウェアになったらもう１つ水を付けて、今度は体の中を回復させるようにしよう。

これで『トランザム』がどういう効果を持っているかを知ることが出来て、これで一応の完成としよう。

じゃあ、完成の記念にいままで抑えていた欲望を解き放つか。

「いくぞ！・・・『トランザム』！！」

俺の体を淡い赤色の光が包み込んでいる。

「・・・ふふふ、あーはっはは！出来た！出来たぞ！見よ！我が奥義を！！俺がガンダムだあああ！！！」

「・・・あれは、ダーリン、よね？・・・な、なにか叫んでいるみたいだけど、ストレスでも溜まっていたのかしら？・・・ま、まあ、ここは見なかったことにしておくのが優しさよね・・・」

キュルケは見なかったことに決めてその場を去った。そういえばヴァルムロートがちょっと赤かったようだと思ったが、振り向かなかった。

赤くて3倍・・・シャアじゃないよ！（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

強化魔法の『トランザム』の完成です。赤くなって、能力が向上します。

私は魔法の元はほとんどガンダムなどのロボット系から持ってきているので、これは決して『界王拳』から取ってきたのではありません。

まあ、『トランザム』の元ネタはおそらく『界王拳』でしょうが・・・

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

ペストを媒介するのは実際にはノミ、ネズミはノミの運び役（前書き）

こんにちは。こんばんは。

カトレアさん治療の下準備の話で消毒用アルコール作成が主です。

ペストを媒介するのは実際にはノミ、ネズミはノミの運び役

「ふう、これで中にはなにも残ってないかな。」

俺は家の魔法練習場の隅にある小屋にいた。

目の前のこの小屋は用事が終わったのでもうすぐ焼き払って、最後は錬金で土に返してもらう予定だ。残しておいたら危ないかもしれないし。

「まあ、必要になったらまた建ててもらえばいいよな。」

小屋はワインを蒸留して得られた約９６％のアルコールを希釈して消毒用アルコールを得るための動物実験用に建ててもらった。

小屋の中には2つの部屋があり、扉を入ったすぐの部屋には手洗い場（桶が置いてあるだけ）と机が置いてあり、その奥の部屋は実験動物の飼育室になっている。

俺はアルコールが届いた時点（カトレアさんの誕生会直前）で次のような御触れ（？）を家に近い町に出していた。それは、

“ネズミを生きたまま持ってきた者には5匹につき銅貨1枚を与える。期限は9日後の次のオセルの曜日まで、もしくはネズミが５０

０匹集まるまでなので、お早めに。

ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー”

期限を９日後としたのはカトレアさんの誕生会に行って戻る時間（行くのに４日、そのまま誕生会に参加して、１泊して、昼から帰って家に着くのが４日後で合計８日）を考慮したもので、５００匹は集められたネズミに怪我や病気、年老いたものを省いたら、半分位になるかなと思ったからだ。

ネズミ５匹で銅貨１枚だから集まるかどうか心配だったんだけど、初めて３日目で規定数に達したようだった。普段害にしかならないネズミが金になったから住民の人達は張り切ったんだろうな。

しかし、思ったより集まるのが早かったのでネズミだけの状態で６日間、餌もある程度渡していたが大量にネズミが入っていることからくるストレスや餌が行き届かないことから共食いなどがあり、５００匹いたはずのネズミは俺が見た時は３００匹位になっていた。

そして俺がその様子を見て初めに思ったことは、

ネズミが大きい！だった。

俺が想像していたネズミは良く実験とかで使われる様なハツカネズミ（小さくて可愛い）だったのだが、実際にいたのはクマネズミやドブネズミのような大きなもの（でかくて可愛くない）がほとんど

だった。

まあ、特に問題はないので残ったネズミの仕分け作業を行った。

しかし、ここで注意しなければいけないことが1つある。これは地球での場合なのだが、中世ヨーロッパにおいて猛威を振るった黒死病、つまり“ペスト”に気をつけなくてはいけない。ツェルプスト一領内の町で死人が大量に出たという話は聞いていないが、念には念を入れておかないとな。こんなところで死にたくは無いし。

そこで顔は口と鼻をマスクの代わりに布で覆って、服の上にも布を纏い、さらにネズミの入った箱から少し距離を取って、『念力』で1匹ずつネズミを掴み、『ディテクトマジック』を使ってネズミの健康状態を大まかに診ていった。

ノミ位なら『念力』で潰せるので地道に潰していった。ペストになりたくないしな。

家のメイジにも声をかけて作業した（さすがにキュルケや母さん達には手伝ってもらわなかった）のだが、３００匹はやっぱり多かったようでかなり時間がかかった。

この仕分けで３００匹位いたネズミは１５０匹位になった。

それで大きいネズミは2匹ずつ、小さめのネズミは3匹ずつ個別に飼育箱に入れていった。飼育箱は６９箱になった。（大きいのが１０１匹で５１箱、小さいのが５３匹で１８箱）

これでやっと準備が整ったので、早速やってみることにした。

やり方は簡単でネズミ５匹で１グループとし、ネズミの体の側面の毛をあらかじめ剃っておいて、そこに擦り傷を付けて、そこから・・・

?:そのまま放置するグループ

?:約９６％アルコールの原液で毎日消毒するグループ

?:約９０％に希釈したアルコールで毎日消毒するグループ

以下アルコールの濃度は?:８０％、?:７０％、?:６０％、?:５０％、?:４０％、?:５０％、?:４０％、?:３０％、?:２０％、?:１０％

?:ただの水で同様の操作を行ったグループ

?:コントロールとして傷付けずにそのまま消毒も何もしないグループ

以上の操作を行ったネズミを１０日間飼育し、その経過を見た。

その結果、?:は問題無く全匹元気で生きている。

?:のグループは怪我が治るのが普通もしくは遅いくらいかと思っていたのだが、飼育室の衛生状況が悪いのかどうかわからないが怪我は酷いものになっていた。

で、アルコールで消毒したグループはどうかというと、?:より断然

良かった。グループによってはほとんど傷が治っていたグループがあった。

そのグループは？８０％と？７０％だった。

アルコール濃度が濃い？や？などは逆に傷口の皮膚が傷ついていたようだった。

？のただの水は？よりは酷くは無かったが、やはり治りが遅いように思えた。

これらの結果から、消毒用アルコールにはアルコール濃度が８０％～７０％位がいいことが分かった。

今回の実験では７０匹のネズミを使った。しかし、後８４匹のネズミがいる。

そこで俺は残りのネズミを使って解剖や肺の機能を知ること、どれくらいなら肺を摘出していいのかを調べることにした。

ネズミを使って人体実験のプレ実験をしてみようと考えたわけだ。

まずは解剖などをして肺の機能を簡単に知ろう。

肺は胸の中の肋骨などに囲まれた空間にあるわけだが、そこにぴっ

たりくっついているわけではない。まあ、これは『ディテクトマジック』をすれば分かるのだが。

そして普通の状態の肺が空気が入った風船とすると、解剖して胸を開いたとたんに肺がまるで風船がしぼむ様に小さくなってしまう。

さらにこのまま胸を閉じても肺は元通りの大きさに戻らなかった。この状態のネズミは息が苦しそうで、運動能力や持久力などが極端に低下し、死んでしまった。

しかしその状態で胸に少し穴を開けてやると肺は大きくなることが分かった。ネズミの状態も普通に近づいた。

そういえば、肺が機能するためには陰圧にする必要があるとか習ったことがある気がする。もちろん前世の話だ。

人体実験で胸を開けた後に肺と胸の間の空気をどうにかしてなくさないといけないな。

次にどれくらいなら肺を摘出しても生きられるかを試してみた。

ネズミの肺は左が1つ、右が4つに分かれている。ちなみに人間は左が2つ、右が3つだ。

まず左の肺を摘出した。すると多少運動機能が落ちるようだが問題なく生きられるようだ。

次に右肺を1つから4つそれぞれ摘出してみた。すると、3つ以上肺を摘出した場合心臓が少し大きくなるようだ。肺を半分以上摘出

したものは取り入れる酸素が少なりその分心臓に負担が掛かるみたいだ。

他にもどれだけ血を抜いたら死ぬかなどを試した。

そうしていくうちに全てのネズミを使い切った。

今回知りたいことはもう試したので追加で御触れを出すことはしなかった。

実験で殺してしまったネズミはさすがに食べることは躊躇われたので焼却処分させてもらった。

「次は人体実験だな。・・・ヴァリエール公爵様から連絡はまだ無いな。」

ちょっと・・・いや、かなりドキドキする。

ペストを媒介するのは実際にはノミ、ネズミはノミの運び役（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

今回消毒用アルコール作成だけのつもりでしたが、すこし蛇足を足してしまいましたね。

しかしネズミを集める為に御触れを出すとか、周りから見たら主人公は変人以外の何者でもないですね（笑）

ご意見・ご感想よろしければお願いします。

銃く魔法の世界　ハルケギニア（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は討伐受注って感じの話です。

トランザムで顔まで火で覆うと大変なんじゃないか？という意見があったので、顔といか頭は覆っていないという描写をこの話で補足しておきます。

「『トランザム』！」

体が淡い赤い光に包まれる。

・・・あ、そうそう。体は炎に包まれているが、首から上は炎に包まれてないよ。さすがに顔まで炎に包んだら息する時に熱風を肺に取り込んで大変なことになるからな。最初からそうなってたのは無意識のうちに危険だと思ってたからなのかな。

家の近くにある林の中を縦横無尽に動き回ってみる。最初はなかなか速さに慣れなくてゆっくり（それでも『トランザム』を使っているのでそこそこ速い）動いていたが、いまでは高速で動いても大丈夫な位になった。

「・・・はあ、はあ、はあ。・・・良し、そこそこ動いても体があまり痛く無くなったな。全力で動くと体が痛くなるけど、体の力の上手い抜き方が分かってきたな。」

まあ、力の抜き方というか力の入れ方というか、例えるならば、そうだな・・・座っている状態から立つ時に地面に手をつける補助動作をいままでは思いっきり地面を叩くように手をついていたのを訓練により一旦地面に手をついてから力を入れる位になった感じかな。

ちょっと体に優しくなった感じだな。

ただ魔力を使いきるまで『トランザム』状態でいると精神的に疲れて他に何も出来なくなるので練習出来るのは５秒位だ。だから１０

秒位までやるとまた違ってくるんだろうけど。

ちなみに今『トランザム』が終わった状態で軽い筋肉痛のような感じで体全体がだるいが、頑張ればまだ普通に動くことが出来る。

「・・・まあ、このままにしておくと明日は酷い筋肉痛になるんだけどな。安い秘薬を使って・・・『ヒーリング』」

回復魔法を体にかけると体のだるさが和らいだ。

「・・・これで風呂があれば完璧なんだがな。」

トランザムの特訓から帰ってきて部屋で夕飯まで魔法に関する本を読んでいたら父さんに呼ばれた。

書斎に行くとそこには父さんがいて、キュルケもいた。

「父さん、どうしたんですか?」

「そうよ、お父様。私達に話って何ですか?」

「うむ。・・・ヴァルムロート、キュルケ。明日討伐に向かうので付いてきなさい。」

「ああ、そういうことですか。分かりました。行かせていただきます。」

「私もダーリンが行くなら一緒に行くわ。」

父さんは俺達の返事に満足しているように見えるが、キュルケが返事した瞬間に少しだけ苦笑いのような表情をしたがすぐに真面目な顔になった。まあ、キュルケの返事の仕方は確かに苦笑いしたくなるものかもな。

「・・・ああ、お前達ならそう言うと思っていた。ただ今回はいつもの討伐とは少し違うから心しておきなさい。」

「お父様、それってどういうことですか？」

（いつものオーク鬼とかじゃないってことか？）

「・・・父さん、今回の討伐目的は何ですか？」

「今回討伐するのは“ワイバーン”だ。オーク鬼などより危険度ははるかに上だ。」

（竜種か・・・）

「・・・ワイバーンですか。」

「ワイバーンって家の兵士が乗っている竜ですよね。見た感じではそこまで危険じゃないようですけど？・・・まあ、飛ばれたら厄介ですけど。」

「確かに私達が普段目にしているワイバーンは一般的には命令をされない限り人に危害を加えるものはほとんどいない。しかし、それは人間に従っているからだ。」

「つまり、野生のものは危険だと？」

「そうだ。ワイバーンを従えているのは基本的に人が乗るためだが、人が乗ることでワイバーンは本来持っている能力をある程度押さえている。しかし、野生のものにはそれがなく、持てる力全てを使ってくるから危険なんだ。」

「どうして人が乗ると本来の力を全て出しきれないの？」

「それはだな・・・ヴァルムロート、お前はなぜか分かるか？」

「そうですね・・・基本は人に従っているのでその乗っている人がうまく扱えないのか、それともワイバーンの攻撃や機動性などがワイバーン自体は耐えられるけど人が耐えられないので力を抑えている、ですかね？」

「うむ、半分位正解だな。確かに前者では乗る者が未熟ではそもそもダメだ。しかし後者のものではワイバーンのブレスは他の竜種に比べると威力は落ちるがそれでも強いことに変わりないが、魔法を使えば耐えれないことは無い。また全力で動くとワイバーンの体が激しく上下するので乗っている者にとっては最悪だろうが、それも慣れることは出来る。・・・まあ、ワイバーンに乗る者でその能力を全て引き出せる者は騎士でもそういないがな。」

「なるほど。」

「惜しかったわね。ダーリン。」

「これでワイバーンを甘く見ていると痛い目に会うことが分かっただろう。それに野生では群れで行動しているものがほとんどだから

な。1匹だけに集中できないのも魔法を使う者にとっては脅威となる。」

「・・・そうですわね。ん?魔法に集中できないって今回前衛はいないのですか?」

「いや、いるぞ。だたし今回は全てメイジだがな。今回の前衛はワイバーンに乗れるもので行う。もちろんお前達は後衛だがな。」

「ワイバーンにはワイバーンということですね。でも全てメイジってどういうことですか?平民出の兵士は?」

「平民出の兵士は連れて行かないぞ。さっきキュルケも言っただろ、『飛ばれたら厄介』と。」

「ええ、そう言いましたわね。・・・つまり飛ばれると魔法が使えない者では手も足も出ないということですか?」

「そういうことだ。わざわざ犠牲を出すこともないだろう。」

「でも父さん、弓なら対抗出来るのではないですか?」

「確かに兵士には弓を得意とするものもいるがワイバーンの体は矢を通さないほどに強いものだからな。居ても足手まといになるのが目に見えている。」

「そうですか。・・・あ!では銃はどうですか?」

「銃って、ダーリンあれはおもちゃみたいなものよ?」

「そうなのか？」

「銃か・・・あれは弓とそう大差ないな。そしてなにより武器として問題がある。」

「え？問題って何ですか？」

「なかなか狙った所に弾が飛んで行かないのだ。１０メイル位だったらまだましなのだが、それ以上になると全然ダメだ。下手をすると味方に当たる可能性もあるからな。」

「え！？それは危険なものですね。」

「それにね、ダーリン。銃の弾なんて魔法で簡単に防げるのよ。火は弾を溶かし、水は弾を止めて、風は弾を反らし、土は弾を弾くのよ。」

「・・・そこまで銃は弱いのか。いや、魔法が強すぎるのか？」

「それは魔法が強いのよ。もし銃の方が魔法より強かったら今頃トリステインは無くなってるかもしれないわね。」

「そうだな。ゲルマニアでは金さえあれば平民でも貴族になれるので平民の価値が見直されてきているが、トリステインでは平民は貴族の所有物であり、奴隷のように扱っているところも多いと聞く。・・・まあ、ヴァリエールのところは違うようだが。そんな平民に魔法より強いものがあったならば最初に貴族主義がなくなるのはトリステインかもしれんな。」

「平民が力を得れば貴族主義が崩壊し国を滅ぼすか・・・」

「そうなったら、他の国もただでは済まないだけでなく、統治者がいなくなった国は荒廃していくだけになるだろう。」

（このハルケギニアに民主主義みたいなものはないだろうし、平民同士の弱肉強食が始まってカオスになるってことかな。）

「・・・まあ、そうなる、ですかね。・・・ちなみに家に銃ってありますか？参考程度に見てみたいのですが。」

「銃か？そうだな・・・以前兵士の攻撃力増強の一環として銃を購入したことがあったはずだ。まあ、さっき言った理由から使うことはほとんどないがな。シュバルツに聞けば今どこにあるかわかるだろう。」

「分かりました。今度聞いてみます。」

「ねえ、ダーリン。銃なんて使うより魔法を使った方が強力だし確実よ？」

「その通りだろな。・・・まあ、見てみるだけだよ。」

「見るだけ無駄だと思うのよね。」

確かに時間の無駄かもしれない。でもこのハルケギニアの銃のレベルはどれほどのものかをちょっと見ておきたいんだよね。

今回は本当に見るだけで改良して威力、射程、命中率を上げるとかは出来ないと思うんだよね。俺前世ではロボットものは好きだけどミリオタとかじゃないし。

魔法至上主義のハルケギニアで自力で銃のレベルが上がることはほとんどないと思うけど、異世界から来るものや竜の羽衣、別名零戦があるからな。それらを解析したら一気に近代兵器並のものが出来るかな？

・・・あ！そう言えば、俺はゼロ魔の知識はアニメだけで原作は読んでなくてネットで見たり、ウィキみたりしただけなんだけど・・・確か戦車もあるんだよな・・・

「では、明日の昼には出発するからそれまでにちゃんと準備をしておけよ。」

「「はい！」」

「ワイバーンか、どれくらい強いのか。・・・どきどき6割、わくわく1割、不安3割ってとこかな。」

「ダーリン！そんなことでどうするの！ダーリンなら大丈夫だからしゃきっとしないとダメよ。・・・でも、無理はしないでね。」

「ああ、ありがとう、キュルケ。」

（もしかしたら『トランザム』を使うこともあるかも知れないな。）

銃く魔法の世界　ハルケギニア（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

原作でも銃（ハルケギニア製）より魔法の方が断然に強い設定だったと思いますが、私は基本アニメしか見て無いし、見たのもずいぶん前なのでどれくらい差があったか覚えていません。・・・もしかしたらそんな描写はなかった？
まあ、アニエスとその部下しか使って無かったと思いますし。

あと、主人公は銃は携帯しません。理由は銃と切り札の相性が最悪だからです。

ご意見・ご感想があればよろしくお願いします。

日本の独自の遊びっぽいけど違ったモノ（前書き）

こんにちは。こんばんは。

ワイバーン討伐の中継地点です。長くなってきたので分割しました。

・・・無駄話が多かったのか？

日本の独自の遊びっぽいけど違ったモノ

次の日、早速ワイバーンが出た所に向かって出発した。

「父さん、目的地まではどれくらいの時間がかかるんですか？」

「ん？教えていなかったか？」

「ええ、教えてもらっていませんわよ。お父様。」

「そうだったか。途中の町で1泊して次の日の昼には着くだろう。」

「父さん、いままで家の領でワイバーンなんて出たことあったのですか？」

「ああ、家の領地にもワイバーンはいるぞ。ただ普段は山や森の奥に方にいてめったに村の近くまではこないのだが・・・しかも今回は群れでやってきている。何かあるのかもしれんな。」

「お父様、何かって何でしょうか？」

「私にもわからんな。ワイバーンなどの竜種はそのテリトリーに入らなければほとんど襲ってくることはないのだがな。それがあちらからやってくるとは・・・」

（縄張りとか、その辺は竜種でも野生動物って感じだな。）

「もしかしたら別のワイバーンの群れとテリトリーを争って負けたのでやってきたのかもしれないですね。」

「ふふ、弱い群れかもしれないってことね。」

「・・・そうだといいのだがな。」

「まあ、楽観視は危険ですし、気を引き締めていきましょう。」

「そうね。」

「そうだな。」

中継地点の町に着いた。そこそこの大きさの町だ。

・・・とはいっても“ハルケギニアにおいて”そこそこ大きな町だ。現代の日本と比べてはいけない。

キュルケは女性のメイジと一緒に町に繰り出していった。俺も誘われたが大勢の女性の中に男が1人とか罰ゲームに近いものがあるし、そもそも女性の買い物は長いので付き合うのがとても大変だ。

・・・と、上記の理由から俺は遠慮させてもらった。それに俺にも用事があるし。

俺は家のワイバーンが繋いである小屋に行った。

そこでは数人のメイジがワイバーンの世話をしている。

「ブルーダー先生、今いいですか?」

「これはヴァルムロート様、すぐに終わらせますので少しお待ちください。」

「いえ、外で待っているのでしっかりワイバーンの世話をしてあげて下さい。明日は頑張ってもらわないといけないですからね。」

「はい。分かりました。お前達もいつも以上に世話をしてやれ！」

「「「はっ！了解しました！」」」

「・・・いや・・・まあ、いいか。それでは外にいるので終わったら出てきてください。」

「はい！分かりました！」

・・・１０分経過・・・

「この町も家の外に糞尿を捨ててるのか。メインロードは広くて風が通る分まだましだが、１つ通りを外れると・・・やっぱりかなりキツイな。」

・・・３０分経過・・・

「・・・まだ終わらないのか。早く終わらないかな?でも俺が言っちゃたから、いまさら早くしろとか言えないしな。待つか・・・」

・・・１時間経過・・・

「暇すぎる・・・俺も買い物について行けばよかったかも・・・。」

すこし離れた所で子供が数人でなにやら遊んでいる。

「何やってんだろ?」

俺はその子供達に近づいて行った。何かを地面に投げているようだ。

「なあ、何やってるんだ?」

「なんだよ?・・・げえ、こいつ貴族だぞ!」

「き、貴族が何の用だ・・・ですか?」

「あわわわ・・・」

「どうしよ、どうしよ・・・」

「そんなに怖がらないでくれ。何やってるか気になっただけだから。」

「これ、やってたんだよ・・・」

リーダー格の少年が遊んでいたものを手にとって見せてくれた。

それは丸っこい円錐の胴体をしていて、その円錐の先の方にも短い棒が付いている木で出来たものだった。

(え!?)

「これって・・・コマか?」

どうやら子供達がやっていたのはコマだったようだ。

しかしコマって日本のものではなかったのか?それともハルケギニアだからか?もしかしたらコマって世界中にあったのかも知れないな。今の俺には知る術はないけど。

遊び方はコマを地面で回して、最後まで回っていた人のコマが勝ちというものらしい。ベイブレードみたいに戦わせるわけじゃないのか。

「なるほど・・・なあ、俺にもやらせてくれないかな?」

「え!?貴族なら金で買えばいいだろ?あそこで売ってるぜ。」

「そうか。ちょっと買ってくる。」

コマを買ってすぐに戻り、遊びに混じった。

最初は貴族である俺に遠慮してぎこちなかったが、一緒に遊んでいるうちにすぐに仲良くなった。

遊んでいるうちに俺は教科書とかの挿絵で見たコマのあるものを思い出した。

「・・・そうだ!お前らちょっと待ってろ。」

俺は雑貨屋で桶と安い布と紐を買った。

そして俺は桶の上に布を被せ、周りを紐でくくって、最後に布を押さえてくぼみを作った。

「にーちゃん、これでなにをやるんだよ？」

「なに、これ？」

「これはな、コマを戦わせる土俵だ！」

「「「「どひょう？」」」」

「土俵っていうのは、まあ、場所のことだな。ここでコマを回すとコマ同士がぶつかり合って戦わせることが出来るんだ！」

「おお！すごいな、さすが貴族！」

「ふ、まあな。さっそくやってみようぜ！」

「おう！」

俺が作ったコマの土俵はなかなかの評価だ。みんな楽しそうに遊んでいる。もちろん俺も楽しく遊んでいるぞ。

「・・・ヴァルムロート様、何をしているのですか？」

「あ、先生。もうワイバーンの世話は終わったのですか？」

「はい。」

「そうですか。・・・じゃあ、お前ら俺はこれで失礼するぜ。」

「え、もう行っちゃうのかよ。これ、どうすんだ？」

「土俵はお前らにやるよ。あ、貴族がみんな俺みたいだと思うなよ。俺は貴族でも変わり者だからな。貴族にはちゃんと接しろよ。」

「・・・そんなの初めから分かってるよ。にーちゃんが変わってるってことぐらい。」

「分かってたのかよ。それじゃ、バイバイ！」

「「「「バイバイ～！貴族のにーちゃん！」」」」

「ヴァルムロート様、先ほどの子供達はなんですか？」

「ああ、コマ遊びやってたから混ぜてもらったのですよ。」

「・・・そうですか。お待たせしたようですみません。」

「いえいえ、お陰で楽しく過ごせましたよ。」

「それでお話とは何でしょうか？」

「はい、父に聞いたのですが、家にも銃があるそうですね。管理は先生がしていると聞いたので。」

「確かに銃は兵舎の倉庫に保管してありますが、どうするのですか

？」

「ちょっと銃を見せて欲しいな、と思いまして。」

「まあ、見せるくらいならいいですけど・・・はっ！もしかして、使おうなどとは考えていませんか？」

「いえ、考えてませんよ。見せてもらうだけです。」

「・・・本当ですね。」

「ええ、本当です。」

「・・・分かりました。それでしたらヴァルムロート様とキュルケ様の誕生会の後にお見せできるように手配しておきましょう。」

「・・・たんじょうかい？」

「ええ、討伐から帰ったらすぐに誕生会ですよ。・・・ご自身の誕生日を忘れてましたね。」

「あはは・・・」

「はあ、ではそのように手配しておきますから、準備が出来たらお呼びします。」

「よろしくお願いします。」

「しかし、それ位の話でしたら先ほど来られた時にされたら良かったのではないですか？」

「・・・あ！・・・そう、でしたね。」

確かにブルーダー先生が言うとおりでさっき言っておけば、外でこんなに待つことはなかった。

が、そのおかけで久しぶりに童心に戻れたような気がするので良しとしよう。

日本の独自の遊びっぽいけど違ったモノ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

子供の遊びは中世ヨーロッパの遊びを例にしました。
他にもお手玉とかシャボン玉で遊ぶこともあったみたいですね。

ワイバーン討伐は本当なら導入から終わりまでで1話と思っていたのですが、書いていると思ったよりもかなり多くなってきますね。
なんか私は話が横道にそれることが多々あるみたいです。

次でワイバーン討伐の話は終わりです。おそらく更新は来週の火曜か水曜です。お盆ですからね。

ご意見・ご感想があれば、よかったら書いてください。

ワイバーン討伐作戦（前書き）

こんにちは。こんばんわ。

これでワイバーン討伐の話も終わりです。・・・なんか長かった。

ワイバーン討伐作戦

町で1泊して、翌朝出発した。そして夕方に目的の村に着いた。

「着いたわね。」

「ここにワイバーンが出るのか。」

「いや、ワイバーンが出るのは近くの森だぞ。しかし安心は出来ないかもしれないが。」

父さんが馬車から降りると一人の老人が走ってきた。

「おお！ツェルプストー様自ら来られるとはありがとうございます！ありがとうございます！」

「村長ではないか。明日に向けて作戦会議をしたいのだが、この村には宿がないようだから大きい部屋がある家に案内してくれ。」

「はい！それでしたら私の家にどうぞ！」

「うむ。シュバルツ、いくぞ！メイジも何人か来い！」

「「「「はっ！」」」」

「ヴァルムロートとキュルケも一緒に来なさい。勉強になるだろう。」

「「はい！」」

「では、村長案内を頼む。」

「はい！こちらになります！」

俺とキュルケ、父さん、ブルーダー先生、レイルド先生を含めた数人のメイジで村長の家に行った。

家の応接間で簡単な地図（本当に簡単で村の位置とか森とかが大雑把に描いてあるもの）を中央に広げて、作戦会議が始まった。

「村長、ワイバーンの被害はどんなものだ？」

「はい。森に狩りや山菜を取りに入った村の者が５人ワイバーンに襲われました。運よく生きて戻れた者の話によると、ワイバーンの群れはかなり大きな群れだそうです。これ以降は怖くて森に入れず、村の者は迷惑しております。いままでもワイバーンを見かけることはあったのですが、それは森の深い場所でほとんど単体で飛んでいるところでした。しかし今回は比較的森の浅い場所しかも群れに被害にあったため、ワイバーンが村に来るかもしれないと、夜も眠れない状態が続いています。」

「そうか。事態は思ったよりも悪い様だ。しかしまだ村自体に直接被害が出ていないことが不幸中の幸いというべきか、早急にこれを排除するぞ。」

「「「「はっ！」」」」

「村長、話では森のこの辺でワイバーンに遭遇したのだな。」
父さんが地図の森の部分の比較的に出口に近い所辺を指差しながら聞いている。
「はい。そうだと聞いております。」
「この辺でワイバーンを見かけたということはどこのあたりにワイバーンの寝床があるだろか?シュバルツ、お前の考えを聞かせてくれ。」
「はっ!このあたりがワイバーンの狩り場だとすると・・・このすこし森を入ったこの場所
に寝床を構えていると考えられます。」
「ふむ。その根拠は?」
「はい。この場所は狩り場から適度に離れており、さらに近くに水場があります。本来なら洞窟などがあればそこなのでしょうが、この近くにはそう言ったものがありません。このことからこの場所だと考えました。」
「なるほど。ではまず『遠見』が出来るものにその場所の周囲を探らせよう。だれか『遠見』が出来る者はいるか?」
「はっ!その役目は私が。」
「レイルドか。よし、お前に任せる。」
「はっ!」

「部隊を地上組と空組に分ける。地上組は歩きで近づき、地上から魔法を使う、まあ、ワイバーンに乗っていないメイジ達の部隊だな。空組はワイバーンに乗って空から魔法を使う部隊だ。ヴァルムロート、キュルケ、お前達は私と一緒に地上組だ。いいな。」

「「はい！」」

「群れの位置と大きさを確認したところで近くまでは竜籠で向かい、その位置で空組は待機、地上組は歩いてワイバーンの群れに近づき、まだ寝ているワイバーンに先制攻撃を仕掛ける。この攻撃で倒せなかったワイバーンが飛び上がって、地上組からでは攻撃が当てにくいだろう。そこで空組が攻撃しつつ、ワイバーンの動きを制限すれば、地上組の攻撃も当たるだろう。これでワイバーンを殲滅する！なにか意見がある者はいるか？」

「あの・・・父上、急いでいるなら今から討伐に向かう方がいいのではないのですか？」

「いや、今日はもう日が沈む。ワイバーンは夜は寝ているが、こちらのワイバーンも夜の活動は制限される。兵達も疲れているだろうから、一晩休んで万全の体制で討伐に取りかかりたいからな。それに夜の森はそれだけで危険だ。よって討伐は夜明けを待って行う。いいな。」

「はい。分かりました。」

「他に意見のあるものは・・・いないな。では、これで作戦会議を終わる。シュバルツは兵士にこのことを伝達し、地上組と空組とに部隊を分けておいてくれ。」

「はっ！了解しました。」

「では、解散！」

「ツェルプストー様、今日の宿はどうされるのですか？私の家でしたら、どうぞお使いになってください。」

「心配はいらんぞ、村長。村はずれに陣地を作らせている。今日はそちらで休む。陣地は討伐が終わり次第壊して、土地も馴らしていくので心配はするな。」

「分かりました。」

俺とキュルケも陣地内の別々のテントで休んだ。

夜明け近く、まだ空が紫色で空には少し星が見える。

いまレイルド先生が空組のワイバーンに乗って上空からワイバーンの群れの位置を『遠見』の魔法を使って調べているところだ。

・・・あ、降りてきた。

「旦那様！ワイバーンは予想通りの場所を寝床にしている様です！数はざっと３０匹ですが、木に隠れて見えない場所があり、それ以

上だと思われます！」

「うむ。ご苦労。・・・３０匹以上か、かなり大きな群れだな。シュバルツ、いけるか？」

「はっ！こちらは地上組が２０人、空組が7組です。地上組の先制攻撃でメイジのランクが高いものは胴体や頭を狙い、１撃でワイバーンを倒すようにし、ランクが低いものは羽を狙い、なるべく飛び立たせないようにすれば、こちらのワイバーンの数が少なくても十分に空を支配することは出来ると考えます。」

「ふむ。ではワイバーン１匹に対しトライアングル以上のものは１人、ライン・ドットのものは2人でペアを作ることにする。シュバルツは早速兵の割り振りを決めてくれ。」

「はっ！」

「ヴァルムロートはトライアングルだが今回はキュルケとペアを組みなさい。」

「「はい！」」

シュバルツ先生がレイルド先生達と話し合っている。メイジ同士の系統とかランクで効果的なペアを決めているんだろう。

・・・お、どうやら終わったようだ。シュバルツ先生がこっちに来て、レイルド先生や数人の兵士やメイジが伝達しに行くようだ。

「旦那様。ペアの割り振りが決まりました。すぐに兵達に伝わりましのので、しばしお待ちください。」

「分かった。」

1人の兵士がこちらに走ってきた。

「旦那様！ペアの割り振りが全員に伝わりました！」

「そうか。では、いまから出撃前の最終確認を行う！全員をここに集めろ！」

「はっ！了解しました！」

走ってきた兵士はまた走っていった。そしてすぐに全員集まった。皆オーク鬼討伐の時よりも険しい顔をしている。それだけでオーク鬼とワイバーンの危険度が違うことが分かる。

「これからワイバーン討伐を行う！手順はすでに皆知っていると思うが、ワイバーンの群れの近くまで空組の竜籠で地上組を運び、まず地上組で近づいて先制の一斉攻撃を仕掛ける！その際には先ほど伝達があったように1人もしくはペアでワイバーンを確実に仕留めていく！そこで仕留められなかったワイバーンは空に飛び上がるだろうが、そこから空組に活躍してもらうぞ！空組で上手くワイバーンを取り囲み、動きを制限して地上と空からの挟みうちで残りのワイバーンを一掃する！この時に地上組のものは常に自分の上に注意しておけ！ワイバーンが上から落ちてきて下敷きになりました、ではメイジとして情けない死に方になるだろう！・・・シュバルツ、他に何か言うことはあるか？」

「はっ！どうやら風の向きがよくないようです。このままワイバーンの群れに直進するとこちらが風上なので臭いで近づくのをワイバ

ーンに察知されてしまうかもしれません。ここはすこし大周りして群れの横から近づくのがよろしいかと思われます。」

「うむ。では、地上組を運ぶ際には風上にならないようにワイバーンの群れの横の位置に地上組を下し、その位置で空組は待機。爆音が聞こえ次第、ワイバーンの群れを取り囲むように動いてくれ！・・・では、出撃！！」

「「「「「「「「「「「「はっ！！！」」」」」」」」」」」」

俺達地上組は竜籠に入った。

それぞれの竜籠に全員乗った所でふわっという感覚と共に竜籠が地面から離れた。

地上組の降下地点は歩けば1時間位はかかるだろうが、ワイバーンで飛んでいくと１０分位ですぐに着いた。

これからワイバーンと戦うことになるかと思うとドキドキしてくる。

最近は討伐に行っても慣れたのかここまで緊張することは無かったが、今回の相手はいままでのオーク鬼よりも段違いに強いし、それに空も飛ぶので少し不安になっているのかも知れない。

森の中を１０分位足音を立てないように歩いて行くと、灰色の何かが見えてきた。

ワイバーンだ。どうやらワイバーンの群れに着いた様だ。

「地上組はワイバーンの群れを囲むように展開するぞ。一番遠くには・・・レイルド、お前に行ってもらう。」

「はっ。」

「レイルド、お前が配置に着いたら手を振れ。それにより地上組の展開は終了とみなす。そして私が小さく『ライト』の魔法を使う。それを合図とし、魔法による一斉攻撃を開始しろ。」

「「「「「はっ。」」」」」

父さんの指示により、地上組は左右に展開し、それぞれまだ眠っているワイバーンに狙いを定めていった。

一番遠くに行ったレイルド先生から手を振る動作による展開終了の合図をもらった父さんが、

「『ライト』」

と言うと、一斉に魔法が放たれた。

火の玉や先の尖った氷の柱がワイバーンに向かって飛んでいき、見えない風の刃がワイバーンを傷つけ、地面から現れた石の柱はワイバーンの体や翼を貫いた。

俺とキュルケも火の魔法で攻撃した。キュルケの魔法はワイバーンの翼を破り、俺の魔法はあらかじめ急所と教えてもらった首の裏側に当たり、爆発して、ワイバーンの首は皮一枚で繋がっている状態

になり、地面に倒れて動かなくなった。

（え!?死んだ!?なに?それで死んじゃうの?え?ロープレとかじゃもっと強いじゃん!?どういうこと?）

「・・・」

「すごいわね、ダーリン!1撃で倒せるなんて!」

「あ、ああ。僕も驚いてるよ・・・」

俺はこのとき、いくら急所をついたからといえ自分の想像よりワイバーンが脆かったことに衝撃を受けたり、まだ戦闘中でちゃんと考える時間がなく、ただただ驚いていた。

が、後でよく考えれば俺の思い描いていたワイバーン像はゲーム、しかもRPGが主だったのでそりゃゲームバランスとか考えれば魔法1~2撃で死ぬようには設定出来ないだろうということ、このハルケギニアのワイバーンは生物の1種にすぎないものだと気付いた。

アニメ（あれは風竜か?）でも零戦の機関銃ですぐやられてたし・・・いや、たしかに機関銃はかなり強いけどな。

後で教えてもらったことだが、ワイバーンは竜種の中では最弱で、どの系統の魔法に対しても耐性がなく、どの魔法でも普通に効くらしい。

魔法に対する耐性はゲームやってる人ならすぐわかると思うけど、火竜なら火の系統魔法に強く、風竜は風の系統魔法に強い、といっ

たものだ。だた火に強いからといって水に弱いわけではないらしいが・・・

最初の先制攻撃で１０数匹のワイバーンを倒すことに成功したが、それでもまだ２０匹強のワイバーンが目の前にいる。

いきなり魔法を浴びたワイバーンは大部分が混乱状態になり空に飛び立ったが、何匹かはこちらに気付き翼を大きく広げて襲ってきた。

「くるぞ！シールド系の魔法が使える者はワイバーンの足を止めろ！止まった所を他の者が数人で確実に仕留めろ！！」

父さんが大声で指示を出た。

こちらに向かってくる何匹かのワイバーン１匹に対し数人のメイジのシールドで動きを止めている。

シールドを破ろうとそのまま前進しょうともがくワイバーンを数人のメイジで確実に仕留めていった。ただ動いていて急所（首の裏やお腹の皮膚の柔らかい部分）に当たらず、背中の固い鱗の部分に当たって１撃で倒すことは出来なかったが、それでも数人のメイジの魔法により向かってきたワイバーンをことごとく倒していった。

空に飛び立ったワイバーンも最初の魔法の爆音などを聞いてやってきた空組に周囲を包囲され、いまだ上空を旋回している状態だった。

「ふう、地上に残っていたワイバーンは全て倒しましたね。父さん。」

「ああ、しかし空に飛び上がったワイバーンの方が数が多い。まだまだ油断するな。空を飛んでいるワイバーンを倒す方が数段大変だぞ。」

「あら?でもあと１０匹ちょっとでしょ。大丈夫よ!」

「いや、ゆｄ

バキバキバキッ!と木の枝が折れる音のすぐ後に、ドーーーン!!!という何か大きなものが落ちた音が後ろの方から聞こえた。

「え!?何の音なの!?」

「何の音だ!状況が分かる者は居るか!」

「はっ!空組のワイバーンが落とされたようです!」

「何!どういうことだ!?空組はワイバーンと一定の距離を保っていたはずだろう!どういうことだ!」

「そ、それは、私から、申し、上げます・・・」

「お前は空組の・・・その傷はどうした!?水のメイジをここへ呼べ!秘薬も持って来させろ!」

傷だらけの兵士が父さんに事情を説明している。どうやらさっきの音はこの兵士の乗っていたワイバーンが落ちた音だった様だ。

すぐに水のメイジが来て『ヒーリング』をかけている。俺も『ヒー

リング』をかけながら、兵士の怪我の様子を見る。どうやら背中に大きな傷があるようだ。

「何!?背後から別のワイバーンに攻撃されただと!」

「はっ!・・・それも普通のワイバーンよりも翼の大きい個体で速さが普通のものよりも速く。前に集中していたといえ、気付いた時にはすでに攻撃された後でした・・・」

「そうか。・・・まずいな。もしそのワイバーンにより空組の包囲がなくなれば、地上からワイバーンを倒すことはかなり難しいぞ。」

「どうするの?お父様?」

「空組の包囲がある今のうちにワイバーンに攻撃を仕掛ける!だが、直接倒そうと思うな!飛行が出来なくなるように翼を狙え!何人かは私と共にそのワイバーンへ攻撃を行う!」

「僕は父さんに付いてそのワイバーンを倒すのを手伝うよ!」

「ダーリンがいくなら私も行くわ!」

「・・・そうだな。おい!お前達が私に付いてこい!他の者は上空のワイバーンへ攻撃を開始しろ!」

兵士を回復させるために呼ばれたメイジがそのまま別の場所から来たワイバーンへ攻撃するチームに入れられた。他の地上組のメイジは空に向けて各々魔法を放っている。

「で、父さん、どうするのですか?」

「とにかくそのワイバーンを確認しないといけない。木の上まで上がってそこからそのワイバーンに攻撃を仕掛ける。いいな！」

「「はい！」」

「「はっ！」」

俺達は『フライ』を使って、木で空を見るのが邪魔されないくらい上の方の枝まで上がった。

そこから空をみると確かにワイバーンの群れを囲んだ空組のワイバーンに攻撃を仕掛ける翼の大きなワイバーンがいた。

「あれか。確かに普通のワイバーンよりも翼が大きいな。」

「突然変異かしら？」

「そうかもね。もしかしたらあのワイバーンが群れのボスなのかもしれないな。」

「ふむ。そうかもしれんな。少し離れた場所から群れを見守っていたんだろう。今は囲まれている群れを助けるために空組のワイバーンを攻撃しているんだろう。・・・それにしても速いな。」

空組のメイジ達も魔法を放ってそのワイバーンを倒そうとしているのだが、そのワイバーンはメイジの放つ魔法を簡単に避けていった。

確かにそのワイバーンは普通のワイバーンに比べて少し速く、小回りも利くようだった。

「こちらから攻撃して空組を援護するぞ！用意はいいか！」

「「はい！」」

「「はっ！」」

俺とキュルケと父さんは火の玉を、水のメイジの2人は氷を塊を飛ばした。

そのワイバーンは突然の下からの攻撃をもろともせずに避けた。下からの攻撃に注意がそちらに向かったと判断した空組のメイジがすぐさま魔法を放ったが、そのワイバーンは普通なら直撃してもいいような攻撃を大きく羽ばたくことで体の位置をずらして回避した。

その時俺は、野生の勘ぱねぇな・・・となんかのんきなことを考えていた。

さらに先ほどの攻撃でこちらに気付いたのか、こっちに向かって飛んできた。

「こっちにくるぞ！木から降りろ！」

俺達は急いで木から降りた、その瞬間ワイバーンが俺達がさっきまでいたところすれすれを飛んでいった。

「こちらから攻撃してもあまり効果は無い様だな。どうするか・・・」

「ねえ、お父様。まず囲っているワイバーンを全て倒してから空組のワイバーン全部で相手にした方がいいのではなくて？」

「それができたらいいが、さっきのを見ただろう。あれでは囲っているワイバーンを全て倒す前に、最悪の場合空組が全滅しかねないな。」

「と

父さん、どうしましょうか?と言おうとした時、「うわあぁぁぁ」という人の悲鳴と共にバキバキッ、ドーンという音がした。別の空組の人がやられたようだ。

「お前達は先ほど落ちた兵士の回復に回れ!」

「「はっ!」」

水メイジの2人は先ほど空組のワイバーンが落ちた所に走っていった。

「不味いな。空にはまだ10匹位のワイバーンが残っているが、空組のワイバーンはあと5匹だ。これ以上はワイバーンを包囲するのも難しくなってくるぞ。どうしたものか・・・」

「本当にどうしたらいいのかしら・・・。ねえ、実はダーリンには何か考えがあったりするんじゃないの?」

「おいおい、キュルケ、いくらヴァルムロートでもこんなにすぐになにか思いつくわけが・・・」

「・・・ある。」

「な、あるって。・・・あるだと!?本当か!」

「え!?ちょっと聞いてみただけなのに、すごいわ!ダーリン!」

「それでヴァルムロート、その考えとはどんなものだ!?」

「・・・これから『トランザム』を使います。これならおそらくあのワイバーンを倒せるはず、少なくても飛行不能には出来るはずです。」

「とらんざむ?まあ、いい。またお前が考えた魔法だろう。それで私達に出来ることは何かあるか?」

「決着は１０秒位で着くと思うので、その後に僕が動けなくなる可能性があるのでその時は助けてください。」

「それってダーリンが勝つ前提よね?」

「ああ。」

「勝つのに、動けなくなるってどういうこと?」

「・・・まあ、ね。では父さん、後をよろしくお願いします。」

「あ、ああ。こういっては何だがあまり無茶はするなよ。」

俺はちょっと苦笑いをして、『フライ』で空に飛んでいった。

「ダーリン、『フライ』で空に上がっていったけどどうするつもりなのかしら?」

「ヴァルムロートは何を考えているんだ！『フライ』でのこのこ飛んで行って、ワイバーンのいい標的になるじゃないか！」

俺があのワイバーンがいる同じ高さまで上がっていったら、案の定あのワイバーンがこっちに向かって飛んできた。

「ああ！ダーリン！逃げてーー！！」

「何しているんだ、動け！ヴァルムロート！」

ワイバーンはその口を大きく開けて、牙をむき出しにし、俺にいまにも噛みつこうと迫ってきている。

「『トランザム』！」

その瞬間俺は淡い炎に包まれ、上に飛び、間一髪のところでワイバーンの噛みつきから逃れた。

そのまま通り過ぎようとするワイバーンの背中に『フライ』を切り、自由落下している最中に『ファイヤーボール』を3発連続で放った。

1発目は背中に当たって爆発したが、2発目は翼に当たったのに大した爆発は起きなかった。3発目は外れて地面に落ちた。

「ん！？」

ワイバーンはふらふらしているが、まだ倒しきれず、行動不能にもなっていないようだった。

そこで俺は『フライ』を使い、自由落下を止めて、ワイバーンの背

中にドン！と踏みつけるように降り立った。

（わりいけど、時間がないからもう終わらせてもらうよ！）

「『ビームサーベル』！」

ワイバーンの背中に杖を押しつけるようにして『ビームサーベル』を発動させた。

発動した『ビームサーベル』は易々とワイバーンの体を貫いた。

ワイバーンはひと際大きな雄たけびを上げたかと思うと、そのまま力を失い、地面に向けて落ちていった。

俺はその様子を『トランザム』を解除して、残り少ない魔力で『フライ』を使いながらふらふらと地面に降りていった。

が、あと１０メイルくらいの所で魔力が切れてヤバい！と思ったが、父さんの『レビテーション』に助けられて無事に地面に降りれた。

「すごいわ！ダーリン！もうどれだけ私を虜にするの！？」

「本当にすごいな、ヴァルムロート！とらんざむ？だったか、あれはどんな魔法何だ？」

「・・・と、父さん。俺のことは、いい、から。残りの、ワイバーンを・・・」

「おお、そうだったな！・・・ん？おい！攻撃を中止しろ！」

「どうしたの？お父様？・・・え！？」

俺は魔力切れと実戦の疲れからかなり眠くなっていたが、周りの様子がおかしいことが空気で読みとれた。

「ど、どうし・・・え!?」

その瞬間俺の眠気は吹っ飛んでいた。

なぜなら、数匹のワイバーンが地面に降りて頭を下げているではないか。それどころかまだ空にいるワイバーンも次々と地面に降りてきて頭を下げている。

あっと言う間に俺の周りはワイバーンが集まり、その全てが頭を下げているという光景になった。

これで今回のワイバーン討伐は終了した。

謀らずとも俺が群れのボスを倒したこと、特に速さで圧倒したことで群れのワイバーンに認められたので残りのワイバーンは討伐ではなく捕獲になった。

父さんは「あはは、これでわが家の戦力が増えたな。ヴァルムロート!お前もそろそろ竜に乗る訓練を始めるか?」とか陽気に言っていた。

でも、俺が乗れるのは1匹なのでブルーダー先生に一番良いのを選んでもらって、他10数匹は他のメイジを認めさせることで晴れて我が家の戦力になった。

で、その認めさせるので少々時間を食ってしまい誕生会に間に合わせるために、行きは馬車で来た道のりを帰りは竜籠でぶっ飛ばして帰っていった。

竜籠の中で俺はキュルケに膝枕してもらいながら横になっていた。

・・・というのも、どうやら『トランザム』でワイバーンの背中に降りた時に勢いが良すぎたようで、俺の両足にひびが入っていたんだ。

秘薬はすでに怪我人の治療に使って無かったので水メイジに『ヒーリング』をかけてもらったのだが、やはり秘薬が無いとあまり効果が期待できないようだったので、早く家に帰って治療を行うのも早く帰る理由の1つだった。

「これでヴァルムロート様のお怪我は治りました。」

「うむ。ご苦労。」

「ありがとう。」

「やれやれ、ヴァルムロートにはいつも驚かさせるな！あははは！」

「あなた！笑いごとじゃないでしょ。・・・でも、本当にすごいわね！」

「でも、その魔法はかなり代償が大きいみたいね。話によると使った後かなりふらふらになったんでしょう?それに足まで折れて・・・」

「母さん、折れて無いから。ひび入っただけだから。」

「でも、炎を体に纏わせるなんて無茶するわねぇ。通りで最近ヴァルの服が時々焦げてると思ったわ。」

「そうね。火の系統魔法を失敗して服が焦げていたのかとも思ったのだけどね、まさか自分を火で包んでいたなんて。」

「服、焦げてたんだ・・・ごめんなさい。」

「そうね。反省しなさい!・・・今度からヴァルの服は耐火性のものにしないといけないわね。」

「え!?・・・いいの?」

「しょうがないでしょ。毎回服を焦がしてくるよりはいいわ。」

「あ、ありがとう!」

「それにしても火を体に纏うだけで強くなれるんだったら私もしようかしら?」

「ね、姉さん。危険だから絶対に真似しないでよ!これは火だけじゃなくて水の系統魔法も混じってるんだから!」

「分かってるわよ・・・。それにそんなことしたら女の命である髪が傷むでしょ。」

「そうよねー。」

「ほっ。良かった。」

「しかし、ヴァルムロートよ。あれはあんまり使うなよ。戦闘中に行動不能になるとはな。今回は良かったが、次はそうはいかないぞ。」

「うん。分かってるよ。使う時は状況をしっかり見極めてから使うことにするよ。」

「そうか。それならいいんだ。」

「でも、あのときのダーリン、かっこよかったわー。」

「いいな。キュルケはこんど私にもそれ、とらんざむ、だっけ?見せて欲しいな。」

「こらこら、さっきむやみに使うなと注意したばかりだろう。」

「えへへ、はーい。残念だわ。」

「「「「あははは。」」」」

(でも、『ファイヤーボール』を連続で出した時、威力が一定じゃ

なかったな。たまたまなのか？）

そして明日は俺とキュルケの１４歳の誕生会だ。

ワイバーン討伐作戦（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

風竜「ワイバーンがやられたようだな・・・」
火竜「ククク・・・ワイバーンは竜四天王では最弱・・・」
海竜「メイジ如きにやられるとは我ら四天王の面汚しよ・・・」

なんか本文で最弱とかかいたらこんなイメージが・・・

今回は3回も分割したのに今回は1万字位になってしまいました。
もっとコンパクトにしてえ。
・・・読んで下さる人はこの長さはどうですか?ちょっと長いですかね?

トランザムはまだまだ未完成なので少しぼろがでています。これから改良です。

次回は珍しく主人公の誕生会の話です。

ご意見・ご感想があればコメントしてください。

ファンタジーの世界って中2病の人が沢山いそうだよな（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は主人公の１４歳の誕生会です。
原作のキュルケが１８歳らしいので原作開始まであと４年です。

「皆さん今日は私ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと姉キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーの誕生会に来て下さり、ありがとうございます。」

「今日は我が家のシェフ達が腕によりをかけた料理が沢山ありますのでゆっくりしていってくださいね。」

今日は俺とキュルケの１４歳の誕生会だ。

いろんな貴族やその息子・娘が挨拶やプレゼントを渡してくる。

プレゼントは嬉しいんだけど・・・なんだろうね、年々俺へのプレゼントが物騒になってくるというか実用的な物になっているというか。

キュルケには大抵化粧品とかアクセサリーがほとんどで男からは花束とかだったりするんだけど、俺には珍しいマジックアイテムだとか純度の高い魔石とか、あと場違いな工芸品も少し見かけたな、ＣＤとか何かのケーブルとかここでは役に立たない物ばかりだけど。

・・・なぜだろうか？もっとプレゼント！って感じのものがいいんだけどな。

こういうと嬉しくないみたいだけど、実際はかなり役に立ってるものもあるから、これからもよろしくお願いします！って心境なんだ

けどね。

そうそう。ゲルマニアでは平民でもお金があれば土地を買って貴族になれるのだが、そういう成り上がり貴族からのプレゼントに高価なものや珍しいものが多いようだ。メイジの血を入れて名実共に貴族になりたい為の戦略かな？

こういう場では良く、今度家に来てお茶でもいかがかな？家にも同い年位の娘がいて是非話がしてみたと言っているんだが、とか、今度ゆっくりお話できませんか？などという、何このエロゲ？みたいな展開とかあるかと思っていた。

・・・そんなものは１２歳くらいまであるにはあったが、キュルケがことごとく話を潰したり、俺自身も自分を鍛えたり、カトレアさんのことで精一杯だったからスルーしていたら、去年の誕生会ではさっぱり無くなった。

ちなみにこれはキュルケの方も同じで最初こそはキュルケに交際を申し込む輩も多かったが、キュルケがバッサリと切り捨てたりして全く相手にしなかったからか、こっちも去年からそういう話が無くなった。

カトレアさんの誕生会ではカトレアさんを誘っている貴族が何人かいたから、ここまできっぱり無くなるのはちょっと怖い気がする。

そんなことを考えていると、ほとんどの貴族と挨拶が終わり、最後

の1組となった。

その最後の1組が俺達の前に来ると会場が少しざわついた。

最後はヴァリエール一家だった。まあ、一家といっても公爵さんとカリーヌさんとルイズだけだが。カトレアさんは病気の関係で長距離の旅路は危険だし、エレオノールさんとはなぜか仲良くなれないんだよな。こっちは結構友好的な接し方をしていると思うんだけどね。

今でこそこの程度のざわめきだが、初めてヴァリエール一家が来た時は会場入りした瞬間からヤバかった。あの時は父さんがすぐに対応したから良かったけど、一歩間違えたら家が戦場になってたかもしれない。

「誕生日おめでとう、ヴァルムロート君。元気にしてるかね。」

「これはヴァリエール公爵様。御越し頂きありがとうございます。はい、元気でやっています。」

「誕生日おめでとう！はい、誕生日プレゼント。ちぃ姉さまと一緒に選んだのよ。キュルケにも、はい。」

「ありがとう、ルイズ！カトレアさんにも帰ったらありがとうって言っておいて。」

「ルイズにしてはいいものを選んだじゃない。ありがと。カトレア様にありがとうって伝えておいて。」

「ええ、分かったわ！」

「ねえ、ヴァルムロートさん。つい最近ワイバーン討伐に参加したんですってね。」

「はい。おとといのことですけどよく知っていますね。」

「ええ。そこで１０匹強のワイバーンを一度に従わせたんですってね。一体どうやったのかしら？是非教えて欲しいわ。」

「え、えーと。それは・・・」

「カリーヌ様、ダーリンってばすごいんですよ！私達が対処しきれないワイバーンのボスをダーリンがあっという間に倒したら、残りのワイバーンが全てダーリンを認めて従うようになったんです！」

「そう・・・すごいわね、ヴァルムロートさん。今度私の家に来た時に私と模擬戦などはいかがかしら？」

（は！？ハルケギニア１強いかもしれないカリーヌさんと戦うとか・・・模擬戦でも死ねる！か？）

「え！？いえ、私などまだまだです。メイジのランクもトライアングルでスクウェアであられるカリーヌ様にとても敵いませんよ。」

「強さはメイジのランクだけではないけれど、そこまで言うなら貴方のメイジとしてのランクがスクウェアになった時は私と戦ってくださいね。」

カリーヌさんからプレッシャーを感じた。キュルケやルイズ、公爵さんもそれを感じているのか何も言わない。いや、言えなかった。

「は、はい・・・」

（なぜだ！なぜ俺はカリーヌさんの提案を安請け合いしてしまうんだ！やべぇ！素質的にはスクウェアになれるらしいし、それを目指しているから俺がスクウェアになるのも時間の問題だと思うが・・・正直、戦いたくねえええええええええええ！！！）

「・・・ヴァルムロート君、例の件で話があるんだ。後で時間いいかな？」

（例の件、人体実験の話か！）

「ええ、大丈夫です。ヴァリエール公爵様達は今日も家に泊まっていくのでしょう？その時に話ましょう。」

「ああ、そうしよう。・・・ではそれまでパーティを堪能するよ。」

「例の件？ねえ、ヴァルムロート、何の話？」

「ん、まあ、ちょっとね・・・」

「ふーん、話たくないことなのね。まあ、いいわ。それじゃあね。」

それから会場で来賓の人と話していた父さん達に合流し、一緒に会場を回って貴族の人達と話をした。

・・・貴族の話はなんか長いね。

そうしていくつか回った時、不意にキュルケが腕を組んできた。

「いきなりどうしたの？キュルケ？」

「ねえ、ダーリン。さっきから変な視線感じない？」

「え、今日の主役は僕達だからそりゃ注目されるのは仕方ないけど・・・変な視線は分からないな。」

「そういう普通の視線じゃなくて、なんていうか、粘っこい？みたいな視線なのよ！」

「粘っこい視線ね・・・」

俺が周りを見渡すとある貴族がこちらを見ているようだ。その貴族はこちらの視線に気付いたのか不自然に視線を外した。

（なんだ、今の？）

俺は変だなと思ったが、たまたまかもしれないのでスルーした。

それから何人かの貴族と話をした後、さっきの変な視線を送っていたと思われる貴族と話をすることになった・・・父さんが。

その貴族は年齢的には父さんより年上に見えるので５０過ぎだろうか。

その貴族は父さんと話していてもちょいちょい視線がこっちを向く。

初めは俺を見ているのかと思ったが、どうやら俺ではなくキュルケの方を見ているようだった。

そいつの視線は１４歳にしては大きいキュルケの胸とか胸とか胸とかをちらちら見ていた。どんだけ胸を見るんだよ！

俺は少し体をずらしてそいつとキュルケの間に入ってキュルケをガードするようにした。

こいつも話が長いのでほとんど聞き流していたが、どうやら公爵でいままでも誕生会の招待状を出していたが、今回初めて来たようだった。

そしてやたらキュルケのことを聞いてきた。婚約者はいるのかとか、しなくてもその候補となる者はいるのかとか。

・・・何だこいつ、こいつに息子がいてそいつの婚約者にでもするつもりだろうか？・・・考えたら、ムカついてきた。

それからも何人かの貴族と話したが、その間もそいつを何回か見たがやはりこちらを見ていた。

・・・ストーカーか！

ストーカー爺の出現があったが、誕生会自体は恙無く終わった。

パーティのホストって大変だよな。なんせ来賓の相手をして満足に料理も食えないんだから、厳しいぜ。

誕生会に来た貴族も全て帰り、ヴァリエール一家を客室に案内させて一息ついたときにさっきの公爵について父さんに聞いてみた。

「父さん、途中で話したパーティに初めて来た公爵は誰ですか？」

「ああ、あの公爵は我がゲルマニアの皇帝アルブレヒト3世閣下が親族を幽閉する際にそのことから逃れることが出来た数少ない公爵の1人だ。」

「幽閉から逃れることが出来たって、あの公爵はそんなに有能なのですか？」

（・・・そうは見えなかった、ただのエロジジイって感じだったし。）

「いや、逆だ。有能だったら真っ先に幽閉されている。あの公爵は言葉は悪いが無能と言ってもいいだろう。」

「どうして、そんな人に招待状とか出したの？」

「社交辞令のようなものだ。お前の姉達の時も出していたが来たことは1度も来たことは無かったんだがな。」

「・・・もしかしてキュルケが目当て？息子の嫁にするとか？」

「あの公爵に子供はおらんはずだ。しかし・・・キュルケ目当てというのは当たっているかもしれんな。あの公爵はあまり良くない噂を聞くからな。」

「どんな噂かは聞かないけど、それだとあの公爵自身の嫁にでもす

るってこと？」

「そこまではまだ言ってはいないが、どうだろうな。しかし、そんなことになったら爵位はあちらは上でも私は断固反対してやるぞ！」

「頼もしいけど、大丈夫なの？」

「・・・まあ、大丈夫だろう。」

「あ、そうだ。父さん、ヴァリエール公爵様が例の件で今夜話があるって。」

「そうか。これはほとんどお前の問題で私や母さんは立会人のようなのもだが、一緒に話を聞かせてもらおう。」

「ありがとう。」

夕食の後、応接間に俺、父さん、母さん、ヴァリエール公爵、カリーヌさんの５人が集まった。母さん２人も参加したいと言っていたが、キュルケや姉さん達それにルイズの相手を頼んだ。

「ヴァリエール公爵様、例の件で話があるとのことですが。」

「うむ。ヴァルムロート君の言った通りに盗賊などの罪人を３０人ほど集めた。今は家から離れた森の中に建物を作り、そこに隔離している。」

「ヴァリエール、よくそんなに集められたな。」

「ああ、少し苦労したな。いくら最近のトリステインが物騒といってもそうそう盗賊など出んからな。周りの領地から処刑される罪人を譲ってもらったりしたな。」

「そんなことをして大丈夫か？変な噂とか流れるんじゃないのか？」

「噂か、どうだろうか。秘密裏に交渉し、口外しないと金を握らせ、もし破ったら烈風のカリンによる制裁があると言っておいたから大丈夫だと思うが・・・」

（カリーヌさんの扱いが地球の核兵器みたいだな・・・いや、似たようなものか。）

「３０人ですか。思ったより多く集めましたね。男女比はどうなっていますか？」

「ああ、男は２２人、女が８人だ。やはり盗賊ともなると女は少ないな。」

「いえ、それで十分だと思いますよ。」

「そうか。一応まだ盗賊が出ればなるべく生きて捕えるように言ってある。」

「そうですか。まあ、どんなことがあるか分かりませんから多すぎるということはないと思いますが。・・・それでいつそちらに向かいましょうか？」

「こちらとしては何時でもいいぞ。」

「そうですね・・・なるべく早い方がいいと思うし、一度言ったらかなり長い間そちらにお邪魔することになりますね。準備がいるので5日後のイングの曜日に出発します。そちらに着くのはそれから2日後のダエグの曜日ですね。」

「そんなに急がなくても、いや、助かる。ではヴァルムロート君の到着を心待ちにしているよ。」

「それでどのくらい家に滞在なさるのかしら?」

(うーん、初めに何人かは解剖して、その後肺切除の実験をして術後の経過観察や身体機能を調べたりしないといけないよな。術後の観察に結構時間がかかるか?あ、でも回復魔法でかなり短縮できるよな。)

「え?そうですね・・・最低でも60日位でしょうか。おそらくそれ以上になるでしょうが。」

「最低で60日か、かなり時間がかかるな。そうだな、ヴァルムロート君の部屋を用意しておこう。」

「いえ、そこまでしていただかなくても・・・」

「ヴァル、こういう時は相手の好意を素直に受けておくものよ。まあ、時と場合、そして相手によるのだけどね。」

(信用できない人の好意は簡単に受けない方がいいってことかな?まあ、確かにそんなのは何か裏がありそうだよな。)

「分かりました、母上。ではヴァリエール公爵様、よろしくお願いします!」

「うむ。任せておけ。それにお願いするのはこちらの方だからな。カトレアのこと、よろしく頼む！」

「はい！頑張ります！」

その頃のキュルケとルイズ達。

「ねえ、キュルケ。今お父様達はどんな話をしているのかしら？」

「さあ？私達には聞かせたくない話なんでしょ。」

「でも、ヴァルムロートが話に入ってるってことはちぃ姉さまのことかもしれないのよね。」

「そうね。おそらくカトレア様の話でしょうね。」

「ねえ、キュルケ。今どんな話をしているか知りたくない？こっそり聞きに行きましょうよ！」

「止めておきなさい、ルイズ。そのうちダーリンから話してくれるわよ。」

「そう、残念ね。早くちぃ姉さまの病気治らないかしら？」

「そのために今ダーリン達が頑張ってるんでしょ！」

「そんなこと分かってるわよ！ちょっと言ってみただけ！」

「ああ！キュルケとルイズちゃん、こんなところにいた！こっちに来てお話しましょ。」

「きゃー！ルイズちゃんは小さくて可愛いわね！」

「こんな妹が欲しかったわね。」

「お姉様、私は？」

「え？キュルケの背はもう私達とあんまり変わらないし。」

「私より胸が大きいし。」

「ボンキュボン・・・でも、ルイズちゃんは背が低くてぺたんこだし。」

「ぺ、ぺた・・・！」

「・・・そうね。頑張って！ルイズ！」

「い、いまに見てなさい！私だってちぃ姉さまみたいにボ、ボンキュボンになるんだから！」

翌日、ヴァリエール一家は帰っていった。

なんかルイズの様子が落ち込んでいたような？朝食のときやたら胸に手を当てたり、カリーヌ様の方を見てため息ついたり、なにかを

思い出して少し明るくなったり、また凹んだりしてたな。

ファンタジーの世界って中2病の人が沢山いそうだよな（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

そろそろカトレアさんの治療も佳境を迎えますね。

ご意見・ご感想があればよければ書いて下さい。

感情システム的な魔法の仕組み？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は感情が及ぼす魔法への影響についての話になります。

感情システム的な魔法の仕組み？

誕生日の翌日、今日は昼の剣の訓練の時にブルーダー先生が銃見せてくれる約束をしている。

「その前に魔法の練習だな。」

と、いうことで練習場に行くと、キュルケが的に向かって『ファイアーボール』を放っていた。

「あ、ダーリン遅かったわね。」

「そうだった？ごめんごめん。・・・あれ？レイルド先生は？」

「先生は急な用事が入ったから今日は魔法の練習をみることが出来ないから各自で練習して欲しいって言ってたわ。」

「そうなんだ。それでキュルケは何をやってるの？」

「魔法の命中率を上げようかと思って。ワイバーン討伐に行った時にちゃんと狙わないと避けられちゃったでしょ。それで、ね。」

「たしかにいままでは明確にここに当てたいとか思って練習したこと無かったな。僕もやろうかな？」

「ええ、一緒にやりましょ！」

こうして、キュルケと一緒に魔法の命中率アップを目指して自主錬することにした。

狙う的はに２０メイル位離れた場所に立ててある木だ。

ドカーン！

「もう！当たらないわね！」

ドカーン！

「惜しい！ちょっと外れたわ！」

ドカーン！

「ああん！ちっとも当たらないわ！どうしてよ！」

確かにさっきからキュルケの様子を見ていると的に全然当たっていない。いつものキュルケならこれだけ撃てば何発かは当たっていても可笑しくは無いはずだが？

それになんだがカリカリしているというかイライラしているというか・・・当たらないからか？

しかし、魔法の威力の方はいつもより少し高いように見える。ここからだと判断が難しいが、いつもより地面に開く穴が大きいように思う。

「キュルケ、ちょっといいかな？」

「え？どうしたの？ダーリン？」

「キュルケ、今日はちょっと調子がよくないの？なんか魔法を放っている時怒っているみたいに見えるんだけど？」

「そうね、今日はちょっとむしゃくしゃしてて。それを魔法の練習で発散させようかと思ってるの！」

「え？今日って何かあったっけ？」

「昨日の誕生会に来た公爵をダーリン覚えてる？」

（ああ、あのエロジジイね。）

「まあ、昨日のことだからね、もちろん覚えてるよ。」

「それがね、聞いてよ！その公爵が私の夢にまで出てきて嫌らしい目で私をずっとみるのよ！朝起きた時には気持ち悪いわ、ムカつくわで・・・それでむしゃくしゃしてたの！」

（あー、たしかにあのエロジジイが夢にまで出てきたら腹立つかもしれん。）

「そ、それは大変だったな・・・」

「そうよ！どうせ夢に出るならあんなやつじゃなくて、ダーリンが出れば良かったのに！」

「あはは・・・、まあ、それでキュルケはあんなにカリカリイライラしてたのか。」

「そう見えた？」

「まあ、ね。・・・じゃ、練習の続きしようか。キュルケもそのイライラを魔法に込めるといいよ。」

「ええ！そうするわ！」

キュルケは怒っていてイライラしていたようだ。まあ、あのエロジジイ相手では仕方ないか。

「さて、僕も・・・いや、待てよ・・・」

そう言えば以前レイルド先生が魔法は感情に左右されやすいものだと、特に怒りの感情ではいつもよりも高い威力の魔法が出るって言っていたな。

今、キュルケはかなりイライラしている。つまり、かなり怒っている状態だな。キュルケには悪いけど今後のために少し観察させてもらおう。

ドカーン！

「また、外れたわ！今度こそ！」

ドカーン！

「もう！なんで当たらないの！」

ドカーン！

「やっと当たったわね！でもまだまだよ！」

「あ、ダーリン。休んでるわね！ちゃんとやりなさい！」

「・・・はっ！わかってるよ。」

うーん、やっぱり今の状態のキュルケだと命中率が落ちているけど、その分魔法の威力が少し上がっているみたいだな。爆発で的が半分に折れてるし。

つい最近もこれと同じような練習をしたけど、そのときは的に命中しても爆発で倒れることはあっても、半分に折れるとかは無かったはずだ。

しかし怒りの感情によって威力が上がるって、怒りのスーパーモードみたいだな。冷静さが無くなって命中率が落ちてるのもにてるし。

威力が上がるのは結構だけど、命中率が下がり過ぎだな。

赤い人も、

「当たらなければどうと言うことは無い！」

って言ってたしな。

「ダーリン！聞こえてるわよ！・・・次は絶対に当てるわ！」

・・・声に出してたのか、キュルケには悪いことしちゃったな。

あ、外れた。

やっぱり怒りの状態ではコストパフォーマンスが良くないな。

・・・ん？そういえばサイトの武器になるデルフリンガーも感情に反応して真の能力を解放するんだよな？

思いの力をそのまま現実の世界に反映させるって・・・あ、こっちはラムダ・ドライバかな？

そう考えると魔法ってすごいな。なんでも出来そうだよな。まさに、魔法！って感じだな。

まあ、それは置いておいて今はキュルケだな。

今は怒りの状態だけどこの状態から普通の状態に戻ったら、やっぱり普通の命中率、威力になるのかな？

ちょっと試してみるか。・・・でも、どうやろうか？

うーん、そうだな・・・あ！これでいってみよう！

「キュルケー！」

「もう！なにかしら？」

キュルケはまだイライラしているようだな。上手くいくかな？

（恥ずかしいが、ここは羞恥心を捨てて・・・）

「・・・キュルケ、好き！大好きだよー！！」

ぎゃー、今の俺絶対顔真っ赤になってるよ。恥ずかしいー！いつもキュルケに言われてることを言ってみたけど、マジ恥ずかしい。

「・・・え？・・・い、いきなりどうしの？・・・わ、私もよ・・・・好き／／／」

ん？キュルケの顔が真っ赤だな。

・・・もしかしてキュルケ、自分が言うのはいいけど相手から言われたら照れるってやつなのか？

一応フォローを入れておこう。

「いきなりだったのは、キュルケの怒りを緩和させようかと思ってね。」

「そ、そう、だったの・・・ありがとう。今ので怒りはどこかに行っちゃったわ。でも、冗談だったの?それは残念だわ。」

「いや、結構本音だけど?さすがに冗談でそんなことは言えないよ。」

「え!?・・・そ、そうなの?」

「ああ。それより、練習の続きしようよ。」

「え、ええ。そうね。」

その後のキュルケはいつもの状態ではないようだった。

そのせいか分からないが、さらに魔法の命中率が落ちて、威力が先ほどよりも上がっていた。

キュルケはときより、

「・・・もう。ダーリンったら・・・」

とか

「・・・そこはダメ。まだ早いわ・・・」

などとなにやら妄想に浸っているような言葉が聞こえ・・・あーあー、聞こえない。

結局今日の練習の間にキュルケが普通の状態に戻ることは無かった。

まあ、今日の収穫は怒りのスーパーモードは良くないだろうということ（動きが遅くて体が大きいものが標的ならいけるか？）と、俺がキュルケの何らかのフラグを立ててしまかもしれないということかな。

「・・・昼食を食べたら、銃見せてもーらお！」

感情システム的な魔法の仕組み？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

フォローがフォローになってなかったり、最後の主人公のセリフは少し自棄が入ってます。

怒りで威力が上がるとか結構ありますよね。スーパーモードとか超サイヤ人とか。まあ、デメリットも結構あるみたいですけど。あ、超サイヤ人はそんなに無いかな。

好奇心は猫をも殺す。

主人公は好奇心が強い人で恋愛に関しては・・・まあ、ギャルゲー位の知識ですが、人並みです。隠されると分からないかもしれませんが、露骨だと分かる位。

あんまり鈍感な主人公ものの話は私も好きではありませんし。

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてください。

火縄銃はマスケットと呼ばれる銃の1種（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回はハルケギニアの銃についての話です。
話の中でちょこっと改造しますが、今後この改造が役立つことは無いかもしれません。

「お待たせしてすみません。ヴァルムロート様。」

「いえ、いいんですよ。・・・それが銃ですか。」

「はい。銃身の長さはいくつかあるのですが平均的な長さのものを持ってきました。・・・他のも持って来ましょうか？」

「いえ、銃としての構造が同じならばこれ1つで十分です。」

「そうですか、分かりました。」

「それでブルーダー先生。今日はこの銃についていろいろ調べたいので剣の訓練はお休みしていいですか？」

「ええ、構いません。そもそも貴族であるヴァルムロート様には本来剣の訓練はあまり必要ではないですから。」

（まあ、俺が無理やりやらせてもらってることだしな。あ、銃は扱ったことはないから扱える人がいるな。あと比較対象として弓を使おう。的とか作ってもらうために『錬金』が出来る人がいるな。）

「そうですか。・・・それでついでと言っては何ですが、兵士で一番銃の扱いが上手な人と弓の扱いが一番上手な人、それと土のメイジ、特に『錬金』が得意な人を連れて来てくれませんか？ちょっと調べごとに協力して欲しいのですが。」

「はい。分かりました。今連れてきますのでしばらくお待ちください。」

「ありがとうございます。」

そういうと先生は兵舎の方に駆けていった。

「待ってる間に銃を見てみよ！」

まずは全体の形、

「全部の大きさは1．5メイル、銃身は1．2メイル位か。それに結構重いな。最近使いだした本物のブロードソードの2倍くらいはあるな。」

発射のための構造と思われる所、

「ん？ここに火縄を付けるのか？で、引き金を引くと・・・上にあった火縄をつけるであろう部分が下がって銃のちょっと横に出っ張った所に当たるな。お、引き金を緩めたら元に戻った！・・・ん？出っ張った所に蓋があるな、ああ、この蓋を開けて火薬を少し入れて導火線の役割を果たさせるのか。」

銃身を覗いてみる、

「ん？この銃ってよく銃にある螺旋が入って無いな。つるつるだ。」

最後にまた全体を見てみる、

「それにしてもこの金具の部分の装飾って要らなくね？・・・あ、

銃身の下の方に銃身に火薬や弾を込めるための棒が付いてた。」

あれこれ見て、俺が思ったことは、

「火縄銃だよな、これ。」

そうやっているうちに先生が3人連れて戻ってきた。

「ヴァルムロート様、銃の扱いに長けた者、弓の扱いに長けた者、そして『錬金』を得意とする土メイジを連れてまいりました。」

「エルヴィン・ケーニッヒです。兵の中では銃の扱いが比較的上手かったと言われています。よろしくお願いします。」

「ヴィルヘルム・テムです。兵の中で私が一番弓の扱いに長けていると自負しています。よろしくお願いします。」

「イルマ・ハーメルベルクです。メイジのランクはラインですが、『錬金』では他の者に負けないと思っています。よろしくお願いします。」

「わざわざ来てもらってありがとうございます。」

「それでヴァルムロート様、一体何をするのですか?」

「いまから行うのは銃の性能を見ようかと思いまして、長距離攻撃の比較として弓を使ってもらいます。」

「私は何のために呼ばれたのでしょうか？」

「ハーメルベルクさんには狙う的とその後ろに壁を作って欲しいのです。あと・・・」

「あと、なんなのですか？」

「・・・もしかしたら、銃にちょっと手を加えるかも知れないので、その時に『錬金』でお願いします。」

「はあ・・・分かりました。」

「じゃあ、的と後ろに壁を作ってください。あ、的は人の形を作った後に胴体部分にダーツで使っているような直径４０サントの丸い的を作ってください。」

「はっ、分かりました。」

「ヴァルムロート様、私もここで見ていてもいいですか？」

「ええ、もちろんです、先生。・・・そうだ、銃の射程距離ってどのくらいなのですか？」

「そうですね・・・確か１５０メイル位までなら届いたと思います。しかし届くだけでほとんど命中しませんけど。」

「１００メイル位ならどうですか？」

「１００メイルですか・・・それでも１０発撃って４発当たればいい方じゃないですかね。」

「・・・それでは５０メイルならどうですか？」

「５０メイルですか、それならある程度は当たると思います。」

「そうですか。では、ケーニッヒさんとテルさんにはいまから５０メイル離れた場所からあの人の胴体部分の的を５回連続で狙ってもらいます。なるべく的の中心部分に当たるようにねらってください。」

「はっ！分かりました！」

「はっ！分かりました！しかし、銃に負けるとは思いませんけどね。」

「ヴァルムロート様、こちらの準備は完了しました！」

「ありがとうございます。危ないのでこちらに来て下さ～い。」

「分かりました！」

ハーメルベルクさんがこっちに来たので、的から約５０メイル離れて、２人に的を５回連続で狙ってもらった。

「では、お願いします。」

「「はっ！」」

弓のテルさんは弓を構えて、矢を持ち、弦を引き、狙いを定めて矢を放った。

銃のケーニッヒさんは腰に付けた入れ物から火薬が入った入れ物を取り出し、まず出っ張りのふたを開け、そこに少量の火薬を入れ、蓋をし、そして銃身の先の方から火薬を入れ、銃身の下に付いていた棒でトントンと押し込んだ。
次に銃身の直径よりも小さい丸い弾を取り出し、中に入れ、それも棒でトントンと押し込んだ。
さらに持っていた縄の先に火を付け、引き金と連動して動く部分に付けた。
そして銃の底の部分を肩に付け、狙いを定めて、出っ張りの蓋を再度開け、引き金を引くと火縄が下がっていき、出っ張りの部分に着いたと思ったら、そこから煙が出て、次の瞬間、

バン！

という爆発音と共に弾が放たれた。

2人が5発づつ撃ち終わった。

「弓は1回に5～6秒で5回で30秒位、銃は1回15～20秒で5回で1分30秒位でしたね。・・・弓の方が圧倒的に早いですね。」

「ヴァルムロート様、さらに弓はこれより遠くから矢を射ることが出来ます。銃なんて高価なおもちゃみたいなものですよ。調べるだけ無駄なのでは？」

「そうかもしれませんが・・・それでは的に当たったかを見に行ってみましょう。」

「「「「はい。」」」」

遠くからでも弓は的に刺さっているのか見えるが、銃の方は良く見えなかったので的に近づいた。

「弓の方は全て的に当たっていますね。すごいですね！」

「いえ、このくらい当然です。」

「・・・で、銃の方は・・・なんて言うか、悲惨ですね。」

銃の方は的に当たっているものは5発中2発でその2発も的ぎりぎりだ。のこり3発は後ろの壁にめり込んでいる。

「ええ、私の腕のせいもあるかもしれませんが、あえて言わせてください。銃は射程距離、連射速度、命中率、どれをとっても弓に敵いませんし、火薬を使っていても弓とそう威力もかわりません。ですから銃はほとんど使われていないのです。」

「そうなんですか、先生？」

「はい。ケーニッヒの言う通りです。一度は兵団で銃を使うという話になったのですが、先ほどのような結果があり、結局採用は見送られています。あと威力に関してですが、遠距離からは確かに弓と同程度ですが近距離からではなかなかの威力でした。」

「そうですか・・・」

「銃の腕を買われて連れてこられた私が言うのはおかしいかもしれませんが、先ほどもイルマが言っていましたし、これ以上は無駄なのではないでしょうか？」

「まあ、無駄と決めるのはちょっと待ってください。ハーメルデルクさん、『錬金』をお願い出来ますか？」

「はい。お任せ下さい。それで今度は何をするのですか？」

「銃身の内側に溝を入れて欲しいのですけど、出来ますか？」

「はい。出来ると思います。それでどのような溝を作るのですか？」

「螺旋状の溝を等間隔で、そうだな・・・とりあえず６こお願いします。」

「な、なかなか難しいですね。」

「出来ますか？できないｎ」

「いえ！出来ます！出来ますとも！お任せ下さい！・・・しかし、少し難しいので少しお時間を下さい。」

「ええ、分かりました。お願いします。」

「ヴァルムロート様は何をやろうとしているのだろう？」

「そうだな。内側に溝なんて付けたら、でこぼこが引っ掛かって今より飛ばなくなるのではないか？」

「・・・まあ、ヴァルムロート様の好きにさせよう。いままでも驚くことを何回か行っているのだからな。」

（言いたい放題だな。まあ、しょうがないか。この世界じゃ魔法の方が“今は”圧倒的に強いからな。でも、どうしようか。俺自身銃をあまり知らないから適当に改良してみるけど、もしこれで飛躍的に銃の性能が向上したらメイジの地位が危うくなるんじゃないのか？・・・そしたら俺も危ないか？でも、そんなに簡単に性能は上がらないだろう。・・・ん？そう言えば・・・）

「そう言えば先生、今日は僕の指導は無いのですから他の人を見てあげなくてもいいのですか？」

「ヴァルムロート様、それは大丈夫です。うちの兵団に私がわざわざ指導するようなひよっこはいませんから、それにこれは旦那様の命でもあるのです。」

「父さんの？」

「はい。旦那様からヴァルムロート様は夢中になると周りが見えなくなるので、銃を見る時は絶対何かし始めるから危険がないように見守ってくれ、と仰せつかっています。」

「全部まるっとお見通しってことか。」

「ふふ、そのようですね。」

「ヴァルムロート様、『錬金』終わりました。」

「あ、ご苦労様です。あと弾の方も『錬金』で形を変えてもらえますか？」

「え？弾もですか？えぇ、分かりました。それでどのような形にしましょう？」

「はい。ドングリのような形にしてください。それでそこの部分はスカートかお皿のようにくぼみを作ってください。・・・あ、大きさは銃身の直径よりも少し小さめでお願いします。」

「それ位なら簡単ですよ。いくつくらい作りましょうか？」

「そうですね。とりあえず１０個作ってください。」

「はい。分かりました。」

そういうとハーメルデルクさんはケーニッヒさんから弾を受け取って、それを『錬金』して形を変えていった。

「ヴァルムロート様、先ほどから聞きたかったのですが、さっきから何をなさっているのですか？」

「え、銃の改造だけど？」

「いえ、それは見ていれば分かります。この改造で銃がどのように変わるのですか、と聞いているのですが。」

（ただ俺が知っている銃に少しでも近づけてるだけだしな。これで

どうなるかなんて俺には分からんな。）

「それは僕にも分かりません。単なる思いつきですから。」

「・・・そうですか。」

「そうです。・・・それではケーニッヒさん、この改造した銃でもう一度お願いします。」

「はい。分かりました。」

「テルさんとハーメルデルクさんは的の方にいて、僕が合図をしたら弾がどこに当たったかを知らせて下さい。」

「「はい。分かりました。」」

俺と先生とケーニッヒさんは的から５０メイル離れたところに、テルさんとハーメルデルクさんは的の方に行った。

「ではケーニッヒさん、今回は3回でいいので連続で的の中心部分を狙ってください。あ、弾は尖っている方が先になるように入れて下さい。」

「はい。分かりました。・・・では、行きます！」

ケーニッヒさんが先ほどと同じ動作をして3回的を狙った。

1分間に3回の銃声が鳴り響いた。

俺は少しわくわくしていた。

隣で見ていた先生の雰囲気が少し変わったことには気が付かなかった。

「テルさ～ん、ハーメルデルクさ～ん、弾はどこに当たりましたか～？」

俺の声を聞いて2人が的を見に行く。

「ヴ、ヴァルムロート様～！す、すごいで～す！ほとんど真ん中に当たってま～す！」

「おお、聞きましたか！ヴァルムロート様！まさかあれだけでこれだけ命中率が上がるなんて、すごいことですよ！」

「ええ、そうですね！では、もう少し離れてやってみましょう。今度は１００メイルからで。」

「ええ！１００メイルですか！・・・はい。分かりました！」

「テルさ～ん、ハーメルデルクさ～ん、またやるので2人は離れていてくださ～い！」

「「分かりました～！」」

俺達3人は的から１００メイル離れた。

「・・・ここから的、狙えますか？結構遠いですよ？」

「いえ、ぎりぎり大丈夫です。また3回狙ったらよろしいのですか

？」

「はい。お願いします。」

「・・・では行きます！」

また3回銃声が鳴り響いた。

先生の雰囲気がさらに厳しいものになっていた。

俺でも分かる位に。

「・・・先生？どうかしたのですか？」

「いえ、私は『遠見』を使って見ているのですが、今回も3発全てが的に命中しています。」

「え！本当ですか？・・・テルさ～ん、ハーメルデルクさ～ん、弾はどこに当たりましたか～？」

「ヴァルムロート様～！今回も全て的に当たっていま～す！」

「的のどこら辺に当たってますか～！」

「・・・中心からどれも１０サント位の所に当たっていま～す！」

「おお、結構いい感じで当たってますね。よし、もっと離れた所から狙ってみましょう！」

「ヴァルムロート様、これ以上離れると私では狙うことができませ

ん。」

「そうですか。・・・どうしようか。」

「・・・ヴァルムロート様。私も銃を扱えますし、『遠見』も使えるので私が変わりにやりましょうか？」

「・・・では先生、お願いしてもいいですか？」

「はい。私もこの改造した銃の性能がどれほどのものか興味がありますから。」

「では先生お願いします。ここからは5発ずつにしましょう。・・・あ、もう弾が無くなりますね。それではハーメルデルクさんにこちらに来てもらいましょうか。」

「ヴァルムロート様、私が呼びに行ってそのままイルマと交代します！」

「分かりました。ではお願いします。」

「はっ！」

ケーニッヒさんが的の方に走っていき、ハーメルデルクさんと2、3言葉を交わすと、ハーメルデルクさんがこちらに『フライ』で飛んできた。

「お待たせしました！ヴァルムロート様！銃の弾を『錬金』するのですね！」

「ええ、お願いします。」

「はっ！ちゃんとエルヴィンから弾をもらってきていますし、お任せ下さい！」

俺と先生とケーニッヒさんと交代したハーメルデルクさんの3人は的から２００メイルの所まで『フライ』で飛んでいった。

「ケーニッヒさ～ん、テルさ～ん、的から離れて下さ～い！・・・では先生、お願いします。」

「分かりました。・・・行きます！」

先生はおそらく『遠見』を使って的を狙って、改造銃の引き金を引いた。

５回銃声が鳴り響いた後、的を確認してもらうと５発中４発が的に当たっていた。

その後、２５０メイル、３００メイル、３５０メイル、と５０メイルずつ的から遠ざかって、５００メイル位まで試した。途中距離が足りなくなったりして場所を変えたり、先生の提案で５発から１０発に変更したりした。

「・・・この改造銃は３００メイル位までなら５割の命中率を持っています。ただし届く距離で言えば今回行った５００メイルよりも

さらに遠くからでも大丈夫でしょう。」

「まさか銃がここまでの可能性を秘めていたなんて知りませんでした！すごいですね！ヴァルムロート様！」

「・・・まさか銃が弓以上だなんて、驚きました！」

「ヴァルムロート様！先ほど的を『ディテクトマジック』で調べたところ、改造銃から発射された弾は普通の銃のものよりも深い場所にあることが分かりました！貫通力まで高くまるとは驚きです！」

（・・・なんか想像以上のものが出来ちゃったな。俺は精々２～３割増し位の性能アップだと思っていたんだけど、ここまでとは・・・）

「・・・あはは、僕も驚きですよ！」

「・・・ハーメルデルク。お前に聞きたい。お前がこの銃で３００メイル離れた所から狙われたら、自分を守れるか？」

「え！？そうですね・・・３００メイル離れていても銃声を聞いてからではすでに遅いですから、初めから相手が狙っていると知らなければ難しいと思います。」

「では、すでに防御の魔法を使っていたらどうだ？」

「今回的の後ろの壁が貫通している様子は無かったので大丈夫だと思います。」

「そうか。土系統のお前に聞くのは違うかも知れんが、他の水や風の系統ではどう思う？」

「そうですね・・・得意とする系統が違うので確実なことは言えませんが・・・ラインの上、くらいの実力がなければ難しいかと思われます。」

「やはりお前もそう考えたか・・・」

俺達5人の空気が張り詰める。

「先生、ハーメルデルクさん、つまり・・・この改造銃は『こいつは・・・強力過ぎる』になってしまった、ということですか?」

「その言い回しは的確ですね。いままでも銃や弓は“メイジ殺し”といわれるようにメイジ以外がメイジを殺すことを可能としています。しかし、これまでの銃は射程の短さ、命中率の悪さ、弓と同程度の威力からよっぽど腕の悪いメイジくらいにしか通用しませんでした。弓は確かに銃よりは射程はありましたが、矢を射ってから当たるまでに時間があることが欠点でした。」

「・・・だから、そこまでの脅威ではなかったと?」

「ええ。しかし、この改造銃は違う!弓に匹敵する射程距離!改善された命中率!そして威力の向上!しかもこれはマジックアイテムでも何でもない“ただの銃”です。その気になれば大量に作り出すことが出来、平民でも覚えれば扱える!このことからこの改造銃は今現在ハルケギニアに存在するどの武器よりも強力な“メイジ殺し”になってしまったんです!」

「せ、先生。そこまではさすがに言い過ぎではないのですか?」

「いえ、いいすぎではありません！もしこの銃がロマリアあたりにでも知られれば異端審判にかけられるかもしれません！」

「う、嘘ですよね？」

「いえ、ロマリアは魔法至上主義ですからその魔法を脅かす、とすればそうなる可能性も零ではありません！むしろそうなる可能性の方が高い位です！」

「・・・そうなんですか。」

（ロマリアうぜえええええええええええええ！！！）

「そういうことで、ケーニッヒ！テル！ハーメルデルク！今日ここで見た聞きし、体験したことは今後口に出すことを禁止する！いいな！！」

「「「はっ！絶対に今後このことは口に出しません！」」」

「ただし、今回のことを聞かれて頑なに無言で貫くな！今回のことはヴァルムロート様が銃の性能を見たと言って行い、その結果は散々なものだった。と言っておけ！」

「「「はっ！」」」

「すみません。なんかとんでもないことになってしまって・・・」

「いえ、私達だけでなく兵の皆、ヴァルムロート様のことをお慕いしていますからこんなことどうということはないですよ！」

「その通りです！この秘密は墓まで持っていきます！」

「ブリミル教の権威を振りかざしているだけロマリアの連中にうちの若旦那を渡すことなんて絶対にあり得ないことですから！」

「ケーニッヒさん、テルさん、ハーメルデルクさん、ありがとうございます！」

「・・・よし、今日はもう解散だ！お前達は戻って休め。」

「「「はっ！」」」

ケーニッヒさん達3人は駆け足で兵舎の方に走っていき、俺と先生が残された。

「先生は兵舎に戻らなくてもいいのですか？」

「ええ、これからこのことを旦那様に報告しに行くますので・・・ところでヴァルムロート様。少しお聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」

「何ですか？」

「それでヴァルムロートの様子はどうだった？今日銃を見せたのだろ？」

「旦那様、危うく・・・いやもう出来たか。ヴァルムロート様は最

強のメイジ殺しを作られてしまいました。」

「何！銃はおもちゃ同然の代物ではなかったのか！？なぜそれがいきなり最強のメイジ殺しになるんだ？説明しろ、シュバルツ！」

「はい。・・・

・・・説明中・・・

・・・ということです。」

「そのようなことがあったのか。我が息子ながら末恐ろしい。」

「いえ、旦那様驚くのはそこだけではありません。」

「何！まだ何かあるのか！？」

「はい。他の３人と分かれた後、ヴァルムロート様と一緒に御屋敷に戻ってきたのですが、その時に・・・

「今回の銃の改造はどのように思いついたのですか？よければ教えて頂きたいのですが。」

（え！？マジか！やっぱりそこはスルーしてくれないか。どうする？・・・ジャイロ効果とか言っても分かんないだろうし、さらに不思議がられるぞ？どうする？）

「・・・」

「教えては頂けないのですか？」

（どうする、どうする・・・あ！！）

「・・・コマ。」

「コマ、ですか？コマがどうかしたのですか？」

「コマって回っている時は倒れずに安定していますよね。それで同じように銃の弾に回転させればせめて真っ直ぐ飛ぶかな？と考えたんです。ここまですごくなるとは思いませんでしたけど。」

「うーん、分かるような分からない様な。しかし、他の人ではコマの回転を銃の弾に応用しようと考える者はいないでしょう。・・・ちなみに他にも何か考えたことはありますか？」

「銃についてですか？」

「はい。」

「そうですね・・・まず、今着火に火縄を使っているのでそれを火打石に変えること。これでいちいち縄に火を付けなくて済みます。」

「ふむふむ。」

「次に今の銃は前から火薬や弾を入れてますけど、それを後ろから入れられるようにすること。これで連射速度がかなり早くなると思います。」

「ふむふむ・・・」

「今は火薬と弾を別々にしていますが、それを1つのものにすること。これなら携帯性やさっき言った後ろから込めるのと合わせれば連射速度の向上をさらに引き上げるでしょう。」

「ふむ、ふむ・・・」

「あ、火薬と弾を1つにするんだったらいっそ弾の中に小さな火打ち石でも仕込んで後ろから強く叩くことで発射するようになればいいかも！」

「ふむ・・・ふむ・・・」

「それだったらいまの引き金連動じゃダメだな。むしろ引き金を引いたら一気に叩きつけるようにバネを付けよう！」

「・・・」

「長距離から狙うんだったら肉眼じゃきついから、なにかマジックアイテムで『遠見』を再現させて・・・」

「・・・ヴァルムロート様、もう、いいです。」

「え？そうですか？」
（やべ！やりすぎたか！？）

「ヴァルムロート様、そのことは絶対に、絶対に！他の者には公言しないで下さい！いいですね！」

「はい！分かりました！」
（あちゃー、つい調子に乗ってしまった。危ない、危ない。）

・・・と、言うことがありまして、ヴァルムロート様にはまだまだ銃を強化できる案をポンポンと出しておられました。」

「シュバルツ、その話他の者に聞かれなかっただろうな？」

「はい。『ディテクトマジック』を周囲にかけて人がいないか常に探っていたので大丈夫です。」

「そうか。・・・しかしヴァルムロートにはいつも驚かされるな。」

「ええ、そうですね。もしかしたらハルケギニア１の神童かもしれませんね。」

「ふふ、シュバルツよ。鳶が鷹を産んだ、とでも言いたいのか？」

「いえ、旦那様も鷹でございます。」

「ふ、まあいい。今後もヴァルムロートが何かやりそうな時はなるべくフォローしてくれ。」

「はっ！了解しました！」

ヴァルムロート自室にて、

「今日の銃の件はやりすぎたかもな。下手したら異端審判だって・・・。もう少し自重するか、もっと穏やかな進歩なら大丈夫かな？」

「穏やかな進歩ってなんだよ？・・・はぁ、ダメだな、こりゃ。なるべく自重する方向で行こう。」

「でも銃は封印か。ちょっともったいないような、これで良かったような。・・・まあ、元から銃を使うつもりは無かったけどな、どう考えても『トランザム』と相性悪すぎ。」

「でも、今回のでハルケギニアの銃がどんなものか大体分かったな。原作までにそこまで進歩しないだろうし、あまり恐れるものではないな！」

火縄銃はマスケットと呼ばれる銃の1種（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ハルケギニアの銃はマスケット銃というものらしいですね。
今回は原作より前なのでマスケット銃の初期型として銃の大きさは長銃身のもので、火薬なども別々に持っています。

きっと原作では短銃身のものが出来、火薬なども1つの紙に弾と一緒になった紙薬莢とかが出来るんでしょう。ライフリングはなさそうですが。

次の話はとうとう人体実験の話です。描写とかはあまり期待しないでくださいね。

ご意見・ご感想があれば書いてみて下さい。

ハルケギニアに刑務所はあるのか？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

カトレアさんの治療の為の実験最終段階、人体実験に突入です。

・・・が、今回は人体実験直前までの話です。

あ、一応今回から「Ｒ１５」「残酷な描写あり」のタグを追加します。

俺がヴァリエール家に行く数日前の夜、

「キュルケ、いいかしら？」

「あら、お母様。どうかしたの？」

「大事な話があるの、お父さんの書斎にいらっしゃい。」

「え？ええ、分かりましたわ。」

「お父さん、キュルケを連れて来たわ。入るわね。」

「ああ、いいぞ。」

「失礼します。・・・あら、お母様達にお姉様達まで一体どうしたの？」

「ああ、大事な話があるんだ。キュルケ、お前にとってな・・・」

「私にとって？・・・あら、ダーリンはいないのね。」

「まあな、これはヴァルムロートを驚かしてやろうというのも含まれいるからな。」

「ダーリンを驚かす？・・・お父様、一体なにをするおつもりなのですか？」

「それを今から話す。だがな、初めにこれだけは聞いておくぞ。」

「何かしら?」

「キュルケ、お前・・・ヴァルムロートのこと、本当に好きか?愛している、と言えるか?どんな困難があってもヴァルムロートと一緒にいると言えるか?」

「お父様・・・そんなものはいまさらですわ!私の心はダーリンのことを考えるだけでこれ以上ない位燃え上がるわ!どんな困難があっても私とダーリンがいればなんでもないわ!」

「・・・そうか。それを聞いて私も決心したよ。」

「「「あなた・・・」」」

「「「お父様・・・」」」

「何?このことを聞くためにここに呼んだの?」

「いや違うぞ。・・・では、キュルケをここに呼んだ理由を話そう。心して聞いてくれ。」

「え、ええ。分かったわ!」

俺がヴァリエール家に行く日になった。家の前には馬車が止まって

いる。乗るのは俺1人だ。

俺の出発に家族皆と家のメイドさんがお見送りに来てくれている。

「では、父さん、母さん達、姉さん達そしてキュルケ。行ってきます。」

「うむ。気を付けて行けよ。」
「あちらに失礼が無いようにね。」
「体に気を付けてね。」
「ちゃんと寝るのよ。」
「しっかりね。」
「烈風を怒らせないようにね～。」
「お土産よろしく。」

「頑張ってね、ダーリン！」

（キュルケ、ほんとに付いてこないんだ。てっきり急に『私も行くわ！』とか言うかと思ってたのに・・・）
「じゃあ、行ってきまーす！」

「「「「「「「「「「いってらっしゃーい！」」」」」」」」」」

こうして俺は皆に見送られてヴァリエール家に向けて出発した。

「行っちゃったわね、ヴァル。」

「ああ、あいつはしっかりしているし、大丈夫だろう。・・・では私達も支度を始めよう。」

「ええ、こっちもいろいろしないといけないわね。」

「でも、このことを教えるのをなぜ魔法学院の入学の前なの？もっと早く出来るのに。」

「お父様が考えるにはヴァルの入学祝いみたいなものなんですって。まあ、学院には、ね。」

「ああ、なるほど・・・」

「ふふふ・・・待っててね。ダーリン！」

1人旅（馬車の操手はいるけど）で暇を持て余しながら、俺は約4日かけてヴァリエール家に到着した。

「おお、来てくれたか。待っていたぞ、ヴァルムロート君。」

「いらっしゃい、ヴァルムロートさん。今日は家でゆっくりされるのかしら？」

「ご無沙汰しています、ヴァリエール公爵様、カリーヌ様。今日か

らお世話になります。」

「いやいや、こちらこそよろしく頼むよ。ヴァルムロート君の部屋は用意している。いま案内させよう。」

「ありがとうございます。」

それからヴァリエール公爵が呼んだメイドさんに部屋まで案内してくれた。

「こちらが本日からツェルプストー様のお部屋になります。何か御用がございましたら、近くの者に仰ってください。すぐにお伺いします。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「・・・え!?」

(ん?なんかびっくりした顔になっているけど、どうしたんだ?)

「え?何か変なこと言いました?」

「いいえ!もったいないお言葉です!に、荷物はお食事の間に他の者がお部屋に入れておきます!」

(なんか緊張?してるみたいだな。なんだろう?メイドになってから日か浅いのか?)

「分かりました。お願いします。」

「そ、それでは食堂の方に案内します!すでに旦那様方は向かわれ

ているはずです！」

（まあ、食堂の位置位もう知ってるけど、ここで断ったらこのメイドさんに迷惑かけるかもな。）

「ええ、お願いします。」

「で、ではこちらにどうぞ！」

食堂にはヴァリエール公爵とカリーヌさん、カトレアさん、ルイズがいた。

俺の席はどうやら公爵とルイズの間の席らしい・・・別に端っこで良かったのに。

「お待たせさせた様ですみません。」

「いやいや、皆今集まったところだ。気にすることは無い。」

「皆？エレオノールさんはいないのですか？」

「ヴァルムロートさんが来て下さるのはいつも私の誕生会でしょう。お姉様はいつもはトリスタニアの王立魔法研究所に勤めていてなかなか帰って来ないのよ。」

「エレオノールにも困ったものね。研究ばっかりでヴァリエール家の長女としての自覚はあるのかしら？この間だって・・・」

「そういうな、カリーヌ。エレオノールだって頑張っているのだよ。

」

「・・・ルイズ、エレオノールさんがどうかしたの？」

「・・・エレオノールお姉様、また、お付き合いしていた男性に逃げられたみたいなのよ。というか、ヴァルムロート、あなた何しに家に来たの？お父様達は仕事って誤魔化してるけど。」

「そうだな・・・まあ、確かに仕事みたなものかな。しばらくの間ここにお世話になるから、よろしくな。あ、でも昼間はほとんど屋敷にはいないと思うから。」

「昼間ほとんどいないって、どんな仕事なんだか・・・まあいいわ。お父様達が許可しているんだもの、私がとやかく言えないわよ。」

「そういうことですので、カトレアさんもよろしくお願いします。」

「ええ！よろしくお願いします、ヴァルムロートさん。ふふ、なんだか楽しくなりそうね！」

「ヴァルムロート・・・長期滞在だからってちぃ姉さまに何かしたら、承知しないわよ！」

「なにもしないって！」

（カトレアさんに何かしたらカトレアさんの体自体が持たないかもしれないし、いや持つならやるとかではないが。しかもおそらく、いや、確実にカリーヌさんに殺されると思うし。）

「うふふ。」

次の日、メイドさんに起こされた。俺が着替えようとすると手伝おうとしてきたので丁重にお断りし、寝巻の洗濯をお願いした。

そのメイドさんが出ていくと、別のメイドさんが入ってきて、ヴァリエール公爵が呼んでいると教えてくれた。

メイドさんに案内されて公爵の書斎に来た。

「旦那様、ツェルプストー様をお連れしました。」

「うむ。」

「それでは、ツェルプストー様。どうぞ。」

「ありがとうございます。・・・失礼します。」

「朝早くからすまないな、ヴァルムロート君。例の件の話なんだが、今日から始めるのかね?」

「そうですね。早い方が良いのですが、その前にその場所を案内してもらってもいいですか?それとカトレアさんの手術に参加するメイジをヴァリエール公爵様にあと2人ほど今日中に選んで欲しいのですが、お願いできますか?」

「なかなか急だな。その者達にも例の件を一緒に行うのか?」

「はい。いきなり本番では戸惑うことも多いでしょうし。」

「分かった。例の場所にはミス・リッシュに案内してもらえるようにこちらから言っておこう。出発は、そうだな・・・昼食後でいいかな？」

「ええ、それで構いません。ちなみにその場所は遠いのですか？」

「そうだな。馬を３０分ほど走らせた森の中にあるぞ。」

「そうですか。遠かったらあちらに泊まりこみしないといけないかな、と考えていました。」

「そうか、余計な心配をかけさせたようだな。」

「いえいえ、それではヴァリエール公爵様はお仕事があると思うので、これで失礼します。」

「ああ、こちらから呼んだのにすまないな。では、私はこれからあと２人をだれにするか考えるとしよう。」

昼食を食べ終わって、カトレアさんやルイズと食後のお茶を飲んでいるとメイドさんがやってきた。

「ツェルプストー様、お茶のところ失礼します。リッシュ様が玄関にてお待ちになっています。」

「準備が出来たんですね。分かりました。・・・カトレアさん、お

茶の途中ですけど仕事の準備が出来たようなので僕は行きますね。すみません。また時間がある時においしいパイを御馳走してください。」

「ええ、その時は腕によりをかけて作りますね。」

「もうヴァルムロートの仕事って何なのかしら?ちぃ姉さまとのお茶の時間を中断させるなんて。・・・あ、ちぃ姉さま、パイを作るのならクックベリーパイにして下さいね。」

「ええ、分かったわ、ルイズ。」

「では、失礼します。」

「ええ、行ってらっしゃい。」

「まあ、また誘ってあげてもいいわよ。」

玄関に行くとカミーユさんが待っていた。

「すみません、カミーユさん。お待たせしてしまって。」

「いえ、では早速行きましょうか。」

「はい。お願いします。」

ヴァリエール家を出てすぐに森に入る道があり、そこから３０分位

馬を走らせるといきなり森の中に砦が建っていた。

「ここ、ですか？」

「はい。ここです。」

「なんかすごい建物ですね。まるで砦ですよ。」

「いえ、まるでも何もこれは砦としても利用可能ですよ。」

「え、そんなに立派な建物じゃなくてもいいようなものなのに・・・」

「ここは元々処刑されるはずの罪人達がいるのですから、それなりの建物でないといけないでしょう。」

（そうか、刑務所みたいなものか。そういえばハルケギニアに刑務所とかあんのか？城とかの地下に牢屋とかはありそうだけど、どうなのかな？やっぱり、罪人はどっかの鉱山で強制労働とか？）

「・・・そういわれれば、そうですね。」

なんて話しているうちに建物の前に着いた。入口の所には門番であろう兵士がいる。

「これはリッシュ様。後ろの方はどなたですか？」

「この方が今回の発案者ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーだ。」

「おお、あなたがそうですか。」

（こんな罪人のいるところを守る役割とかさせて・・・すみません！）

「あ、どうも。ご苦労様です。」

「それでは中を案内します。」

俺とカミーユさんは馬を建物の外に繋いで中に入った。

「この建物は地上2階、地下2階の構造になっています。1階は実験をするための部屋と門にいたの衛兵の部屋、そして簡単ではありますがキッチンとそこで働くコックの部屋があります。2階は会議に使える部屋と衛兵とは別の私達の仮眠室がこちらにあります。そして地下1階と2階に罪人がいます。」

「罪人がいるところはどんな感じですか？」

「そうですね・・・普通の牢屋と同じでしょうか。」

「それはあまりきれいではない、ということですか？」

「ええ、そう言うことにありますね。掃除とかもしませんし。」

（衛生環境が悪いのか、実験しても衛生環境が悪いとあまりいい結果が得られないかもしれないな。せめてある程度の頻度で掃除位はして欲しいな。）

「・・・罪人自身に掃除させるか？」

「メイドは・・・いえ、相手は罪人、危険ですね。そうすると罪人にさせるのが良いのですかね。しかし、素直に掃除するでしょうか？」

「そうですよね。魔法で脅せばある程度はやってくれないですかね？」

「それはどうでしょう？」

「そうだ！『スリープクラウド』で眠らせている間にささっと掃除してもらえばいいのではないですか？これならメイドさんにも頼めるし。」

「そうですね！あとでヴァリエール公爵様に進言しておきましょう。」

「あ、食事の方はどうなんですか？やっぱり臭い飯、ですか？」

「そうですね。さすがに腐ってはいませんが、やはりあまりいいものは出せませんね。」

「そうですか、なるべくなら平民が普段食べているものがいいのですが。」

「そのくらいでしたらなんとかなるかもしれませんね。これも進言しておきます。」

「お願いします。」

このあと実際に各部屋を見て回った。

1階には手術室が1部屋、主にここに来るようになるだろう。それと衛兵の部屋と小さいがモノはある程度揃っているキッチンがあり、ここに数人のコックが働いていた。ここで衛兵の食事や地下の罪人の食事を作っているのだろう。

2階は少し大きめの会議室とベットが置いてある部屋がいくつかあった。ついでにベランダみたいに外にでれるところがあったりした。

地下は軽く見た程度だが、薄暗くてゲームに出てくるような感じの牢屋だった。

そして少ししか地下にいなかったのにこれまでの人生（前世も含め）とそしてこれからの人生でここまで罵倒されることは無いだろうと思える位に罵倒されまくった。

地下から出た時にカミーユさんに心配された。どうやら結構堪えたようだった。

「気にすることはありませんよ。あんなの罪人の戯言ですよ。」

「そうかもしれませんが、これから彼等に行うことを考えると否定はしきれなくて・・・ああ、世界の悪意が見えるようだよ。」

「彼等は世界のはみ出し者です。悪意の塊のようなものですから、そう見えても不思議ではありませんが。何度も言うようですが、気にしない方がいいですよ。」

「・・・そうですね。気にしないようにします。」

「ヴァルムロート君、あそこに行ったのだろ。どうだったかね？」

「はい。僕が思っていたよりも立派な建物でした。」

「そうかそうか。こちらもメイジを2人選んでおいたぞ。」

「そうですか。ありがとうございます。明日前選んで頂いたメイジの人とその2人を連れて、早速取りかかりたいと思います。」

「そうか。分かった。・・・で、最初は何をするんだ？」

「最初は彼等の身体能力を測定したいと思います。そしてそののち実験を開始します。」

「どうしていきなり実験をしないんだ？」

「この実験はカトレアさんの手術の為の実験です。カトレアさんの手術は空気を取り入れる部分をある程度切除しないといけないかもしれません。この部分は体にとって非常に大切な所なのです。このことはネズミを使った前実験で少しは分かっています。」

（まあ、肺がないと酸素を体内に取り込めないからな。）

「うむ、それで実験によってその部分をある程度切除したものの前と後で比べて影響がどれくらいあるかを調べるということだな。」

「はい。最悪の場合、命の危険は無くなってもそれまでと同じようにあまり活発に動けないこともあるかもしれませんし、そこがどうなるかを調べたいと思います。」

「そうか、カトレアの為にも頑張ってくれ。」

「はい！」

次の日、玄関にカミーユさんとあと3人いた。あの人たちが今回手術を手伝ってくれる人達だろう。

「おはようございます。カミーユさんこの方達はどなたですか？」

「ヴァルムロートさん、おはようございます。この子たちが手術を手伝ってくれるようですよ。」

「そうですか。僕はヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと言います。よろしくお願いします。僕のことはヴァルムロートと呼んでください。」

「はじめまして、ヴァルムロートさん。私はイネス・フレサンジュ、土メイジです。旦那様に言われてカトレア様の心臓の動きを見ていました。」

（イネスのＩはアイのＩってか。）

「あなたがそうでしたか、今日から実験にも付いてきて頂きたいの

ですが、大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫です。」

「はじめまして、私はロザミー・ヴィオレ・ル・ルッシュです。姉がここで働きだしたのでその伝手を頼ってきました。あ、水のメイジで回復魔法は得意ですよ。」

「ルッシュで姉ってことは・・・カミーユさん？」

「ええ、私の妹なんです。ここに来るまで私って特定の所に長居しなかったので、それまでは妹も私に付いてくるのは諦めていたみたいなんですが、今回のことで私がここにいると知って来たようなんです。でも、私が言うのもなんですがこの子も回復魔法はなかなかなものですよ。」

「姉さんはそろそろ結婚した方がいいのになかなかしないから、私が急かしに来たんです。まあ、私も公爵家ならいい所の３男、４男位はいるかな？と思っていますけどね。あ、これ内緒にしててくださいね。」

（・・・まあ、別に言わねえけど。）

「あはは、お願いしますね。」

「はじめまして、私はセシール・フェア・ル・ロワと言います。水の系統魔法を得意としています。これからよろしくお願いしますね。」

「よろしくお願いします。皆さんのことはイネスさん、ロザミーさん、セシールさんとお呼びしても構いませんか？」

「「「はい。大丈夫です。」」」

「では、行きましょうか。」

「それでヴァルムロートさん。今日から始めるのですけど何から行うのですか？」

「最初は罪人たちの身体能力の測定を行いたいと思います。これは実験前と後で行うことでその実験がどのくらい体に影響を及ぼしたのかを大体ですが知ることが出来ると思います。」

「なるほど。・・・どうやって、身体能力を量るのですか？」

「ああ、それなんですけど。僕達が1人の罪人に数人付いて森の中を走ってもらい、倒れるもしくは走れなくなるときまでの時間をその人の身体能力の基準とします。」

「・・・結構大変ですね。どうやって罪人を追うのですか？馬ですか？」

「馬でも構いませんが、森の中なので馬では厳しいと思います。ですから『フライ』で追尾し、休憩しそうになったら魔法を放って休ませないようにして下さい。あ、でも体に当てないぎりぎりか怪我しないくらいでお願いしますね。相手は罪人なので油断はいないようにして下さい。」

「「「「分かりました。」」」」

それから俺達の地味で気が遠くなるなるような日々が続いた。

罪人は逃げれると思ったのか、結構走る。そのせいか俺が思ったよりも体力が持った。

どうやらカミーユさんが事前に罪人に逃げ切れたら、そのままどこかへ行ってもいいとか煽っていたようだ。

結局３０人いる罪人全ての測定が終わるのに１０日掛かってしまった。

ハルケギニアに刑務所はあるのか？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

書いてて思ったのですが、主人公達がやってることって人狩りだな。
真面目にやってる所が逆にシュールな感じになってそうだ。

刑務所って調べたら今の形のものが１６世紀に出来たらしいですね。
ということはハルケギニアにもあるのかも？

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてください。

初めての・・・（前書き）

こんにちは。こんばんは。

カトレアさん治療のための人体実験本格スタートです。
おそらく2話構成になると思うので、前編ということで。

初めての・・・

「では、今日から人体実験を始めたいと思います。」

ここはヴァリエール家が用意してくれた施設の2階にある会議室だ。

カミーユさん、ロザミーさん、イネスさん、セシールさんと俺の5人がいる。

「ヴァルムロートさん、人体実験って公爵様から聞いていましたが、何を行うのですか?」

「人体実験で行うことを簡単に言うとまず体の構造を知ること、次にカトレアさんは空気が入る部分に病気があるのでその部分についていろいろ調べます。そして最後に実際カトレアさんに行う手術の練習、となります。最後の方に行う手術の練習では手術の半年から1年後の経過観察を行います。」

「はい!質問です!」

「なんですか?ロザミーさん?」

「体の構造を知るとはどういうことですか?」

「これはまず体を開いて、体の構造を知ることから始めるということです。」

(ハルケギニアには医学とか無いだろうからな。)

「どの罪人で行うのですか?カトレア様の手術のための実験なので

すから、女性ですか？」

「セシールさん、女性は人数が少ないのでもっと重要なことに使うべきではなくて？私がいままでに『ディテクトマジック』で“診る”かぎり体の中の構造はほぼ同じだったわ。だから人数の多い男性にするべきではないかしら？どう思われます？ヴァルムロートさん。」

「そうですね、イネスさんの言うとおりここは男性でいきましょう。」

「ヴァルムロートさん、『ディテクトマジック』で“診る”ことが出来るのなら、わざわざ体を開く必要はないのでは？」

「確かに『ディテクトマジック』で“診る”ことは出来ますが、実際に“見た”方が今後イメージしやすいでしょうし、本番の手術でも体をある程度開くことになるので慣れておくという意味合いもあります。」

「なるほど、場数を踏もうということですね。」

「はい。そういうことですね。」

（初めて見たら下手したら気絶するかも・・・俺が。）

「はい！空気が入る部分について“いろいろ”調べるの“いろいろ”って何ですか？」

「それはですね。この空気が入る部分を仮に“肺”と名付けて、この肺をどのくらい切除するとどのくらい体に影響が出るのかや、肺に穴が開くとどうなるのか、ということをすでにネズミを使った前

実験で行ったのですがそれが人間になるとどうなるのかを調べたいと思います。」

「はぁ、ヴァルムロートさんはネズミを使ってすでにある程度調べているのですね。」

「それにしても空気が入る部分の名前を肺と名付けるのですか、確かに呼びやすくはなりますね。」

「はい！カトレア様に実際に行う手術の練習を行うのはいいのですが、どうして半年から1年後の経過観察を行うのですか？」

「それはですね、手術をしてもその後健康に生活出来なければ手術をした意味がないじゃないですよね。そこでとりあえず術後半年から1年の経過観察を行いたいと思いました。」

「確かに折角手術してもその後に最悪死んでしまったら意味が無いですね・・・」

「他にも何か質問があれば随時応えられるものには応えていきたいと思います。だた行うこと全てが初めてのことだと思うのでほとんど皆で考えていくことになると思いますが。」

「それでいいのではありませんか？」

「ヴァルムロートさん1人に全て押しつけるというのもいけないと思いますし。」

「そうね。皆で頑張りましょう！」

「それで、男性のどの罪人を連れて来ましょうか？」

「そうですね・・・では、身体機能が低い平民の男性にしましょう。あとこれからは“罪人”とう呼び方ではなく、“被験者”という呼び方で呼んで下さい。」

「「「「ヒケンシャ、ですか？」」」」

「ええ、実験を被る人で“被験者”です。いつまでも罪人と呼ぶのも良くないかな、と思いまして。」

「ええ、分かりました。これから人体実験をする罪人を“被験者”と呼ぶことにします。他の人もよろしいですか？」

「「「はい。」」」

俺達は汚れないように服の上から白色ではないが白衣を着、口は布で覆った。

地下の部屋から被験者を連れてくるのは『スリープクラウド』で眠らせて、『レビテーション』で実験室まで運んだ。

実験室の台の上に仰向けにして、『スリープクラウド』が解けた時の為に両手足を台に縛り付けた。

「ではこれから体を開きたいと思います。今回は観察する為なので胸の前面を開けますが、カトレアさんに行う時などの本番の手術では少ししか開けないので今回しっかり見ておいて下さい。」

「「「「分かりました。」」」」

「あの、どうしてカトレア様に行う時は少ししか開かないのですか？大きく開いた方が見やすくて作業もしやすいと思うのですが？」

「確かに大きく開いた方が見やすいですけど、それだけ体への負担も大きくなります。」

「つまり体への負担を少なくするために開く部分を狭めるとうことですね。」

「そういうことです。・・・では、始めます！」

そういうと俺はまず『ブレイド』で魔法の刃を3サント位出した。

『ディテクトマジック』で体を診て、俺から見て右の鎖骨の辺りから刃を慎重に入れていく。

俺は初めて人に対してこういうことをすることに緊張して少し手が震えていたが、一方で本当に『スリープクラウド』が効いていることにほっとしていた。

鎖骨の下には大きな動脈があるようなのでそれを傷つけないように肩の前位まで切り、そこから下に行って肺を切らないように肋骨を切断しながら横隔膜のところまで行った。

気が付くと俺はすごい手汗を？いていたので、杖を落とさないように汗を白衣で拭い、杖を持ち直した。

そこから横隔膜に沿って横に切り、横腹を上がりながら肋骨を切って、左の鎖骨にいき、ぐるっと1周切り終わった。

そこからカミーユさんに『レビテーション』で切った部分を持ち上げてもらい、まだ内側に付いている部分を削いでいった。

そして大きな出血はないもののあるのもはあるので『ヒーリング』により止血してもらった。

こうして胸の部分を開くことに成功した。

首の所から気管とその下に食道、そして気管は2手に分かれて左右の肺に繋がり、中心より少し俺から見て右側に少し肺に隠れて心臓が脈打っていた。

（めっちゃ緊張した・・・）

「・・・ふう、ようやく開くことが出来ましたね。」

「ええ、しかし・・・」

「『ディテクトマジック』で“診る”ことは何度もありましたが、実際に“見る”となんというか・・・」

「ええ・・・すごいですね！」

「お姉様、この真ん中で動いているのが心臓ですか？」

「ええ、おそらくそうね。実際に見るのは初めてだけど。」

「この両側にある大きいものが肺ですか？」

俺は『レビテーション』で肺を浮かしながら、

「ええ、そうだと思います。人の肺はこちらから見て右が2つ、左が3つに分かれているようですね。ネズミとは違いますね。」

「お姉様、この被験者って本当に『スリープクラウド』が効いているのですか？ここまで体を開いたのだから、もう亡くなっているのではありませんか？」

「・・・え！？」

（おいおいおい、何言ってんの？ロザミーさんよ！？）

「でも、心臓はまだ動いているのだからまだ生きているでしょう。」

「でもこの状態で魔法を解いたらどうなるのか知っておく必要はあるかもしれませんね。」

「ちょ、イネスさん！？」

「それは確かに知っておく必要がありますね。」

「セシールさんまで！？」

「どうでしょうヴァルムロートさん。カトレア様の手術中に魔法が切れるというアクシデントが起こらないとは限りません。ここは試

しに魔法を解いてみてるというのはいかがでしょうか？」

（確かにカトレアさんの時に魔法が絶対切れないという保証はない。というかまだ『スリープクラウド』が何時間効き続けるか調べてもいないからな、これは今度調べよう。）

「・・・そうですね。これから手術の練習を行う中でそういうこともあるかも知れませんし、カトレアさんのときにもないとは言い切れませんね。」

「それでは。」

（おそらく魔法を解いたら想像絶する痛みが被験者を襲うんだろうな・・・いや、これくらいで悩んでいてもこれからもっと酷いことを被験者達に行っていくのだから覚悟を決めないと！・・・覚悟？・・・俺って結構甘い考えでここまで来てたんだな。）

「・・・いいと思います。それでどうやって『スリープクラウド』を解くのですか？」

「それは・・・この秘薬を使用します。」

カミーユさんは部屋の棚にあった瓶を持ってきてそう言った。

「これを口に含ませれば、あっと言う間に起きます！」

（気付け薬の１種かな？）

「そうですか。では、お願いします！」

カミーユさんが被験者に秘薬を口に入れた瞬間、

「！！！・・・！！！・・・！！！」

被験者の目がこれ以上ない位開き、固定された手足をもげんばかりに動かして、心臓は破裂してしまうんじゃないかと思う位激しく脈を打ち、口を大きく開けて声にならない悲鳴を上げているようだった。

「「「っひ！」」」

「カ、カミーユさん！早く！魔法を！」

「え、ええ！『スリープクラウド』！」

カミーユさんが再度『スリープクラウド』をかけると、被験者はまた静かに眠った。

「・・・驚いたぁ。」

「驚いたわね・・・途中で魔法が解けると、ああなるのね。」

「これは魔法の効いている時間も調べないといけませんわね。」

（この『スリープクラウド』の効きめはポケモンのうたうやさいみんじゅつみたいに効くな。）

「そうですね。この次の実験は『スリープクラウド』の有効時間を調べることにしましょう。」

「それがいいですね・・・」

俺はふと被験者の顔を見た。

すると被験者の唇が紫色のようになってきて、呼吸も満足に出来ないようだった。

（これは酸素不足によるものか！？）

「・・・まずいな。誰か風系統の魔法使えませんか？」

「どうしたのですか？」

「胸を開いたことで呼吸ができない状態になったので、風魔法で肺に直接空気を送りたいのですか、誰か使えませんか？」

「私は水専門ですから・・・風はちょっと。」

「私もです・・・」

「私は土だから風と相性が悪いので・・・」

「私も風は・・・」

（俺は風系統はなかなか上達してなくて、まだ細かな操作とか出来ないんだよな・・・）

「・・・と、いうことはこの中で風系統の魔法を満足に扱える人はいないということですか。」

「そう、なります。」

被験者の様子はますます悪くなってきて、顔全体が紫色のようになってきた。

金魚鉢にいる金魚のように口をパクパクさせたかと思うと、それ以上は動かなくなった。

俺達はその様子をただ見ているしかなかった。

そうするうちにあんなに激しく動いていた心臓の動きがどんどん弱くなっていき、最後には止まってしまった。

「・・・」

「・・・被験者、亡くなりましたか?」

「・・・ええ、心臓の動きが無くなりましたし。」

「・・・これからどうします?ヴァルムロートさん?」

「・・・」

「ヴァルムロートさん!」

「・・・え、あ、はい。今後の為に各自肺の位置、大きさ、形をしっかり見ておいて下さい。人により多少の違いはあるかもしれませんが、ほぼ同じだと思うので。」

「「「「わ、分かりました・・・」」」」

しばらく『レビテーション』で肺を持ち上げたりしていたが、どうやらそれも終わったようだ。

「・・・見終わりましたが、どうします?今回はもう終わりにしま

すか？」

（ここで終わったらこの被験者の死を無駄にすることにならないか？もっと出来ることがあるはずだ！）

「・・・いえ、次は肺を切ってみましょう。よろしいですか？」

「私はいいですが・・・」

「「「私も敵いません。」」」

「・・・では、行きますね！」

俺は肺を切る為に『ブレイド』を使った。

しかしただ闇雲に肺を切り刻んでもしょうがないので、『ディテクトマジック』で肺を観察してみた。

（気管が肺に入って、いくつかに分かれているな・・・そう言えば肺にはなんか区画？だっけ、そういうものがあるってテレビでやってたことあったな。どれが区画なんだろう？）

「・・・」

俺がそう思って念入りに肺を観察していると、気管から伸びた枝の先の肺の所にある血管がそれぞれ独立しているように思えた。

（これが肺の区画なんだろうか？左右の肺に１０個位の区画があるみたいだな。・・・心臓がある方は９個か？）

「・・・ここで切り取ってみるか。」

カミーユさんに『レビテーション』で肺を切り易いように動かして

もらいながら、試しに1区画切り取ってみた。

「・・・ふう、出来た。」

「ヴァルムロートさん、どうしてこんな切り方をしたのですか?」

「それは先ほど『ディテクトマジック』でじっくり診ていたら空気が通る管が肺の中でいくつかに分かれていて、その先の部分がそれぞれ交わらないことに気が付いたので、試しに1つ切り出してみました。」

「それでこんな形に切ったのですね。」

「いくつかということは他にもあるのですか?」

「はい。左右ともに9個から10個位に分けることが出来ると思います。今から他の所も切ってみますね。」

他の所も切り出してみると、俺から見て右側（心臓がある方）は9個、左側は10個の区画に分けることが出来るようだ。

（この区画毎に切る方法だと肺の血管をあまり傷つけなくて済むかもしれないな。まあ、肺を切除しないといけない時の話だけどな。）

「・・・こんなものですかね。」

「私達も肺がこのように分けることが出来ることを覚えておいた方がいいですよね。」

「ええ、その方が手術中のサポートの技術が上がるでしょうし、お願いします。」

「「「「分かりました！」」」」

カミーユさん達は俺が切り出した肺の区画を『レビテーション』を使い、パズルのように元のようにして、じっくり観察していた。

被験者の肺を取り除いて心臓しか残っていない胸の中には肺を切ったときに出た血が溜まっていた。

それを見た瞬間に、

・・・ああ、俺、人殺しちゃったんだな・・・

と、心がずしっと重くなるような、もやもやするような、なんとも言い難い気分になった。

カミーユさん達の観察も終わり、これ以上することが思いつかなったので今回の実験は終わりになった。

「カミーユさん、この被験者の遺体ですが・・・」

「あ、はい、今回の人体実験で出る死体は全てヴァリエール家の責任で処分することになっているので、こちらにお任せ下さい。」

（『固定化』で標本にって、どうせ最後はこの施設も含めて全廃棄だろうし、ロマリアなんかに見つかったら異端審判にかけられるかもしれないしろものだし、まあいいか。）

「・・・そうですか。お願いします。あ！あとヴァリエール公爵様に風のメイジを新たに選んでもらえるようにお願いできますか？」

「今日のことですね。分かりました。旦那様に言っておきます。早ければ2、3日後位に誰かが新しく選ばれてくると思います。」

「お願いします。」

ヴァリエール家の屋敷に戻って、蒸し風呂に入って汗と汚れを流して、今日は公爵やカリーヌさんがいなかったのでルイズやカトレアさんと夕飯を食べて、俺に用意された部屋に行った。

「ちぃ姉さま、夕飯のときのヴァルムロート、ちょっと変じゃなかったかしら？なにか心ここにあらずって感じで。」

「あら？ルイズ、彼のことが気になるのかしら？」

「べ、別に、いつもとちょっと様子が違ったから気になっただけなの！それだけ！」

「うふふ。」

俺は部屋のベットに横になって天井を見上げた。

「はぁ・・・今日初めて人、殺しちゃったな・・・」

「俺が直接手を下したわけじゃないけど・・・俺が提案したことで死んだんだから俺がやったも同然か・・・」

寝返りを打つと、窓の外には2つの月が出ていた。

「ここがゼロ魔の世界っていうのは分かってたし、いつか人を殺すだろうとも思っていた。・・・いや殺さなくて済むんだったら、それが一番だったんだけどな。」

「でも、人を殺すとしても、もっとこう・・・戦いの場っていうか、そういう所でだと思ってたんだけどな・・・」

「こういうことで殺すなんて転生する時は夢にも思わなかったよ。」

「はぁぁ、戦いで人を殺したらこんな感じにはならなかったのかな？・・・いや、そんなこともないか。」

「人を殺すたびにこの心の奥にくる嫌な感じになるのかな？それとも初めてだから、こんな感じになっているのかな？」

「はぁ・・・俺ってメンタルくそ弱いな・・・」

「・・・今回のことが終わったらこの嫌な感じにも慣れているのかな？」

「はぁぁ・・・今夜は月が歪んで見えるよ・・・」

初めての・・・（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

まずは人体解剖を胸だけしてみましたが、それでもいろんな発見や失敗があります。

主人公の精神年齢は前世＋今で４０歳位なのですが、肉体年齢に合わせて子供の面が出てくるので、なんか安定しない感じになっていると思います。

・・・ただ単に子供っぽい大人？

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてみて下さい。

実験の日々（前書き）

こんにちは。こんばんは。

人体実験の話、後半です。

医学素人の主人公がここまでこれたのは前世のテレビ知識とない知識を補って余りある魔法というトンでもない存在のおかげです。

実験の日々

強烈な体験から1晩が過ぎた。

「・・・結局眠れんかったな。」

パン！パン！とほっぺたを両手で叩いて気合いを入れた。

「良し・・・。気持ちを切り替えていくぞ！」

「ヴァルムロートさん、今日は何を行いますか？」

「今日は昨日の“手術中に『スリープクラウド』が切れてしまう可能性がある”ということが話に上がったので、『スリープクラウド』がどの位の間効いているのか調べたいと思います。」

「それでは今日は被験者には眠ってもらうだけですか、私達は楽できますね。」

「そうですね。今回の実験には体格の異なる男女数名を被験者にして行います。魔法をかけるのは同じ人が良いと思うのでカミーユさんお願いできますか？」

「はい。私はいいですよ。被験者は部屋の中のままでいいのですか？」

「そうですね、そのままでいいと思います。・・・それでは被験者を選びましょう。」

被験者は次の様になった。

?:男、２０代、背は低い（１６０サント位）、体格は普通、平民

?:男、１０代、背は高い（１８０サント位）、体格は普通、平民

?:男、３０代、背は高い（１８０サント位）、体格は肥満、平民

?:男、３０代、背は俺と同じくらい（１７０サント位）、体格は普通、メイジ

?:女、２０代、背は低い（１５０サント位）、体格はやせ形、ぺたん、平民

?:女、２０代、背は低い（１５０サント位）、体格は肥満、ボイン?、平民

?:女、２０代、背は俺と同じくらい（１７０サント位）、体格は普通、普通、平民

女性のメイジはいなかったのは残念だが、実際に盗賊に身を落としているメイジがいるんだな、と思った。

『スリープクラウド』が効きやすいように被験者の部屋を地下2階の部屋に一時的に移した。

この時は魔法を使わずに衛兵に拘束してもらって移動した。

その理由として、下手に魔法を使ったり、その解除のために秘薬を使うとその影響がある可能性が考えられたからだ。

ただ地下1階の人を地下2階に移動したり、部屋数が足りなくて地下2階の人を地下1階に移動させたりと、以外に時間がかかった。

「では、カミーユさんお願いします。」

「分かりました。・・・『スリープクラウド』」

「・・・では、時間を量り始めますね。」

「はい。お願いします。」

『スリープクラウド』という魔法が効果を発揮するには一定以上の濃度（魔法の密度?）のものを吸いこまないといけないが、それは一瞬でいいらしい。

外で範囲的に使う時は高位のメイジか、数人のメイジが同時にやれば十分可能らしいが・・・

まあ、1回効いちゃうとヤバいんだけどな。

これチート級じゃね？と思ったが、いくつか欠点がやっぱりあって、

展開速度が遅い（魔法の中でもっとも遅いらしい）

発動者自身にも効果がある（風とかで戻ってきたら自滅するかも）

効果を発揮するのに一定以上の濃度が必要（この魔法は周囲に拡散していくため意外とすぐに濃度が一定以下になる）

これを聞いて、風のメイジと協力すれば全部解決じゃね？と思ったが口には出さないでいた。

口は災いの元だしな。自重、自重。

これまでの経験と教わったことから、ハルケギニアのメイジは他の系統のメイジと協力するという発想が無いように思える。

やっぱり「自分の系統が最強！」とか思ってるからか？

相性の問題とかもあるのかも・・・火と水とか。

・・・あ、そういえば王家には合体魔法とかあったっけ？

それからが暇だった。

なにせ眠っている被験者をただ見ているだけなのだから。

「・・・暇ですね。」

「そうね。メイドにでも任せればよかったかしら?」

「でも、これもカトレア様の為の大切な実験なのだからメイドに任せるわけにもいかないでしょう。」

「・・・そうね。」

「・・・しりとりでもしますか?」

「しりとりですか、子供の頃以来ですね。」

「私、しりとり強いんですよ!」

「いい時間つぶしになりそうですね。」

「それで誰から始めますか?」

「では提案した僕から、しりとりのりで、・・・リュティス。」

・・・2時間経過・・・

「・・・る、る、ルイズ。」

「ず、す・・・スクウェアスペル。」

「また、る!?る、る・・・」

「・・・ん!?あ、ヴァルムロートさん!被験者が目を覚ましましたよ!」

「る・・・え!?誰がですか?」

「えーと、3番の被験者です。」

「3番・・・一番体格がいい男の人ですね。」

「あ、こちらにも目を覚ました人がいるようですよ。」

それから多少の時間差はあるが次々に目を覚ましていった。

男女・体格差があるかと思ったが、特に差は無いようだ。

メイジと平民で魔法の効果に差がないようなのはちょっと驚いた。

俺はメイジには魔法耐性があって平民よりも早く起きるかと思ったんだけど・・・メイジに魔法耐性とかないのかな?

「2時間程度ですね。この時間の間に手術を終えることが出来るでしょうか?」

「どうかしら?まだ手術の練習もしていないのだから分からないわね。」

「・・・カミーユさん、『スリープクラウド』の重ねがけって出来

ないでしょうか？」

「『スリープクラウド』が切れる前にもう一度『スリープクラウド』をかけるのですか？やったことが無いので分かりませんね。」

「そうですか・・・では、昼食を食べて昼からは『スリープクラウド』の重ねがけが出来るかどうかを調べてみましょう。」

「分かりました。他の方はよろしいですか？」

「ええ、いいですわ。・・・でも、しりとりもやり尽くした感がありますし、別の時間つぶしが必要ですね。」

「昼食に戻った時に御屋敷から本でも借りて来ましょうか。」

「それいいですわね。」

「お姉様、私お腹すきました。早く戻りましょう！」

「そうね。では一旦御屋敷に戻りましょう。」

ちょっと遅い昼食を屋敷で食べて、少し休憩してから施設に戻った。

先ほどと同じ被験者で『スリープクラウド』の重ねがけが出来るかどうかを試した。

・・・結果から言うと、出来なかった。

1回の『スリープクラウド』では2時間で起きたので、今度は1回目の『スリープクラウド』で眠らせてから1時間経った時点で2回目を行った。

重ねがけが出来るのならば、理想論は1回目に『スリープクラウド』をかけてから3時間経ったら起きるというものだった。

しかし、実際には2時間で起きてしまった。

この結果より『スリープクラウド』の重ねがけは出来ないと結論付けた。

ちなみに起きたばかりでも『スリープクラウド』をかければ効くことは昨日の時点で分かっていたが、再度確認した。

次の日、新たに風のメイジが加わった。

「はじめまして、ツェルプストー様。公爵様よりカトレア様の手術に協力することを仰せつかりました、ローラ・ギャロスです。よろしくお願いします！」

「ヴァルムロートでいいですよ。よろしくお願いします、ローラさん。」

風のメイジが来たことで胸を開いた時の呼吸の問題はほぼ解決したと言えるだろう。まあ、要練習かもしれないが。

「では今日は肺に穴が開いた場合どうなるのかと、出来ればその対処法を調べたいと思います。これはカトレアさんの治療を行った際に肺に穴が開いたまま終わった時を想定しています。」

「被験者はどうしましょうか？」

「そうですね・・・肺に開ける穴も大、中、小と考えているので、体格が似た男女3人ずつにしましょう。」

「分かりました。ではこちらで良さそうな人を挙げておきますね。」

「お願いします。では、ローラさん、いきなりこんな所に来て分からないことがあると思うので僕から説明しますね。」

「はい！お願いします！」

・・・説明中、被験者選抜中・・・

「・・・と、いうことですね。」

「なるほど、そんなことになっているのですね。良く分かりました！」

「ヴァルムロートさん、被験者を選び終わりました。早速行いますか？」

「そうですね。まず男性で行って、なにか問題があれば女性の時に解決出来るようにしましょう。」

（・・・これじゃあ男は使い捨てみたいだな、いやいまさらか・・・。）

「分かりました。では最初に男の被験者を連れてきますね。」

「お願いします。」

被験者が運ばれて、台に固定された。

まずは『ディテクトマジック』で初めの状態を知っておく。じゃないと後で比較出来ないからな。

「イネスさんは心臓の動きも診ておいて下さい。」

「はい！分かりました！」

（カトレアさんの肺に異常があるのは右肺だったな。）

「では、まず・・・」

ここで俺が事前に運び込んでもらっていた消毒用アルコール（樽で持ってきたが、この部屋にあるのは小瓶に分けたもの）を綺麗な布に軽くしみ込ませて、今から切るところに塗った。

「ヴァルムロートさん、それは何ですか？」

「これですか？名付けて、消毒用アルコール（ヴァル印）です。切った所から皮膚に付いている病気の原因が入ったら正確な実験が出来ませんからね。」

「「「「「はあ～、そうなんですか。」」」」」

被験者の肺に穴を開ける方法は胸の肋骨の間から『ブレイド』の刃を入れて、右肺に小さな穴を開け、『ヒーリング』で胸に開いた穴を治した。

「これでこの被験者の肺には0．1サント位の穴が開いています。『ディテクトマジック』で診てください。」

皆一斉に『ディテクトマジック』をかけた。

「・・・確かに肺に小さな穴が開いているようですね。しかし、肺自体に変化は見られないですね。」

「確かに先ほどと同じように見えますね。小さな穴を除いて。」

「・・・では、被験者を起こして反応を見てみましょう。お願いします。」

「はい。分かりました。」

被験者を起こすと、何事も無いかのように目を覚ました。

「・・・なんだよ、貴族様か。飯の時間かと思ったぜ。」

「つい先ほど貴方にある処置を行いました。今なにか感じますか？」

「はぁ！？処置って・・・ん？別に何ともねえな、残念だったな！」

「痛みとかもないですか？」

「はっ！ないものはないぜ！」

「・・・なるほど。では、次は“運動”をしてもらいましょうか。」

また『スリープクラウド』をかけて、被験者を眠らして、台の固定から外し、『レビテーション』で外に連れ出して、“運動”をしてもらった。

最初は元気よく走っていたが、そのうち呼吸に咳が混じり始め、そして走るのを止めて、倒れこんだ。

近づいてみるとちゃんと呼吸が出来ていないようだった。

『ディテクトマジック』で肺を診ると、最初より少し肺が縮んでいるように見える。

「これは・・・ローラさん、出番です！先ほど説明した時に教えたことをこの被験者に行って下さい！」

「わ、分かりました！風の魔法で外の空気と肺の空気を循環させる、でしたね・・・。やってみます！」

「お願いします！では、この被験者を中に運びましょう！ローラさんはそのまま魔法を行っていて下さい！」

被験者を実験室に運び込んで台に固定した。

呼吸の方はすでに落ち着いているようで、ローラさんには呼吸器の

代わりを任せることが出来そうだ。

「・・・う、ううん・・・はっ！・・・なんだ、またここかよ！」

「起きましか、今体の状態はどうですか?体に痛みとかありますか?息はしにくいですか?」

「はあ?なんでそんなこと?・・・そういや、さっき俺になんかしたとか言ってたな！何しやがった！」

（・・・ちょっと脅すか）

「・・・質問に答えろ、この場で殺すぞ。」

俺はちょっと声を作ってそういうと『ブレイド』を使い、首に切れないように当てた。

「くっ・・・分かったよ。胸の所がなんかいてぇ、息はいまは大丈夫だ。・・・これでいいか?」

「“運動”している時はどうでした?」

「・・・走り出したときは普通だったが、少ししたら息が苦しくなった。そのまま走ったが、ダメだと思った後は何も覚えてねぇよ。」

「なるほど・・・。もういいですよ。カミーユさん、お願いします。」

「もういいのですか?」

「はい。」

「分かりました。・・・『スリープクラウド』」

「おい！結局俺に、な、に・・・し・・・」

「では、この被験者を部屋に戻して下さい。運動をしなければ問題ないみたいですし、このまま肺に開けた穴が時間経過によって塞がるのか、塞がらないのかを調べたいのでこのまま生活してもらいましょう。」

「分かりました。」

「昼食は挟んで、午後からは女性で同じことを行ってみましょう。」

昼から女性で同様の処置を行った。

先に行った男性との違いは処置を行ったすぐ後に胸に違和感があったと言っていたことくらいだった。

次の日は肺に開ける穴をもう少し大きい1サント位にして行った。

この時は処置した後すぐに呼吸が乱れて、ちゃんと息が出来ないようになっていた。

『ディテクトマジック』で診ると、肺が昨日行った被験者のものよ

りも縮んでいた。

ローラさんに空気を肺に送ってもらって安定したようだが、呼吸自体はいつまでも安定しなかったので結局胸を開いて、肺に開けた穴の端を合わせて『ヒーリング』を行って塞ぐことで元に戻った。

「・・・これでいいかな?じゃあ、この被験者も経過観察を行うので部屋に戻して下さい。」

「分かりました。」

「・・・あら?」

「どうかしましたか?ローラさん?」

「あの・・・」

「今日はお昼から女性の被験者で行う予定でしたが、先ほどの実験で問題点が見つかったのでその改善策を話し合いましょう。」

「先ほどの人ですか?肺の穴を塞いで終わったのではないですか?」

「はい。私もそう思っていたのですが、呼吸を担当しているローラさんによると肺の穴を塞いでも呼吸がまだ正常ではないのでは、と言われました。」

「そうなのですか?ローラさん?」

「は、はい！生活するのはおそらく問題無いと思われる程度のことですが、これがカトレア様だと考えた時にそれはいけないのではないかと思いまして・・・」

「確かに今は被験者で実験を行っているから死なないのなら問題ないと思っていたけれど、カトレア様として考えたら良くは無いわね。」

「ええ、僕もそのことを失念していました。そこでこの被験者をどうすれば元の呼吸に戻せるのかを皆さんで考えたいと思います。」

「そうですわね！・・・でも、どうすればいいのかしら？」

「「「「「「・・・」」」」」」

皆なかなかいい考えが思い浮かばないようで全く意見が出ない。

そういう俺もいま行っている実験が気胸を人工的に作って行っているものだとは分かっていたが、気胸は肺に穴が開いた状態としか知らないので穴を塞げば問題無いと思っていたのが間違いだったと知り、どうすればいいのか考えていた。

「・・・呼吸が元に戻らないのはどうしてかしら？」

「そうね・・・『ディテクトマジック』で診たところ、穴を塞いでも肺の大きさが縮んだままなのが問題じゃないの？」

「・・・風で空気を送って肺を膨らませてみたらどうかしら？」

「それ・・・間違って肺が破裂したりしないかしら?私はそれはちょっと怖いわ。」

(空気を送って肺を膨らませるか、風船みたいにやるってことか。失敗しなければ問題ないけど失敗した時のリスクが高いような・・・肺ってそんなに簡単に破裂するのかな?・・・いや、もっと安全な方法を考えよう。・・・風船か懐かしいな・・・あ。)

「・・・あ。」

「どうしました?ヴァルムロートさん?」

「風の系統魔法を使って肺を膨らませるのにいい方法を思いつきましたよ!」

「やっぱり風を送って膨らませるのですか?」

「セシールさん、それは危ないのでとさっきから言っているでしょう!」

「確かに風を送って肺を膨らませるのは危険かもしれないので行いません。でも、セシールさんが言ったことがヒントになりましたよ。」

「それは良かったですが、なんだか複雑な気持ちですね。・・・それでどうするのですか?風を使うのに肺に空気を入れずに膨らませる方法なんて・・・」

「それはですね・・・」

「「「「「それは？」」」」」

「空気を抜くことで肺を膨らませます！」

「「「「「？？？」」」」」

説明を皆に行って、納得してもらったところ（まだ半信半疑だったようだが）で少し遅れたが女性の被験者で実験を行うことにした。

女性の被験者の肺に1サント位の穴を開けてその様子を観察したが、やはり朝と同じ様になったので、胸を開けて肺に開けた穴を塞いだ。

「ここからですね。ローラさん、先ほど説明したことを行ってみて下さい。」

「え、ええ。肺と胸の間の空気を抜いていけばいいんですよね？」

「はい。僕が『ディテクトマジック』で肺の大きさを診ていますから元の大きさになったら教えるので空気を抜くのを止めて下さい。そしてその状態で胸の開けた穴から空気が入らないようにして下さい。」

「はい！ではいきます！」

俺は『ディテクトマジック』で被験者の肺を確認しながら、ローラさんか空気をゆっくり抜いていって、肺が元の大きさになるのを待

った。

「はい！ここです！止めて下さい！」

「・・・はい！」

そしてローラさんが空気が逆流しないようにしてくれている間に胸に開けた穴を塞いだ。

「どうですか？」

「・・・ええ、被験者の肺は最初と同じ大きさになっています！呼吸も異常は見られません！」

「ふう、成功したみたですね。」

「でも、こんな方法で肺を膨らませることが出来るなんて驚きました！すごいですね！」

「ヴァルムロートさんはどうしてこんなことを思い付いたのですか？」

「ええ、なんか、こう、ピキーンと来たんですよ。」

「「「「「そ、そうなんですか。」」」」」

まあ、前世の記憶のおかげとは言えないからな。

こっちには風船がないから実演は出来ないけど、子供の頃とか風船で遊んでいる時に普通に膨らませるのはなくて、空気入れる所とは

逆の膨らむ方（胴体？）をくわえて息を吸いこむと口の中で風船が膨らんだことを思い出して、これは使える！って思ったんだが、ずばり的中したな。

次の日はさらに大きな穴を肺に開けてみた。

いままでよりも大きな穴を肺に開けるのでかなりの出血があると考えて『ヒーリング』をかけつつ、穴を開けた。

穴を開けた肺はみるみるうちに縮んでいき、さらに穴を開けていない方の肺も影響を受けてか少し縮んだようだった。

「ヴァルムロートさん！被験者の心臓の様子が！」

「え！？」

そう言われて心臓の様子を診ると、なにかおかしい。

いままでも心臓の鼓動が早くなることはあったが、こんな風になったことは無かった。

詳しく診ようと思い集中してみると、本来血液を送り出している心臓がその働きを行っていなかった。

というよりも、心臓に血液が入ってきていないように思えた。

「確かにおかしいですね。とりあえず肺を元に戻してみましょう！」

心臓のおかしな動きに不安があったが、胸に穴を開けて肺の穴を塞ぎ、ローラさんに肺を元の大きさに戻した。

「ヴァルムロートさん！心臓の動きが元に戻りました！」

「え、そうなんですか！？分かりました！」

「ヴァルムロートさん、この被験者どうしましょうか？」

「そうですね・・・とりあえず、このことの影響があるか見たいので部屋に戻して、経過をみて下さい。」

「分かりました。」

午後からも女性の被験者で同様の処置を行い、やはり同様に心臓に異変が起こった。

「今日の実験で1つ分かったことがあります。」

「それはなんですか？」

「イネスさん、今日行った2人の被験者で2人とも心臓がおかしな動きをしたことを診ていましたよね。」

「ええ、鼓動が早くなることとは違い、なんだかおかしなものでした。」

「それがどうしたのですか？」

「心臓は人の体で一番大事なものですよ。それがおかしな動きをしたとなると・・・」

「ええ、皆さんお分かりだと思いますが、あの状態が長く続いた場合死ぬ可能性が高い、というか死ぬと思います。」

「やはりそう考えますか。私もそう思っていました。」

「ですから、手術中にあのような状態になった時は何をおいてもあの状態を回避することを優先します。皆さんもそれでいいでよろしいですか？」

「はい。構いません。」

「分かりました！」

「治療も大事ですが、命の方が大事ですからね。」

「ええ、分かりましたわ。」

「はい！分かりました！」

肺に穴を開けた被験者は１日１回肺の様子を『ディテクトマジック』で観察を行った。

その結果、肺に開いた小さな穴は自然治癒して塞がれることが分かったし、多少縮んでした肺も１０日位で元に戻ることも分かった。

処置から１０日後、身体能力を測定するとほとんど以前測ったものと同じで、再び穴が開くこともなさそうだった。

この１０日間は完全に暇だったので、俺だけで観察を行い、他の人は本来の仕事に一時的に戻ってもらった。

また俺自身も暇を持て余したので、ここに来てさぼりがちになっていた剣の訓練を１人でやった。

「今日からはさらに手術の元になる実験をしたいと思います！」

「「「「「え！？なにを行うのですか？」」」」」

「肺の切除を行います！」

今回の実験の概要は、カトレアさんは右肺に異常があるので、右肺の切除を行い、それがどのように影響するかを調べる。

しかし被験者の数も限られているので小さな区画毎では出来そうもないので、ここは大きく３つに分けることにした。

ちょうど右肺は大きく３つに分かれているしな。

男女それぞれ３人選び、右肺の３つから１つ切除、２つ切除、３つ

切除（右肺全排除）で実験を行い、その時間経過と身体能力への影響を観察することにした。

胸の横の肋骨に刃を入れて、そこを『念力』でぐぐっと開くように固定してもらって、肺を『レーザー』で切り易いように『念力』で動かしてもらった。

大きな血管や気管などは一旦切断して（血管は『念力』で挟んで止血している）、端を合わせて『ヒーリング』を行うことで閉じることが出来た。

切除した肺を胸の開けた穴から出して、肺を元の大きさに戻して、開いた胸を閉じた。

これだけで言うと簡単に出来たように見えるが、肺を切る時に動かしてもらったんだけど、これがなかなか難しくなかなか思い通りにはいかなかった。

そしてなにより最初の1人目の時に途中で、

「・・・じゃあ次は少し右に移動させて下さい。」

「こ、こうですか？」

「あ、それではちょっと行きすぎです、もう少し左へ。」

「はい。・・・こうですか？」

「はい。そこでお願いします。」

「・・・ん?ヴァルムロートさん!」

「なんですか?あ、勝手に動かさないで下さい!」

「え!?私動かしていませんよ?」

「!!!・・・!!!・・・!!!」

「ヴ、ヴァルムロートさん!魔法が切れています!」

「なんだってー!」

「ど、ど、どうしましょう!?」

「私はどうしたら!?」

「ローラさんはそのままで!えーと・・・

「『スリープクラウド』」

「あ、カミーユさん、ありがとうございます!」

「いえ、それより処置中に魔法が切れることをある程度は予想していましたが、本当に起きるものなんですね。」

「・・・処置に時間をかけすぎなのかもしれないですけど、これはかりはどうしようもないですね。経験不足ですね。」

「ええ、そのための実験ですよ。これから頑張りましょう！」

「はい！」

「ヴァルムロートさん！早く終わらせちゃいましょう！」

「そうですね！」

・・・と、『スリープクラウド』が切れちゃって最初は皆大慌て、まあ俺もそうなんだけど、被験者はじたばたして違う所切りそうになったし・・・でも、カミーユさんがすぐにまた『スリープクラウド』をかけてくれたおかげでなんとかなった。

2人目からも時間がかかって魔法が途中で切れちゃったんだけど、皆冷静に対応していた。

それで全員終わらせるのに3日かかったんだけど、それから30日間経過観察することにした。

経過観察といっても、こっちは外傷的なものは安物だが秘薬を使った『ヒーリング』で治療しているので少なくなった肺の機能に体を馴染ませるための期間といった方が近いだろう。

30日経つまで特にすることも無かったが、手術時間の短縮のために福笑い的なことをして意思疎通の向上を行ったり、カミーユさんに水メイジとしての経験をいろいろ聞いたりしていた。

それで３０日目に体の観察と身体測定を行った。

まず３つのうち１つを切除した被験者は身体的には特に変化は無かったし、身体能力もそれほど落ちてはいなかった。

３つのうち２つを切除した被験者も身体的には変化はほとんど無かった。ただ身体能力の方が１つ切除した被験者よりも落ちていたが、日常生活にはなんら問題は無いと思われる。

右肺を全て切除した被験者の体には心臓がほんの少し大きくなるという変化があった。身体能力的にはすぐに息切れを起こした。

さら別の人は左の肺の位置がずれ、そのせいで気管が狭くなっているようだった。

これに対し、俺は癒着させれば動かなくなるんじゃね？という考えから一度胸を開いて肺を元の位置に戻し、胸の内側をわざと傷つけて肺を密着させ『ヒーリング』を行うことで肺を癒着させることが出来た。

まあ、肺が動かなくなっただけですぐに息切れはするんだけどな。

次の日は俺とカミーユさんでカトレアさんの診察を行った。

この診察により、カトレアさんの肺のどこの部分に異常があるかを具体的に知ることが出来た。

皆でぞろぞろいっても仕方ないし、いままで働き詰めだったと思うので他の人はお休みしてもらった。

「昨日カトレアさんの診察をして肺のどこに異常があるのか分かったので、今日からは実験ではなく実際に行う手術の練習を始めたいと思います！」

「「「「「はい！」」」」」

「・・・それでカトレア様の肺のどこの部分に異常があったのですか？」

「はい、それはですね。右肺の上から3つ目の部分にありました。」

「他の場所には無かったのですか？」

「はい。幸いその部分だけでした。さらに詳しく診たところその中で外側にある2つの区画を切除するだけで良さそうです！」

「おお！すごいですね！」

「これでやっと手術の練習できますね！」

「はい！手術の練習の目標は『スリープクラウド』が効いている2時間以内に終わらすことです！」

「2時間ですか！？」

「出来るでしょうか？」

「確かにいままで２時間で終わらせたことはありませんが、そこは要練習だと思います！頑張りましょう！」

「「「「「はい！」」」」」

最後に本番同様の手術を施して半年から１年経過観察などを行いたいので数人残すことを考えると、練習できるのは１３人位だ。

１３人で満足できるほど上達が出来るだろうか？

少し不安はあったが、手術の練習が始まった。

最初はやっぱり２時間で終わらすことは出来なかった。

午前は手術の練習を行って、午後は午前の反省会とその対策を話し合った。

その結果、次第に時間が短くなり１０人目の時にとうとう２時間を切ることが出来た。

それからはさらに時間を短縮するのど同時に技術の向上を目指した。

その結果、１３人目を終わった時は俺自身は満足いくようなものになった。

まあ、カミーユさん達や魔法という前世では非現実的なもののおかげなのは言うまでもないが。

「今日から最後の仕上げを行いたいと思います！」

「とうとうですね！」

「被験者もあと残すところ４人ですからね。」

「なにを行うのですか？」

「今日からの残り４人はカトレアさんに行うことをそのまま行います。」

「カトレア様に行うことそのまま、ということはどういうことですか？」

「そうですね。まずは部屋の綺麗にして、消毒用アルコール（ヴァル印）を部屋全体に撒いて、私達も手洗い、消毒を今まで以上に念入りに行います。あ、内装もヴァリエール公爵様に頼んで実際に行うであろう場所と同じにしてあります。そうですよね、カミーユさん。」

「はい。すでに内装の準備は出来ていると聞きました。」

「ありがとうございます。」

「そこに被験者を入れて、後は練習と同じですか？」

「はい、そうです。そして手術後は半年から1年位経過観察を行います。」

「半年から1年ですか？かなり長いですね。」

「ええ、でもこれは手術を行った後の影響が長期的にみてどうなのかと他の病気にならないかどうかを調べる意味があります。」

「そうですか。それでその間ヴァルムロートさんはこちらにいらっしゃるのですか？」

「いえ、最初の30日間はこちらに留まって様子をみようと思いますが、その後は皆さんに任せて僕は一旦家に帰ろうと思います。このことはすでにヴァリエール公爵様に言って、承諾をもらっています。」

「・・・そうですか。確かに経過観察位なら私達だけでも出来ますし。」

「ええ、月1回位に報告の手紙を頂ければいいので。・・・あ、でもなにか問題があればすぐにでも来ますから！」

「分かりました。・・・でも1年も間が開くと今回培った手術のことを忘れないでしょうか？」

「完全に忘れるということはないと思うけど、技術は少し落ちそうね。」

「僕もそれを危惧したので、半年後のカトレアさんの誕生会に参加すると思うので、その時に1回と1年後にカトレア様の手術を行う前に何人か練習出来るように数人の被験者確保をヴァリエール公爵様に頼んでおきました。」

「そうですか！それは安心しました。」

「じゃあ、最後の仕上げを行いましょう！」

「「「「「はい！」」」」」

それから実験室に行くと、昨日とは全く違う様子になっていたのは驚いた。

部屋全体をレースの付いた綺麗な絹のカーテンが覆い、手術台は天蓋の付いた大きなベットになっていた。床も高級そうなカーペットが敷いてあった。

「・・・」

俺は公爵には質素な感じの部屋にして欲しいと言ったと思ったんだが、これが貴族にとって、いや公爵の位を持つヴァリエール家の質素なんだろうな。

掃除はすでに行き届いていたようなので、消毒用アルコールを水メイジであるカミーユさんに均等に散布してもらった。

そして白衣を着て、口に布を付けて、いつも以上に念入りに手を洗

い、消毒した。

そこへカミーユさんが『スリープクラウド』で眠らせた被験者を『レビテーション』で運んできた。

カミーユさんも手を洗い終わり、手術を開始した。

手術内容自体はこれまで練習でやってきたことなので問題無く終わった。

最後に全体に病原菌が入っていても発症しないように俺が免疫が活性化するイメージで『ヒーリング』をかけておいた。

これを1日1人で4人行った。

ちなみに4人目に唯一のメイジに手術を行った。体のことなのでメイジと平民に違いが出るとは思えないが、折角メイジがいるのだから最後にやらないとな、と思って今までやらなかった。

4人の術後の経過は良好のようだった。

あっという間に30日が過ぎ、その時点での身体能力の測定では特に問題は無かった。

あとは1年後にどうなっているかだが、おそらく問題はないと思う。

「・・・では今後のこと、お願いします。なにかあれば手紙を下さい。」

「はい。分かっています。そろそろお時間です。玄関の方へ、ヴァリエール公爵様やカリーヌ様、カトレア様、ルイズ様がお待ちになっていますよ。」

「そうですね。それでは半年後のカトレア様の誕生日にお会いしましょう。」

「ええ、それでは。それまでお元気で。」

「ヴァルムロート、ちぃ姉さまの主治医の人と仲よさそうに話していたけど、あれはどういうことなの?」

「え!?あれは仕事の話だよ。」

「ふーん、まあ、いいけどね!・・・」

(なんかルイズがぶつぶつ言ってるな、なんかちぃ姉さまとか聞こえるけど、カトレアさんがどうかしたのか?)

「・・・カトレアさん、ルイズどうしちゃったんですか?」

「あらあら、しょうがないわね、ルイズは。」

(カトレアさんはなにか知っているのか?いや、分かっている、のか?)

「?」

「うふふ、なんでもないのよ。・・・元気でね、ヴァルムロートさん。」

「ええ、カトレアさんもお元気で。カトレアさんのことだから無茶とかはしないと思いますけど、しないで下さいね。」

「ええ、分かっているわ。」

「ヴァルムロート君、予定の９０日よりも短かったのだが、いいのかね？」

「ええ、あれは目安のようなものでしたから。公爵様が集めて下さったメイジが優秀でしたので思ったより早く終わりました。」

「それで例の件は上手くいったのかね？」

「ええ、上手くいきました。公爵様もあの件をよろしくお願いしますね。」

「ああ、大切な娘のことだからな！任せておきなさい！」

「ヴァルムロートさん、ありがとうね。カトレアの病気が治ったら私が直々に稽古を付けてあげてもよろしくてよ？」

「あははっ！そうしてもらいなさい！あの“烈風のカリン”に手ほどきを受けられる者などそうは居らんぞ！」

（居らん、じゃないくて稽古に耐えられない、の間違いじゃないのか？どうなんだろう？）

「あはは・・・そうですね。考えておきます。」

「それでは半年後のカトレアさんの誕生会でまたお会いしましょう！」

こうして俺の実験の日々は終わりを告げた。

俺はヴァリエール公爵が用意してくれた馬車に乗って、家へ向かった。

俺が家は離れていた間、家では俺を驚かせるための秘密のことが進められていたとは知らずに。

実験の日々（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

まず、１３人練習した程度で上手くなるわけないとお思いでしょうが、これは本文でも言っていますが周りの人が優秀（まあ、公爵家に仕えられる位メイジとして一流）と魔法の存在のおかげです。ここはぶっちゃけ、ご都合主義ということで。

あと、肺を切除した後に胸水とか溜まるんじゃね？と思いましたが、そこはややこしいし、少量なら再度血管に吸収されるらしいので無視してもいいよね。

ご意見・ご感想があれば良かったら書いてみて下さい。

あ、そうだ・・・ちょっと今週に欲しいゲームが発売するので更新が遅くなるかもしれません。とりあえず頑張って水曜までに１話あげたいでが・・・。

仕組まれた婚約式（前書き）

こんにちは。こんばんは。

前回の引きからの話です。

ヴァリエール家を出てから4日目、やっと家が見えてきた。

俺が帰ることは鷹便ですでに知らせている。

家の玄関に着くと、家族とメイドさんが出迎えてくれた。

俺が馬車から降りるとメイドさんが、

「お帰りなさいませ。ヴァルムロート様。」

と頭を下げた。

「父さん、只今帰りました。」

「うむ。ご苦労だったな。・・・で、どうだった?上手くいったのか?」

「はい。上手くいきました。」

「そうか。それは良かった。」

「心配し過ぎよ、あなた。」

「なんだかんだ言って一番心配してましたしね。」

「い、いいじゃないか!」

「別に悪いとは言っていませんわ、お父様。ねぇ～。」

「「ねぇ～。」」

この何でもない様なやりとりに俺は家に帰って来たんだな、と感じた。

（ああ、やっぱり家はいいね。・・・ん？）

「父さん。」

「ん？何だ？」

（キュルケがいないな・・・どうしたんだ？）

「キュルケはどうしたのですか？どこかに出かけてるのですか？」

「ああ、キュルケは養子に出たぞ。」

「へぇ・・・」

「ええ、だから今家にはいないのよ。」

（・・・は？）
「・・・は？ヨウシ？」

「ああ、養子だ。」

（は？養子？何言ってんの！？待て待て待て！落ちつけ、俺！ハルケギニアの養子が俺の知っている養子とは違うものかもしれない！）
「・・・養子って何？」

「ヴァル、養子っていうのはね、他の家に行ってその家の子供になることよ。」

（は？嘘だろ？）
「あはは、冗談酷いですね。どうせどこかに隠れているんですよ・・・ね？」

「ヴァルムロート、嘘ではないぞ。本当のことだ。」

（皆で俺を驚かせてやろうというんだな！それだったら・・・）
「・・・『ディテクトマジック』！」

俺はまだ父さん達が嘘を言っていると思い、隠れているだろうキュルケを探すために『ディテクトマジック』を俺の周囲半径１０メイ

ルに展開した。

「・・・いない。」

「だかね、ヴァル・・・」

(近くにはいないのか?だったら!)

「まだだ!・・・『トランザム』!『ディテクトマジック』!」

「お、おい・・・」

俺は『トランザム』を使い『ディテクトマジック』の捜索範囲を半径30メイルに広げて再度行った。

しかし、その範囲にもキュルケを見つけることは出来なかった。

(この範囲にもいないのか!?)

「いない!?・・・もっと遠くにいるのか?」

「・・・ヴァルムロート、いくら探してもキュルケは養子に出ていて今は家にはいないぞ。」

(マジで?)

「マj、・・・本当、なんですか?」

「ああ、本当だ!」

俺は父さんの目を見て、その目が嘘を言っていない、真剣なものだということが分かった。

俺はさらに母さん達や姉さん達の方を見たが、皆キュルケが養子に出たのは本当だと頷いていた。

「父さん・・・どうしてキュルケを養子に出したのですか？」

「そうだな。お前にはきちんと話をしないといけないな。中に入ってゆっくり話そう。」

「・・・はい。」

俺達は食堂に行った。

そこにはすでに紅茶とお菓子が出ていたが、キュルケのものはなかった。

（・・・本当にいないのか。）

「・・・本当にキュルケは家にいないのですね。」

俺はキュルケが以前座っていた席を見ながらそう言った。

「ああ、そうだ。」

「・・・」

「・・・それでキュルケを養子に出したことを理由だったな。」

「はい！父さんはどうしてキュルケを養子に出したのですか！？」

「キュルケを養子に出したのは、ヴァルムロート・・・“お前の為”だ。」

（・・・は？俺の為？どういうことだ？）

「父さん！キュルケを養子に出すことが僕の為というのはどういうことですか！？」

「ヴァルムロート、お前に許嫁や良い仲の女性が１人もいないことは知っているな？」

（なんだ？いきなり？）

「え？ヴァリエール家のカトレアさんやルイズは結構仲は良いと思いますよ？」

「確かに仲は良いがそういう仲の良さではなく、“将来を考えた上で”という意味の仲の良い異性はおらんだろう？もしやカトレア嬢やルイズ嬢にその様な感情を持っているのか！？」

（そう言われると、カトレアさんやルイズってなんか従姉妹みたいな感じだしな。）

「いえ、カトレアさんやルイズにそういうのはないですが・・・。」

「そうだろう。しかし、普通の貴族ならお前の歳位になるとそういう女性の１人や２人いるのが普通だ。」

（なんなんだ？）

「はぁ・・・。しかしそういう女性と出会う機会とかありましたっけ？」

「普通なら誕生会がそのような出会いの場になるのだがな。」

「そうなんですか。でも、僕にそういうのは無かったような気がしますが？」

（俺の場合、同い年位の女の子も来るけど、挨拶だけしてしてすぐにいなくなるのがほとんどだったからな。）

「その理由は分かっているか？」

「はい。・・・キュルケがそういうのを全て防いで来た、だったと思います。」

「そうだ。お前はこのツェルプストー家の嫡男だ。いずれこの家を継ぎ、さらにツェルプストーの血を後世に引き継いでいかなければならない。」

（え、まさか？）

「・・・」

「しかし、キュルケがお前の傍にいるといつまでたってもお前には嫁どころか恋人さえできないだろう。これは由々しき問題だ。」

（嘘、だろ？）

「まさか！？」

「そうだ。キュルケをお前から引き離す為にキュルケを養子に出した。」

（そんなことで！？）

「どうしてですか！僕はキュルケがいても恋人くらい作って見せますよ！」

「その恋人にした女性をキュルケ以上に愛せるというのか？」

（うっ！）

「・・・おそらく。」

「ではその恋人の為にキュルケを突き放すことが出来るのか？」

（別に一緒でいいんじゃないの？）

「え？別に恋人がいてもキュルケを突き放さなくてもいいのではないのですか？」

「ではお前はキュルケよりも魅力的な女性を見つけられるのか？」

（それは・・・）

「・・・」

「・・・では今のお前の心境でもしキュルケに縁談があればお前はそれを素直に受け止められるのか？」

（・・・めちゃくちゃムカつくな、そいつ。でも・・・）

「・・・努力する。」

「どう、努力するのだ？」

（そうだな・・・）

「・・・相手をとりあえず1発ぶん殴って、そのあとに模擬戦して、僕より強かったら認める・・・かもしれない。」

「お前・・・それ、認めるつもりないだろう？お前より強いメイジ

はそういないぞ。」

「・・・」

「・・・まあ、お前がこれまで言ったことを行っても傍にいるキュルケが黙ってはいないだろうし、キュルケへの縁談も本人が拒絶するだろう。それはこれまでの誕生会を見れば分かる。」

（確かにキュルケには群がっていたけど、一蹴してたしな。）

「確かにそうかもしれない・・・。」

「ヴァルムロート、分かってくれ。お前はこのツェルプストー家の嫡男なのだ。生まれた瞬間からこの家を継ぐことを運命付けられているのだ。」

「それは分かるけど・・・。」

「家を継ぐというのはさっきも言ったが、後世に子孫を残すことだ。それは分かるな？」

「・・・はい。」

「確かにキュルケとお前は仲の良い姉弟だ。仲が良すぎるくらいにな。しかしゲルマニアにある法律では、姉弟で婚姻を結ぶことは出来ないのだ。」

「・・・」

「キュルケの養子縁組をお前に黙っていたのはすまないと思っている。しかしこれがお前とキュルケにとって一番良い形なのだ。今は

分かってくれとは言わないが、私や母さん達、お前の姉さん達もお前達の幸せの為と思っていることだけは知っていて欲しい。」

「・・・あ、ああ。」

「今日は旅のことや今のことで疲れているだろうから、もう部屋で休みなさい。」

「・・・はい。最後に聞いていいですか?」

「なんだ?」

「キュルケは養子に出されることに納得はしたのですか?」

「・・・ああ、お前の為だと言って分かってもらった。」

「そう、ですか・・・。」

俺は心配した母さんが呼んだメイドさんに連れられて部屋に戻って、ベットに横になった。

「・・・マジか。」

「俺の為にキュルケが養子に?・・・はは、なんだそりゃ!?」

「俺のせいなのか?俺がいつまで経っても恋人とか作らなかったから?」

「でもそれは早く強くなって、原作を迎えたいからで・・・」

「・・・でも恋の1つや2つはする時間位あったかな?」

俺は自分の隣に恋人がいるイメージをしてみる。

すると隣にはキュルケが微笑んでいた。

「・・・ここでキュルケが出てくるとか。ないわー。」

「・・・でもキュルケよりも魅力的な女性がいるのかと言われた時に何も言えなかったな。カトレアさんは確かに超絶な美人さんだけど、俺の中ではキュルケが1番なんだよな・・・。」

「キュルケがいなくなってこんなに心がもやもやするなんて、前世も含めて初めてだ。この前の初めて人を殺した時とは全然違う・・・。」

「はあ・・・。まさか俺自身がこんなドラマや小説、漫画などで使い古されたことになるとはな・・・。」

「・・・俺、キュルケのこと姉としてではなく、1人の女性として好きなんだな。いや、もう、“だった”になってしまうのか・・・。」

「いなくなってこんな1番大事なことに気が付くんだな・・・。」

「・・・でも、父さんも言ってたけど姉弟は結婚出来ないしな。これはゲルマニアでも一緒か。」

「はあ・・・。初恋は実らないってことか。」

ヴァルムロートが出ていった食堂で、

「・・・あなた、ちょっときつく言い過ぎではないかしら?」

「そうか?あれくらいでちょうどいいと思うのだが。」

「でも、いつも冷静なヴァルがあんなに取り乱している様子は初めて見たわね。」

「“姉弟”で結婚出来ないのは法律で決まっているのだからしょうがないわね。」

「そうね・・・。」

それから数日過ぎた。その間、俺はというと・・・

魔法の練習で、

「ヴァルムロート様!的はあちらですよ!?」

「え？・・・あ、本当だ。ちょっとボーっとしてました。すみません。」

「・・・いえ、いいのですよ。次は気を付けて下さいね。」

剣の訓練で、

「ヴァルムロート様！剣に振られていますよ！もっと集中して下さい！」

「え？あ、すみません。」

「ヴァルムロート様、今日も集中出来ていませんね。これ以上は危ないので今日も周りを走って足腰を鍛えて下さい。」

「・・・分かりました。」

食事の時に、

「・・・ふう。」

「あら、ヴァルもういらないの？」

「はい。・・・これはもう下げて下さい。」

「かしこまりました。デザートの方は如何いたしましょう？」

「いえ、もういいです。では、僕は部屋に戻らせてもらいますね。

家庭教師から宿題が出ていますので。」

「・・・そうか。分かった。頑張りなさい。」

「では、失礼します。」

「「「「「・・・」」」」」

俺は宿題があるからと部屋に戻ってきたが、そんなものはすでに終わらせている。

ただ食欲が無かっただけだ。

「はあ、これじゃあダメだって分かってるけど、どうすればいいんだ?・・・時間が経てば元に戻るのか?」

「はあ・・・。」

ヴァルムロートがいなくなった食堂にて、

「あなた、ヴァルの様子かなり悪くなってるわね。大丈夫かしら?」

「うむ・・・。ここまで酷くなるとは思わなかったな。」

「でも、明後日でしょ?」

「ああ、そうだ。あちらも竜籠を使い、急いで来ているらしい。」

「どうなるかしらね・・・。ヴァルの“お見合い”。」

「ああ、ヴァルムロートには明日の朝に伝えておこう。」

次の日の朝食で、

「ヴァルムロート、お前に話がある心して聞きなさい。」

「・・・何ですか？」

「明日、お前にはとある貴族の娘に合ってもらう！拒否は許さんぞ！」

（いきなり来たか・・・。）

「・・・どこの貴族ですか？」

「ああ、ゲルマニアの北の方に領地を構えている。」

「そうですか。かなり遠くから来るのですね。」

「ああ。その貴族は私が軍で働いていた時の部下でな、これがなかなか出来る男だったのだ！家の領地とは距離があっていままでお前の誕生会には呼べなかったのだが、今回こちらに用事があり、家の近くに来るらしい。そしてそいつにもお前と同じ年の娘がいるらしくてな、折角だからお互いを合わせてみようという話になったのだ

！どうだ？興味湧くだろう？」

「・・・そうですね。あまりにタイミングがいいので何か勘ぐってしまいますよ。」

「そういうな。相手の娘は歳の割になかなかの色気を持っているらしいぞ！喜べ、ボンキュボンだぞ！気に入ったら、そのまま縁談に話を進めてもいいぞ！」

「いえ、合うことは合いますけど・・・縁談まではさすがに進まないでしょう。」

「そうか？まあ、その時に考えればいい。」

「分かりました。では、そろそろ魔法の練習の時間ですので、これで失礼します。」

「うむ、ボーっとして怪我をしないようにな。」

「はい。」

ヴァルムロートは魔法の練習に行くために食堂を出ていった。

「あなた、ヴァルにちょっと怪しいと思われたのではなくて？」

「そ、そうだな。しかし普通の縁談の話だと思っただろう。」

「そうね。明日ヴァルがどんな反応をするか楽しみね！」

今日の魔法の練習と剣の訓練はこれまでの数日とは違った意味で集中出来なかった。

俺は今日も夕飯をそうそうに切り上げて、部屋に戻った。

「俺がキュルケの養子のことを知ってまだ1週間も経っていないのに、もう縁談の話か。」

「父さんは合うだけ、とか言ってたけど十中八九縁談を持ちかけられるんだろうな。」

「相手の人には悪いけど、俺の心の整理がまだついてないし、今回は断念してもらおう。」

そして例の貴族が来る日は朝から騒がしかった。

聞いたところ、今日来る例の貴族の位は伯爵だという。伯爵って結構位の高いのが来たな。

そして朝食が終わって、今日は魔法の練習や剣の訓練が休みになったので、部屋で魔法に関する本を読みながら例の貴族とその娘が来るのを待っていた。

すると、メイドさんが来てそろそろ伯爵が到着すると連絡があったと言っていた。

部屋から出て、廊下の窓から見ると、まだ遠いが竜籠が見える。

伯爵は竜籠で移動して来たようだ。

まあ、家からかなり離れた場所にあるらしいので馬車で移動したらどんだけ時間かかるんだよ！ってことだな。

俺もお出迎えをするだろうと思い、玄関に行こうとするとメイドさんに俺は先に応接室で待っていて欲しいと父さんが言っていたと言った。

普通は俺もお出迎えするんじゃないのか？と思ったが、父さんが言ったことなので素直に従って俺は応接室に向かった。

応接室で待っていると、竜籠が降りてきたらしく玄関の方が騒がしくなった。

しばらくすると父さんが応接室に入ってきた。

父さんの後から父さんと同年代と思われる男の人が入ってきた。この人が例の伯爵だろう。

茶色のカール（天然パーマ？）の髪と色白の肌、そして怖そうな顔立ちだが目は優しそうな感じの人だった。

俺は失礼が無いように椅子から立ち上がって、挨拶をした。

「はじめまして。私ツェルプストー家の嫡男、ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと申します。以後お見知りおきを。」

「おお！君が例の！おおっと、私はアウグスト・フェアエンデルング・フォン・グナイゼナウという者だよ。ゲルマニアの北の寒い所でほそぼそと領地経営をしているよ。よろしく、ヴァルムロート君。」

「グナイゼナウ様は伯爵であらせられ、軍では現役で元帥をされているとお聞きしています。」

「いや～、伯爵になれたのはきみの御父上であるツェルプストー辺境伯のおかげだよ。そうですよね、大元帥。」

「“元”だ。いまは退役しているからな。それに元帥になり、位も伯爵にあげたのはお前の実力だろう。まあ、運もあったかもしれんがな。」

「「あはは！」」

伯爵って聞いてたからどんな堅物が来るのかと思ったら、意外と愉快な人のようだ。

話していると、少し遅れてドレスを着た女性が入ってきた。

すると外にいたメイドさんが扉を閉めたので、この女性が今日の縁談の相手ということだろう。

帽子で顔が隠されていて見えないが、確かにスタイルはいいようでかなり胸が大きいようだ。

髪は腰くらいまでの長さで色は赤、ドレスは胸の部分が大胆に開いていてそこから見える肌は褐色だった。

えらい伯爵と違うが、母親似なのだろうか？

（一応挨拶はしとかないとな。）

「初めまして。私はヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと申します。」

「・・・」

「あはは、すまないね。娘は人見知りなのだよ。よければ友達になってもらえないかな？」

（友達、ね・・・。）

「・・・ええ、それは敵いませんが・・・。」

「それは良かった！なんだったら、そのまま嫁にもらってくれてもいいんだよ？」

（おいおい・・・）

「いえ、その話は・・・」

「・・・お父様。私、この人と結婚するわ！」

（しゃべった！なんかキュルケに似た声だな・・・って、は！？今

なんて言った？）
「・・・は！？結婚！？」

「そうか。それではきちんと挨拶をしないといけないな。」

「はい！」

（いやいやいやいや！ちょっとちょっと！まだ顔すら見て無いのに何言ってんだ！？）
「そんな！あまりにも急・・・」

「急？・・・いいえ！以前からそうしたいと強く思っていたわ！」

（以前から？どういうことだ！？）
「え！？どういうｋ・・・」

その女性が初めて帽子をとり、その顔を見て俺は言葉を失った。

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・グナイゼナウよ！もうダーリンたら私のことが分からなかったの？」

俺は何が何だか分からなかった。

キュルケはどこかの貴族に養子に出たはず・・・。

「・・・キュルケ？本当にキュルケ？」

「ええ、私の他にキュルケという女がいるなら連れてきて欲しいわ

！」

「確かにキュルケだ・・・。でも、キュルケは養子に出たはずじゃ・・・あ！」

そういえばキュルケの養子先はまだ聞いていなかったな、と思った。

「そうよ。だから名前が“ツェルプストー”から“グナイゼナウ”に代わっているでしょう。」

「ああ、そうだね。」

「ええ！そうよ！・・・ところで、ダーリンさっきの話だけどもちろん受けてくれるわよね！」

「え、さっきの・・・ああ！結婚のことか！ちょっと待って！」

「もう！何！？」

俺はキュルケから父さんの方に向き直った。父さんはニコニコというかにやにやしている。

（これは父さんが絶対絡んでるな！）

「父さん！これはどういうことですか？どうして養子に出たはずのキュルケがここにいて、そして結婚という話になっているんですか！？」

「ん？どうした？ヴァルムロート？何かおかしなことがあるのか？」

「おかしなことだらけでしょうが！ちゃんと説明して下さい！」

「まあ、混乱するのも無理はないか。ではこちらに座って話をしようじゃないか。」

「ええ！」

俺達のやり取りを見て伯爵は笑っているし、キュルケはしかたないわねみたいな感じだった。

「じゃあ、説明して下さい！」

「ああ、“姉弟”で結婚出来ないのはこの間話したな。だったら、“姉弟”でなければ結婚出来るということだ。」

「はい！？そんな簡単なものでいいのですか！？」

「まあ、”双子”という条件があるのだがな。」

「”双子”ですか？」

「そうだ。法律にな、『双子の兄妹もしくは姉弟で、満１４歳になった時点でお互いに恋愛感情以上のものが見られる場合、どちらかを養子に出すことでその者達に婚姻する許可を与える。』とあるのだ。」

「はあ、そんな法律があったのですか・・・。」

「あったのだ。まあ、普通異なる性別の双子が生まれることは稀で、しかも１４まで互いを好き合うことはめったにないからこの法律が使われたのは２・３度だけらしい。しかしキュルケやお前の態度を

見ているとこれに該当するかと思ったのだ。それでこのことをキュルケに話して、今回のことになったのだ。」

「ええ、私はダーリン以外と結婚するなんて考えられないから、この話に乗ったのよ！」

「それで養子先を探すことにして、軍にいた時にもっとも信頼出来たグナイゼナウ伯爵に頼み、快く了解してくれたのでキュルケを養子に出したのだ。」

「ええ、とても面白そうなことでしたからね。」

「・・・父さん、僕の気持ちは聞かれてないけど？」

「お前は誕生日の翌日にキュルケへの愛を思いっきり叫んでいたじゃないか？それで十分だろう。」

（・・・あのときか。）

「・・・あれを聞いていたのですか。」

「ああ、あれを聞いて今回のことをキュルケに話すことを決心したといってもいいぞ！」

「そう、なんですか。」

「それでヴァルムロートよ。キュルケの申し出を受けるのだろ？早くしなさい。」

「ねぇねぇ！ダーリン早く！」

（おおぅ。答えは決まっているといえ、実際に口に出すと思うとかなり勇気がいるな。でも、もうあんな気持ちは味わいたくない！）

「・・・私ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーはキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・グナイゼナウからの申し出を快くお受けします。結婚しよう！キュルケ！」

「ダ、ダーリン！！！」

キュルケが俺に飛びついて来た。

俺は座ったままだったので顔にキュルケの胸が押し付けられて、苦しいが幸せな気持ちでいっぱいだった。

それから昼食の時間になったので、食堂までキュルケと腕を組んで行った。

食堂には豪華な料理と大きなケーキがあり、ドレス姿で皆集まっている。

父さんは皆の前に出て、

「今日はささやかながら私ヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーとキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・グナイゼナウの婚約式を行う。おめでとうヴァルムロート！キュルケ！」

「「「「「おめでとう！」」」」」

母さん達や姉さん達が祝福してくれている。

「ありがとう！」

「ありがとう！・・・ん？“婚約”？結婚とか婚姻じゃなくて？」

「ああ。実際の結婚式はお前達の歳の問題もあるので魔法学院を卒業した後くらいに壮大に行うつもりだ。それでは不満か？」

「そうなんですか？いえ、ちょっと気になっただけですから。」

「そうか！それなら問題無いな！」

「・・・そういえば、どうして今回のことを僕には一言もなかったのですか？キュルケが養子に行ったのは僕が家にいなかった時ですし・・・。」

「そのことか。それはな・・・」

「それは？」

「お前の驚く顔が見たかったからだ！いつもお前に驚かさせれてばかりだからな！たまには驚かしてやりたいと思ったのだ。どうだ驚いただろう？」

「そりゃあ驚きますよ！キュルケにもう会えないかと思って本気で凹んでいたし・・・。」

「もう！ダーリンたら、そんなに私のことが好きだったのね！もっと早く言ってくれても良かったのに！」

「あはは！まあ、終わりよければすべてよし、ということでいいじゃないか！」

「・・・いいのかな？」

「いいのよ！ダーリン！」

こうして俺はキュルケと婚約した。

キュルケはこのまま花嫁修業という項目で家に留まり、年に１・２回位養子先に行くらしい。もちろん俺も一緒に。

「そういえば、どうして法律に男女の双子はどちらかを養子に出したら結婚出来るって法律を作ったのすかね？」

「それ、私も気になってちょっと調べたのよ。そしたら・・・」

「そしたら？」

「どうやら、男女の双子って前世決して結ばれなかった恋人同士でね！生まれ変わってもう離れないようにっていうことで双子として生まれてくるという話から来ているみたいなの！ロマンチックね！」

（まあ、実際は時の権力者のせいだと思うんだけど、なんか日本で

も同じような話を聞いたことがあるような？どこにでもある話なのかな？）

「へえ、そんな話があったのか。」

「ええ！・・・ということは、私とダーリンも前世では結ばれなかった恋人だったのね！」

（すまん！キュルケ！俺前世の記憶あるけど、恋人がいたこととか1度もないから。・・・ちょっと空しい。）

「・・・そうだったら、いいな・・・。」

「今度は幸せになりましょう！」

（前世とか関係ない！俺はキュルケを幸せに出来るように頑張ろう！）

「ああ、僕がキュルケを幸せにするよ！」

仕組まれた婚約式（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

あはは、ヨスガっちゃう前段階になっちゃいました。
この二次作品ではキュルケがメインヒロインだからしょうがないね！

実際に昔の日本で双子の片方を養子に出して、他人として結婚させるってことがあったみたですよ。この場合はおそらく赤子のときに養子に出すのでしょうが。

「近親相姦キモい。」という方がいらしたらすみません。

でも今後はヨスガるのではなく、ただキュルケのいちゃいちゃが増える位だと思って下さい。

ご意見・ご感想かあれば宜しければ書いてみて下さい。

原作開始まであと3年半だけど・・・（前書き）

こんにちは。こんばんは。

ゲームを攻略したり、私用で家を空けたりといろいろあって思ったより更新するのが遅くなってしましました。

今回は魔法学院についての話ですね。

原作開始まであと3年半だけど・・・

「ヴァルムロート、キュルケよ、お前達はもう１５だ。来年の春から魔法学院に通わないか？」

「え！？」

朝、皆で朝食と食べていると父さんがいきなりそう口走った。

俺は１５歳になったばかりだ。

あ、俺の誕生日はラドの月の５日だ、ラドの月は日本でいうところの９月だな。

ちなみにカトレアさんの誕生日はティールの月の１２日で、ティールの月は３月に該当する。

１５回目の誕生会を名前の変わったキュルケと一緒に行った。

今回はキュルケの養子先のグナイゼナウ伯爵も来ていて、そこで大々的に俺とキュルケの婚約を発表した。

誕生会に来ていた貴族達は皆動揺していたが（そりゃそうだ）、法律のことや父さんが根回しして用意していたゲルマニア皇帝の婚約許可書を出すとしぶしぶ納得していたようだった。

婚約許可書なんて普通はおそらく要らないと思うが、他の貴族を黙らせるにはこれが一番だって父さんが笑っていた。

いくら父さんが辺境伯の位を持つ貴族でも皇帝の許可書なんてどうやったら貰えるのかを聞いたけど、

「まあ、ちょっとな・・・。どんな苦労も娘の幸せの前では無に等しいからな！」

と、詳しくは教えてくれなかった。

あとで母さん達にちょっと聞いたら、父さんと皇帝、そしてキュルケの養子先のグナイゼナウ伯爵はゲルマニア軍時代の戦友だったらしい。

父さんと皇帝がね・・・それでもどうなんだろうね？

「そうね！本当ならもっと早くても良かったと思うのだけど、さっさと卒業して早く結婚しましょ！」

「え！？」

キュルケも乗り気のようだ。

それもそうかもしれない。

俺とキュルケが婚約した日の夜、俺が寝ているとキュルケが俺の部屋に忍び込んできたのだ！

それもかなりきわどい下着姿で！

キュルケの目的は十中八九夜這いだったのだろう。

正直嬉しかった！

・・・が、もしここでやってしまって妊娠したら、キュルケは出産と子育てをしないといけないし、俺も子育てを一緒にやりたいからゲルマニアから出ることはほとんどなくなって、トリステインの魔法学院に留学なんて絶対にしないだろう。

しかし、それでは原作組の戦力がほぼルイズとサイトとギーシュだけになってしまう可能性が高い。

ギーシュはサイトとの決闘イベントによって友達みたいなものになるだろうが、タバサはどうだろうか？

タバサはおそらくトリステインに留学するだろう。

しかし、キュルケがいない状態であの我関せず的な態度を取るタバサがルイズやサイトを自発的に手伝うだろうか？

タバサはキュルケが引っ張っていたからルイズ達に協力していたのであって、キュルケがいなかったら我関せず的な態度を崩さなかっ

ただろう。

フーケのイベントはサイトがいればロケットランチャー改め破壊の杖でフーケのゴーレムは倒せるだろう。

しかし、アルビオン関連のイベントでは圧倒的に戦力不足だ。

武器がデルフだけのサイトとドットメイジのギーシュ、あの時点では虚無の使えないルイズ、そして敵であるワルド。

下手をしたらサイトはアルビオンに着かないまま最悪死んでしまうかもしれないし、そしたらルイズは操られて、トリステインはそのうちレコンキスタに侵略されるだろう。

俺のゼロの使い魔の知識はアニメとネットでちょっと調べた程度だが、しかも15年経っているので大まかな事しか覚えてないけど、このハルケギニアで一番の問題が地面の下?にある風石でそれが大量に溜まってきていて近い将来にハルケギニアの大地が浮かび上がってしまうらしい、ということだ。

おそらく原作ではきっと無事に解決するんだろうけど、もし解決出来なくて大地が浮かび上がってしまったらどうなるのか?

アルビオンみたいに安定したものならいいけど、そんな楽観視はできないだろうし、しちゃいけないと思う。

映画かドラマだったか忘れたけど「常に最悪の事態を想定しておくことは大切なことだ!」みたいな言葉を聞いた時、なるほど最悪の状態を想定しておけばちょっと悪いことが起こっても冷静に対応出来るしな、とか思ったものだ。

だから大地が浮かび上がるなんて、そんな事態にはしてはいけないのだ！

主に俺とキュルケがずっと幸せに暮らしていくためには！

だからここでキュルケを受け入れるわけにはいかなかった。

そんなことをものの数秒で考え、誘惑に負けそうになる自分を押さえながら、キュルケを必死に説得、しかも今考えたことはおそらく未来のことなので言えないし大地が浮かび上がるなんて信じないだろうから難しかったが、

「しょうがないわね。・・・今日の所はキスだけで我慢してあげるわ！」

ということで前世も含めてのファーストキスをキュルケと交わした。

キスしている時、キュルケの唇やわらけ～とか思いながらものすごく興奮していた。

なんせ初めてのキスに今の体は１５歳でやりたい盛り？（普段は魔法に剣にであんまり考える時間が無いからそうは思わないけどってなんか部活に打ち込んでいる中学生みたいだな）なので、少しでも冷静になるように素数を数えたりした。

キスを終えると、キュルケは真っ赤な顔だったが満足したように自分の部屋に戻っていった。

次の日の朝、俺は皆に“最後の一線はきちんと結婚してから！”と宣言をした。

これは今後のキュルケが行うであろう夜這いを牽制するものだ。

ぶっちゃけ、次にキュルケが夜這いを仕掛けてきたら理性を保てる可能性が低いからだ！

キュルケ以外は初めからそう考えていたようで意外とすんなり分かってもらえた。

キュルケは俺の宣言に不満そうにしていたが、

「キュルケと“一緒”に学院を過ごしたいんだ！もし、妊娠や子育てをしていたらそれが不可能になると思うんだ・・・僕の自分勝手な理由でごめんね。」

といったら、しぶしぶ了承してくれた。

こんなことがあったので、キュルケとしてはさっさと学院を卒業して結婚したいのだろうが、ここでいう魔法学院はおそらく・・・

「父さん、その魔法学院はゲルマニアのですか？」

「もちろんそうだ。」

やはり、とうか普通はそうだろう。

ゲルマニアの貴族はゲルマニアの魔法学院に行く、これが普通だ。

魔法学院に行く理由は学問や魔法、作法の勉強のためというよりは他の貴族とコネを作るためというものが大きいだろう。

勉強なんて、家庭教師とかでどうとでもなるしな。

原作のキュルケはなんでトリステインの魔法学院にいたのかね？

ルイズはキュルケがゲルマニアの男を漁り過ぎて、それが問題になったからトリステインの魔法学院に来たんじゃないの、とか言ってたような？

それに今ルイズは１３歳だったはずだ。

仮に１５歳から魔法学院に行くとしてあと２年ある。

どうするべきか・・・

なんとかして２年の時間を稼がないと！

「父さん！」

「どうした！？ヴァルムロート？」

「僕はまだ魔法学院にいくことはできません！」

（キュルケ、ごめん！）

家族皆が驚いた顔をして俺を見つめる。

特にキュルケはどうして！と顔にありありと出ていた。

「どうしてだ？皆お前くらいの歳で魔法学院にいくものだぞ？むしろお前の成長を見ればもっと早くても良かったかもしれんと思ったのだか。何か理由があるのか？」

「そ、そう！ダーリン、どうしてなの！？」

「それは魔法学院の位置に大きな問題があるのです。」

家族皆首をかしげてた、アニメや漫画だったら頭の上に？マークが出ていただろう。

「ん？学院の位置がどうして問題になるのだ？」

「はい。前にゲルマニアの魔法学院ことを聞いた時に帝都の比較的近くにあると聞きました。」

「それがどうした？別に家から通うのではないぞ？」

「ヴァル、魔法学院は全寮制だから家との距離は関係ないわよ？」

「そうそう。私達も学院にある寮で過ごしていたのよ。」

「部屋はちょっと狭いけどね。」

「ヴァルも住んでみれば友達と一緒にわいわい出来るし、面白いわよ？」

「ダーリン、お姉様達もこう言っているのに、なにが問題なの？」

「いいや、寮に住むことは別にいいんだ。問題なのは家との距離ではなくて、ヴァリエール家との距離の方なんだよ。」

「ヴァルムロート、どうしてヴァリエール家が関ｋ・・・いや・・・」

父さんは何かを言いかけたが、すぐに俺が言いたいことが分かったようだ。

「はい。ヴァリエール家と距離が離れてしまうとカトレアさんの病気が急変した時にすぐに駆けつけられないと思うのです。」

いまでも馬車で約４日だが、使ったことは無いが竜籠を使えば１日で着く距離らしい。

しかしゲルマニアの魔法学院は実際に行ったことはないが効いた話だと、ここから馬車で２０日近くかかり、竜籠でも３～４日かかってしまうらしい。

「確かに学院にいてはヴァリエール家までは時間がかかり過ぎるな。」

「でも！ヴァリエール家にはカトレア様の主治医であるカミーユさんや他にも沢山のメイジがいるじゃない！ちょっとくらいダーリンが遅れても大丈夫じゃないの？」

「確かにそうかもしれない。今までもそうだったしね。でも次に何かあったらそうじゃないかもしれない。」

「・・・そうだけど。」

「それにこれは大丈夫、大丈夫じゃないという問題ではないんだ。これはカトレアさんを治療するという約束に対する責任みたいなものなんだ。」

「・・・今すぐにカトレア様の治療を行うって、ダメ？」

「確かにほとんどの準備は終わっているな。」

（この前のカトレアさんの誕生会の時に2人程練習して手術の技術が衰えていないのを確認したしな。あとはこの被験者をまた1年くらい経過観察して本当に大丈夫かを調べる。）

「じゃあ！」

「でも、ダメ。今は何をしているかはまだ教えられないけど経過観察中なんだ。でもこれがうまくいったら次のカトレアさんの誕生会に行った時に治療が出来るかもしれないんだ。」

（まあ、前の被験者は最初はちょっと体調崩したりしたみたいだけど、手術から約9ヶ月たった今はもう全然平気みたいだからおそらく大丈夫だとは思うけど、念には念を入れないとな。）

「え、そうなの！？すごいじゃない！ダーリン！」

「そうか、後少しなのだな！やったな！ヴァルムロート！」

俺の報告を聞いて、皆が褒めてくれている・・・照れるぜ／／／

「えへへ・・・」

「それじゃあ、再来年には魔法学院に通えるのね？」

「いや、確かにカトレアさんの治療が終わるのは来年の春だけど、その後の経過観察を1年・・・いや1年半は見なくてはいけないと思う。治療した後は体の調子が悪くなるから体力の落ちているカトレアさんは特に慎重にならないといけないと思うんだ。」

「そう、なの・・・。」

「ごめんね、キュルケ。」

「ううん。そういう風に物事に真剣に取り組めるダーリンだから好きになったの！謝らないで、早くカトレア様を治してあげてね！」

「キュルケ・・・」

俺とキュルケは見つめ合って、心なしか周りがきらきらと輝いているようだ。

ああ、時が見えるよ・・・

「・・・うおっほん！そろそろいいかな、おふたりさん？」

「あ、父さんごめん。で、こういった理由なんだけど、ダメかな？」

「まあ、そういうちゃんとした理由があるならしょうがないな。自分の言ったことに責任を持つことは大切だからな、何に対しても。」

「それじゃあ・・・」

「ああ、魔法学院へは3年後の春、お前達が17歳の時だな。まあ、入学するのに年齢制限があるわけではないから問題はないな。これで問題無いな？」

「・・・魔法学院はどうしてもゲルマニアじゃないといけないですか？」

「ん？ゲルマニアじゃないとすると、国外・・・ガリアか？あそこはハルケギニアで一番魔法の研究が進んでいるようだからな。学院でもなにか変ったことを教えてくれるかもしれんな。」

「・・・いや、トリステインとか、は？」

「トリステインか・・・ヴァリエールには悪いがあの国は始祖ブリミルの子孫が起こした国だが、ここ１０数年景気が傾いていて、国力がどんどん落ちていっているぞ？それなのに大した対策もせず、大半の貴族は自分達の生活を維持するために平民にかける税を増やしていると聞く。まあ、ヴァリエールはそのようなことは行っていないが。言えるのはあの国の貴族のほとんどはプライドだけがやたらめったに高い連中ということだな！それにいつまでたっても王位が空席ということが何よりも問題だな！まったく、何を考えているのやら。」

（あ、やっぱりトリステインってかなり状況悪いんだ。ぼろくそに言われてるよ。）

「・・・でも、父さんはトリステインの魔法学院に行ったのですよね？」

「・・・ああ、そうだったな。そこで初めてヴァリエールと顔を合

わせたのだったな。ふふ、よく決闘紛いなことをやったなものだな・・・。」

「・・・まあ、ガリアも魅力的ですがトリステインのように状態が悪い国でも学べることはあると思いますよ?例えば、外からでは分かりにくい国の腐敗している部分を知ることが出来たり、自国をあえて外から見ることでまだ伸ばせるいい所や改善すべき部分が見えてくるかもしれませんよ?」

「・・・ふむ。一理あるか。まあ、まだ時間はあるのだ、それまでにじっくり考えよう。」

「そうですね。・・・それで外国に行くことになったらキュルケには」

「私ももちろん一緒に行くわよ!」

「ああ、もちろんだよ!むしろ付いて来てもらわないと困るよ。」

「もう、そんなに私と一緒に居たいなんて!どこまでも付いて行くわよ!」

「父さん、もし外国の魔法学院に行くことになったら・・・」

「ああ、グナイゼナウには私から話をしよう。まあ、行くことになった時の話だがな。」

「そうですね。その時はお願いします。」

こうして今回父さんがいきなり言いだした魔法学院行きはなんとか回避した。

なんか正当な理由なんだけど、カトレアさんをだしに使ったみたいで申し訳ないな。

でも、こうしてなんとか魔法学院に通うときを原作に会わせることが出来た。

まだ時間しか合わせられてないけど、どうにかしてトリステインの魔法学院に行くようにしないとな。

原作開始まであと3年半だけど・・・（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

カトレアさんの誕生日は、まあ、ある意味適当です。

あ、主人公はヘタレじゃないけど、原作突入するためにはしょうがないね。まあ、童帝ですけどね。他の方の作品だったらメイドさんとやりまくってたりするところもあるますが、童帝なのでそのへんはピュアってことで。

・・・父さんがすでにハーレムなのにね。

原作開始までの時間稼ぎ方が酷い・・・もっとスマートに出来ないものだろうか？

ご意見・ご感想があれば書いてみて下さい。

主人公の練習はハルケギニアではかなり特殊かも？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

主人公のメイジレベルアップで模擬戦フラグが成立。

主人公の練習はハルケギニアではかなり特殊かも？

俺は今ある魔法の詠唱を行っている。

それはいままでの俺では出来なかったものだが、今の俺になら出来るはずだ！

と、思っている。

「頑張って！ダーリン！」

「ヴァルムロート様を信じましょう。・・・しかしヴァルムロート様なら大丈夫のような気がしますね。」

キュルケとレイルド先生が見守るなか、俺は詠唱を完了させた。

「『ヴォルケイノー』！」

魔法を唱えると俺の目の前に火の塊が出来た。

ここまでなら『ファイアーボール』となんら変わらないが、その火の塊がみるみるうちに大きくなっていく。

その火の塊は俺よりも大きくなり、近くにいるだけですごい熱さを感じる。

「やったわ！ダーリン！」

「いえ、ここからの操作が一番難しいと聞きます！ここで操作を誤ると大惨事を引き起こすのでまだ気を緩めないで下さい！」

俺は周りに被害が出ないように確認して地面と水平にその火の塊の力を放出した。

するとものすごい爆発のエネルギーが放出され、地面の表面をえぐりながら進んでいった。

見た目は超極太の火炎放射だな。

「おお・・・、ゴジラの熱線みたいだな。」

俺はぼそっと思っていることを口にしてしまった。

幸い、キュルケやレイルド先生とは少し距離があったので聞こえなかったようだが。

熱線は５０メイル位のところまで地面をえぐり、周りのもの（と言っても練習場で草や的位しか無いけど）を燃やし尽くした。

「良し！次は・・・。」

また同じように『ヴォルケイノー』を発動させ、今度は火の塊自体を５０メイル程移動させた。

キュルケやレイルド先生は土の壁から顔を覗かせている。

俺もレイルド先生が『錬金』で作った土の壁に身を隠し、火の塊を

そのまま爆発させた。

ドーンっと、大気を震わす大きな音の振動を肌で感じた次の瞬間に土の壁にすさまじい爆風と爆発によってまき散らされた土の塊や石が直撃した。

爆風をやり過ごして、爆発させたところを見ると大きなクレーターが出来ていて、地面にまだ赤くなっている部分もあった。

別の土の壁に身を隠していたキュルケとレイルド先生がこちらに来た。

「キュルケ！レイルド先生！成功しm、ぐえ！」

俺の言葉が終わらないうちにキュルケが『フライ』で飛んで来て、俺に抱きついてきた。

「すごいわ！本当にスクウェアスペルを成功させるなんて！これでダーリンは正真正銘のスクウェアメイジになったのね！」

「ありがとう！これもキュルケが応援してくれたおかげだよ！」

「もう、ダーリン自身の力があってこそよ！」

少し遅れてレイルド先生が近くにやってきた。

「ヴァルムロート様、おめでとうございます！ヴァルムロート様がいきなり“もしかしたら、スクウェアクラスになったかもしれない”と言われた時にはいくらヴァルムロート様に素質があるとはいえ、こんなに早いものなのか？と疑ってしまいましたが・・・」

レイルド先生が地面のえぐられたところやクレーターを見た。

「実際にスクウェアスペルを使用出来ているところを見ると、ヴァルムロート様はみごとにスクウェアクラスになられたということですね！これまでの練習の成果が出ましたね！」

「ありがとうございます！」

（よっしゃあああああああああ！！！）

「おめでとう！ダーリン！」

キュルケが突然ほっぺたに軽く触れるくらいのキスをしてきた。

俺は突然のことで驚き、顔が熱くなるのを感じた。

午後からの剣の訓練の時にブルーダー先生にお祝いの言葉を貰ったが、それはそれでみっちり剣の訓練をした。

最近は兵士の人と軽い試合形式の模擬戦を行っているが、これがなかなか勝てない。

悔しいので剣の訓練も今まで以上に頑張っている。

その夜は俺がスクウェアクラスになったお祝いにいつもより特別豪華な食事が出て、ちょっとしたパーティのようになった。

父さんは上機嫌で普段は出してこない年代物のワインを開けている。

「さすが私の息子だ！この年でスクウェアクラスになってしまうとは！ゲルマニアの最年少スクウェアではないのか！」

「僕も驚いていますよ。」

（確かにもうちょっと時間がかかるかと思ったけど、魔法を練習し始めてからもう１０年か。普通の練習だけでなくて、必殺技の開発や『トランザム』とかの訓練とかもスクウェアになれたことに影響してるのかな？）

「そうね、ヴァル位の歳では普通はドットかライン、よくてトライアングルですからね。スクウェアはほとんど聞かないですわね。」

「あ、ヴァルがスクウェアになったんだから・・・」

母さんの１人が突然真剣な顔をした。

「え！？どうしたの、母さん？」

すると母さんは真剣な顔を解いて、そしてにっこり笑って、

「ヴァルがスクウェアになったんだから、次にカリーヌさんに会ったら模擬戦しないといけないわね！」

「・・・」

（・・・忘れていたかった。）

「おお！そうだったな！ハルケギニア１とも噂があるあの“烈風の

カリン”ことカリーヌ夫人と模擬戦か！これは楽しみだな！」

「・・・ソウダネ。」

（自分が戦うんじゃないから、気楽に言ってくれるな・・・。てか、カリーヌさんってハルケギニアで一番強いの！？マジで！？）

「今度カリーヌさんに会うのは次のカトレアさんの誕生会ね！」

「次のカトレアさんの誕生会は大変ね！カトレアさんの治療の大詰めにカリーヌさんとの模擬戦と。」

「・・・アア、ソウダネ。」

（やべえ、仮に模擬戦でも下手したら半殺し位になるかもしれん・・・）

「「頑張ってね！ヴァル！」」

「大丈夫よ！ダーリン！」

「キュルケ・・・！」

「勝て・・・ないかもしれないけど、いい勝負にはあるんじゃないかしら？」

「そうだと、いいな・・・」

次の日の魔法の練習の時間になった。

俺とキュルケが練習場に行くと、すでにレイルド先生が待っていた。

「「レイルド先生、今日もお願いします。」」

「・・・練習の前にヴァルムロート様、お話があります。」

「なんですか？」

「どうしたの？」

「昨日、ヴァルムロート様はスクウェアになられました。」

「ええ、そうのようですが・・・。それがなにか？」

「私のメイジのクラスは御存じですよね？」

「ええ。」

「先生って、確かトライアングルだったわよね？」

「はい、その通りです。私はトライアングル、しかし教えるべきヴァルムロート様はスクウェアになられた、ということは私では教えられることはないにも等しいのです。ヴァルムロート様のこれ以上の上達を私では促せないかもしれないので。」

「え！？では、これからは教えてくれないのですか？」

「いえ、そうではありません。これからは知識とメイジとしての経験を用いてアドバイスを行っていくことでヴァルムロート様の上達

に手をお貸ししていこうと考えています。」

「そうですか・・・。では、何か分からないことがあればアドバイスを貰うことにします。これからもお願いします。」

「はい。お任せ下さい！」

「ねえー、私は？」

「キュルケ様は今まで通りに教えていきますよ。宜しいですね？」

「はーい。」

「頑張ってね、キュルケ！」

「ええ！私もダーリンにすぐに追いついて見せるわ！」

ということでこれからの魔法の練習の時間は主に自主錬になりそうだ。

カトレアさんの誕生日まであと1ヶ月くらいだ。

あと1ヶ月でカリーヌさんと模擬戦をしないといけないかもしれない。

「・・・死にたくは無いな。」

もちろん模擬戦なので死ぬことは無いだろうが、下手をしたら大怪

我じゃ済まないかもしれない。

「・・・とりあえず『トランザム』をやってみるか。魔力総量も増えているだろうから、もしかしたら持続時間が延びているかも。」

俺の体が淡い炎で包まれる。

そのまま動いたり、『フライ』で飛びまわってみたが基本性能はトライアングルのときと変わらないようだ。

そのまま１０秒過ぎたが魔力切れになる様子は無く、地上で走ったりは体に負担がかかり過ぎると考え、そのまま危なくなるまで『フライ』で縦横無尽に飛んでみた。

すると大体２分３０秒位で精神的に疲れてきたのが分かったので、そこで止めておいた。

「２分３０秒位でこの疲労感か・・・。これだったら、完全な魔力切れは３分前後だな。」

これ以上行うと魔力切れで午後からの剣の訓練が死にそうになるのでキュルケの練習風景を眺めながら、なにかいい必殺技はないかな？と考えを凝らしていた。

次の日も『トランザム』について調べると、興味深いことが分かった。

それは魔法の使用頻度と『トランザム』の持続時間の関係性と『ト

ランザム』状態における魔法の威力の誤差拡大についてだ。

前者は前から考えていたことだが、魔法を使用すればするほど『トランザム』の持続時間が少なくなるというものだ。

これは、まあ、しょうがない。

なにせ、『トランザム』は常に魔力を消費しているのだから、魔法を使って魔力を消費すればそれだけ『トランザム』に割ける魔力が少なくなるのは当然だろう。

問題は後者の魔法の威力の誤差拡大だ。

同じ魔法を使ってもそのたびに威力が異なることがあり、特に『ファイアーボール』のように連射出来る魔法ではそれが顕著に現れた。

実はこの現象をワイバーンと戦った時にすでに1回経験していた。

あの時はたまたまかと思ったが、そうではなかったようだ。

それでどれくらい誤差があるのかを調べたところ、俺の感覚でいうと以下のようになる。

普通の状態で『ファイアーボール』を連射したときの威力を平均したものを１００とすると、その誤差は±２０だ。

つまり８０～１２０の威力というわけだ。

これを『トランザム』で行うと、『ファイアーボール』を連射したときの威力を平均したものは２００くらいになり、その誤差は±１

００だ。

つまり１００～３００の威力で下手したら『トランザム』状態なのに普通の状態よりも弱いのに、消費魔力はやはり3倍位だ。

これではあまり割に合わないかもしれない。

「・・・と思いませんか？どうしたらいいですかね？」

さっそくレイルド先生に質問してみた。

「そうですね・・・。『トランザム』という魔法はヴァルムロート様オリジナルなのでどのような感じなのかは分かりかねますが、魔法の誤差が大きいというのであれば練習を繰り返し少しでも誤差を少なくするのがよろしいのではないでしょうか？」

「やはり、そうですか・・・」

それは俺も考えていたことだ。

やはり地道に練習していくのが一番なのだろうか？

「それと、魔法の連続使用は魔法１つ１つのイメージが希薄になることで誤差が大きくなるものだと考えられます。」

「１つ１つの魔法のイメージですか・・・」

「はい。ですから、実際に魔法を放つだけでなく、心の中でイメージしてみることも訓練になると思いますよ。魔法はイメージが大切

ですからね。それにこの方法だと実際に精神力を使わなくて済みますしね。」

「なるほど・・・ありがとうございます！」

（イメージトレーニングか・・・）

「ヴァルムロート、お前に手紙が届いていたぞ。」

「カミーユさんからだ。経過観察の定期連絡かな。後で読むよ。」

「分かった。では、お前の部屋に置いておくようにしよう。それとヴァリエールからも手紙が来ていたな。」

「カトレア様の誕生会のことですかね？あと1ヶ月くらいですから。」

「ああ、それもあったが・・・」

「あったが？」

「手紙にはカトレア嬢の治療を誕生会の前に出来ないかと書かれていたぞ？ヴァルムロートよ、何か聞いているのか？」

「カトレアさんの治療を誕生会の前にですか？後じゃあいけないのかな？前にしたら手術後は2週間くらいは安静にしておいてもらいたいのだけど・・・。」

「ヴァルムロートは何も聞いていないのか。」

「ねえ、ダーリン。さっきのカミーユさんからのお手紙に何か書いてあるんじゃないかしら？」

「そうだね。父さんさっきの手紙を今貰ってもいいですか？」

「そうだな。今持って来させよう。・・・ヴァルムロートの部屋からミス・リッシュから来た手紙があるはずだ。それを持ってきてくれ。」

父さんがそういうとメイドさんは1人走っていき、少し経って戻ってきた。

俺はそのメイドさんから手紙を受け取ると、早速開封してみた。

手紙の内容はいつもの経過観察について書いてある後にヴァリエール公爵がカトレアさんの手術を早めたいと書いてあり、手術を早めるにあたりカミーユさんの意見が書いてあった。

カトレアさんの手術を早めるのはカミーユさんの意見ではこれまでの実験結果と最近のカトレアさんの体調が良いこともあり、特に問題無いだろうということが書いてあった。

ただなぜここに来てヴァリエール公爵がカトレアさんの治療を早めたのかを知ることは出来なかった。

「・・・確かにカミーユさんの手紙にもカトレアさんの治療を早めることがかいてありますね。どうして早めたのかという理由は書いてないですけど。」

「こちらの手紙にも理由は書いていないな。お前のカトレア嬢の治療への準備が順調に進んで、今はほとんど終わっているのだろう？ヴァリエールも早くカトレア嬢を治して欲しいのかもしれんな。」

「それでダーリンはどうするの？」

「うーん。カトレアさんの治療をして、誕生会も開くのなら最低でも2週間前に手術を終わらせたいな。時間的な余裕を考えたら、すぐにでも行って行った方が良い位だよ。」

「ヴァル！だったら、すぐに行きましょう！」

「え？」

「そうだな。ではすぐにでもヴァリエールに返事を書いて明日の朝・・・は、さすがに急か。では、明後日の朝に出かけるぞ。皆準備をしておきなさい！」

「「「「「「「「「はーい！」」」」」」」」」

「え？いいの？」

「いいのよ、ダーリン。それに・・・」

「それに？」

「早くダーリンとカリーヌ様の戦いが見たいもの！ねー！」

「「「「「「「「「ねー！」」」」」」」」」

「・・・そっちが本命なのか？父さんなんとか言ってよ！」

「・・・すまん。私もお前とカリーヌ夫人との戦いを見てみたいのだ。なに、カトレア嬢のことはお前に任せておけば問題無いだろう！」

「・・・父さんまで。そりゃ、ここまでやったんだからカトレアさんのことは頑張るけどさ。」

翌日、父さんは鷹便でヴァリエール公爵宛で手紙を出したようだ。

さらに翌日、家族皆でヴァリエール家に向けて出発した。

「よし・・・覚悟を決めた！カリーヌさんだろうが烈風カリンだろうが戦ってやるぜ！」

「ダーリン、カトレアさんのことじゃなくてそっちを悩んでたの？というかダーリンってそういうしゃべり方も出来たのね！」

「カトレアさんのことは僕1人で行うわけじゃないからね。というか・・・今の口に出てた？」

「ええ。なんだかワイルドで素敵だったわよ。」

「そ、そう？」

「ええ！たまにはそういうしゃべり方もいいわね！」

「まあ、気が向いたらね。それに・・・」

（あんまり羽目外し過ぎると、貴族らしくないんじゃないかな？それに・・・）

「それに？」

「事は全てエレガントに、ね。」

ちょっとキザにポーズとか決めてみた。

「・・・それはちょっといまいちね。」

「あ、そうですか・・・。」

「やっぱり普通が一番かもね！」

「そうだね！」

「・・・でも、なんでヴァリエール公爵様はカトレアさんの治療を早めたんだろ？まあ、早まったのは１ヶ月くらいだけどさ。」

主人公の練習はハルケギニアではかなり特殊かも？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

主人公がスクウェアになりましたが、火はスクウェアですが、水基準ではライン、風ではいまだにドットです。これらも今後上がっていく予定です。

もう知っているかもしれませんが、この二次創作の主人公は魔法の元を魔力と考えています。主にゲームの影響で。
しかし、原作や他の登場人物は精神力を使って魔法を発動していると考えています。（というかそういう設定）
前者がＭＰで後者がＳＰですね。

それに魔法に使用についても理解に違いがあります。
メイジのランクが上がれば使用できる魔法の回数が増えるのですが・・・
主人公は消費魔力は一定で魔力の総量が増えるから回数が増えると思っています。
主人公以外の人や原作の設定では精神力の総量は一定で魔法の消費精神力が減ることで回数が増えるということになっています。（だったはず）
まあ、結果的にどちらも回数が増えるので一緒かな？
魔法はイメージなのでイメージのし易さが大事だと思っているので、あえて主人公は精神力ではなく魔力で考えています。
スパロボはＳＰだけど、魔法じゃないからな・・・「必中」とかあったら「加速」持ちのジョゼフも簡単に倒せそうだな。
って、「加速」って書くとなんか違う気がするな。「集中」？「ひらめき」？

次はとうとうカトレアさんの治療を行いたいと思います。
主人公が初めてカトレアさんと出会ってから5年経ってようやくですね。

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてみて下さい。

カトレアの手術。そして・・・死の宣告？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

とうとうカトレアさんの治療、最終話です。

カトレアの手術。そして・・・死の宣告？

今、俺はツェルプストー領とヴァリエール領の間に位置する国境の町にいる。

カトレアさんの治療のために特に準備もせずに家を出てきたのでいろいろ足りない物があるらしい、特に女性陣のアクセサリー類だが。

俺は特にすることもないのでキュルケ達の買い物に付き合ったわけだが、俺が欲しいものは無いし、会話は女性陣で盛り上がっているので俺の入る隙はない。

そういうわけで店の前でボケーっとしていると道を行き交う人の会話が断片的だが聞こえてくる。

その中でも特に多く出てきた言葉が、

「ガリア王が死んだ」
「魔法を使えない無能の兄の方が王位を継いだ」
「魔法の優秀な弟は突然死んだ」
「暗殺かも」

などだった。

どうやらジョゼフが弟を殺してガリアの新しい王になったようだ。

外国の、それも王族のことなので俺にはどうしようもないので仕方ないだろう。

でも、ジョゼフが王になったということはやっぱり世界を混乱させるためにレコンキスタを支援するんだろうし、それによって戦争が起きるのだろう。

あ、タバサのお母さんも毒で廃人になったのか？

俺もなんとかしてあげたいけど、これは病気ではなくてエルフの薬のせいだったはずだから俺には無理だな。

仮に現代の病気に置き直せても脳の疾患ぽいから治療不可とかになりそうだしな。

カトレアさんの治療が出来そうなのは本当にたまたまだし。

「ダーリン！次のお店に行くわよ～！」

「やれやれ、まだ行くのか・・・。」

次の日、ヴァリエール家に到着した。

ヴァリエール公爵、カリーヌさん、ルイズそれに珍しくエレオノールさんも出迎えに出てきている。

「よく来てくれたな、ツェルプストー。ヴァルムロート君、カトレアのことよろしく頼むよ！」

「はい！出来る限りのことをやります！」

「うむ。長旅で疲れただろう、部屋を用意させているから今日は休んだらどうかね？」

「そうだな。疲れていては正確な操作をすることは出来まい。今日は休ませてもらおうじゃないか、ヴァルムロート。」

「その前にカミーユさんを呼んでもらえませんか？明日手術をするにあたって2・3聞きたいことがあるので。」

「そうか。分かった、呼んで来させよう。ヴァルムロート君は先に会議室に行って待っていてもらえるかな？」

「分かりました。お願いします。」

ヴァリエール公爵が人を呼んでカミーユさんを呼びに行かせた。

「私達は先に部屋で休ませてもらうぞ。お前も疲れているのだから、早々に話を切り上げて休めよ。」

「はい。分かりました。」

「私はダーリンと一緒にいるわ。」

「そうか。ヴァルムロートの邪魔にならないようにな、キュルケ。」

「はーい！」

「ヴァルムロート、キュルケ、お久しぶりね。」

「お久しぶり、ルイズ。」

「こんにちは、ルイズ。エレオノールさんもお元気そうで。」

「こんにちは。・・・ふん！なんでこんなやつをカトレアは・・・」

エレオノールさんは挨拶もそこそこに家に入っていった。

「エレオノール様はなんだかカリカリしてるわね。」

「・・・ルイズ、僕エレオノールさんに何かしたっけ？」

「さあ？でも、あなかから手紙が来てちぃ姉さまの治療をしにくるってエレオノールお姉様に手紙を出したらすぐに帰ってからずっと機嫌が悪いわね。どうしてかしら？」

「そうか。」

「ねえ、ヴァルムロート！ちぃ姉さまを本当に治療してくれるのよね！」

「ああ、そのためにやってきたからね。頑張るよ。」

「ダーリンに任せておけば大丈夫よ！」

ルイズと話をしながら、会議室にやってきたが、カミーユさんはまだ来ていなかった。

しばらく待っているとカミーユさんがやってきた。

「お待たせいたしました。」

「いえ、お仕事中だったのでしょう。急に呼び出したりしてすみません。」

「いえ、明日のカトレア様の手術についての話をするのですね。」

「ええ、といっても今のカトレアさんの状態と去年模擬手術を行った被験者の経過観察、後は手術の準備について聞きたいだけなのですが。」

「分かりました。現在のかカトレア様の状態は良好で手術を行うのに問題は無いと思われます。去年模擬手術を行った被験者の経過観察も良好で日常生活では全く問題は無く、激しく運動しても手術前とほとんど変わらない状態です。手術の準備に関しては、手術室をお屋敷の部屋を改装してすでに作ってあり、部屋の中を消毒用アルコールを用いて綺麗に掃除してあります。手術着などもすでに準備済みです。」

「そうですか。準備は万全ということですね。」

「はい。後は明日の本番に臨むだけです。」

「ええ、明日頑張ってカトレアさんを元気にしてあげましょう！」

「はい！では、これで失礼します。」

「わざわざありがとうございました。」

カミーユさんが部屋から出ていった。

「ねえ、ヴァルムロート。あなたさっきミス・リッシュにちぃ姉さまお体の様子を聞いていたけど、実際に会ってみたらいいんじゃないの？」

「そうだな。明日の手術でカトレアさんも不安になっているかもしれないし、会ってみようかな。」

「じゃあ、早速カトレア様の部屋に行きましょう！」

「キュルケ！なんであんたが仕切っているのよ！」

「いいじゃない、ルイズ。細かいことは気にしない。」

「・・・キュルケとルイズは仲良くなったな。」

「「良くない！」」

キュルケとルイズがわいわい話しているのを見て、アニメではルイズが一方的にキュルケを嫌っていたみたいだけど俺の存在で少しは変わったのかな？と思った。

「・・・あ！」

「どうしたの？ダーリン。」

「・・・いや、何でもない。」

「ちぃ姉さまのこと？」

「いや、別のことでカトレアさんには関係ないことだよ。」

「そう・・・。」

俺は重大なことに気が付いてしまった。

それはＳＦにおけるタイムパラドックス的なもので、この世界に俺という存在が誕生したことによる未来の改ざんが発生している可能性だ。

例えば本来ならかなりの色ボケになっているはずのキュルケが俺一筋になったり（あ、後半はコルベール一筋だったか元からそういう素質はあったのか）、キュルケとルイズの関係がアニメよりもかなり良好だったり、とか。

まあ、カトレアさんのように俺が積極的に介入したものもあったが、今は微々たる誤差かもしれないがこれが今後もっと大きくなっていくかもしれないし、あまり変わらないかもしれない。

そういえばタイムパラドックスには４つ位パターンが考えられていたな。

？タイムパラドックスしても過去は変わらないよ、という考え。
これは未来が確定したもにという考えに基づいたものだな。未来の人が過去の人を殺そうと思っても決して殺せないというものだったな。

？タイムパラドックスしたら過去は変えられるよ、という考え。

まあ、普通はこう考えるかもしれない。
ドラえもんの映画で百式みたいなロボットが出てくるものでラストで過去に過去に行ってロボットの設定を変えたら、そもそもその事件自体が無くなったとかいう話があったと思う。

?タイムパラドックスして過去を変えても未来はそんなに変わらない、という考え。
これは過去を変えても別のことが起こって結局未来にさほど変化は無いというものだな。
?と違うのは仮に過去でAというやつの親を殺しても、その未来ではAとは違うけどAに限りなく近いほとんど同じ奴がいる、みたいな感じかな。

?タイムパラドックスして過去を変えるとそこからパラレルワールドが発生する、という考え。
これは未来Aという未来から来たやつが過去を変えると、未来Aとは別に未来Bという時間軸に世界が進み、でも未来Aが消滅したりするわけではなくて沢山あるパラレルワールドに新たに未来Bが1つ加わるだけ、というものだったかな。
これはドラゴンボールとかテイルズ・オブ・ファンタジアの小説とかであったな。

で、現状を考えるとキュルケとルイズの仲の良さを見ると?は無いと思うな。

あとは???か。

俺がいることで未来は変わるのか変わらないのか・・・。

うーん。

・・・分かんねえな！

まあ、なるようになるか！

すでに俺がいるんだし、俺が思うように行動するのも悪くないかな？

・・・あ、でもあまり原作から離れない方がいいよな。折角のアニメとネットの知識が無駄になるし。

とか、考えているとカトレアさんの部屋に着いた。

「ちぃ姉さま、ヴァルムロートと、それからおまけでキュルケも連れて来ました。」

「ルイズね。お入りなさい。ヴァルムロートさんとキュルケさんもどうぞ。」

「「失礼します。」」

カトレアさんの部屋は相変わらず多くの動物がいる。

「お久しぶりですわ、カトレア様。」

「お久しぶりです、カトレアさん。お体の調子はどうですか？」

「お久しぶりですね、キュルケさん、ヴァルムロートさん。体の調子は良いと思いますよ。最近はうちの外に出ていませんから。」

「そうですか。それも後少しの辛抱ですよ！」

「ええ、明日私の治療をして下さるのでしょう。よろしくお願いしますね、ヴァルムロートさん。」

「はい。任せておいて下さい！」

「うふふ、頼もしいわね。」

「それでは、この辺で。あまり長いをすると明日に響くといけないですからね。」

「そうね。それではカトレア様、失礼しますね。」

「ちぃ姉さま、また明日。」

「あ、キュルケさんに少しお話があるので残ってもらえないかしら？」

「え？分かりました。ダーリン達は先に行ってて。」

「ああ、分かった。」

「ちぃ姉さま、私は残っちゃいけないのですか？」

「ごめんね、ルイズ。キュルケさんと2人だけでお話がしたいのよ。」

「そうですか・・・。キュルケ！長話してちぃ姉さまに迷惑をかけないようにね！」

「ルイズ、呼び止めたのは私なんだからそういうことは言わないの。心配してくれるのは嬉しいけどね。」

「・・・はい。ごめんね、キュルケ。」

「別に気にしてないからいいわよ。ほら、そこにいるといつまでたってもカトレア様が話を始められないでしょ。行った行った。」

俺とルイズはカトレアさんの部屋から出た。

「ちぃ姉さまのキュルケへの話って何かしら？ヴァルムロート、分かる？」

「さあ？分からないな。」

「役に立たないわね。あ、あの話かしら？・・・そう言えば。」

「役に立たないってちょっと酷いんじゃないかな。それに心当たりあるんじゃないか。」

「あんたとキュルケって婚約したって聞いたけど、本当？」

「ああ、本当だけど。それが何か？姉弟で婚約とか生理的に無理、とか思っちゃう？」

「別にそこまでは思わないけど、驚いただけよ。それに貴族だと異母兄弟でとか良くあることだしね。姉弟はさすがにトリステインじゃあ聞いたことは無いけど、ゲルマニアの法律にあるんだったらいいんじゃないの？」

「そうか。ありがとう。」

「なにお礼言ってるの？」

「いや、酷いこと言われるのかと思って。」

「そう。それにもしかしたら私の・・・」

「私の？」

「あ！これは秘密だったんだわ。気にしないで！それじゃあ、明日ちぃ姉さまのことよろしくね！」

「あ、おい！はあ、カトレアさんの話の心当たりも聞けなかった・・・。」

ルイズはなにやら意味深な事を言って、去って行ってしまった。

「なんなんだ？私の？」

（・・・は！もしかして、俺ルイズに惚れられてる！？・・・いや、そんな感じじゃなかったな。ルイズが惚れたらもっと分かりやすいと思うし、ツンデレだからな。・・・だったら何なんだ？）

ルイズの意味深な言葉を気にしつつ、部屋に戻った。

キュルケが戻ってきたのは、それから少し経ってからだった。

あ、キュルケとは一緒の部屋ではなくてお休みの挨拶をしに来ただけだぞ。

そこでキュルケにカトレアさんの話は何だったのかを聞いたけど、

「女の子同士の話だからひ・み・つ！」

と、誤魔化されてしまった。

キュルケが帰り際に、

「ダーリンも罪な男ね！まあ、ダーリンだからしょうがないわね！じゃあ、お休みなさい！」

と、キュルケも意味深な事を言って自分の部屋に帰っていった。

「・・・罪か。実験で人をモルモットにしたこと、とか？」

少し罪の意識に苛まれながら、眠りに着いた。

「・・・明日、カトレアさんの手術、頑張ろう。実験で殺した人の命の分、カトレアさんが生きれるように。」

翌日、朝食を食べた後、会議室にヴァリエール公爵、カリーヌさん、父さん、キュルケ、ルイズ、カトレアさんの手術するメンバーの俺

やカミーユさん達、そして珍しくエレオノールさんもいる。

母さんや姉さん達は御邪魔になるといけないからと言ってキュルケを代表として他の皆は部屋に帰っていった。

「ヴァルムロート君、今日！とうとう、カトレアの病気が治るのだな！」

「はい！僕の、いえ、僕達の出来る限りの力を持ってカトレアさんの病気を治してみせます！」

カミーユさん達の方を見ると、彼女達も力強く頷いてくれた。

「ダーリン、かっこいいわ！」

「ああ、ヴァルムロートも立派になったものだな。」

「ええ、本当に立派ですわ。これなら・・・」

「それでカトレアさんは？」

「すでに手術室の方に案内されています。」

「そうですか。それでは行きましょう！」

「はい！手術室はこちらです！」

カミーユさんに案内されて、皆でぞろぞろ手術室に向かっていった。

「こちらです。手術室は2部屋に分かれていて、入ってすぐのとこ

ろで手術着を着たり、消毒用アルコールで洗ったりと準備が出来るようになっています。その奥の部屋にカトレア様がおられ、手術が出来るようになっています。」

「分かりました。・・・ヴァリエール公爵様達はすみませんが、外でお待ちになっていて下さい。」

「中でカトレアの治療を見てはいけないのかい？」

「手術、カトレアさんの治療に集中したいので治療関係者以外は御遠慮頂きたいのです。すみません。」

「カトレアの治療のためか、それではしょうがないな。・・・それでは治療はどれくらい時間がかかるのかね？」

「治療自体は約2時間を予定しています。ただしそれで完治したわけではないですよ。それから1～2週間は安静にしてもらって、それから約2年の経過観察を行った後に完治したかどうかを判断したいと思います。再発がないとも限りませんからね。」

「ああ、分かっている。しかし、経過観察の間は普通の生活、いやカトレアの場合は今までより良い生活ができるのだろう？」

「はい。治療が上手くいけば、そうなります。」

「それが聞ければ十分だ。ヴァルムロート君、ミス・リッシュ、それに他の者もカトレアのことをよろしく頼む！」

「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」

手術室に入り、最初の部屋で手術着やマスク、それに髪が落ちないようにバンダナのような帽子を付け、消毒用アルコールで手を洗い、奥の部屋への扉を『念力』で開けた。

中に入ると、真ん中にベットがあり、そこにカトレアさんが寝ていたが、こちらに気づいて起き上った。

カトレアさんは上半身に布しか羽織っておらず、いつも清楚な感じのカトレアさんから一転とてもエロい感じを受けた。

特にいつもは見えない胸の谷間などから。

（はっ！いけない！今から俺はカトレアさんの手術をするんだよ！煩悩沈まれ！2、3、5、7、11、13、17、19・・・ふう。）

「・・・カトレアさん、気分の方はいいですか？」

「はい。大丈夫です。ヴァルムロートさん、それに皆さんも。今日はよろしくお願いしますね。」

「僕達にお任せ下さい。カトレアさんの病気を寝ている間に直してみせますよ！」

「うふふ。あなたを信じていますよ。」

「その信頼に応えられるように頑張ります。・・・カミーユさん、お願いします。」

「はい。・・・『スリープクラウド』」

カトレアさんが眠りに着いた。

「ここから2時間です。イネスさんは心臓の様子を常に確認、お願いします。」

「はい！」

「ローラさんは肺に空気を送ることをお願いします。」

「はい！」

「では、行きます！」

俺は布をどけて、右側の胸の横が見えるようにした。

「・・・あの、タオルでカトレアさんの胸を隠して下さい。」

「うふふ、分かりました。」

そして俺は小さな『ブレイド』を作り、肋骨の間から切開していった。

切開した所をロザミーさんに『念力』で開いてもらい、肺の様子を確認した。

肺に出来ている袋状のものは実際に見ると『ディテクトマジック』で診たときよりも大きく見えた。

これを取り除けばカトレアさんは普通の生活が出来るようになるは

ずだ。

「では、セシールさんお願いしますね。」

「はい！」

「・・・『レーザー』」

ここからは地道に異常な袋状のものが付いている肺の区画を切り離していった。

『レーザー』の魔法の肉を焼いていく臭いが部屋の中に漂っていた。

1時間半くらいかかって、、ようやく肺の区画を切り離すことが出来た。

「・・・ふう！セシールさん、切り取った肺を外に出して下さい！」

「はい！」

胸の横に開けた穴から切り取った肺が出てきた。

それを皿に乗せて、部屋の隅の邪魔にならないところに置いてもらった。

「ではこれから開いた胸を閉じましょう。ローラさん、胸の内側の空気を抜いて下さい！」

「はい！」

ローラさんが胸腔から空気を抜いていき、肺が適度な大きさになった所で空気の移動が無いようにしてもらって、切った所を合わせて、“精霊の涙”で作られた最高級の秘薬を用いた『ヒーリング』で切った所を塞いだ。

最後に手術の体への負担軽減や感染症予防の意味を込めて、体全体にも『ヒーリング』をかけてもらった。

「・・・手術終了です。成功です！お疲れさまでした！」

「「「「「お疲れ様です！やりましたね！」」」」」

「ええ！ではヴァリエール公爵様に報告に行きましょう！」

「はい！」

「あ、あと少しでカトレアさんの目が覚めると思うのでそれまでに服を着せてあげて下さい。」

「はい。分かりました。」

そして俺とカミーユさんがヴァリエール公爵に報告に行った。

「ヴァリエール公爵様！カトレアさんの治療が終わりました！」

「おお！それでどうなのかね？」

「はい！成功しました！これでこの病気でこれ以上苦しむことは無いと思います。」

「おお！ありがとう！それでカトレアは？」

「今はまだ魔法が効いているので眠っていますが、すぐに起きるはずですよ。」

「もう会っても大丈夫なのかい？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

すると公爵は「カトレアー！」と叫びながら、部屋に入っていった。

「ちぃ姉さまを治してくれてありがとう！ヴァルムロートお義兄様！」

ルイズも走って行ってしまった。

「え？おにいさま？ってどういうこと？」

「・・・ヴァルムロート！」

「はい！？」

エレオノールさんが困惑している俺に声をかけてきた。

「・・・カトレアを治してくれて、ありがとう。でも、まだ認めたわけじゃないんだからね！」

と、エレオノールさんも行ってしまった。

「・・・認めるって何を？」

「ヴァルムロートさん。カトレアの病気を治してもらって、ありがとう。」

「いえ、約束でしたから。」

「うふふ、そうね。約束を達成したのだから、あなたの命はとらないでおくわ。」

「あはは・・・。」

「カトレアは最低でも1週間は安静なのよね。」

「はい。そうですけど・・・。」

「それ以降なら、家の外に出るくらいならいけるわよね?」

「ええ、カミーユさんが付いていれば問題無いかと。」

「そうですか。・・・そうだわ。貴方達はカトレアの誕生会まではうちにいるのよね?」

「はい。その予定ですが。・・・何か?」

「貴方スクウェアクラスになったんですってね。」

「・・・ええ。この間なることが出来ましたが。」

「では、私と模擬戦をするという約束も果たして下さいね。1週間後にうちの特別魔法練習場で行いましょう。」

そういうとカリーヌさんも部屋に入ってしまった。

カリーヌさんに一言言おうと思って、部屋に入ろうとしたらいきなり扉が開いて、中からルイズが出てきた。

続いて『レビテーション』で浮かされているであろう目の覚めたカトレアさんとその『レビテーション』を使っているであろうヴァリエール公爵、それからカリーヌさんにエレオノールさんが出てきて、

「あ！ヴァルムロートさん！ありがとうございますー！」

とドップラー効果みたいな感じで行ってしまった。

ルイズや公爵さんたちもお礼を言って走っていった。

おそらくカトレアさんの部屋に行ったのだろうが、公爵直々に魔法使って、しかも走っていくとか浮かれ過ぎか？

・・・いや、治療を諦めていた娘が治ったのだから、そりゃあはしゃぎたくもなるか。

「ヴァルムロート、やったな。すごいぞ！」

父さんがぽんっと俺の肩に手を置いて俺を褒めてくれた。

「やったわね！ダーリン！」

キュルケが抱きついてきた。

「僕だけの力じゃないよ。カミーユさん達の力があってこそカトレアさんを治療することが出来たんだよ。」

「でも、ダーリンがいなかったらカトレアさんの病気は治らないままだったと思うわよ？っだから、ダーリンはもっと自分に誇ってもいいと思うわ！」

「そうだぞ、ヴァルムロート。キュルケの言うとおりだ。お前は控えめなところがあるからな。もっと自分を主張しないとそのうち損をする羽目になるぞ！」

（なんか前にも同じような事言われたな。）

「そうですね。必要があればそうすることにします。でも、僕は無駄に威張っているのがあまり好きではないのでほどほどで。」

「そうか。まあ、他の貴族になめられないように気をつけなさい。後はお前の判断に任せよう。」

「えー、私はもっとダーリンに威張って欲しいな。実際にすごいんだし。」

「まあ、キュルケそう言うな。ヴァルムロートにもなにか考えがあるのかもしれないからな。」

「いや、考えはなくて、そういう性分なだけだけどね。」

「あ、そうだ。さっきルイズが僕のことを“おにいさま”とか呼んだのって、聞き間違いじゃないよね？」

「・・・さあ、なんのことだ？私は聞いていなかったな。」

「・・・ダーリンとカリーヌ様の模擬戦は1週間後か。楽しみね！」

（何か隠してるな・・・）

「そうだ。どうしてカリーヌさんが僕がスクウェアになったことを知っているのでしょうか？」

「ああ、それは私がヴァリエールへの手紙でそのことを書いていたからな。」

「・・・そうですか。模擬戦を回避することは。」

「まあ、無理でしょうね。あきらめて、ダーリン！」

「はあ、やるだけやってみるか。」

「そうそう！かっこいいところを見せてよね！」

「・・・おう。」

（カリーヌさんって暫定ハルケギニア1なんだろ？瞬殺だけはされないようにしよう！）

こうして俺はカリーヌさんとの模擬戦という不安を抱えて1週間過ごすこととなった。

カトレアの手術。そして・・・死の宣告？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

カトレアさんの治療は終わりましたが、主人公に対しては死の宣告に近いものがありますね。
ただ主人公はカリーヌさんの強さを聞いて知っているだけなので、どうなるかはお楽しみにしていて下さい。

あ、カリーヌさんはこの二次創作でも壊れ設定ですよ。

次は模擬戦の話ではなくて、ちょっと時間が戻ってカトレアさんとキュルケの話を書きたいと思います。まあ、短い話になりそうですが。

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてみて下さい。

キュルケとカトレア（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は前回の話の間にあったことを書いてみました。

「あ、キュルケさんに少しお話があるので残ってもらえないかしら？」

あら？なにかしら？

ダーリンに話があるというなら分かるけど、私に？

「え？分かりました。ダーリン達は先に行ってて。」

「ああ、分かった。」

「ちぃ姉さま、私は残っちゃいけないのですか？」

ルイズったら気を利かせなさよ。

わざわざ帰り際に呼び止めたってことは2人で話をしたいということなのに。

「ごめんね、ルイズ。キュルケさんと2人だけでお話がしたいのよ。」

「そうですか・・・。キュルケ！長話してちぃ姉さまに迷惑をかけないようにね！」

「ルイズ、呼び止めたのは私なんだからそういうことは言わないの。心配してくれるのは嬉しいけどね。」

「・・・はい。ごめんね、キュルケ。」

ルイズってカトレア様の言うことは素直に聞くのよね。

「別に気にしてないからいいわよ。ほら、そこにいるといつまでたってもカトレア様が話を始められないでしょ。行った行った。」

ダーリンとルイズが部屋から出ていった。

そしてダーリン達の足音が遠ざかっていった。

どうやら扉のへばりついて盗み聞きをするようなことは無かったようね。

私は部屋を覆うように『サイレント』の魔法をかけた。

これで部屋の外には声は漏れないはずだわ。

私は風系統の魔法は得意ではないんだけど、カトレア様の体のことを考えたらカトレア様に魔法を使わせるわけにはいかないしね。

「あら？『サイレント』をかけたの？」

「はい。なにせ、女の子同士の秘密のお話ですからね。」

「うふふ。そうね。」

「それでカトレア様、お話というのは一体何でしょうか？」

「そのまえにちょっと聞いていいかしら？」

「何をですか?私に応えられるものなら構いませんわ。」

「キュルケさんはヴァルムロートさん、好きな人と婚約出来た時どんな気持ちでした?」

私はダーリンに婚約の話を持ち出した時のことを思い出した。

あのときはダーリンを驚かせようと家族皆で画策して、ダーリンには全く知らせずに作戦を実行したんだったわ。

「それはもう!本っ当ぅに!嬉しかったです!心の中の恋の火が爆発したように体が熱くなって、もうダーリンのことしか考えられなかったです!」

ダーリンが婚約を受け入れてくれたときのことを思い出すと、今でも幸せな気持ちで心が満たされるわ。

「キュルケさんは本当にヴァルムロートさんのことが好きなのね。」

「はい!ダーリン以上の男性とはこの先も出会えないと本気で思っているくらいですから!」

「自分の感情をありのまま表現できるなんて羨ましいわね。」

「そんなこと無いですよ!カトレア様にも出来ますわ!」

「どうかしら・・・。そう、それでキュルケさんを呼びとめたのは聞いて欲しいことがあったからなの。」

「なんでしょう？」

「ヴァルムロートさんが私の病気を治すために奮闘してくれて５年経って、とうとう明日病気が治るかもしれないのよね。」

「不安なんですね・・・。大丈夫ですよ！だってダーリンが治療するんですから！」

「確かに不安はありますけど、私もキュルケさんと同様にヴァルムロートさんを信じているので大丈夫だって思っています。」

「治療に関する不安を聞くのでは無かったのですね。それではカトレア様は私に何を聞かせたいのですか？」

「・・・治療が無事終わった後、たぶんお父様が私とヴァルムロートさんの婚約の話を言いだすと思うの。」

「え！？カトレア様とダーリンの婚約ってどういうことですか？」

カトレア様の病気を治したら婚約なんて話は聞いていない。

ダーリンはこのことを知っているのだろうか？

キュルケの動揺を心の中が見えるんじゃないかという位の洞察力を持つカトレアはすぐさま感じ取った。

「キュルケさん心配しないで。婚約の話はヴァルムロートさんは知らないと思いますよ。」

「そうなのですか？」

「ええ。元々病気を直したら婚約という話は私がまだ小さかった頃のことでしたし。それに7年前からカミーユが病気の様子を診てくれてましたから。」

「そうですか・・・。それでも病気を治したら婚約とはすごいですね。かなりの人が来たのではないですか？」

「ええ、それはもう多くのの腕に覚えがある水メイジの方達が来られて、回復魔法や沢山の様々な秘薬を使って病気の治療を行いましたが、ほとんど効果が無くて。」

カトレア様の話を聞いて、公爵家の二女という位とその美貌で多くの男性が来たことを想像するのは簡単なことだった。

「試せるものは全て試して、それでも病気を治すことは出来なかった。そんな時キュルケさんの家から国境正常化の話が転がり込んできたのよ。」

「ああ、あの時ですね。」

あのときダーリンがヴァリエール家との仲を改善しようと言いだしたときは家の中が大変なことになったわね。

「その時にヴァルムロートさんに出会えたことは私にはとても幸運なことだったわ。お父様達は藁にもすがる気持ちだったのでしょうけど。」

「そうでしょうけど、でもその時に病気が治せなかったら殺すとか言ってたと聞きましたけど。」

「私もその話は後から聞きました。いままで忌み嫌っていた家の息子に娘を任せたくないけど、でも娘の病気が治る可能性を潰したくは無いといういろいろな気持ちと公爵家としてのプライドが入り混じった末のものだったのだろうとお父様は言っていましたけど、でもお母様がヴァルムロートさんがどの程度の覚悟でものを言っているのかを知りたかっただけの様に思えますけどね。」

確かにあの時ダーリンも「覚悟を試したんじゃないかな?」みたいなことを言っていたし、本当も殺すつもりは無かったのでしょうね。

「それでこの5年間で随分両家の関係改善して、そしてヴァルムロートさんと言う人がどういう人なのかを少しは知ることが出来ました。私の両親、特にお母様がヴァルムロートさんのことを気にかけているようですし、この状況で私の病気が明日の治療で治れば・・・」

「・・・それは確かにダーリンにカトレア様との婚約の話を勧めてくることもあるかもしれませんね。」

「はい。・・・しかし、私はこの話を断ろうかと思っています。」

「どうしてですか!?あ、もしかしてカトレア様、ダーリンのことが嫌いだったのですか!?」

「いいえ!私がヴァルムロートさんを嫌うなんて!それはないです!・・・むしろ婚約出来たらいいなと思っています。」

「カトレア様、言っていることが矛盾していませんか？婚約は断るけど、婚約したいなんて。」

「そうですよね・・・。でも、先ほどのキュルケさんの話を聞いて、やっぱり断ろうと改めて思いました。だって、キュルケさんは本当にヴァルムロートさんを好いていてそれを邪魔するようなことは出来ませんわ。」

「私の為なんですか！？そんな風に気を使われても私はちっとも嬉しくありませんわ！失礼ですけど、私をバカにしているように思えます！」

「怒らせてしまってごめんなさい！でも、キュルケさんをバカにしているつもりは全くないのよ！」

「ええ、それは分かっているつもりです。・・・カトレア様は本当はどうしたいのですか？本心を聞かせて下さいますよね？」

「・・・私も・・・キュルケさんのように自分の心に素直になりたいわ。でも・・・。」

「でも？」

「ヴァルムロートさんは私のことを親戚の仲の良いお姉さん位にしか思って無いようですし・・・。」

カトレアが言った言葉に（そんなことまで分かるんだ・・・）とキュルケは感心していた。

そしてカトレアが自身の恋に嘘をついて諦めようとしていることが

キュルケには分かった。

もしカトレアと自分の立場が逆だったら、自分はどうするだろうか？とキュルケは考えた。

相手にすでに恋人がいるから諦める？

いいえ。奪い取ってでも私のものにしてみせるわ！

相手が自分のことを恋愛対象外とみていたら諦める？

いいえ。必ず私の方に振り向いてもらって、私に惚れさせてみせるわ！

相手とすでにいる恋人に自分では作れない絆があったら諦める？

いいえ。絆ってようするにどれだけ一緒にいたかでしょう。これから作っていけばいいのよ！

自分だったとしてもやはり諦めるという選択肢は無いとキュルケは思った。

そしてキュルケはカトレアを応援したくなった。
その行為が自身の最大の“敵”を作るかもしれないと分かっていながら。

「カトレア様！それでも自分の心に正直になって下さい！」

「キュルケさん？」

「相手に恋人がいようとも！自分のことをなんとも思っていなくても！それはそれ。自分の心に嘘をつく理由にはなりませんわ！」

「あらあら。相手の恋人はキュルケさんなんですけどね。」

「あら？うふふ、そうでしたわね。」

「キュルケさんってうっかりさんね。」

「あはは・・・それでもカトレア様は御自身の気持ちをちゃんと言うべきですわ！」

「そうね・・・。でも、この話をしたらキュルケさんはてっきりヴァルムロートさんとの婚約に猛烈に反対してくるのかと思ったけれど、まさか反対に応援されるなんて。」

「たしかにダーリンと他の誰かが形式的に婚約するのは嫌ですけど、でも本人に恋愛感情がある場合は別ですわ。」

「あら？どうしてかしら？」

「恋はツェルプストーの宿命ですからね！・・・あ、炎もありましたっけ。」

「うふふ、そうなの。でも、いいの？自分で恋敵の応援なんてして？」

「ええ、恋は障害がある方が燃え上がりますから！」

「あらあら。私はキュルケさんの恋の道具のひとつということかしら？それでしたら私にも考えがありますわ。」

「なんですか？」

「私もヴァルムロートさんの婚約者になってキュルケさんと対等・・・いえ、それ以上の存在になってあなたを脅かしてみせますわ！」

「そうですか。それは楽しみですわ！」

「・・・うふふ！」

「・・・あはは！」

キュルケとカトレアの間に緊張が走ったかと思うと、２人とも笑いだした。

「カトレア様、お互いの恋の為に頑張りましょう！」

「キュルケさん、私達はヴァルムロートさんの婚約者という同じ立場なるかもしれないのですから他人行儀はやめましょう。私のことは様付けで呼ばなくてもいいわ。」

「それでは今度から“カトレアさん”と呼びますわね。呼び捨てはお互いが婚約者から夫人になった時にしましょう。」

「うふふ、そうね。よろしくね、キュルケさん！」

「こちらこそ！」

「・・・でも、この婚約の話ヴァルムロートさん自身が断らないかしら？」

「そうですわね・・・。ダーリンは恋に生きる！と言う感じのプレイボーイではないですからね。もし断わりそうになったときは私のほうから説得しますわ。」

「え！？いいのですか？」

「ええ！ツェルプストーの男として婚約者の２人や３人は同時に愛せる位でないといけないですからね！」

「あら？３人目がいるのしから？」

「いえ、いないけですけど。それ位の気持ちでいて欲しいということですわ。」

「私としてはもう増えて欲しくないのだけれどもね。」

「それは今後次第、ダーリン次第ということですわね・・・。」

「そうね。まあ、ヴァルムロートさんのことですから自分から言い寄るということは少ないと思うのですけど。」

「あ！私が婚約の話は知らなかったからダーリンはもちろん知らないと思いますけど、私のお父様やお母様はこの話を知っているのですか？」

「ええ。お父様が以前手紙でツェルプストー辺境伯様にお手紙を出した時にそういうことを書いたと聞きました。キュルケさんには私が直接話したかったので黙っていてもらいましたけど。」

「お父様達は婚約の話知っていたのですか・・・。あ！だからあんなに今回のカトレア様の治療に行くのを急いでいたのね。てっきりカリーヌ様との模擬戦を楽しみにしているとばかり思っていたけど。」

ただキュルケはそれはそれで楽しみにしているんだろうな、と思った。

そしてまたヴァルムロートだけ自分のことなのに婚約の話を聞かされてないことに気付いた。

「・・・またダーリンだけ婚約の話を知らないのね。自分のことなのに。」

「あ、本当は事前に話そうとヴァリエール側は考えていたのですが、ヴァルムロートさんには黙っていて欲しいとそちらからの意見がありまして。」

「その理由とか聞いてます？」

「はい。なんでもその方が面白いから、だそうです。」

「やっぱりね。」

キュルケのときもそうだったが基本ツェルプストーの家族はヴァルムロートを驚かせることが好きなようだ。

主にお父様だろうなとキュルケは思った。

以前キュルケがどうして婚約のことを黙っていたのかを聞いたところ、ヴァルムロートが魔法や領地経営などでは自分達が驚かさせてばかりなので、せめて恋愛関係でヴァルムロートを驚かせてやりたい、と言っていたのを思い出した。

「カトレアさん、私はそろそろ失礼しますね。」

「そうですか。キュルケさん、ありがとうございました。」

「いえ、明日は大事な日なのでゆっくり休んで体調を万全にしてくださいね。それではお休みなさい。」

「ええ、お休みなさい。」

カトレアがベットに入るのをみて、キュルケは部屋から出た。

カトレアの部屋を出た後、ヴァルムロートにお休みの挨拶をして自分の部屋に戻ってきた。

キュルケは最大の“敵”であるカトレアに塩を送ったことを微塵も

後悔はいていなかった。

むしろこれから起きるであろう沢山のことを思い描いた。

「ふふ、これから楽しくなりそうね！・・・ダーリンは大変そうだけどね。」

翌日、カトレアの手術は無事成功する。

キュルケとカトレア（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

はっきり言おう。

めちゃめちゃ書きづらい！会話が全然頭に浮かんでこない！もっとしゃべれよ！

女性同士の話とか難すぎ！言葉づかいが変になってるよ！よ。とか、わ。とかどう使い分けたらいいの？

というわけで、カトレアさん婚約者フラグをほぼ回収したわけですが。

前回の最後にキュルケのカトレアさんの呼び方が変わっている理由がこれですね。

ゲルマニアは一夫多妻制をというせっていただけど、トリステインって一夫一妻制なのかな？ヴァリエール家は公爵なのに嫁がカリーヌさんだけだし。妾とかいたら・・・殺されるかもな。公爵が。

３人目の婚約者フラグが・・・どうだろうか？建ったのか？

次はカリーヌさんとの模擬戦の話です。

あ、主人公はいまのところかなり強い分類ですが、チートではないですよ。

チートっていうのは例えば１０万の軍勢と１人でやりあえる位の力を持ってないとね！

ちなみにこの二次小説では例にもれずカリーヌさんはチートクラスです。

試合用の本気ってやつ？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

カトレアさんのフラグ回収とカリーヌさんとの模擬戦の話です。

試合用の本気ってやつ？

カトレアさんの手術を行った翌日、様子を見るためにカトレアさんの部屋を訪れた。

「カトレアさん。ヴァルムロートです。今よろしいですか？」

「あ、はい！ちょっと待ってくださいね。・・・いいですよ。」

「失礼します。」

俺が扉を開けて部屋に入った。

続けてカミーユさんやヴァリエール公爵、カリーヌさん、ルイズ、エレオノールさん、キュルケにうちの両親たちまで入ってきた。

ヴァリエール家の人たちはカトレアさんが心配だから来たのは分かるけど、なんでうちの家族まで入ってきたの？

俺の行った結果をちゃんと確認したいのだろうか？

「おはようございます、カトレアさん。体の調子はいかがですか？」

「ヴァルムロートさん、おはよございます。体の調子ね。・・・体を開いたと聞きましたが、全然痛くありませんわ。」

カトレアさんは体に痛みは感じていないようだ。

実験段階では手術の次の日くらいは多少の痛みを被験者達は訴えて

いたが、それは安い秘薬を使用した場合だ。

今回は回復の補助として最高級の“精霊の涙”を使用した秘薬なのでその効果は絶大だったということだろう。

しかし傷が塞がっているとはいえ所詮回復魔法は治癒力を高めているだけなのでまだ完全ではないだろうし、今後は感染症と切り取った肺のところからの空気の漏れがないかや癌ではないと思うので（癌であそこまで大きかったら他の臓器に転移していただろう）再発の可能性はないと思うが０ではないのその辺を長期的に確認していかないといけない。

それに折角病気が治ったのだから、健康的な体作りを少しずつしてもらって今まで以上に自由に生活できるようになってもらわないとな。

「そうですか。ほかには何か変わったことがありますか？」

俺がカトレアさんに質問している間にカミーユさんが『ディテクトマジック』で切開した場所状態や肺の様子を確認してくれている。

「そうね・・・。あ、前よりも息がしやすくなったかもしれませんね。悪いところを取り除いたからでしょうか？」

「そうだと思います。カトレアさんの悪かった部分は息を吸うところを圧迫していたので、それがなくなったので息がしやすくなったのでしょう。」

「そうですか。でも息を吸うところなのに取ってしまっても良かったのですか？」

あ、インフォームドコンセントをカトレアさんにしてなかったかも・・・。

公爵やカリーヌさんには説明したんだけど、聞いてなかったのかな？

（ここはちゃんと説明しとかないとな。）

「はい。確かに僅かばかり息を吸う能力は落ちましたが、それでもほぼ健康な状態と変わりないので安心してください。」

「そう。私はいままで健康ではなかったから、いままで以上になれるのかしら？」

「ええ。そうだと思います。」

「ヴァルムロートさんはたくさんのことを知っているのね。すごいわ。」

（カトレアさんの治療はほぼ終わりだ。あの事をいうなら今じゃないのか？ちょうど他のみんなもいるし・・・）

「・・・カトレアさんにお話しがあります。」

「あら？何かしら？」

俺は公爵や父さんに目配せをした。

「そうか。あれを話すのか・・・。」

公爵がそう呟き、父さんは黙って頷いた。

「カトレアさんを治療するにあたって黙っていたことがあり、治療が終わった後にお話しする約束でしたのでお話ししたいと思います。」

「はい。」

カトレアさんの顔が真剣なものに変わり、ほんわかした雰囲気が薄れた。

「しかしこの話はあまり聞いていても気持ちの良い話ではないのでカトレアさんにはこれを聞かないという選択もすることができます。もし今は気持ちの整理ができないと仰るのならば別に時でも構いません。」

「そのことは私の病気を治すために行ったことなのでしょう?」

「はい。これがなければカトレアさんの病気を治すことは僕にはできませんでした。」

「・・・そうですか。では、お話しを伺います。それが私の責任というものでしょう。」

「・・・分かりました。キュルケにも約束していたからな。良かったら聞いてくれ。」

「もちろんよ!仮に聞くなと言われても、聞いていたわ!」

「おn・・・ヴァルムロート!私は?」

「ああ。ルイズも関係者だからな。良かったら聞いてほしい。もち

ろん、エレオノールさんも。」
（てか、ルイズなにか言いかけたな？何だ？）
「当然でしょう。あなたが何をしたか興味あるわ。」
エレオノールさんの眼光が鋭い。
俺エレオノールさんに嫌われているみたいだな。
やっぱりツェルプストーとヴァリエールの長年の確執はそう簡単には埋まらないってことか？
そして俺は人体実験について話始めた。
人を実験台にしたことにカトレアさんとルイズは驚いていたが、エレオノールさんは納得したようだった。
それから実験の内容を簡単に説明するとやけにエレオノールさんの食いつきが良くなったようだった。
なんだか今までで一番エレオノールさんと距離が近くなったのかもしれない。
実験後の被験者がどうなったかを話したときはもともと死刑が決まっていた犯罪者というせいなのか以外にすんなり聞き入れていた。
「・・・これがいままで黙っていた事の全てです。」
話終わった後、俺は沈黙が重たく感じた。

カトレアさんは怪我をした動物を拾ってくる位命を大切にする人だ。
だから人体実験を行った俺のことを酷いヤツだと思っているのかもしれない。

「・・・どんなすごいことかと思ったけど、案外普通のことをしてたのね。」

「え!?」

そんな中、一番に口を開いたのはエレオノールさんだった。

「人体実験なんてアカデミーのゼミでもやっていたことがあるらしいですし。そんなに驚くようなことではありませんでしたわね。・・・まあ、それを個人のレベルで行った、ということは驚くことかもしれませんけど。」

「そう、なんですか?」

「ええ。だからそこまで気にすることもないでしょう。カトレア!それにルイズも!いつまでも変な顔をしていないでしゃきっとしなさい!」

「「は、はい!」」

エレオノールさんのおかげで重たい感じがなくなっていた。

「ヴァルムロートさん。」

カトレアさんがいつもの調子で話しかけてきた。

「はい。」

「私のためにそこまでして下さってありがとうございます。」

素直に感謝されると照れるね。

「いえ。・・・なにせ自分の命も懸かってましたから。」

「でも・・・」

「でも?」

「またこのようなことがあったときは隠さずに話してくださいね。本当はしてほしくはないのですけど。」

「わかりました。でも、やらないという選択肢はありません。カトレアさんを救うためだったらどんなことでもしてみせます。」

「そ、そう、ですか・・・。」

俺はちょっとくさかったかな?と思ったが、カトレアさんの顔が少し赤くなって照れているようだった。

その時ヴァリエール公爵が父さんの横に移動したのには気が付かなかった。

そして2人だけに聞こえる位の小声で話し始めた。

「・・・やはりお前の息子だな。こんな場面なのにカトレアを口説いているぞ。」

「・・・いや、口説いているわけではないと思うぞ。あれは素だな。」

「あれが素か・・・。どうやらツェルプストーの血は女たらしの才能があるようだな。で、どうする。この場で“あの話”を切り出すか?」

「いや。カリーヌ夫人との模擬戦の後にしないか?」

「どうしてだ?早い方がいいだろうし、今なかなか雰囲気もいいぞ?」

「困難があったことの後の方が喜びが大きいだろうし、その方が良いリアクションが見られるかもしれんぞ?今だと、そのまま普通に承諾してしまいそうだからな。」

「別に普通でいいのではないか?」

「それでは面白くないだろう?やるなら面白い方がいいしな。」

「そうか。あんまり自分の息子をいじめてやるなよ?」

「ふふ、そうだな。考えておこう。お前こそ義理の息子になるからといって甘やかすなよ。」

「そうだな。・・・で、どうする?」

「建前はカトレア嬢の回復祝いとして・・・」

「ふむ。では、その裏で・・・」

カトレアさんの診断の結果は今のところ問題ないようだ。

このまま念のために1週間は安静にしていてもらおう。

嵐の前の静けさのように平和に日々が過ぎ、そして1週間経った。

今俺はヴァリエール家の魔法の“特別”練習場に来ている。

わざわざ“特別”と付いているのはカリーヌさんの為に広く（うちの練習場の倍以上の大きさがある）、そして周りを何重にも『固定化』と『硬化』の魔法がかけられた高い塀に囲まれている。

練習場の端の方に観戦用の席が作られて、そこにみんなが座っている。

その後ろでなにかあった時のためにカミーユさんが待機している。

そして俺は練習場の真ん中でカリーヌさんを待っている。

当初はみんなで一緒に行く予定だったのだがカリーヌさんが、

「ちょっと遅れるので先に行っていなさい。」

というので先にやってきたわけだが、何をしているのだろうか？

まだかな？と、思っていると突然突風が吹いて砂が巻き上がった。

「うわっ！」

俺は目を瞑り、顔を守るように腕を上げた。

風が止んだので目を開けるとカリーヌさんが目の前にいた。

「烈風カリン、ここに参上！」

カリーヌさんの登場演出に俺は驚いていた。

「あの・・・カリーヌ、さん？」

「今の私は“カリーヌ”ではありません！今の私は“カリン”です！」

「はあ・・・、カリンさん、ですか。それでその恰好は？」

「これですか？これは私が“カリン”として騎士団にいたときの恰好を再現して作らせたものです。さすがにズボンは長めにしましたけど。しかし、このような恰好をすると騎士団にいたときを思い出しますわね。」

「そ、そうですか・・・。」

カリーヌさん、改めカリンさんは髪を括ってポニーテールにして、白いノースリーブの服の上に青色のマントを羽織り、白いスラックスを穿いて、黒色の革靴を履いている。

あまり女性ぽい服装ではないが、胸元の赤い大きなリボンが最後の抵抗のようについている。

「ちぃ姉様、お母様はどうしてあのような恰好をしてきたのでしょうか？」

「そうね。いつものドレスでは動きにくいのであのような恰好をしてきたのでしょう。」

「なるほど！でも・・・あまり女性っぽい服ではありませんね。なんだか男性が着るような服みたいですね。」

地球で見たらべつに女性がズボンを着ていても不思議ではないが、ハルケギニアでは男性はズボンを、女性はスカートをつけるものという考えがあるのでルイズは不思議に思った。

「そうね・・・。お姉さまは何か知っていますか？」

「さあ？私もみたことはないわね。でも昔お母様は“烈風カリン”と呼ばれていたようね。“カリン”は男性につける名前だからそれに関係あるのではないかしら？ねえ、お父様？」

しかし、ヴァリエール公爵は目の前にいるカリーヌの姿を見て驚きと同時に軽い恐怖の念を抱いていた。

「あ、あの服、まだ持っていたのか？・・・いや、少し細部が異なるか？あのときは短いズボンと黒い長い靴下を穿いていたはずだ。」

「お父様？」

「あ、ああ、ルイズ、すまない。あの服はカリーヌが騎士団に所属していたときに着ていた服にそっくりな服なんだよ。」

「騎士団ですか？それは知っていますけど、それとどう関係があるのですか？」

「ちょっと待って。そういえば昔聞いたときは疑問に思わなかったけど、騎士団は男性しか入れないはずよね？」

「その通りだ、エレオノール。だから、カリーヌは名前を“カリン”と偽って、あんな男装してまで騎士団にいたのだ。」

「そうなんだ・・・。」

「そして、カリーヌがあのような恰好をしたということは・・・」

「「「いうことは？」」」

「・・・カリーヌはかなり本気でやるつもりのようだ。ツェルプストー！」

ツェルプストー側はカリーヌのズボン姿が凛々しいだの、今度自分

もやってみようかなどとわいわい話していたが、いきなりヴァリエール公爵に声をかけられて少し驚いていた。

「ヴァリエール、どうした？」

「カリーヌがかなりやる気でな、もしかしたらこっちまで被害が来るかもしれん！だから試合中は『エア・シールド』をかけておこうと思う。そちらも手伝って欲しい！」

「・・・あの“烈風カリン”がやる気になっているのか。分かった！前面に『エア・シールド』を展開すればいいのだな？」

「ああ！頼む！」

「カリーヌ様がやる気を出しているなんて、ダーリン大丈夫かしら？」

「どうかしら？でも仮に怪我をしても後ろにミス・リッシュがいるから大丈夫よ。」

「そうそう。」

「あら？ヴァルってメイジと戦ったことあったかしら？」

「「「「「「「「・・・」」」」」」」」

「ま、まあ、なんとかなるでしょう。」

「そうね。ヴァルなら大丈夫よ。・・・たぶん。」

そんなことを話しているとヴァルムロートとカリーヌがお互いに距離を取った。

「やっぱり無理かも。」

「そうね。距離が普通の倍以上開いてるわ。」

「ダーリン、頑張って！」

「・・・そろそろだな。では、皆で『エア・シールド』をかけるぞ！」

「「「「「「「「はい！」」」」」」」」

「こちらも『エア・シールド』をかけよう！エレオノール頼んだぞ。」

「はい！」

「カトレアはまだ、りはびり？というものがあって魔法を使うのをまだ禁止されているからしなくていいぞ。」

「そうですね。分かりました。」

「お父様！私は？」

「ルイズは・・・カトレアと一緒にメイジ同士の戦いがどういうものかをよく見ておきなさい。」

「・・・はい。分かりました。」

「落ち込まないで、ルイズ。一緒にお母様とヴァルムロートさんを応援しましょう。」

「ううう・・・。分かりました。」

そして観戦席の前に何重もの風の壁が出来上がった。

俺がカリーヌさん、いやカリンさんに服のことを聞くと騎士団にいたときに着ていた服に似せて作ったと言っていた。

(なんかやる気満々って感じだぞ?)

「あの・・・、どうしてそのような恰好で来られたのですか?」

「どうしてって、ヴァルムロートさんと戦うからでしょう?」

「いえ、確かに普段のドレスでは戦い難いのは分かりますが、なぜ“騎士団時代に似せた服”なのですか?」もっと他にもあると思うのですが・・・。」

「確かに別にこの服でなくても戦い用の服はありますが、わざわざこの服を用意させたのはヴァルムロートさんに敬意を払っているからですよ。」

(うそ!?まじで!?)

「え!?僕にカリー・・ンさんが敬意を払うなんてことがあるのですか?」

「ええ。私はヴァルムロートさんの魔法の能力を高く評価しています。その歳でスクウェアまで上り詰めたことやカトレアの病気を治してくれたことがありますからね。」

「あ、ありがとうございます！」

「それに・・・」

（え、なんかあるの？）

「それに？」

「やはり思う存分力を出すにはそれなりの恰好でないといけませんからね！」

（いやあああああああああああ！！！やっぱりやる気満々だよ！）

「えっ！？」

「ああ、大丈夫。私は全力を出さないようにしますから。」

（え？全力全壊じゃないの？・・・よかったあああ。）

「そ、そうのなですか。」

「ええ、ですがヴァルムロートさんは全力で来てくださいね。あなたの実力に応じて私も出す力を決めますから。」

（それだったら、弱く見せた方が被害が少なくて済むかも。）

「・・・分かりました！」

「あ、くれぐれも実力を隠しておこうとは考えないで下さいね。」

（ぎくっ！）
「アハハ、マサカ。」
「もし後で力を隠しているのが分かったら・・・いいですね。」
（俺オワタ・・・）
「分かりました・・・。」
「あら？その落胆を見ると隠すつもりでしたわね。おほほ、そうはいきませんよ。」
「・・・僕の現在の力全てをもって挑みたいと思います！お願いします！」
「それでいいのです。・・・ではいきますよ！」
「はい！」
俺とカリンさんはお互いに距離を取った。
カリンさんは元いたところから５メイル位しか離れなかったが、俺は１０メイル以上も離れて、お互いの距離は２０メイル位になった。
「ヴァルムロートさん！そんなに離れて大丈夫なのですか？」
（え！？こんなに離れたらだめだったの？）
「え！？あ、はい！大丈夫です！」
俺の普通の状態での射程距離は大体２０～３０メイル位で最大５０

メイル（トランザム状態では距離が延びる）だから問題ないとその時はおもったのだが、後で聞いたところ普通は１０メイル位の距離から始めるらしい。

「ではヴァルムロートさんに先手を譲りますわ。さあ、かかっていらっしゃい！」

（対メイジってどう戦えばいいんだ？まずは弱い攻撃で相手の出方を伺った方がいいのかな？）

「はい！・・・『ファイアーボール』」

俺は『ファイアーボール』を放つと共に横に移動し、さらに２発目の『ファイアーボール』を放った。

「時間差の別の場所からの攻撃ですか。まあまあですわね。しかしこの程度の攻撃ではどうにもなりませんよ！」

あと少しで『ファイアーボール』がカリンさんに当たるというところで風の魔法で『ファイアーボール』は弾き返された。

さらに弾かれた『ファイアーボール』は２発目の『ファイアーボール』に誘導されて、ぶつかり、爆発した。

爆風で砂が空中に舞い上がった。

「うわっ！砂でカリンさんが見えない。・・・っていうか、ここの砂簡単に舞い上がりすぎだろ！？」

俺が砂に戸惑っていると砂の向こうから竜巻が現れた。

しかも普通竜巻は地面に垂直にできるものだが、その竜巻は地面に水平にやってきた。そう、コンバトラーの超電磁タツマキのように。

「え！？あ、ぎゃあああああ！」

一瞬のことだったので俺には反応できず、あっさりその竜巻に巻き込まれた。

竜巻の中でもみくちゃにされながら後ろに１０メイル位飛ばされて、竜巻から放り出された。

しかも放り出された方向が上だったので、そのまま放物線を描いて地面に激突するかと思ったがなんとか『フライ』を使ってまぬがれ、地面に着地した。

「あ、危なかった。ううえっ、目が回って気持ち悪い・・・。『ヒーリング』」

『ヒーリング』単体でも多少のめまいなどは回復するので俺はそれで少しだけ自分の体調を元に戻した。

「あれを凌いだのね。大抵は竜巻で目が回ってそのまま地面に叩きつけられてダウンするのですけど・・・。運がいいのか、実力か・・・。あ、回復しましたね。まだまだいけるということですわね！」

カリンさんの方を見ると砂が晴れており、次の攻撃に移ろうとしていた。

カリンの口が少し動いたかと思うと、ドン！と横の地面が何かにぶつかった様な音を立てて砂が巻き上がった。

「見えなかった！なんだ！？とにかくここにいたんじゃいい的だ！移動しよう！」

俺はすぐに走って場から離れた。

しかしこれ以上離れると俺の魔法が届かなくなるのでカリンさんを中心に円の弧を描くように移動し、さらに的を絞らせないようにとスピードをランダムに変えながら動いた。

「このままじゃ防戦一方だ。実力差があるのは分かっていたけど、攻撃が見えないんじゃ話にならん！どうすれば・・・。」

そしてそれはすぐに思いついた。

見えない攻撃とかは漫画やアニメでも結構よくあるパターンだからな。

「見えない攻撃は見えるようにするのがセオリーだろ！この場所だったら、これだ！」

俺はカリンさんに向かって『ファイアーボール』を連続して放った。

「あら？また『ファイアーボール』ですか？それは最初に意味がないと分かったはずですけど？」

カリンはまた自分に向かってくる『ファイアーボール』を弾き返そう

としたが、その前に『ファイアーボール』の進行方向が変わり地面に激突して、大量の砂を巻き上げる爆発を起こした。

「これは・・・目くらましのつもりでしょうか？しかし私には無意味ですわよ。」

カリンは気配を探った。

ここでいう気配はドラゴンボール的な“気”ではなく、それぞれの系統のメイジには実は特性みたいなものがある。例えば、火系統のメイジは“熱”を感知しやすい、などだ。

そしてカリンは風系統のメイジで“音”つまり“空気の振動”を感知しやすいのだった。

普通のメイジだったら砂を使った目くらましも有効だったかもしれないが、カリンのその並外れた才能は数十メイル離れた人の呼吸する音さえも知ることのできるほどだった。

「・・・！あら？さきほどのところから動いていませんね。何を企んでいるのかしら？まあ、お手並み拝見といきましょう！」

カリンは『エア・ハンマー』の魔法を唱えた。

先ほどからの見えない攻撃はすべてこの魔法だった。

他にも見えない魔法は『エア・カッター』などもあるのだが、こちらは殺傷能力が高いので模擬戦などでは使用しないことにカリンは決めていた。

カリンはヴァルムロートがいるところに『エア・ハンマー』を放った。

「見えないのなら見えるようにすればいい。」

俺はカリンさんとの間に砂を巻き上げて、砂のカーテンを作りそこを見えない攻撃が通ると砂が動いて見えない攻撃も見えるようになると考えた。

「まあ、うまくいくか分からないけど。ここはなんでもやってみないとな！」

そのとき砂のカーテンに隙間ができた。

「来た！行くぞ！」

俺は見えない攻撃に当たらないようにしてカリンさんの方に向かって走り出した。

俺は目の前の砂のカーテンを超えると新たに『ファイアーボール』を放ち、カリンさんとの間に砂のカーテンを作った。

「なうほど、考えましたね。あれはただの目くらましではなくて自らも見えない魔法に対応するものだったのですね。・・・それでしたら、こうしたらどう出るかしら？」

カリンは自身の周りに巨大な竜巻を発生させて、砂のカーテンごとヴァルムロートを吹き飛ばした。

「うわわわ！あっぶねぇ・・・。また吹き飛ばされたよ。あの巨大な竜巻は『エア・ストーム』の魔法かな？」

今目の前に発生している竜巻は俺が前世でハリケーンの映像をみたものに匹敵するよな大きさだった。

「いいえ、違いますわよ。これは『エア・ストーム』ではなく、だたの『ストーム』ですよ。」

竜巻が消えて、その中からカリンさんが現れてどこかの魔王みたいなことを言った。

「え！？カリンさん聞こえていたのですか？」

（どんだけ地獄耳だよ・・・。）

「“音”を感知しやすいのが風メイジの特徴ですよ。覚えておきなさい。」

（そういえば昔レイルド先生から習ったことがあるような？あの時は火のメイジの特徴を聞いてサーモグラフィかよ、とかあまり重要だとは思ってなかったけど、考えを改めないとな。）

「え、あ、はい。覚えておきます。」

「では、次はどうでますか？今私は空を飛んでいるのでもう砂を使

うことはできませんわよ？」

そういってカリンさんは飛んだまま、見えない攻撃を繰り出してきた。

俺はひとまず『フライ』で飛び上がり、ジグザグに飛んで見えない攻撃を躱していった。

「『フライ』をうまく使えていますわね。しかしその程度の動きではすぐに見切られてしましますわよ！」

「え！？うわっ！」

俺はみえない攻撃の直撃を受けて地面に落とされた。

なんとか『フライ』で落下スピードを抑えたので激突はしなかったが、そのまま地面を転がった。

「いてて、小細工はもうできないか。だったら最後の手段は・・・正面からぶつかることだな！」

俺は服についた砂を払いながら立ち上がった。

「『トランザム』！」

俺の体が淡い炎に包まれたと同時に俺は『フライ』を使ってカリンさんに向かって飛び上がった。

「そんな隠し玉をもっていたなんて！それでこそです！」

カリンさんは俺の変化に驚いていたようだがそれでも冷静に俺に向かって見えない攻撃を繰り出してきた。

俺は先ほどと同じようにジグザグに、それでいて先ほどとは段違いのスピードで動いてみえない攻撃をやり過ごした。

あっという間にカリンさんとの距離が埋まり、俺は『フライ』を切ってその勢いのまま『ブレイド』を展開してカリンさんに切りかかったが、単調な動きを見切られて避けられてしまった。

俺は『ブレイド』を切って、再び『フライ』を使って体制を立て直した。

振り返るとカリンさんは竜巻をいくつも発生させて、それらをこちらに向かわせていた。

俺は逃げるように上昇すると竜巻もついてきた。

俺は『フライ』を切って、一つの賭けに出た。

「こいつでどうだ！『ビームサーベル』！」

長さ１５メイルに及ぶ強化された『ビームサーベル』で襲ってくる竜巻を薙ぎ払っていった。

「あれが“炎剣”の由来ですか・・・。なかなかやりますね！」

カリンは自分の竜巻が消されたことは特に意に介していないようで、ただヴァルムロートの攻撃に関心していた。

「おお！うまくいってよかったー！」

俺は地面に『フライ』を使って着地すると『ファイアーボール』を放ち、さらに『フレイムボール』を放った。

最初に放った『ファイアーボール』はカリンの下を行き過ぎていった。

「あら？失敗したのかしら？」

少し疑問に思ったが、すぐに『フレイムボール』が迫っていたのでそちらに対応することに専念した。

『フレイムボール』は今までの『ファイアーボール』とは異なりヴァルムロートが操作することと強化されたことで複雑な動きを可能にした。

『フレイムボール』はカリンの攻撃を掻い潜り、そしてカリンとの距離があと2～3メイルというところで爆発した。

カリンはとっさに『エア・シールド』を展開したので怪我はなかった。

次の瞬間、先ほどカリンの下を行き過ぎたはずの『ファイアーボール』が『エア・シールド』にぶつかり、爆発した。

その衝撃でカリンは地面まで吹き飛ばされた。

「うまくいった！」

これは最初からの作戦だった。

最初に『ファイアーボール』を方向違いのところに行かせることで意識から外し、『フレイムボール』を目の前で爆発させることで視界と“音”を塞ぎ、最初の強化された『ファイアーボール』が通常よりも長い持続時間を持っていることで大きく弧を描き、そしてカリンさんの上からぶつかる、というものだった。

ただこれは『フレイムボール』を一定時間持たせないといけないことやカリンさんが場所を移動しないなど、いろいろな前提があって初めて成功するものだったので、これは模擬戦だからこそ、カリンさんが俺の実力をみようとしてくれているからこそできた作戦だろうな、と思った。

俺は再度『ブレイド』を展開し、地面付近まで下りてきたカリンさんに切りかかった。

カリンさんも『フライ』を止めて『ブレイド』を展開し応戦してきた。

俺はすでに『トランザム』を切っており、残り少ない体力を振り絞ってカリンさんと切り結んでいた。

そのころ観戦席でルイズは初めて見るメイジ同士の戦いに目を輝か

せていた。

「お父様！あれがメイジ同士の戦いなのですね！」

「いや、あれはちょっと・・・メイジというよりは騎士に近いかな？」

「騎士ですか！すごい！」

ルイズはかなり興奮しているようだ。

しかしヴァリエール公爵はなぜか少し寂しい気持ちになっていた。

そんなヴァリエール公爵の様子に隣に座っていたツェルプストー辺境伯が気づいた。

「ヴァリエールよ、どうした？どこか哀愁が漂っているぞ？」

「ツェルプストーよ。実は私にはささやかな夢があったのだよ・・・。」

「なんだ？藪から棒に。まあ、言ってみろ。」

「ああ。私の子供たちはすべて可愛い娘たちだろ。」

「そうだな。」

「本当は息子も欲しかったのだが、子供の性別は選べないからな。まあ仕方ないと思っている。」

「まあ、そうだな。」

「そこで娘の婿になる男、つまり義理の息子に『お前を鍛え直してやる！』と言って魔法の稽古をつけるのが私のささやかな夢だったのだよ・・・。」

「なんだ、そんなことか。ヴァルムロートに稽古つけてやればいいだろう？あいつは稽古大好きだぞ。」

「・・・ツェルプストーよ。おまえは目の前で起こっていることを目にしてまだそんなことが言えるのか？」

目の前では先ほどまで魔法で地上と空中で対戦していたが、今は地上で『ブレイド』を用いた剣の勝負になっている。

そして魔法と剣、そのどちらもかなりのレベルで行われているであろうことが見ているだけで分かる。

「ああ・・・。私だったら稽古をつけよとは思わないな。自分より強いものにどうやって稽古をつけるというのだ、といったところか。」

「そうなのだ！なんなんだお前の息子は！強いとはお前の手紙から察することができたが、まさかあのカリーヌと！“烈風カリン”と同じような強さとは聞いていないぞ！」

「まあ、私もあそこまでやるとは思わなかったよ。あれは確かに私の息子だが、時期にお前の義理の息子になるのだから、気持ちは整理しておけよ。」

「いや、優秀な息子ができるのはいいのだ。しかし・・・私の夢がなぁ・・・。」

「まあ、待て。お前にはまだ2人娘がいるだろう。そちらに期待しておけよ、な。」

「エレオノールは婚約者ができたと思えば逃げられるし、ルイズには昔親同士で決めた婚約者がいるのだがそいつも今は王宮騎士団に入り、腕を上げていると聞くしな・・・。」

「そ、そうか。まあ、頑張れよ?」

もう何度目かの『ブレイド』同士のつばぜり合いが起こっていた。

ヴァルムロートの杖はオーソドックスなタイプなのでもちろん鍔などはついておらず、カリンの杖の方にフェンシングの鍔のようなものがついていた。

剣の腕ではわずかにヴァルムロートの方が勝っていたのだが、当の本人は必死すぎて全く気が付かなかった。

「ヴァルムロートさん!あなた、なかなか楽しませてくれますわね!」

「ハァ・・・ハァ・・・ど、どうも・・・。」

(そろそろ限界かも・・・。体の節々が痛いし、体力が・・・)

俺の体力はそろそろ限界を迎えようとしていた。

魔力的にはまだ余裕があるようだったが、いままでの討伐などは後方支援がほとんどで動くことは少なかったし、毎日稽古していたのにこのような戦いの場で走り回ったりするとこんなに疲れるとは思っていなかった。

さらに烈風カリンというハルケギニアでも類を見ないほどの強い相手と戦うことは尋常ではないプレッシャーがあり、それも体力を削る一因になっていた。

これは体力が少ないのではなく、スクウェアになってことで最大魔力量が増え、それに見合う体力がなかったということなのだが、今の俺にはそんなことを考えている余裕はなかった。

つばぜり合いからお互いが一旦離れた。

「楽しいわね！まだまだ楽しませなさい！」

「ハァ・・・ハァ・・・」

（む、無理・・・かも・・・）

俺が次の一歩を踏み出した瞬間、

俺の体力が底をついた。

そのままバタリと地面に倒れて、気を失ってしまった。

「え、ちょっと!ヴァルムロートさん!」

カリンさんは急いでヴァルムロートに駆け寄った。

「ヴァルムロートさん!・・・気を失っているだけのようですわね。よかったわ。」

カリンがヴァルムロートの無事を確認すると同時にキュルケがヴァルムロートに抱き着いていた。

「ダ、ダーリン!?大丈夫?ちょっと起きてよ!?」

キュルケは抱き着いたヴァルムロートをがくがく揺らしている。

「ちょっとキュルケさん、落ち着きなさい!」

「え!?」

「ヴァルムロートさんは気を失っているだけですから、大丈夫ですわよ。」

「そ、そうなのですか?」

「ええ、ですから少し休ませてあげましょう。ミス・リッシュお願いね。」

「分かりました。キュルケ様、ヴァルムロートさんをこちらで休ませてあげましょう。」

「分かりました・・・。お願いします。」

キュルケはしぶしぶヴァルムロートから離れた。

カミーユはヴァルムロートを『レビテーション』で浮かせて、観戦席の後ろに設置していた簡易ベットに寝かせ、『ディテクトマジック』で異常がないか調べた。

ヴァルムロートの体は『トランザム』の影響で全身にダメージを負っていたので『ヒーリング』と秘薬を用いて回復させた。

「う、うう・・・。」

「あ!ダーリン気が付いたのね!よかったわ!」

俺は上半身を起こした。

「あれ?ここは?」

「ここは観戦席の後ろよ。」

「なんだか途中で記憶が途切れているな・・・。もしかして、気絶した?」

「そうよ!突然倒れるからびっくりしたわよ!」

「そうか・・・。心配させてごめんね、キュルケ。」

周りを見るとカリンさんがいた。

「カリンさん、途中で突然気絶してしまってすみません。」

「それは別にかまいません。私もつい楽しくなってヴァルムロートさんの様子に気づけなかったのですから、こちらこそごめんなさいね。・・・あと、今は“カリーヌ”ですわよ。」

そういうカリーヌさんの姿はたぶん気絶している間に着替えたのか、さっきの男装ではなくドレスを着ていた。

「いえ、別にいいのですよ。これからは“カリン”になる機会が増えそうですからね。」

「え!?それってまた模擬戦するということですか?」

「いえ、そうではありません。まあ、それも少しは含まれますけど。」

「と、いうと?」

「ヴァルムロートさんは2年間はどこの学院にも通わずに家にいるつもりなのでしょう?」

「ええ、そうですね。カトレアさんの病気が治ったとはまだ完全には言い切れないので。その経過を見るためですね。」

「あらあら?私なら大丈夫ですわよ?」

「いえ、そうはいきません。カトレアさんの治療を任された責任というものがありますから。」

（それに今学院にいくとズレが生じて原作がうまくいかなくなるかもしれないし。ゲルマニアの学院で騒ぎを起こして退学って手もあるけど、あまり家族に迷惑かけたくないし・・・）

「そこでヴァルムロートさん不在で悪いのですけど、話し合った結果あなたを2年間ヴァリエール家で面倒を見ます。あ、もちろんキュルケさんも一緒ですわよ。」

「え？どうしてですか？」

「それはあなたをハルケギニアでもっとも強いメイジになるために私が直々に稽古をつけて差し上げるからですわ！」

「え？稽古をつけてくれるのは嬉しいのですが、どうしてハルケギニアでもっとも強いメイジを目指すのですか？まあ、志は高く持った方がいいと思いますが・・・。」

「あ、それですか？もちろん志ではなくて文字通りの意味ですわよ？」

「え！？本気でハルケギニア一を目指すのですか！？」

「ええ、私の息子になるのだからそのくらいやってもらわないといけませんからね。」

「「あ！」」

ヴァリエール公爵と父さんが少し声を上げたが急いで手を口にやったり、目をそらしたりした。

（ん！？何だ？何か変な感じを受けたぞ？）
「ん？すみません、カリーヌさんもう一度同じことを言ってもらえますか？」

「なんですか？まあ、いいでしょう。『ええ、私の息子になるのだからそのくらいやってもらわないといけませんからね。』これで構いませんか？」

（・・・変な感じの正体はこれか。）
「・・・あの、いつ僕がカリーヌさんの息子になったのですか？息子のように思ってくれるのは嬉しいのですが・・・。」

「いえ、違いますよ？息子のように、ではなくて本当に息子になるのですよ？・・・あら？これはまだ秘密だったわね。ごめんなさい。忘れて。」

父さんがあちゃーみたいな表情で手で顔を覆い、その肩にヴァリエール公爵が手を置いて、しょうがないみたいな顔をしている。

（これは・・・あれだな。またか・・・。）
「いえ、無理です。すみません。」

「そうね・・・。やっぱり無理よね。」

「はい。・・・父さん！どういうことなんですか！」

「あはは、ちょっと前にヴァリエールに話を進められてな。問題なかったので話を進めておいた。」

「問題大ありでしょう！僕はすでにキュルケと婚約してるんだよ！

？そこんところ分かってるの？」

「別に婚約者が何人いても問題ないだろう。私を見なさい。３人も美しい妻達がいるじゃないか！」

「ぐ・・・、そうだ！キュルケはいいの？勝手に話を進められて。」

「私？私は特に問題ないわよ。その相手とは話あったしね。それに私とダーリンの愛は婚約者が何人いても揺るぎ無いものだと信じているからね！」

「あ、ありがとう。期待に応えられるように頑張るよ！」

「それにダーリンは恋と炎が宿命のツェルプストーの嫡男なのよ。同時に２～３人の女性を愛せる位の器量があるはずよ！」

「いやあ、僕にそんな・・・」

（そんな器量あるかー！）

「しかし、もう断れないぞ？相手は乗り気だし、両家の家族は皆同意しているからな。反対しているのはお前だけだぞ？」

「いや、反対してるわけじゃないのだけど・・・」

「では何も問題はないな。ではヴァリエール、当初とは多少異なるが予定通り明日式を執り行うことにしよう。」

「ああ、問題ない。しかし、残念だったな、驚いた顔を見ることができなくて。」

「ふ、問題ない。今日はヴァルムロートがあれだけ強かったことが分かっただけでいい。」

「で、父さん。大体予想は付いているけど、僕の婚約者って・・・。」

（ルイズはこの時点ではワルドと婚約しているはずだし、エレオノールさんは長女だから嫁に出すわけがない。ということは・・・）

「ああ、カトレア嬢だぞ。良かったな。頑張って病気治した甲斐があるというものだな！」

するとカトレアさんがキュルケとは反対側の俺の横に座った。

いつものカトレアさんでは考えられないくらい顔が赤くなっている。

そして俺の手を握ってきた。

「ヴァルムロートさん、これからよろしくお願いしますね。」

「え、あ、はい。こちらこそよろしくお願いします。」

ついつい俺も流されて挨拶してしまった。

やっぱり俺って心は日本人なんだよ。

「って、カトレアさんはそれでいいの？なんか病気を治したおまけみたいになっているけど？」

「ええ。それに元々そういうことで治療してくれる人を集めていた時期もありますから。」

「そうなんですか・・・。」

「うふふ、私に未来をくれた人と私が好きになった人が同じでよかった。」

「好きって・・・本当ですか？」

「はい！でも、ヴァルムロートさんが私のことを恋愛対象としてみていないのは分かっていました。」

「・・・」

（そんなこと特に考えてなかったからな。）

「そんな私をこれから好きになってくれますか？」

「未来のことは断言できませんが、今この瞬間に前よりもカトレアさんを好きになっている自分がいるのは断言できます。」

（まあ、いままで恋愛対象としてみてなかっただけで普通に魅力的だしこれからどんどん好きになっていくんじゃないかな？）

「私、魅力的ですか！うれしい！」

「あはは。」

（あれ、俺声に出してたっけ？）

「ダーリン！私のこともちゃんと愛してくれないとだめだからね！」

「ああ、もちろん。２人とも愛せるようになるよ。」

（そこのところはやってみないと分からないからな。）

「よしよし。一件落着だな。・・・おいおい、ヴァリエール泣くなよ？」

「まだ泣いていない！泣くのはカトレアの花嫁姿を見てからだ！」

「そうだな。」

「ねえ、ツェルプストー辺境伯さま。ちょっとよろしいですか？」

「どのような要件でしょうか？カリーヌ夫人？」

「ヴァルムロートさんのことなんですけど、あの剣の腕前はどこで習ったのですか？すでに王宮騎士団の隊長クラスの実力をもっていますけど？」

「ああ、あれはうちの家の兵に教えさせているのです。最初はある程度形になればそれでいいかと思ってさせていたのですが、いまではうちの外から剣の腕が立つものを呼んで対戦させている位ですからね。・・・あ、これはヴァルムロートには内緒でお願いしますね。」

「どうしてだ？教えてやればそれだけ励みになるだろう。」

「うちの息子って誰に似たのかかなり向上心が高くて、貪欲に強くなろうとしているらしい。そこでその向上心をなくさないように自分がまだまだ未熟だと思わせているのだよ。」

「そうか。別にいじわるをしているわけではなかったのだな。」

「あたりまえだろう！」

カトレアとキュルケに挟まれて照れているヴァルムロートをカリーヌは見つめた。

「うふふ。ヴァリエールとツェルプストーの長年に渡る確執を気にせず、さらには他のメイジがサジを投げたカトレアの病気を治してしまい、そしてあの魔法と剣の実力。まったく面白い子が私の息子になってくれたわね・・・。育て甲斐があるわね！」

試合用の本気ってやつ？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

いや、話が思ったより長くなっちゃいました。

模擬戦はあくまで模擬戦なので二人とも殺傷能力の高い技を相手に使っていません。
主人公は竜巻相手にビームサーベルつかったけどね。

主人公の現在の実力は剣がかなり高く、魔法も『トランザム』を使えばカリーヌと同程度といったところですかね。特に剣が強いのが今後の成長方針になります。私が好きなある武器を持って戦ってほしいと思います。

これから何話かはヴァリエール家（トリステイン）を舞台に展開していきます。
もちろんキュルケは付いてきますよ。ヒロインですからね。

ご意見・ご感想があれば書いてみてください。

お義父さんが羨ましそうにこちらを見ている。（前書き）

こんにちは。こんばんは。

婚約発表とカリンとの訓練開始です。

お義父さんが羨ましそうにこちらを見ている。

今年のカトレアさんの誕生会はいつもとは違うものになった。

まずカトレアさんの病気が治ったことが発表された。（まだ経過観察中なんだけどね。）

そしてそのことによりカトレアさんに求婚してくる貴族が多く出ることは容易に想像出来たので間髪入れずに俺との婚約も発表した。

キュルケの時もざわついたけど、今度はその比ではなかった。

まあ、公爵家の次女が国外の男と婚約とは自国の貴族としては面白くないだろう。

俺も婚約騒動の後から考えたんだけど、公爵家の娘が他国の貴族に嫁にいってもいいのか？と思って、ヴァリエール公爵・・・もとい、お義父さんに聞いたら、

「ああ、マリアンヌ王妃様にカリーヌが頼んだところあっさり了承してくれたらしい。・・・あの方は王が亡くなってからいつまでも喪に帰すしていないでちゃんと政に参加してもらいたいのだがな。まあ、今回はそれでこちらが助かったということもあるが・・・。」

「・・・そうなんですか。」

俺とカトレアさんの婚約は一応問題ないらしいけど、うーん、国の

トップがそういうのってトリステインはかなりやばい状態かだよな。

あ、そんなだからアホリエッタがあんな行動を起こしたのかな?

で、今回はこのざわつきをどう抑えるのかな?と思っていたら、カリーヌさんが俺がカトレアさんの病気を治したことや模擬戦をやったことを出して、俺のメイジとしての実力を認めたから婚約させたので、それに不服があるなら俺と決闘でもしてみろ!とか言ってた。

俺は決闘とか冗談じゃない!と思ったけど、思いのほか決闘をしようとする貴族はいなくて、別の意味で場がざわついた。

式が終わるまで華やかさとは違ったざわつきが続いていた。

俺今回のことで結構トリステインの貴族に目をつけられたと思うんだよね。

・・・暗殺とかされないよな?

と思って、誕生会が終わってからカリーヌさん、じゃなかったお義母さんに質問したら、

「暗殺?そうね・・・まあ、あなたには並のメイジでは束になっても歯が立たないから大丈夫でしょう。」

「あ、あの・・・その根拠はどこから?」

「この前の模擬戦から現在のあなたの戦力を考えてみました。でも模擬戦と実戦は違うのでその時の運もあるかもしれませんけどね。」

「そうなんですか・・・。」
（でもトランザムには制限時間があるんだけどね・・・。）

「仮に暗殺に来くる輩がいたら、その時は返り討ちになさい。」

「は、はい・・・。」
（ちょっ、簡単に言ってくれるな・・・）

「あ、弓には気をつけなさい。あれはそこそこ遠くから狙ってきますし。」

「弓、ですか。できるだけ気を付けておきます。」
（弓、ねえ・・・。何か対策を考えておいた方がいいのかな?）

「まあ、これから2年間の訓練で今よりももっと強くして差し上げますから、心配はいりませんわよ!」

「あ、ありがとうございます。」
（なんか原作に入る前に殺されるかもしれないから、これからはもっと頑張ろう!）

「じゃあな、ヴァルムロート。カリーヌ夫人にしっかり鍛えてもらえよ!キュルケも元気でな。寂しくなったらいつでも帰っておいで。

」

誕生会の翌日、父さんたちはツェルプストーの家に帰って行った。

そして昼食を食べた後、普通の魔法練習場にやってきた。

「ではヴァルムロート、今日から私があなたを鍛えて差し上げますわよ！」

「はい！お願いします！・・・それで今は“カリンさん”と呼んだ方がいいのですか？」

今のお義母さんは模擬戦のときのようにズボンを穿いて男装っぽい恰好になっている。

「そうですね・・・。私のことは“師匠”と呼びなさい！」

（あ、ドラゴンボールにカリン様ってのがいたな。センズ作ってたな。）

「・・・分かりました。カリン師匠！」

「あら？今何か考えてました？」

（やべっ。）

「あ、キュルケがここにいないのでどうするのかなと思いまして。」

「キュルケさんも訓練に誘ったのですが、丁重にお断りされてしまいました。今は・・・ほら来られましたよ。」

（キュルケ、逃げたな・・・。）

「あ、本当ですね。誘いを断ったとき、キュルケ何か言ってましたか？」

「ええ、カトレアやルイズと一緒に魔法の訓練をしたいとのことでしたので、ルイズと一緒にさせることにしました。彼女は火の系統を得意としているようなので火のメイジを付かせることにしました。」

「カトレアさんは魔法を練習し始めるのにまだ1～2ヶ月の基礎体力向上のためのリハビリがあって出来ないですけど、ルイズは今何をしているのですか？」

（・・・ルイズ、魔法失敗で爆発しまくってるのかな？）

「あの子はね・・・。もう家族ですから隠してもしょうがないので言いますが、ルイズはいまだどの系統も成功したことがないのです。それどころかコモンスペルさえ扱えないのでこまっているところなのです。杖と契約は出来たのだから魔法が使えないということはないと思うのですけどね・・・。」

（やっぱりな。）

「そうですか・・・。」

「あら？驚かないのですか？」

（おっと、まずかったな。）

「いえ、驚きのあまりリアクションが取れなかっただけですよ。」

「そう。でも、どうしてあの子は魔法が使えないのかしらね？」

「なぜでしょうね・・・。」

（・・・虚無だからだろうけど、そういえばなんで虚無系統のメイジは系統魔法が虚無“しか”使えないのだろう？ブリミルって5系統全て使えたらしいし・・・。伝承だから実は違うとか？）

「まあ、ルイズのことはこのくらいにして、これからあなたの訓練について大まかな流れを考えたので教えますね。大体はあなたがこれまで行っていたことと変わらないと思いますけど。」

「お願いします。」

（何考えてきたんだろう？）

「まず、朝起きたら2時間のランニング、朝食後は昼まで日替わりで系統魔法の基礎訓練、昼食後は1時間のランニングのち、剣術を交えた魔法の応用訓練、夕食後はルイズ達と座学を行い、トリステインの歴史や文化などを学んでもらいますね。あと週に1回私との模擬戦を行います。虚無の曜日はお休みにしますね。」

（ん!?まあ、大体一緒だけど・・・。）

「あの・・・少し質問いいですか？」

「なんですか？」

「なんで朝と昼にランニングが入っているのでしょうか？」

「それはあなたの体力増加のためですわ。この前の模擬戦で最後まで体力が持たなかったでしょう。それを改善するためですよ。」

「ごもっともです。それで、あの、日替わりで系統魔法の訓練ってなんですか？」

「ああ、あなたが実は火の他に水や風も鍛えれば伸びると聞いたので日替わりでそれぞれ鍛えていきますね。」

「均等に訓練していくということですか。分かりました。」

「ちなみに今はどのくらいつかえるのかしら?」

「え!?火がスクウェアクラス、水はライン・・・風が、ドット、です。」

ついつい風を得意とするカリン師匠のまえでは声がどんどん小さくなってしまった。

「・・・そうですか。それでしたら風の割合を増やした方がいいかもしれませんね。うふふ。」

(何をやらされるんだ・・・。)

「・・・次に剣術を交えた魔法の応用訓練と言いましたが、貴族であるのに剣術を教えてくれるのですか?野蛮とか思わないのですか?」

「確かに武器を持つ貴族を野蛮だと一般的に言われますが、軍属になれば大抵は杖を剣のように加工しますからね。」

「そうなんですか。」

(そういえばワルドもレイピアみたいな杖だったよな・・・。)

「さらにいえば剣を使うのが前提なのがあなたの戦いのスタンスのようですしね。模擬戦でも何度も切りかかってきましたしね。」

「あはは・・・、そうですね。確かに剣を扱えた方がいいですね。」

「ええ、そこで王宮騎士団などで行われている魔法を使った剣術をあなたに教えますね。」

「魔法をどう剣術に組み合わせるのですか?剣から火を出すとかですか?」

(テイルズ的な?)

「それもいいですけど、基本は『フライ』や『レビテーション』を使った体術の組み合わせですよ。それによってあなたの剣術に磨きがかかるでしょう。」

「最後に・・・毎週師匠と模擬戦ってどういうことですか!?」

(毎週のようにあんな危険なことをしろと?)

「それはですね・・・あなたが戦い慣れてないからですよ。」

「うっ、確かにメイジ、というか人相手に戦ったのは初めてですが。」

「そうでしょう。それに模擬戦とはいえ実戦に近い形の方が上達が早いというものですよ。」

「そういうものですか・・・。」

「ええ!そういうものです!」

「・・・分かりました。」

「それでは毎週ダエグの曜日に模擬戦を行いますね。今日がダエグの曜日なので来週からにしましょう。」

（ほっ。）

「分かりました。」

「それであなたの剣なんですけどね。」

「はい。貸してくれるのですか？」

「うちにあるものを差し上げてもいいのですが、これから命を預けることになるかもしれないのですから・・・。」

「から？」

「明日は虚無の曜日でお休みでしょう？町の武器屋に行って自分にあったものを探してみてはいかがかしら？うちにあるもので気に入ったものがあればそれでもいいですけどね。」

「あ、はい。分かりました。」

（俺のポケットマネーでいいのかえるかな？この家にいいのがあればそれでいいんだけどね。）

「では、欲しいものが見つかればヴァリエール名義で購入なさい。金貨５０００までならいいですわよ。」

（ちょっ！？５０００とか家が買える金額じゃないかよ！？）

「５０００！？そんなにいいのですか！？」

「ええ。普通の剣の相場は２００位なのですが高いものはそこそこ

の値段しますからね。あなたも貴族なのですから多少は見栄えのいいものを選びなさいね。」

（とりあえず、行っていいものがあるか見てみよう！）

「・・・分かりました。明日町に行ってみます。」

「そうしなさい。では今日は平日と同じメニューでいきますわよ。今日は“風”よ！」

「は、はい！」

師匠に風の使い方をみっちり教わった。

が、それが実践できるかどうかはまた別の問題だが。

俺が訓練している間、後ろの方で爆発音とそのあとにキュルケの笑い声が何度か聞こえていた。

お義父さんが羨ましそうにこちらを見ている。（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回は決闘を申し込む貴族はいませんでしたが、今後話が噂程度になったときに出てくる、かもしれません。

これから2年で主人公をさらに強化していきますね。
なんせ今はほとんど火の系統魔法しか使っていない状態ですからね。
他の系統も使っていくようにします。

次は主人公の武器を探しにいく話です。
武器はこの二次創作を書き始めたときから決まっていました。とうとう登場できる！

ご意見・ご感想があればよければ書いてみてください。

セブンソード（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回はヴァルの装備品（武器）についての話です。

セブンソード

「「「「行ってきます！」」」」

今日は虚無の曜日、早速昨日言われた通り町に剣を探しに行こうと思う。

キュルケやカトレアさん、ルイズも町に買い物に行くようなので一緒に行くことになった。

４人乗りの馬車に俺、横にキュルケ、俺の前にルイズ、ルイズの横にカトレアさんが座っている。

「お義兄様も町に買い物に行かれるのですね！何を買うのですか？」

「ああ、今日は剣を探しにね。なあルイズ、この間からそのしゃべり方だけど、どうしたんだ？」

「・・・変ですか？」

ルイズが上目使いでこちらを見てくる。

（可愛いなぁ。）

「いや、別に変ではないけど前の時といきなり反応が変わってちょっと戸惑っただけだよ。」

「そうですか！良かったです！ちぃ姉様と時期に結婚して私のお義兄様になるのだからちゃんと接しないとだめだと思って、戸惑わせ

てしまってごめんなさい。」

「いや、謝ってもらうほどじゃないから大丈夫だよ！あ、じゃあキュルケはお義姉様になるのかな？」

「いえ、キュルケはキュルケですよ。」

「え、そうなの？それでいいの、キュルケ？」

横に座っているキュルケに聞くと、

「ええ。なんかルイズにお義姉様って呼ばれることに抵抗があって。私は別に気にしないからそのままでいいということになったの。」

「そうなんだ。」

「お義兄様！私たちはちぃ姉様のお洋服を見に行くんだけど、一緒に行きませんか？」

「あらあら、ルイズったら。なんだか私よりヴァルムロートさんと仲が良さそうね。」

「ちぃ姉様！そ、そんなことありませんよ！」

「買い物に付き合ってもいいけど、先にこっちの用事を済ませてからでいいかな？」

「いいのですか！」

「その間はどうする？剣を吟味しないといけないからちょっと時間

がかかるかもよ?先に行洋服屋に行ってる?」

「そうですね・・・。」

ルイズは腕を組んでうーん、うーんと考え込んでしまった。

なんだかルイズの一挙一動が子犬のようで可愛い。

「私は暇だしダーリンに付いて行こうかしら。いいわよね?」

「別にいいけど、面白くないかもよ?」

「いいの、いいの。ねえ、カトレアさんやルイズも一緒に行かない?」

「ちょっとキュルケ!」

「そうね。たまには普段行かないところに行ってみるのもいいかもしれないわね。」

「ちぃ姉様まで!じゃあ私もお義兄様に付いていきます!」

「と、いうことでよろしくね。ダーリン!」

「よろしくされてもしかたないんだけど、まあそれでいいのなら僕もなるべく早く終わらせるように努力するよ。」

それからは女性3人がカトレアさんにはどんな服が似合うとか、今の流行のアクセサリーの話などをしているのを相槌を打ちながら、聞いていたら町に付いた。

ヴァリエール家から町までは大体馬車で1時間くらいだった。

町の大きさはそこそこの大きさでヴァリエール領の中では国境の町に次いで栄えている町だそうだ。

栄えている町といえど大通りの道幅は4~5メイルしかないので、馬車を降りて店に行くことになった。

俺は馬車から降りるときに暗殺を警戒して『ディテクトマジック』を発動し、常に周りを警戒することにした。

馬車を操作していた人に聞いたところ武器屋は大通りにはなく、路地を入ったところに看板が見えるのでそこに行って下さい、とのことだった。

言われた通りに進むと、路地に入った瞬間鼻を衝く悪臭が立ち込めていた。

うちのツェルプストー領では最近糞尿などは一か所に集めるように指示を出しているので路地の悪臭も段々と改善させてきて、それに伴い領民の意識も少しずつだが変わってきているが、トリステインというか他の場所ではこれが現状なのだろう。

まあ、農村ではまだ肥料に変えるなどの活用方法があるが、町ではそうもいかないので今後その問題をどう解消していくかが問われている。

路地の中にいた平民たちがこんなところに貴族が来たことにかなり驚いていた。

その好奇の視線を無視しながら路地を少し行くと銅板で出来た剣の看板が店先に釣り下がっていた。

（剣の看板とかゲームみたいだな・・・。）

「ここみたいだな。じゃあ中に入ろう。」

俺たちは扉を開けて店の中に入った。

「へい、いらっしゃ、こ、これは！貴族様がどうしてこのようなところへ！？まさか、抜き打ちの・・・こ、この店は真っ当な品物しか扱っておりませんよ！？」

亭主であろう男性がカウンターから急いで俺の前までやってきてそう矢継早に言った。

「いや、今日は剣を見に来たんだ。」

「貴族様が剣を扱うのですか？」

「何か？」

「い、いえ！若旦那様はこの度軍属になられるのですか？」

「まあ、似たようなものです。では少し勝手に見させてもらってもいいかな？」

「そ、それはもう！若旦那様、それならうちの一押しを出してきま

しょうか？」

「そうですね。では少し見せてください。用意している間に展示しているものを見させてもらいますね。」

「分かりました。すぐに用意します！しばしお待ちを！」

亭主はそういうとカウンターを乗り越えて店の奥に消えていった。

「それでダーリンどうするの？」

「とりあえず周りに飾ってある剣を見てみよう。何かいいものがあるかもよ？」

店に壁に飾ってある剣を2、3本見たところで亭主が布にくるまれた数本の剣を抱えて息を切らして戻ってきた。

「お、お待たせしました・・・。こ、このレイピアなどいかがでしょうか？柄の部分に金を用いた装飾が他の目を引きますよ！そしてこの軽さ！この軽さにより最速の突きを繰り出すことができるでしょう！」

「レイピアですか・・・。」

俺はレイピアを持ってみた。

確かにいままで俺が扱っていたものよりは軽いが、なんだか軽すぎる気がする。

それに俺は片手剣の訓練をしていたので突くよりは切るのが主体の

剣術スタイルになっていたので、レイピアとは合わない気がした。

「これは私には合わないようですね。他は何がありますか？」

「そうですか・・・。ではこれはどうですか？」

と今度は刃渡り1．5メイル位の大剣を出してきた。

「この剣には宝石が埋め込んでありまして、これに魔法がかかっていてどんなものでも切り裂いてしまう極上の一品ですよ。そしてなんとこの剣を鍛え上げたのがかの有名なゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿なんですよ！ほらここに名前が刻んであるでしょう。」

「へえ、すごいんですね。」

（原作でもこんなパチモンが出てきてたよな。これは・・・ん！？）

「どうです？すごいでしょう！若旦那様、これになさいますか？」

「あの・・・これ名前のスペル、間違えてますよ？それにこの宝石は本物ですけど魔法はかかってないみたいですね。」

「そ、そんな馬鹿な！」

亭主は剣を俺からひったくるように取って、まじまじと名前のところを見た。

「・・・本当だ。・・・くそ！あの商人め！まんまと騙しやがって今度来たらただじゃおかねえ！・・・・あ、すみません。お見苦しいところを。」

「別にいいですよ。それで他にはなにかありますか？」

「さっきのがうちの目玉商品だったんですけど・・・。」

亭主がもってきた剣はあと1本残っていた。

「その剣はダメなんですか？」

「これですか？これは急いでいたのでつい持って来てしまったのですが。正直これは売り物にはならないと思いますよ。」

「まあ、見せてください。決めるのはこちらですから。」

「そうですか？まあ、見た目は片手剣なんですが見慣れない形をしていまして。」

亭主が剣をカウンターに置き、布を取った。

「・・・え！？」

「これは多くの人の手を渡ってきたらしいのですが、元は砂漠の近くで見つかったとかで。しかしこの剣は肝心の刃の部分が錆び付いているんですよ。これじゃあインテリアにもできませんよ。まったくどうしたものか。」

「刃が錆びてるってとんだ不良品ね！」

「すみません、奥様。こんなものはすぐに下げますから。」

（なんでこれがあるんだ？いや、ロケランとかがあるんだから不思

議じゃないのか？）

「ちょっと待った。亭主・・・。」

「すみません、若旦那様。変なものを見せてしまって。」

亭主がその剣を布の包んでしまおうとしていた。

（本物、なのか？）

「待てと言っている。ちょっと見せてもらうぞ。」

手で持つところは緑色の紐が巻かれている。

「は、はあ。・・・どうぞ。」

俺はその剣を鞘から抜いた。

「あら、本当に錆びついてますわね。」

刃の長さは大体６０サントで片手剣の大きさで刃と持つところの間に鍔がある。

「この剣って変わってるわね。刃がちょっと曲がってるわよ。」

刃は全体的に反りが入っており、反っている反対側に錆びついてよく見えないが波紋があるようだった。

「ねえ亭主さん。この剣を鍛冶屋でもう一度鍛え直そうとはしなかったの？」

「それがですね奥様。私もそう思って持って行ったのですよ。そし

たら鍛え直してもいいがもう一度この形にするのは不可能だぞって言われたので、断念してそのままです。」

「そうなの。ねえ、ダーリンそんな錆びた剣をいつまでも見てないで他の剣を見ましょうよ。」

（これは刃がちゃんとついてるっぽいし、模造刀じゃないな。）

「亭主。」

俺は剣を鞘に納めた。

「はい！」

（まさか、日本刀がこんなところで手に入るなんてラッキーとしか言いようがない！）

「この剣を貰おう。いくらだ？」

「「「「え！？」」」」

俺の発言に言われた亭主だけでなくキュルケやカトレアさんそれにルイズも驚いた声を出した。

「ちょ、ちょっとダーリン！ほんとに！？錆びてるのよ！？」

「ああ。錆びはなんとかしよう。」

（錆びは『錬金』を使えばなんとかなるんじゃないかな？俺は出来ないけどな。）

「お義兄様！その剣なんか変な形してますけど！？」

「それは問題ない。大丈夫だ。」
（他の剣は大抵まっすぐで両刃だからな。日本刀みたいに反りがあって片刃は珍しいんだろう。）
「本当にそれでいいの？」
「はい。もう決めました。」
（ここで買い逃したらもう手に入らないかもしれないし、ここは買っとくべきだろう！）
キュルケ達は俺の決意が強いものだと分かったのか黙ってしまった。
「で、亭主。いくらだ？」
「は、はい。それでしたら相場からお安くさせていただいて、新金貨１５０です。本当にいいのですか？」
「ああ。構わない。それと・・・あそこにある短剣を４つ貰おう。」
「は、はい。あちらは１つ新金貨で１５０で、４つで６００です。」
「では全部で７５０だな。」
俺はお義母さんに貰った小切手を取り出し、７５０と書いて亭主に渡した。
「あ、ありがとうございます。」
「ああ、こちらもいい買い物をした。」

「？」

亭主はこの貴族はあんな錆びだらけの剣を買っていい買い物とはどういうことだ？と思ったが買い手がないと諦めていたものが売れたのでよしとした。

俺たちは武器屋から出て、路地を戻り大通りに出た。

これから馬車に荷物を置いてから、女性陣の買い物に付き合わないとな。

「ねえ、ダーリン本当にこれで良かったの？」

キュルケは刀を指さしながら聞いてきた。

「ああ。これがいいんだ。でも使えるようにするには一工夫要りそうだけどね。」

「そうよね。」

「ねえ、お義兄様。短剣は何のために買ったのですか？」

「ああ、ちょっと面白いこと思いついたからそれが出来なかな？と思ってね。」

「あらあら。面白いことって何かしら？」

「カトレアさん、それは出来てからのお楽しみということでその時は皆のお披露目するよ。」

「分かったわ。楽しみにしてるわね、ダーリン！」

馬車に荷物を置いて、その後はカトレアさんの服選びに付き合った。

「あの・・・まだ行くのですか？」

「なに言っているの？ダーリン！まだまだ半分くらいよ！」

「そうですよ！お義兄様！まだちぃ姉様に似合う服があるはずですよ！」

「ごめんなさいね。久しぶりの買い物が楽しくて。」

・・・女性のショッピングに付き合うのはある意味訓練よりも疲れるね。

そして夕方ヴァリエール家に戻ってきた俺はお義母さんに報告しに行った。

「あら、お帰りなさい。どうですか？いいものは見つかりました？」

「はい！しかし問題がありまして、このままでは使用できないのです。」

そう言って俺はお義母さんに錆びた刀を見せた。

「・・・どうしてそんなものを買ったのですか？」

「その剣が僕の心に響いたので今の状態に関係なく購入しました。確かに今のままでは使えませんが、『錬金』で刀身を再構築すれば使用できるようになると思います。」

「・・・そうですか。心に来たものがそれならしょうがないですわね。では『錬金』の得意なものにさせましょう。」

「あ、あとマジックアイテムを作成経験があって、最後まできっちり仕事をしてくれるような人がいいのですけど、そんな人いますか？」

「なかなか注文が多いですわね・・・。マジックアイテムを作ったことがあって、キチンとした性格ね・・・あ、そうだわ。エレオノールに頼んでみたらどうかしら？あの子は土メイジであるし、王立魔法研究所に勤めているからそういうのが得意なのではないかしら？」

「エレオノールさんですか？分かりました。それで今はどちらにいるでしょうか？」

俺がエレオノールさんをお義姉さんと呼ばないのは本人に拒否されたからだ。

「今は部屋にいるんじゃないかしら？」

「じゃあ、早速行ってみます！」

早速俺はエレオノールさんの部屋の前に来た。

扉をノックした。

「はい？どなたかしら？」

「ヴァルムロートです。今お時間よろしいですか？」

「あなたね・・・。まあ、いいでしょう。入ってらっしゃい。」

「はい。失礼します。」

エレオノールさんは椅子に座って机で何が本を読んでいるようだった。

「それでなんの用かしら？」

「はい。この剣の錆びを刀身から除いてほしいのです。」

「どうして私がそんなことをしないといけないのかしら？」

「これは僕の、義弟からのお願いです。エレオノールさんが嫌だと仰るなら別の方にお願いしますけど。」

「・・・はぁ、仕方ないわね。ちょっと見せてみなさい。」

俺は刀をエレオノールさんに渡した。

「・・・変わった剣ね。本当に錆びてるわね。・・・変わった金属

ね？いえ、鉄だけど製造方法が違うのかしら？・・・ねえ、聞いてもいいかしら？」

「なんですか？」

「この剣って私の予想だと場違いな工芸品だと思うのだけど、これどこで手に入れたのかしら？」

「この近くの町の武器屋ですけど？」

「そう・・・。確かにこれだけ錆びていれば普通は目にも止まらないか。いいでしょう。研究所に持ち帰って解析のついでに錆びを取り除いてあげましょう。」

「本当ですか！？あ、でもその剣ちゃんと僕のところに戻ってきますか？」

「そうね。本来ならそのまま国の宝物庫で保管という形になるのですけど、あなたはゲルマニアの貴族ですからね。善意の貸し出しという形にして、解析や除錆が終わり次第戻ってくるように手続きしておきましょう。」

「ありがとうございます！・・・それでまだお願いがあるのですが。」

「なにかしら？言ってみなさい？」

「この剣をマジックアイテム化することってできますか？」

「これをですか？まあ、やって出来ないことはないと思うけど。でも、限度がありますわよ？どういう風にしたいのかしら？」

「この剣って今は片手剣の大きさじゃないですか。それを大剣みたいに大きくしてほしいのですけど、出来ますか？」

「剣を大きくする、ですって？・・・そういうにはなにか具体的な方法を考えてきているのでしょうね？」

「はい！実現可能かは分からないのですが、僕が考えたのは

？鍔の部分が半分に割れて、横に展開

？持つところが伸びる

？刀身を引き延ばして大剣サイズにする

なんですけど、どれも『錬金』を使えば出来ると思うのですけど・・・どうですかね？」

「そうね・・・。？はいいけど、？はどうやって伸ばすつもりなのかしら？」

「そうですね・・・。最初はこう閉じているのですけど、伸びるときは開いて伸びるというか。言葉で説明するよりも・・・ちょっとこの紙貰ってもいいですか？」

「ええ、いいわよ。それでどういうことかしら？」

俺は紙を縦に切って、それをバツの形にしたものを３つ位作り、それをＸＸＸと横一列に並べた。

「これが最初の状態では、こう縮んでいるのですけど・・・」

俺はそれぞれを横からぎゅっと圧縮するように縮めてた。

そうすることで縦方向は少し厚くなったが、横方向には短くなった。

「で、伸びるときは、こう、なって伸びます。」

縮めたバツを今度は伸ばした。

そうすると縦は細くなったが、横方向は縮めた状態よりも倍以上に長くなった。

「なるほど。では？はどうしますか？『錬金』は物の形を変えたり、土を金属に変えたりは出来ますが、元の大きさを大きくすることは出来ませんよ？」

「はい。それは分かっています。ですから、『錬金』では刀身を薄く伸ばして大きくして欲しいのです。」

「そうですか。しかしそれでは大剣状態の刀身は十分な強度を得られないのではないかしら？」

「はい。そのままではぺらんぺらんですぐに折れてしまうでしょう。しかし魔法の『固定化』と『硬化』を使えばその問題は解決出来ると考えています。」

「なるほど。それなら確かに強度を得ることは出来るかもしれませんね。」

「出来そうですか？」

「多少複雑ですが、私に係れば問題ないでしょう。」

「そうですか！お願いします。・・・あ、持つところに僕の杖が入る溝も一緒に作ってもらえませんか？大剣状態は重さが変わらないとはいえ重心が変わってくると思うので、両手で持った方がいいと思うんです。」

「それくらいだったら、簡単に出来そうですから問題ありませんよ。」

「じゃあ、お願いします！」

「それで大剣の時の刀身はどのくらいの大きさにすればいいのかしら？」

「あ、それは縦２メイル、幅３０サント位でお願いします。」

「・・・それは大剣の大きさを超えてないですか？そこまで引き延ばすとかなり薄くなりますが・・・『固定化』と『硬化』はかなり強固にかけないといけませんわね。」

「それで変形させるときの合図なんですけど・・・」

「・・・分かりました。ではその掛け声をキーワードに変形を開始するようにしますね。」

「それでもう１つお願いがあるんですけど・・・。」

「今度はなんですか？」

「これもマジックアイテム化して欲しいのですけど・・・。」

俺は今日買った短剣４つ取り出した。

「・・・これはどうしたいのですか？これも大きくしたのですか？」

「いえ、これは大きさはこのままでいいのですが。」

「ではどうするのですか？」

「これ、飛ぶように出来ませんか？」

「飛ぶ？それなら普通に投げればいいのではないかしら？」

「それだと軌道が真っ直ぐですぐに避けられてしまうじゃないですか。それで、こう、ちょっと変な動きを出来るようにしたいんですよ。」

「・・・はぁ。・・・もちろんこっちもなにか考えてきているのでしょうね？」

「はい。まず『ディテクトマジック』を使えるようにして、それを基に標的に向かうようにしたいのです。」

「まあ、それくらいなら出来るでしょう。で、飛ばす方法は？」

「はい。この世界はフネを“風石”で飛ばしているのでそれを応用すればこの短剣を飛ばすくらい問題ないと思うのですが、どうです

かね？」

「飛ばすのは『フライ』じゃなくて“風石”なのね。・・・それにしても“この世界”とは妙な言い回しね。まるで他にフネを飛ばす方法が“風石”以外にもあるみたいね。」

（やべっ！ついぽろっと言っちゃった！）

「いえ、確かにフネを飛ばすなんて“風石”以外にないですね・・・。」

「ふーん・・・。まあ、これも合間をみてやってみましょう。」

「やってくれるんですか！？お願いします！それでこちらも魔法が発動する合図をお願いしたいのですけど・・・」

「分かりました。言ってみなさい。」

「・・・でお願いします。」

「いいでしょう。しかしその名前はどこから取ったのかしらね？」

「あはは・・・。お、思いつきですよ。」

「それでこの件を受ける代わりにあなたにはレポートを提出してもらいますわよ。」

「へっ！？レポート？」

「カトレアの治療についてです。話を聞くだけで終わりにしようかと思いましたが、あなたがこれを頼んできたので私にもそれなりの

報酬を貰わないと割に合わないですからね。」

（ギブアンドテイク、ということか。）

「・・・分かりました。それで期限とかありますか？」

「そうですね・・・。来週の虚無の曜日に来るのでそれまでに原案をあげておきなさい！私が後で添削してあげますからね。」

「分かりました。頑張ります・・・。」

（レポート提出とか学生みたいだな。）

「あなたから頼まれた件もなるべく早く終わらせましょう。ただし私は主席研究員で忙しいので時間がかかるかもしれませんけどね。」

「はい。よろしくお願いします。」

「それにしても普通に武器を使おうとするメイジなんて、ハルケギニアでもあなたくらいじゃないかしら？本当に変わっているわね。ゲルマニアでは他のメイジもそうなのかしら？」

「あはは・・・。いえ、ゲルマニアでもこんな変わったメイジは僕だけですよ・・・たぶん。」

「でも、武器を使うと他の貴族から野蛮と言われるわよ？」

「そうですね・・・。言いたいものには言わせておけばいいのでは？」

「それはいけませんよ！ヴァリエールやツェルプストーの品格を上げるも下げるもあなたの行動次第なのですから。」

「はい、肝に銘じておきます・・・。」

そして1週間過ぎた。

俺には剣が無かったので剣術の稽古はなく、ひたすらに魔法の稽古や体力作りばかりやった。

夜は勉強の後、エレオノールさんに提出するレポート作成に取り組んだ。

お義母さんとの2回目の模擬戦はこっちの攻撃は見切られて当たらないのに、こちらはばかすか攻撃に当たって散々だった。

・・・お義母さん、最初の模擬戦はかなり力セーブしてたんだな。

そして虚無の曜日になり、エレオノールさんが家に帰ってきた。

「お帰りなさい、エレオノールさん。」

「ええ。レポートは出来てるかしら?」

「はい。なんとか形にはなったと思います。」

「では後で見させてもらいますね。こちらもあなたに見せるものが

あります。」

「え！？もしかしてもう出来たのですか？」

「ええ。今は研究の為の資料集めや部下の指導がほとんどで本格的に開始する前だったので比較的に時間が取れたので。運がよかったわね。」

「ありがとうございます！・・・それで仕上がりの方は？」

「ほぼ要望通りに出来ましたよ。ただいくつか変更箇所と注意点がありますけど。」

「変更箇所と注意点、ですか？」

「ええ。ではお披露目を兼ねてそれを教えます。するんでしょう？剣のお披露目？」

「はい。では皆を練習場に呼んできますね！」

「私は先に行っていますよ。」

そして皆を魔法練習場に集めた。

「ダーリンの見せたいものって何かしら？」

「この間錆びた剣や短剣を購入しただろう。その錆びた剣をエレオノールさんに頼んで使えるようにしてもらったんだ。」

「お義兄様、どんなふうに出来たのですか？」

「それは僕もいまから見るんだけど、いいですか？」

「ええ、構いませんよ。私の自信作ですわ！」

「どんなものかわくわくするわね。」

俺はエレオノールさんから刀を手渡された。

まずは鞘から抜いてみると錆びが取り除かれて黒と白の刀身とその間の波紋がきれいに出ていた。

「綺麗・・・。」

「すごい・・・。」

「本当はこのようなものだったのですね・・・。」

しばらくの間見入っていた。

「では、ヴァルムロート。これを切ってみなさい。」

そう言ってエレオノールさんは『錬金』で地面から土の棒を出すと、さらにそれを鉄に『錬金』した。

「エレオノールお姉さま！？それはちょっと無理なのでは？」

「ちびルイズは黙って見ていなさい。」

「ううう・・・。」

（おいおい・・・。この鉄の棒、直径が２０サント程あるぞ。切れるのか？）

「・・・いいのですか？」

「ええ！おやりなさい！」

俺はエレオノールさんがあんなに自信満々なところを信じて刀を横に“振り切った”。

（振り切れた！？切れたのか！？）

「・・・！？」

鉄の棒は真ん中から切れて、上半分が地面に落ちていた。

「すごいわね・・・。」

「本当に切れちゃった・・・。」

「だから言ったでしょう。私の自信作だって。じゃあ、今度は“あれ”をしなさい！」

「はい！」

「あれってなにかしら？」

「さあ？」

「・・・マジックアイテム化したのね。どうなるのかしら？」

俺は刀を両手で持って胸の前で構えた。
そして俺は大剣に変形する合図を唱えた。
（いっやっほー！このセリフ言ってみたかったんだ！）
「・・・『伸びろ！斬艦刀！』」
すると、鍔が左右に展開し、持つところが伸びて、刀身が光ったかと思うと長さ２メイル、幅３０サント位の大きな形となり、光が収まると黒いとそれを縁取る白い刀身を持った大剣へと１秒にも満たない時間で変形した。
（おお！やっぱり斬艦刀はカッコイイな！）
「おお！すごいですよ！エレオノールさん！想像通りです！」
「そうでしょうそうでしょう。なにせ私の自信作ですからね！」
俺とエレオノールさん以外は剣が変形したことに呆気にとられていた。
「ダーリン、それ何？」
「何って、剣だよ剣。片手剣と大剣の両方に出来るようにマジックアイテム化してもらったんだ。あ、名前は斬艦刀っていうんだ。」
「お義兄様、剣の名前はいいとして、その・・・大きすぎません？あきらかにお義兄様よりも大きいですよ？」
「ああ、大きいな！でもこれ見た目より軽いんだよ。それにこれくらいがカッコイイんじゃないかな？」

「確かにカッコイイですわね。」

「でしょう！」

「それでヴァルムロート、それには他にどんな機能があるのですか？」

「え？無いですけど。」

「はい？」

（ただ大きいだけ！でもそこが斬艦刀のロマンなんだよな！）

「ただ大剣に変形するだけですよ？」

「そう、なのですか・・・。」

「あ、でも、これは杖を、こう、セットすれば杖内蔵型の剣になって魔法も使えますよ！」

そう言って俺は魔法で剣に炎を纏わせたり、剣から『ファイアーボール』を出したりした。

「なるほど、分かりました。なかなか面白いものを作ったようですね。」

「はい。それでエレオノールさん、変更箇所と注意点ってなんですか？」

「そうですわね。まず変更箇所なんですけど、元々斬艦刀の刀身は

鉄が何重にも折り重なって出来たものだったのですが、『錬金』による変形を行い元に戻す際にその構造を再現出来ないと分かったので素材は変わらないですけど構造が折りたたみ構造ではなく均一な金属になったわよ。そのままでは強度などが落ちたのですけど、そこは『固定化』と『硬化』で補うことにしたわ。さらに白いところはかなり錆がひどかったので、かなりの部分を失しないはしたけどその分薄くして先を細くすることで本来以上の切れ味を出せるようになったのは先ほど実感したわね。こちらにももちろん『固定化』と『硬化』がかけてあるわよ。まあ、簡単に言えば形は同じだけど構造が異なるものになったというわけ、分かった？」

「はい。分かりました。なんだか思ったよりお手間をかけさせたようですみません。」

「別にそこまでの手間じゃなかったわ。あとは片手剣の時にも持つところに杖が入る溝を作ったことと、剣がかなり切れ味が良くなったからそれに応じて鞘のほうにも強固に『固定化』と『硬化』をかけておいたわ。」

「ありがとうございます。・・・それで注意点というのは？」

「それはね・・・。ヴァルムロート、そのまま2～3回変形を繰り返してみなさい。」

「はい。分かりました。」

俺は言われたまま変形を繰り返した。

片手剣、大剣、片手剣、大剣、片手剣。

「変形しなくなったわね？」

「そうね。なにも変わらないわね。」

「あれ？あれ？・・・もしかして壊しました？」

片手剣から大剣にそれからまた片手剣に戻すことを3回続けると斬艦刀は、うんともすんともいわなくなった。

「いいえ、違います。“土石”の力が無くなったせいですわ。」

“土石”の力、ですか？」

「ええ、この剣は『固定化』『硬化』『錬金』などを複雑かつ強固に組み込んだ作りをしているのは分かったているでしょうけど、それを維持するためには普通のマジックアイテムのようにはいかないの。だからそれを補うために“土石”の力を使っているのよ。『固定化』も『硬化』も『錬金』も全部土系統の魔法ですからね。」

「それは分かりましたが、土石の力は無くなってしまうのですか？」

「ええ、大体変形と戻すことを3回繰り返すと土石の力は無くなってしまうことが分かっています。」

「それで力が無くなったらどうしたらいいのですか？」

「それは簡単です。また新しい“土石”を装着すればいいのですよ。」

そう言ってエレオノールさんは“土石”を取り出し、持つところの

先に付いていた石を外して、付け替えた。

「それでまた変形するようになったはずですよ。」

俺が『伸びろ！斬艦刀！』というと、片手剣から大剣に変形した。

「おお、戻った。つまり変形を3往復させたら“土石”を基に戻した方がいいということですね。」

（ようは電池交換と一緒というわけだな。）

「ええ、そういうことです。“土石”は今後は自分で調達しなさいね。」

「はい。分かりました。」

「では次はこれね。」

エレオノールさんは次に短剣を4つ俺に渡してきた。

「え！？これも出来たのですか！？・・・早いですね！」

「それは簡単に出来たのでむしろ物足りない位でしたわよ。」

「あ、お義兄様それもこの前武器屋で買ってましたよね？それもマジックアイテム化したのですか？」

「そうなんだよ。じゃあこれもどんなふうになったか試してみるね。」

「今度はどんな風にマジックアイテム化したのかしら？」

「楽しみね！」

「ではヴァルムロート、これを狙ってみなさい！」

またエレオノールさんは『錬金』で地面から土の棒を出した。

今度は土のままだ。

「はい！」

俺は『ディテクトマジック』を使い、その土の棒を“認識”した。

そして４つの短剣をばらばらの方向に投げた。

「ダーリンってばどこに投げてるのかしら？全く方向違いのところじゃない。」

「そうね。でも何かあるんじゃない？マジックアイテムなんだし。」

「あ、それもそうね。」

俺が投げた短剣がただの短剣だったら土の棒には当たらなかっただろう。

しかし俺はこの短剣がマジックアイテム化する合図を唱えた。

「・・・『行け！ファング！』」

すると、ばらばらに投げた短剣が弧を描き、土の棒に突き刺さった。

「・・・すごいわね。」

「・・・ええ。」

「ヴァルムロート、あれもあなたがマジックアイテム化をお願いしたものなのかしら？」

「はい。・・・あ！決闘などでは使用しませんよ！あれはあくまで暗殺などを警戒したものですから！」

「そうですか。」

「そうです！え、エレオノールさん、あれにも何か変更箇所や注意点があるのですか？」

「まあ、変更箇所というものではないのですけど、ファングにも一応『固定化』と『硬化』が開けてあるわ。それと注意点はさっきと同じようなものですけど、斬艦刀が“土石”なのに対してファングは“風石”を使用しているのはそのままです。こちらも力が無くなったら飛ばなくなるので“風石”を交換すれば問題ないですわ。ただ・・・。」

「ただ？」

「このファングは対象に刺さるか、使用者が対象を解除するかしないと止まらないのよね。」

「え、えーと。つまり、風石の力が続く限り対象を追いかけ続けるということですか？」

「そういうことね。ちなみに剣などで払ってもまた飛んで追いかけてくるわよ。『固定化』と『硬化』をかけたからそうそう破壊もできないと思いますし。」

（何気に凶悪武器が出来てしまった・・・。）

「・・・そうなんですか。」

「まあ、風石が貴重なこともあるけれどあまり多用はしない方がいいわよ？」

「分かりました。気を付けます。」

「それにしてもダーリンはよく次から次にいろいろなものを考えるわね。」

「まあ、ね。思いつきだよ、思いつき！」

「それにしてもお義兄様は今『ブレイド』に『ビームサーベル』という魔法の剣みたいなものがあって、さらに今回ザンカントウとファング？でしたっけ、が加わって全部で7本も剣を使うことになるのですね！」

「あら、本当！？多いわね。大丈夫かしら？」

「大丈夫ですよ、カトレアさん。ファングはほとんど使いませんし。実質3本みたなものですよ。それにあまり武器を使うのはメイジとしては好ましくないようですし。」

「そうよ。ヴァルムロート。今回は興味深かったので協力しました

が、あまり貴族に反するようなことはしないようにね！」

この中で初めからお義父さんが一言も発言していないことに俺は気が付かなかった。

「そういえば、あなた。一言も言葉を発していないですけど、どうかなさったのですか？」

「いや、な。ツェルプストーから聞いていたが実際目にするとな・・・。」

「ああ、ヴァルムロートが変なことや面白いことを突然思いつくという話ですわね。そうですね・・・。確かになかなか愉快ではないですか。」

「ああ、本当に優秀だ。これだったら生まれてくる子供もさぞ優秀なのだろうな。」

「そうですわね。まさか・・・あなた！」

「ああ！カトレアに2人目の子供が生まれたら養子に貰おう！エレオノールは・・・だし、ルイズも家を出ていくだろうしな。」

「そうですわね。まだ先の話でしょうけど、それも視野に入れておかないといけませんね。」

などというヴァリエール家の将来設計が着々と進んでいるとは思わなかった。

お披露目が終わって皆それぞれの部屋に戻っていった。

「7本の剣、か。俺のセブンソードだな！」

セブンソード（後書き）

読んで頂きありがとございます。

いや～、斬艦刀はやっぱりロマンの塊ですよね。

ファングですけど、ソードブレイカーでもよかったかな？
でも、ファングの方が凶悪武器っぽい名前じゃないですか？

武器と来たので次は防具の話です。
まあ、これから原作崩壊していく元凶の登場なんだけどね。

感想のところにあったのでこちらでも話しておくのですが、原作開始まではまだ１５、６話あります。
まだまだ長いですが、お付き合いください。

ご意見・ご感想があればよければ書いてみてください。

一定以下完全防御系よりダメージ減少系のバリアの方がめんどくさい（前書き）

こんにちは。こんばんは。

前回が武器だったので、今回は防具の話です。

タグに「オリジナル魔法・武器」「はガンダム・スパロボ」を追加しました。

「うわっ！」

俺は『エア・ハンマー』の直撃を受けて吹っ飛んだ。

お義母さん、いや訓練中はカリンさんか、と何度目かの模擬戦を行っている。

「いてて・・・。」

「・・・今日はここまでにしましょう。ヴァルムロートは今日直撃を受けた回数分練習場の外周を走ってから終わりなさい。」

「わ、分かりました！」

今日俺が直撃を受けた回数は8回だから、練習場の外周を8週走ることになった。

俺は模擬戦の後の疲れた体を引きずって走り出した。

走り出したヴァルムロートを見ながらカリンがポツリとつぶやいた。

「あの子・・・どうしてシールド系の魔法を使わないのかしら？」

週が明けて、訓練の時間になった。

「今日は風系統の魔法の訓練をするわよ。」

「はい！」

「・・・その前にヴァルムロート、あなたに聞きたいことがあります。」

「なんですか？師匠？」

「前回の模擬戦の時に気が付いたのですけど、あなた・・・どうしてシールド系の魔法を使わないのですか？使えば魔法が直撃する回数がぐっと減ってさらに戦略に幅が広がるのではなくて？」

「シールド系の魔法ですか・・・。でも火系統にはシールド系の魔法はありませんよ？」

「あなたは火の他にも水や風があるでしょう？どうして使わないのですか？」

「あはは・・・でも、水の『ウォーター・シールド』は事前に水を用意しないといけないし、風は事前準備はいりませんが僕って風メイジとしてはまだドットですから・・・。」

（水や風は火と違ってなかなか扱いが強くならないからちょっと苦手意識があったのかも・・・。）

「まあ、近くに水が無い場合の『ウォーター・シールド』は模擬戦の中で使用するのが難しいというのは分かりますが、『エア・シールド』はドットスペルですから今のあなたでも十分に出来るもので

すよ。」

「う・・・。でも、攻撃に当たらなければどうということはありませんし・・。」

「ヴァルムロート。この前の模擬戦で何回私からの攻撃で直撃をうけましたか？」

「・・・8回です。・・・・分かりました。今度からg」

「今度ではありません！今から！練習しますよ！」

「わ、分かりました！・・・それでどうやって練習するのですか？」

「簡単ですよ。あなたが『エア・シールド』を使って、私がそれに攻撃する。・・・ね、簡単でしょう。」

（うげっ！ドット程度のシールドでスクウェアの攻撃が防げるのか？）

「・・・本当にその方法で行うのですか？」

「ええ！さ、早くしなさい！」

「分かり、ました・・・。」

カリンさんが急かすので俺はしぶしぶ『エア・シールド』を自分の前方2メイルくらいのところに展開した。

（ああ・・・嫌な予感しかしない。）

「い、いいですよ・・・。」

カリンさんは少し俺から離れて『エア・ハンマー』を唱えた。
そして『エア・ハンマー』が俺に向けて放たれた。

ここで『エア・ハンマー』について簡単に説明しておこう。

『エア・シールド』は文字通りに空気で出来た盾だ。
任意の空間に空気の層のようなものを形成し、その空気の層で攻撃を受け止めるというものだ。

この空気の層は体に全く接していないので完全に攻撃を防いだ場合は衝撃などもまったくない。

ただ『エア・シールド』の防御を上回ると空気の層が押されて、押された方向に術者がいた場合などは術者自身が押されたり、衝撃が伝わったりする。

そして、攻撃が『エア・シールド』の防御を遥かに上回る時は・・・。

カリンさんが放った『エア・ハンマー』が俺の『エア・シールド』に接した。
次の瞬間、

俺の『エア・シールド』は瞬く間に貫通され、俺は『エア・ハンマー』によって後ろに吹っ飛ばされた。

攻撃が『エア・シールド』の防御を遥かに上回っているときはシールドがその場で破壊もしくは貫通され、威力がほとんど落ちないまま術者を直撃する。

そう、例えるならばスパロボでＡＴフィールドが４０００以上の攻撃で無効になるように。

俺は５メイル位後ろに吹っ飛ばされ、ごろごろ転がった。

「あら？・・・ちょっと強すぎたかしら？弱くしたつもりだったのですけど・・・。」

カリンもドットランクの『エア・シールド』に自分の魔法を試したことが無かったのでこの結果に少し驚いた。

（・・・やっぱり、嫌な予感が当たったよ。）

「いてて・・・。まさか全く機能しないとは・・・。」

同じ練習場で魔法の練習をしていたキュルケとルイズ、そしてリハビリの為に運動を始めたカトレアさん達がこちらに駆け寄ってきた。

「お義兄様！大丈夫ですか！？」

「ああ、大丈夫、だと思う。」

「でもダーリン、あんなにきれいに飛ばされるなんてなんの訓練を

してたの？」

「ああ、『エア・シールド』の訓練を、ね。」

「あらあら、シールドの練習ですか？それにしては全く防げていなかったようですけど？」

「ええ、まあ・・・その通りです。」

カトレアさんのリハビリに同行していたカミーユさんが診察してくれて、体には擦り傷以外の怪我がないようなのでキュルケとルイズは魔法の訓練に戻っていった。

カトレアさんとカミーユさんにはまた俺が吹っ飛ばされた時の為に近くでリハビリをしてもらうことになった。

「それにしても私の攻撃が全く防げないとは・・・困りましたわね。」

「そうですね・・・。ドットクラスではスクウェアの攻撃は防げないようですね。」

「他のものに攻撃役を変わってもいいのですが、それでも私との模擬戦ではシールドは使えないことに変わりありませんからね・・・。」

「・・・シールドの強度を上げる方法とかはないのですか？」

「そうですわね・・・。基本はメイジのランクが上がれば強度はそれ応じて上がっていくのですけど。シールドを幾重にも重ねるのは

1人では無理ですからね・・・。」

（同じ魔法は同時使用できないからな・・・。）

「そうですか・・・。」

「ミス・リッシュにも意見を求めてみましょう。ミス・リッシュ！ちょっといいかしら？」

カリンさんが近くでカトレアさんのリハビリに付き合っているカミーユさんに声をかけた。

「は、はい！カトレア様、少し休憩を取っていて下さい。」

「はい。分かりました。」

カトレアさんは木の影に移動し、カミーユさんがこちらにやってきた。

「カリーヌ様、どうなさいました？」

「今ね、ヴァルムロートとシールドの強化について話していたのだけど、使用者のランクアップと複数人による重ねがけ以外になにか方法はないかしら？」

「その2つ以外の方法でシールドの強化方法ですか？そうですね・・・。これは『ウォーター・シールド』の話ですがシールドに使用する水が多いほどシールドとしての壁を厚くしたり、水を圧縮して壁の質を上げることで強度を上げることが出来ます。」

「『ウォーター・シールド』にはそういう方法があるのね・・・。

でも、『エア・シールド』にその方法を応用するにはドットクラスでは難しいかもしれませんわね。」

「はい。僕も今のランクで空気の圧縮とかはちょっと無理があると思います。」

「そうですか・・・。」

「ご苦労でした。カトレアのリハビリに戻って結構ですよ。」

「お役に立てなくて申し訳ありません。」

「いえ、そんなことはないですよ。貴重なご意見ありがとうございます。」

カミーユさんがカトレアさんのところに戻った後、俺とカリンさんは腕を組んで考え込んだ。

うーん・・・シールドの強化か。どうしたものか。

でも今のランクではシールドを強化するにもあと一手足りない感じだし・・・。

むしろ今の状態で考え方を変えた方がいいのかも・・・。

よし、ここは俺が知っているバリアを参考にしよう。

バリアといえば“光子力バリア”・・・はダメだな。パリーンって割れちゃうし。

さっきも考えたけどＡＴフィールドは心の壁だからな。参考にはならないか・・・。

ファンタジーな世界観のオーラバトラーの“オーラシールド”は・・・あれは常に発動しているようなものだからな・・・。そこにある力場みたいなものだし。

ナデシコの“ディストーション・フィールド”・・・も、そこにある力場か。

スパロボの“念動フィールド”は・・・あれは超能力を強化して作った壁みたいなものだからな。俺は今は魔法使えるけどそれ以外は普通の人間だしな。

同じくスパロボの“グラビティ・ウォール”は・・・お、これっていけそうじゃね？

「師匠！思いつきました！」

「そうなんですか？どんなものか話してみなさい。」

「はい！今の『エア・シールド』はただの空気の壁ですが、これに下向きの空気の流れを作れば今の僕のランクでも少しは強化出来ると思います！」

「・・・下方向に、ですか。それには少し問題があるように思えますけど。」

「そうですか？」

「そうですね。ものは試しです。ちょっとやって見なさい。」

「はい！」

俺は『エア・シールド』に下向きに空気が高速で流れているいるイメージした。

俺の前には『エア・シールド』の下向きの力により、砂埃が立っていた。

「では、行きますよ！」

そういってカリンさんは『エア・ハンマー』を放った。

カリンさんの放った『エア・ハンマー』は俺には直撃しなかった。

『エア・ハンマー』は『グラビティ・ウォール（仮）』を貫通しつつ、下向きの力により俺の足下の地面に当たり、地面が爆ぜた。

その衝撃により俺は再び吹き飛ばされ、直撃したときよりも少ない距離を飛んで地面に転がった。

俺は再び駆け寄ってきた皆に心配されながら、今度も軽い傷程度で済んだのでカミーユさんに治療してもらった。

「はあ・・・。これは失敗でしたね。」

「そうですね。下方向に力を入れたのではさっきのように魔法が地面に当たって、間接的な攻撃を受けたり、対象よりも上から攻撃し

た場合直撃する可能性もありますわよ。」

「下方向以外だったら・・・直撃する可能性は消えないですね。」

「しかし、弱くしたとはいえ先ほどは直撃した私の攻撃が今度は直撃しなかったところを考えると方向性は良かったのかもしれませんね。」

「方向性はいい、ですか。・・・攻撃を防ぐから直撃を避ける・・・ん?」

(・・・なんかどっかで見た?聞いた?ことがあるな?どこだっけ?)

俺は自分の記憶を探ってみた。

そして俺はもっとも俺がオリジナル魔法を考えるときの基礎となる存在を忘れていたことに気が付いた。

「・・・あ!」

「どうしました?また何か思いつきましたか?」

「ちょ、ちょっと待ってください!」

(どうして忘れていたんだよ!俺!こんなに今の俺の状況にピッタリな設定を!)

俺が思い出したのはクロスボーンガンダムX3だ。

ここでクロスボーンガンダムのコンセプトを簡単に説明すると、Ｆ９１の時代から普及し始めた“ビームシールド”により遠距離からでは有効な攻撃が行い辛くなったので、だったら接近して“ビームシールド”ごと相手を切るだ。

もちろんそんな強力な盾である“ビームシールド”をクロスボーンガンダムＸ１とＸ２は装備しているが、Ｘ３には装備されていない。Ｘ３には“ビームシールド”が装備されない代わりに“Ｉフィールド”が装備されていた。

“ビームシールド”は普通のＭＳの手持ち武器では破れないほど強力だが、一部のより強力なビーム兵器（ヴェスバーなど）や戦艦の攻撃には抵抗できず貫通し、機体が大破してしまう。

“Ｉフィールド”は“ビームシールド”のように攻撃を無効化は出来ないが、“ビームシールド”を貫くようなビームでさえも湾曲させて機体への直撃を防ぐというものだ。

つまり何が言いたいかというと、ある程度の攻撃を無効化し、一定以上の攻撃は貫通したりする『エア・シールド』が“ビームシールド”であり、俺がこれから目指すのが魔法版の“Ｉフィールド”であるということだ！

まあ、さっきの『グラビティ・ウォール（仮）』の方向をちょっと変更するだけなんだけどね。

「師匠！思いつきました！今度は大丈夫だと思います！」

「なんだか自信があるようですね。では聞かせてもらいましょうか。」

「はい！先ほどは1方向の空気の流れでしたがそれを2方向以上、とはいえ今は2方向で精一杯でしょうが、作ることで直撃する危険が大幅に減ると思います！」

「なるほど。まあ、妥当なところですね。早速試してみますか？」

「はい！お願いします！」

俺は前方に中央から左右に空気が流れるような半球状のシールドをイメージした。

カリンさんが少し離れて『エア・ハンマー』を放った。

放たれた『エア・ハンマー』は『I・フィールド（仮）』に接すると右方向に俺の服をかすめながら過ぎ去っていった。

「あら？今度はうまくいったのかしら？でも今のは左にそれたから少し右に撃ってもいけるでしょうね？」

カリンさんは次に放った『エア・ハンマー』は俺の左側をかすめていった。

「・・・出来た。でも、ぎりぎりだったな。」

「今度は上手くいったようですね。しかし空気の流れを1方向から2方向にしただけにしては先程よりも『エア・ハンマー』が曲がっていたように思えますけど？」

「はい。それは先程のものは平坦な壁でイメージしていたのですが今度は半球状でイメージしたためと思われます。」

「その違いでどう変わったというのですか？」

「平坦な壁だけでは通り過ぎるときにしか効果がありませんが、半球状にすることで通り過ぎても壁に接することが出来るのでより効果が高くなります。・・・ただ『エア・ハンマー』のように大きいものには効果が高いですが、小さいものや貫通力が高いものには今のランクのままではあまり変わらないですけど。」

「それなら問題ありませんね。」

「え？」

「これからもっとバシバシ扱くのですぐにランクが上がりますわ！」

「・・・お、お手柔らかに、お願いします。」

防御魔法はこの『Ｉ・フィールド』でいいだろう。

これなら水で使っても応用可能だしな。

「・・・でも『Ｉ・フィールド』ってＸ３やニューみたいなその都度発動させるタイプの方が少なくて、大抵は常に発動してるタイプなんだよな。魔法でそれをすると魔力がいくらあっても足りないよ

な・・・。それが出来れば暗殺には最適な防具になるのに・・・またマジックアイテム、作ってもらうか？今度も何か要求されるのかな？」

「作ってあげてもいいわよ？」

次の虚無の曜日になり、帰ってきたエレオノールさんに修正したレポートを出しに行った時にちょっとお願いしてみた。

「本当ですか！」

「ええ、その代わり・・・。」

（あ、やっぱりなんか要求されるのか。）

「な、何ですか？今度は何をすれば？」

「別に何もしなくてもいいわよ。ただ作ったマジックアイテムを私やカトレア達に渡すけどいいわよね。」

「ええ、それはいいですけど。本当に何もしなくてもいいのですか？」

「・・・あなたが提案した『Ｉ・フィールド』を発生するマジックアイテム『ＩＦＧ（Ｉ・フィールドジェネレータ）』はいつどこから攻撃されるか分からない暗殺には最適なアイテムになるでしょう。そしてあなたが狙われるなら近くにいるカトレア達も巻き添えを受けるかもしれないでしょう？私だって家族が守れるならそれに越し

たことはないと考えていますからね。あ！そこまでいうなら手伝ってもらいましょうか。」

「分かりました。それで何を手伝うのですか？」

「簡単ですよ。私が『ＩＦＧ』を作ってあげるのであなたがそれを使ってみてその使ってみた感想や改善点などを私に教えてくれればいいの。」

（モニターになれってことか、それなら問題ないな。）

「分かりました。」

「あ、あなたなら改善するための対応策を考えられるでしょう？それもして頂戴。」

「は、はい。分かりました。」

「よろしい。では試作品を作ったら送るわね。ちなみにどんな形がいいとか要望はあるかしら？」

「いえ、無いですね。エレオノールさんにお任せします。」

「そう・・・。分かったわ。任せておきなさい！」

エレオノールさんに頼んでから５日後、小包が送られてきた。

中にはネックレス型の『ＩＦＧ』の試作品と手紙が２通、それと多

くの小さな“風石”が入っていた。

1通は『ＩＦＧ』の取扱説明書でもう1通は今度の虚無の曜日は帰れないので試作品の『ＩＦＧ』を使ってみてその感想や改善点を返信して欲しいと書いてあった。

早速取説を読むと、

・『ＩＦＧ』の『ディテクトマジック』は半径約3メイルで常に発動

・魔法、弓や銃の弾などその攻撃の種類に関わらず、この範囲に一定以上の速さを持って侵入すると『Ｉ・フィールド』が発動

・『Ｉ・フィールド』自体はラインクラスの威力で空気の流れも攻撃に対し上と左右の3方向で発動

・可動媒体には“風石”を使用

・効果時間は『ディテクトマジック』だけなら1ヶ月位だが、1度でも『Ｉ・フィールド』が発動した場合は“風石”の交換が必要

と、書いてあった。

「・・・試作品でこの出来か。すごいな。早速使って感想を書いて送ろう！」

魔法の訓練の時にカリンさんと一緒に『ＩＦＧ』の性能実験を行った。

まず実験では俺が身に付けてもいいが、いろいろ試したいので地面

に立てたカカシのような的に『ＩＦＧ』を付けた。

その結果、

「恐らく、このくらいが普通のスクウェアの威力でしょう。」

とカリンさんが言った『エア・ハンマー』（この間よりはかなり威力が高い）でも、直撃は避けることが出来ていた。

・・・カカシの手は折れたが。

次により貫通力が高い『エア・カッター』でも直撃だけは避けれていたが、的の中心から５０サントより外側は見るも無残な感じだった。

頭や胴体は守れけど腕とかは切られるね。

後は弓と銃なんだけど、ヴァリエール家には銃が置いてなかったので弓だけで試した。

弓の場合は完全に防ぐことが出来た。

この結果からこの世界の銃位なら防ぐことが出来ると考えられる。

次に効果範囲の３メイル以内から攻撃してもらったところ、魔法ではやはり距離が近いせいか先程よりは効果が薄かったが、弓ではもともと普通の『エア・シールド』で防げるだけあってこの近さでも完全に防いでいた。

さらに近づいて斬りかかってみた。

まず普通に俺が斬艦刀で上段から斬りかかったところ、ちゃんと発動してカカシの頭を狙ったのが逸れて、カカシの腕を切ることとなった。

次にカリンさんに『エア・ニードル』で心臓付近をめがけて突いてもらうと、それも逸れて脇をかすった。

一定以上の速さで発動するのでゆっくり刺してみると、発動せずに刺さった。

で、調べたところ、どうやら人が走ってタックルしてくる位のスピードで発動することが分かった。

次にカリンさんと2人で攻撃したところはじめの攻撃は防げるが続けざまの2回目の攻撃には“風石”の力がなくなったらしく、そのまま当たった。

まあ、これは取説にも書いてあったし、初撃さえ防げればあとは自分で警戒出来るから問題ないだろう。

・・・多分。

大体試したいことが終わったので、“風石”を付け直して1日そのままで生活してみることにした。

そして早速訓練中に問題が発覚した。

今日の訓練は風の魔法だったのだが・・・。

なんと！

『ＩＦＧ』を付けたまま俺が魔法を使おうと魔法を発動させた時、『Ｉ・フィールド』が発動して魔法をかき消した！

いきなりの事だったので俺は困惑し、カリンさんも驚いていた。

“風石”を付け直して再度行なっても、同じ事が起こったので“風石”は付けずにそのまま訓練を続けた。

このことはエレオノールさんに対応策を考えて、報告しておかないとな。

さらに普通の生活の中でも問題が起きた。

まず駆け寄ってきたルイズを吹き飛ばした。

なんとか『レビテーション』を使って、ルイズに怪我は無かったがルイズにちょっと怒られた。

また廊下を歩いているとなにか慌てたメイドさんが走って横を通り過ぎようとした時に発動し、転ばすところだった。

転びそうになったメイドさんは青い顔をして何度も謝っていたので、こちらにも非があったことを伝えたが聞こえてないくらいに謝っていた。

そこでもう廊下を走らないように注意するとメイドさんはようやく謝るのを止めて、歩いて行った。

あと、俺が走っていて誰かを通り過ぎても発動した。

どうやら『ＩＦＧ』の一定の速度とは絶対的な速度ではなく相対的な速度だったようだ。

これは厄介だな。

うーん・・・人が走るくらいの速度で反応するのは困りものかもしれないな、エレオノールさんに報告して、改善してもらおう。

そして試作品を使った感想や改善点とその対応を書いて、翌日試作品と共にエレオノールさんに送った。

そんな手紙のやり取りを2回繰り返した。

そして改善された『ＩＦＧ』が完成した。

初期のものからの変更点は、

・『ディテクトマジック』により外側から内側に向かってくるものに対して反応し『Ｉ・フィールド』が発生し、内側から外側に向いているときは無反応

・認識速度の設定を変更し、走る程度の速さでは無反応

・さらに『ディテクトマジック』の効果範囲に入っていても横を通過するようなものには無反応

と、追加された機能はないがより使い易くなったはずだ。

これで不意打ちされてもなんとかなるだろう。

完成版の『ＩＦＧ』は俺のと予備、その他に3つ入っていたのでキュルケとカトレアさん、ルイズに渡しておこう。

「あら？私にくれるの？ありがとう！ダーリン！」

「ありがとうございます。あら？中の石は風石ですか？」

「え！？私にもくれるのですか？ありがとうございます！お義兄様！」

3人に『ＩＦＧ』を渡した。

『ＩＦＧ』の見た目は中に青い石の入ったペンダントの形をしていて、デザインの普通のペンダントとそう変わらない。

「・・・でも、突然プレゼントなんてどうしたの？ダーリン？それにカトレアさんとルイズに渡したネックレスも同じものみたいなんだけど？」

「いいじゃない、キュルケ！折角お義兄様が下さるのだから！」

いきなりプレゼントをした俺にキュルケが疑問を投げかけてきたが、

ルイズがそれに食って掛かった。

「こらこら、ルイズ。」

そんなルイズをカトレアさんが軽く注意している。

「別に文句をつけてるわけじゃないんだけど。」

「確かにキュルケが疑問に思うのも仕方ないと思うよ。3人にあげたペンダントはただのペンダントじゃなくてマジックアイテムなんだよ。」

そうして俺は『ＩＦＧ』の性能とどうして3人にそれを渡したのかを簡単に説明した。

「そうだったの。ありがとう、ダーリン！」

「いや、皆にこれを渡すのを思いついたのはエレオノールさんなんだけどね。」

「・・・エレオノール姉様が、ですか。」

ルイズはなにか複雑な表情をしている。

ルイズはエレオノールさんに苦手意識持ってるようなので、自分を心配してくれてるのが信じられないのかな？

「それでヴァルムロートさん。このペンダントをいつも身に着けておいた方がいいのかしら？」

「そうですね・・・。家にいるときはいいですけど、外出する時などは付けておいた方がいいかもしれません。まあ、暗殺で狙われているのは僕なのでカトレアさんを狙ってくることはないと思いたいですけど。」

「そうですか、分かりました。」

「お願いします。キュルケとルイズもそういうことで頼むな。」

「分かったわ！」
「はい！」

夜ヴァルエール家の宛がわれた自室で『ＩＦＧ』を眺めていた。

「ふう・・・。これで暗殺確率はかなり減ったよな。でも最初の１撃しか防げないからな返り討ちにしようと思ったら結局俺自身がもっと強くなるしかないよな。・・・頑張ろう！」

俺は明日からの訓練をもっと頑張ろうと思って、眠りについた。

一定以下完全防御系よりダメージ減少系のバリアの方がめんどくさい（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

灯台下暗しを大げさにやっちゃいましたね。

しかし意外と重要なところでは忘れることが多いですよね、基本って。

『Ｉ・フィールドジェネレータ』略して『ＩＦＧ』ですが、ぶっちゃけＩ・フィールドも力場なんですけどね。

ただＸ３は手の平に発生装置があるので手をかざしてＩ・フィールドを発生させるのがなんか・・・カッコイイ！

Ｉ・フィールドにはそもそもビームを湾曲させる性質があるので別に表面を何かが流れているわけではないのですが、アニメや漫画の表現としてビームが半球状の力場の上を滑っていくように見えるので、魔法でやると表面の空気が流れていくということを思いつきました。

今回『グラビティ・ウォール（仮）』は上手くいきませんでしたが、今後仕様を改善して出てきます。

次は訓練によりランクアップしたことで新たに魔法を習得させます。

ご意見・ご感想があればよければ書いてみてください。

対複数用魔法（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回はオリジナル魔法開発の話です。２つ出すのでどんなものが出るか考えてみてください。

・・・まあ、すぐに分かると思いますけど。

対複数用魔法

俺がヴァリエール家で魔法の訓練を始めてから半年ほど経った。

模擬戦を含めた訓練のお陰で俺は水と風のランクアップし、それぞれトライアングルとラインになった。

ランクアップしたことで加えることの出来るスペルの数が増えたのでカリンさんに新しい魔法を教えてもらった。

覚えた風の魔法の中には一度に複数の相手に効果があるものがあった。

「・・・俺ってほとんど単体攻撃しか出来なかったよな。」

これは俺が火のメイジなのと関係が深く、火の系統魔法は威力は高いが単体もしくは複数攻撃しか持たないのがほとんどだ。

他の系統では土は『ゴーレム生成』で複数を相手に出来るし、水は大量の水が必要だけどあれば可能だし、風は空気操ってるから全体攻撃はお手の物だし『ユビキタス』というチートがあるからな・・・。

「全体攻撃か・・・。」

全体攻撃・・・スパロボ的にはＭＡＰ兵器か。

・・・ん!?

ＭＡＰ兵器というところである機体が脳裏に浮かんだ。

「これはいけるかも！・・・いやいや、これではただの『ウインド・ブレイク』だな。・・・あ、そうだ！あれを使えば・・・。」

次の日は水の魔法の訓練だった。

水の魔法はカリンさんもいるが主にカミーユさんに教わっている。

餅は餅屋ということらしい。

「ヴァルムロートさん、水系統がトライアングルランクになったそうですね。おめでとうございます。では今日からは新しい魔法を教えていくことにしますね。」

という訳で新しい水の魔法を教えてもらった。

水の魔法はランクが上がることに氷系の魔法が増えていっているようだった。

やっぱり水より氷の方が攻撃力が高そうだからか？

カミーユさんに聞いたところ水の状態のままで威力が高い魔法は無いようだ。

「氷の方が威力が高いか・・・果たしてそうだろうか？」

確かに普通に人やオーク鬼、幻獣などを相手にするねら水より氷の方が威力は高いだろう。

だけど氷では金属を貫くのは難しい。

しかし、圧縮した水ならそれが可能だ。

氷は一定の威力だけど、水なら威力をある程度自由に変えることが出来ると思う。

・・・ん？

威力を自由に変えられる？

・・・はっ！

「これは・・・いままでは別々でしか出来なかったけど、同時に出来るのか？・・・まずは腰のところに集めて・・・圧縮の具合を・・・。」

そして虚無の曜日になった。

ちなみに昨日の模擬戦は風系統縛りだったので、防御するのが精一杯だった。

『トランザム』だけは特別に縛りには加えないでもらった。
これがないとカリンさんとの実力の差が開き過ぎて話にならんからな。

で、俺は1人で特別練習場にやってきた。
どうして普通の方に行かなかったかというと、ここは四方を壁に囲まれているのでこっそり練習するにはもってこいの場所だからだ。
それに壁に魔法がかかっててちょっとやそっとじゃ壊れないからな。
そして俺はとりあえず方法だけは考えたオリジナル魔法の練習と実際に行なってみて、そこから改善するところを探すことを行うつもりだ。
的には俺は『錬金』が使えないので近くの森から岩や折れた木などを『レビテーション』を使って運び込んだ。

「よし！じゃあ、やるぞ！」

俺がオリジナル魔法を練習し始めてから、2週間経ったある日。

「ヴァルムロート、あなた1人で新しい魔法を考えているのではなくて？」

魔法の訓練中にカリンさんがいきなりそう言った。

「え!?・・・どうしてそう思うのですか?」

確かにここ2週間はオリジナル魔法のことを考えていたけど、それでも普段の訓練の時には真面目に取り組んでいたから変わらないはずなのにどうして分かったんだろう?

「キュルケさんがね、この前の虚無の曜日とその前の虚無の曜日にあなたの付き合いが悪くなったからまた1人で何かをやっているんだろうと言っていましたよ。そしてそういう時はその後に新しい魔法を使用していることも聞きました。」

「キュルケからですか。」

キュルケ・・・俺のことよく見てるんだな。

しかし付き合い悪くなってたのか・・・今度から気をつけよう。

あ、次の虚無の曜日は街に行って何か美味しいものでもご馳走しよう。

「それでどうなのですか?何か考えているのかしら?」

「はい。まだ練習中なのですが・・・・。」

「そうですか。では今度から1人で休日に練習するのではなく魔法の訓練の時に多少時間をさくのでその時に行いなさい。他人に見てもらったほうが自分では気づかない欠点などが分かるかもしれませんよ。」

「わ、分かりました！」

「それでどの系統の魔法について考えたのかしら？」

「今回は風と水の２つ魔法を思いついたのでそれを練習していました。」

「ほう。２つですか。水もあるならミス・リッシュも呼んでこさせましょう。」

カミーユさんは現在ルイズ達と魔法の練習を少しずつ始めたカトレアさんに魔法を教えつつと体の様子を常に観察している。

「どうかなさいましたか？」

ということでカミーユさんがやって来ました。

「何かあったのかしら？」

「どうしたのですか！？お義兄様！」

「あらあら？ヴァルムロートさん、また何かしたのかしら？」

と、キュルケ達もついてきた。

って、カトレアさんまたって俺前に何かしましたか？

「ヴァルムロートが新しい魔法を考えていたらしいのでそれを見せてもらうのですよ。」

カリンさんが皆に簡単に説明した。

「あ！ダーリンってばやっぱりこそこそ何かやってたのね！」

「それでヴァルムロートさんはどんな魔法を考えたのかしら？」

キュルケがやっぱりね！みたいな顔をして、カトレアさんは興味津々といった感じで聞いてきた。

「では、まずは風の魔法から行いますね。皆は何か意見があったら遠慮なく言って下さい。」

そしてカミーユさんに『錬金』で俺の周りに胸位の高さで一番上が広がったテーブルのようなものを幾つか作ってもらい、その台の上に石と木の枝をそれぞれ複数個置いた。

「ねえダーリン、今置いた石と枝はなんなの？」

「これ？これは攻撃する的だよ。ただし攻撃するのは石だけだけどね。」

キュルケはふーんと少し納得いかないような返事をした。

そして俺は皆に少し離れてもらった。

「ではいきますよ！いいですか？」

「ええ。いつでもいいわよ！」

俺が準備が出来たことを言うとカリンさんがそう答えた。

俺は少し集中して、そしてスペルを唱え始めた。

スペルを唱え終わり魔法を発動すると、俺の周りに風が発生した。

そして周りに作ってもらった台の上から石が全て落ちて、木の枝はほとんどが台の上に残っていた。

「どうでした？名前は『サイフラッシュ』とつけようと思います。まあ、まだ未完成なのですが・・・。」

カリンさんは台の上に残った枝と下に落ちた石を見ながら、

「一見見たところただの『ウインド・ブレイク』に見えましたが、台の上に枝が残っているのは失敗・・・ではなくわざとですか？」

と言った。

キュルケ達は実は石より枝の方が重いので残ったのではないか？と実際に手に取ってやはり枝の方が軽いことを確認していた。

「はい。枝が残っているのはわざとしています。なぜならこの魔法の一番のポイントがこの“攻撃対象の選択”ですから。」

「お義兄様！攻撃対象の選択なんてどうしてそのようなことを？こう言っては失礼かもしれませんが、それは面倒ではありませんか？普通に魔法を使った方が楽なのではありませんか？」

「ルイズの言う通りじゃない？どうしてなの？」

ルイズの疑問にキュルケも同意している。

「確かに普通に魔法を使った方が簡単だし単純に威力も上がる。でも乱戦のように敵味方が入り乱れている時はそう簡単に魔法はつかえないだろう？」

（それに暗殺で街中でしかれられた時に周りに平民がいる状態じゃ、そうそう魔法も使えないと思うし。）

「そうですね・・・。そんな状態で魔法を使ったりしたら味方ごと攻撃してしまうかもしれませんね。」

「そう！そこで使えるのが今回僕が考えたこの“攻撃対象の選択”を行った『サイフラッシュ』なんだ！・・・といっても『ディテクトマジック』で攻撃対象と非攻撃対象とに自動判別して後は非攻撃対象に魔法が届く前にそこだけ避けたりするだけなんだけどね。」

「コモンスペルを使ったらこんなことが出来るのですね。」

ルイズは素直に感心しているようだ。

「『ディテクトマジック』のこの機能を使えばどの魔法でも“攻撃対象の選択”は可能になるはずです。・・・理論的には。」

「それって私でも“攻撃対象の選択”が出来るということ！？」

キュルケが少し興奮したように聞いてきた。

「ああ。出来るはずだ・・・理論的には、ね。」

そう！この『ディテクトマジック』で判別した後にその部分だけ避けたり、魔法を一部解除したりすればどの魔法でも可能のはず！

・・・なんだけど、風は割りと上手く行くんだけど他の系統が上手くいかないんだよね。

あれかな？避けると部分解除の違いかな？

風はその威力の割に自由に進行方向を変更出来るんだけど、水は風よりも質量があるせいか上手く避けられないし・・・まあこれは要練習だな。

火は避けても余波の熱風とかであまり避けたことになってないし、そもそも部分解除は俺があまり上手くないしな。

練習したら少しは上達するんだろうけど・・・部分解除は昔から一応練習しているんだけど、なかなか上達しないんだよな。

だから今は風で練習しているところだ。

カリンさんは落ちた枝を拾いながら、

「しかし“攻撃対象の選択”もまだ完全ではないようですね。ここがまだ未完成という理由かしら？」

「その通りです、師匠。まずはこの石と枝という異なる2つのものの選択を完璧にしてから、さらに選択するものを増やすつもりです。」

「そうですか。では今度からは風系統の訓練の最後の方に時間をとって行うことにしましょう。風魔法の動かし方なら指導出来るでしょうから。」

「分かりました！お願いします！」

「あの、それで私はどうして呼ばれたのでしょうか？」

カミーユさんがおずおずと聞いてきた。

「ヴァルムロートが考えたのは風以外にも水も考えたらしいですから、あなたに意見を聞こうかと思って。」

「では次に水魔法の方を行いますね。カミーユさん、また『錬金』をお願いします。今度は金属の板を『錬金』して下さい。」

カミーユさんは分かりましたと言って、厚さ数サントの鉄の板を『錬金』した。

「では今からこの鉄の板を貫通させます。」

俺は先程とは異なるスペルを唱えた。

すると俺の腰の両側に水が集まり、圧縮され、最終的にハンドボールくらいの大きさになった。

そして右側の水の玉の一部、ほんの僅かな針の穴位のイメージで穴を作った・・・実際はもう少し大きな穴だったが。

するとそこから勢い良く水が出て、鉄板に向かっていった。
ガン！という音が鳴った後、水が鉄板を通り過ぎていた。
皆で鉄板に近づいて穴が開いていることを確認した。
「驚きました！まさか水で鉄に穴を開けることが出来るなんて！」
皆は水がこのように鉄に穴を開けることが出来ることに驚いていた。
「ヴァルムロートさん、この魔法はこれで終わりなのかしら？」
さすがカトレアさんはニュータイプ並に鋭いね。
「皆、もう一度攻撃するので鉄の板から離れて下さい。」
俺がそう注意すると皆鉄板から離れた。
そして今度は左側の数サントの大きさの穴を開けて、水を発射した。
するとガァァン！という大きな音と共に先程はびくともしなかった鉄板が吹き飛んでいった。
「・・・と、このように高い貫通力を持った攻撃と高い破壊力を持った攻撃を同時に操ることが出来る魔法です。名前は『ヴェスミー』とつける予定です。」
名前の元ネタはもちろん『ヴェスバー』で、ヴァリアブル・スピード・水鉄砲で圧縮の違いにより発射するときの水の速さを変えている。

今までも個別なら出来ていたが今回トライアングルになったことで同時に使うことに成功したんだ。

「さらにこんなことも出来ます！」

俺は左右の水の玉に穴を開けたり閉じたりを繰り返した。

すると小さな水の弾がまるでマシンガンのように発射された。

皆目の前を通り過ぎるたくさんの水の弾に言葉を無くしていた。

・・・あれ？やりすぎたかな？

「・・・なるほど。確かにすごい攻撃力を持っていますね。しかし右から貫通力の高いもの、左からは破壊力の高いものと撃ち分けているようですが、もし相手がそれに気づけば簡単に対策を取られてしまいますよ？」

そんなんだよね。

今はまだ左右で別々にしているけど、目指すところはどちらからでも撃つことが出来るようになることだ。

「はい。僕のそこがこの魔法の欠点だと考えているので、今後も練習して左右どちらからでも撃てるようにします！」

「それがいいでしょう。ミス・リッシュ、水の訓練の時にたまに指導をしなさい。」

「はい。分かりました。」

こうして俺のオリジナル魔法の開発は公に行うこととなった。

手伝ってくれるのはとても助かるのだけど、影で練習して本番でいきなり見せて驚かせることが出来なくなるのは残念だな。

「・・・ねえ、ヴァルムロートさん。どうして腰のところに水を集めるのですか？」

カトレアさんが不思議そうに聞いてきた。

当然といえば当然の質問なのだが、俺はその質問に目が泳いでしまった。

「え、あ、えーと・・・よ、様式美です。」

俺にはこれしか言えなかった。

対複数用魔法（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

という訳で、オリジナル魔法は『サイフラッシュ』とヴェスバーならぬ『ヴェスミー』でした。

これらの魔法は広範囲で複数攻撃が出来るのが最大のセールスポイントですがこの他に威力を抑えて非殺傷としても使える、というのがあります。

正直言ってオリジナル魔法第1弾の『ビームサーベル』は殺傷能力ありすぎなんですよね。それでうかつに対人では使えませんし。決闘や決闘もどきで使うなんてもってのほかですよ。

まあ、そんなわけでこの『サイフラッシュ』と『ヴェスミー』が今後『ビームサーベル』以上に活躍するかもしれませんね。

まだまだ修行続くよ～

あ、次は修行の間の話だった。

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてみてください。

湖の畔で（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は３つのショートストーリーみたいなものを書いてみました。

「ジェラート」「ルイズ」「フライ」の３本です。

「キュルケ、カトレアさん、ルイズ。明日の虚無の曜日はどこかお出かけしませんか？」

俺は夕食後の紅茶の時間にそう切り出した。

「いきなりね！？どうしたの？・・・あ！」

キュルケはいきなりで面食らった顔をしたが、すぐにニヤッと笑って、

「デートのお誘いね！・・・そうね。どこがいいかしら？」

「お、お義兄様！？私もですか！？」

ルイズはキュルケのデートという言葉を聞いて顔を赤くしている。

「ああ。あ、もしかして都合が悪かったかな？」

「いえ・・・悪くない、です。」

「あらあら、ルイズったら。でも本当にいきなりですね。なにかあったのですか？」

ルイズの様子を微笑ましく見ていたカトレアさんだったが俺の行動に疑問に思う所があったようだ。

「やっぱりいきなり過ぎました？ここ最近魔法開発で誘いを断って

いたじゃないですか。それでその穴埋めをしようと思いまして。」

俺はここ最近付き合いが悪かったことを反省してキュルケ達を誘うことを考えていたことを話した。

「なんだ、そういうことだったのね！別に気にすることないのに。・・・でも、嬉しいわ。」

「そ、そういうことだったのですね。そういうことは先に言って下さい。」

「そういうことなのね。でも、行きたい所・・・あ！あそこはどうかしら？」

カトレアさんがなにか思いついたように2人に同意を求めた。

「ちぃ姉様？どこのことですか？」

「ほら！あの甘くて冷たいお菓子を出すお店のことよ！」

「あのお店のことですね！確かにあのお菓子はいままで食べたことが無かったですし、なにより今の季節にちょうどいいものでしたね！」

女性陣がなにやら以前食べたお菓子の話で盛り上がろうとしていたが、俺にはなんの話か分からなかったのでキュルケに聞くことにした。

「キュルケ、前食べたお菓子って何？」

「なんでもガリアから入ってきたお菓子らしくて、暑い今の季節にぴったりの冷たくて甘いお菓子なの！」

今の季節は夏真っ盛りだ。

と、いってもいうほど熱くないし、なによりセミが鳴かないから夏って感じじゃないんだけどね。

「へえ、僕も食べたかったな。それでそのお菓子の名前はなんて言うの？」

「確か・・・ジェラート、だったかしら？」

（ジェラートってアイスのことか・・・そういえば・・・。）

「ジェラートか・・・それなら作れるかもな。」

俺は前世で子供のときに氷の実験のついでにアイスを作ったことを思い出して、つぶやいた。

「え！？それ本当！？」

「お義兄様！あのお菓子を作れるのですか！？」

「あのお菓子はうちでも出来るものなの？！」

俺のつぶやきは大きいものでは無かったが、３人は聞き逃さなかった。

「え！？か、簡単なものなら・・・出来ると思うけど？」

俺がそう言うと3人は顔を見合わせて、そして同時に頷いた。

「ダーリン！明日は街に行かなくてもいいわ！」

「だから、お義兄様！」

「明日は私達にそのお菓子を振舞ってほしいの！」

「「ね！いいでしょう？」」

「あ、ああ・・・それでいいのなら構わないけど、普通にお店で食べたほうがいいんじゃないの？そっちの方がちゃんとしていると思うし・・・。」

俺は3人の妙な気迫に押されながらも反論した。

「いいのいいの！」

「私はヴァルムロートさんが作ったものが食べてみたいわ。」

「そうですよ！お義兄様！」

しかし3人はそれでも俺が作るものが食べたいというので俺は、

（まあ、謝罪の意味もあるし・・・いいかな？）

「・・・そうか。じゃあ、明日のブランチに間に合うようにしよう。それでいいかな？」

「ええ。それでいいわ！」

「楽しみです！お義兄様！」

「頑張ってね！期待していますね！」

こうして明日の虚無の曜日は3人にアイスを振る舞うことになった。

そして虚無の曜日、

「お義兄様！起きて下さい！朝ですよ！」

なぜかヴァリエール家に来てからの日課となっているのだが、今日もルイズが起こしにやってきた。

「う、うーん・・・まだ日も出ていないじゃないか。もう少し寝させて・・・。」

俺はカーテンの隙間から空がまだ薄紫色なのを確認して、眠そうに答えた。

「ダメです！ジェラートを作って下さるのでしょう？でしたら早く起きて準備しないと！」

「準備は昨日内に終わらせているから、後は作るだけだから・・・もう少し寝させて。」

俺は昨日あの後すぐに厨房に行き、道具や材料があるかを確認した。

いきなり俺が来たせいでコック達はかなり恐縮していたようだった。

そして分量がうろ覚えだったことに気づいたのでいくつか試作品を作って、さらにそれ改良して・・・と一番いいものを作るのにコック達にも手伝ってもらったが結構時間がかかってしまった。

そのせいで少し寝不足なので本当ならもっと寝たいところなんだが、

「でも作るのにも時間がかかるでしょう?もう朝食を用意させているので早く起きて下さい!」

ルイズは聞く耳を持たずに俺の体を揺らしまくるので仕方なく起きることになった。

早めの朝食を食べて、俺は厨房に向かった。

ちなみに朝食の時にキュルケとカトレアさんが、というかルイズと俺しかいなかったので聞いてみると他の皆はまだ寝ているだろうということだった。

ルイズ・・・どれだけアイスを楽しみにしていたんだ。

コック達に挨拶をして、急遽用意してもらったエプロンを付けた。

「それでお義兄様、どうやって作るのですか?」

エプロンをつけたルイズが聞いてきた。

「付いてきたのか？まあ、いいか。準備するのは卵、ミルク、砂糖、生クリームと氷と塩だな。」

簡単なものだし材料はこんなところだろう。

俺は大きめのボールに魔法で作った氷と水を入れ、そこに塩を適量加えた。

「ねえお義兄様！どうして氷水に塩を入れるのですか？」

塩入の氷水を混ぜているとルイズがボールを覗き込みながら言った。

「ああ、これはこの氷水をさらに冷たくするためだよ。」

俺は卵を割って、白身と黄身に分け、それぞれ別のボールに入れた。

「どうして氷水に塩を入れるとさらに冷たくなるのですか？」

興味津々といった感じで氷水のボールを触ったり、氷水に指を入れたりしながらさらに聞いてきた。

（氷水に塩水を入れる理由は塩水にしたことによる凝固点降下や物体が個体から液体になるときに熱を吸収する為なんだけど・・・この原理はまだこの世界には解明されてないだろうから言ったらダメだろうし、どうするかな？）

「・・・なんでかな？たまたま塩を入れたら冷たくなったから使ってるだけで、どういう原理だろうね？まあ、経験則みたいなものだと思ってくれていいよ。」

以前から思っていたことだが魔法があるせいで科学や物理などの学問はまったくといってもいいほどなくて、せいぜい経験則はあるけど原理は知らないといった感じだ。

それにブリミル教があるせいで魔法以外で不思議なことを行うと異端者にされるみたいだからな、気を付けないと。

まあ、魔法を使って科学的な反応や物理法則を応用するのは全然問題ないのだけど。

「そうなのですか？」

ルイズは腑に落ちないような顔をしている。

（ごまかすのには無理があったかもしれないけど、しょうがないよね。正直に言っても分からないと思うし。）

「・・・そうなんだよ。はい、ルイズもここに来たなら手伝ってね。」

俺は話を変えるようにルイズに白身が入ったボールと泡だて器をルイズに渡した。

「・・・お義兄様、これは？」

「ルイズにはメレンゲを作ってもらおうと思って。まずは角が立つまで混ぜてね。」

「はい！」

ルイズが一生懸命白身をかき混ぜ始めたので、俺もメインとなる黄

身の方にミルク、砂糖を適量加えながら混ぜていった。
さらに塩入りとは別の氷水を用意し、別のボールに生クリームと砂糖を入れてかき混ぜ始めた。
「・・・（『レビテーション』）ぼそっ」
黄身の方はそんなに混ぜる必要が無いのでここらで止めておこう。
ルイズの方はどうやら砂糖を投入したようだ。
かしゃかしゃとボールと泡だて器がこすれる音とシャーという生クリームを混ぜる音だけが聞こえる。
「・・・ん!?あ!お義兄様魔法を使うなんてずるいですよ!」
俺が泡だて器を『レビテーション』で高速回転させているのがルイズにバレてしまった。
「あはは・・・。」
「・・・私も!」
「あ!ルイズやめろ!魔法は使うなよ!」
ルイズが杖を取り出そうとしていたので慌てて止めに入った。
「う・・・はい。」
俺がかなり本気で止めたのでルイズはしゅんっとしてしまった。

「ま、まあ、そのうち魔法も上手に使えるようになるよ。」
（虚無に覚醒すればコモンスペルくらいなら使えるようになったはずだし・・・。）
「・・・そうでしょうか？」
そうするうちにメレンゲと生クリームが出来たのでさっき作った黄身のものと加えた。
黄身だけのスタンダードなものとメレンゲと生クリームを入れた二種類に分けて、塩入りの氷水にボールを入れた。
「お義兄様、これからはどうするのですか？」
「ここからはただ混ぜるだけ。このアイスの元が冷えて固まるまでね。」
「アイス？ジェラートではないのですか？」
（アイスもジェラートも同じなんだけど、ややこしいな・・・。）
「ああ、そうだった・・・アイスじゃなくてジェラートだったね。間違えたよ。」
そしてアイスが固まるまでひたすらに混ぜた。
試作品を作った時は少しだったのですぐに固まったが今回は多いので固まるまでに時間がかかった。
「出来た。これで完成だ！」

「これが・・・でも、これ、前お店で食べたものと見た目が違うような？」

（そりゃ、店で出されるようなものと比べられても困るよな。）

「それはきっとお店だから手が込んでいたんだよ。これはごく簡単なものだしね。」

「そうですか？・・・それで、あの、お義兄様？試食してはいけませんか？」

ルイズが上目づかいでお願いしてきた。

（可愛いな・・・でも！）

「手伝ってくれたからいいよ！・・・と、言いたいところだけど。皆と食べるまで我慢してね。」

「ううん、分かりました・・・。」

しかし出来たのはいいが、まだブランチまで時間があったので魔法で氷の箱を作り、その中に布を被せてアイスの入ったボールを入れた。

「それでどこで食べようか？今日は天気もいいし、外がいいかな？」

「あ！それでしたら湖の畔がいいのではないでしょうか？水の近くは少し涼しいですし。」

「ああ、裏にある湖か。・・・いいね！そこにしよう！」

気温が上がり始めたそんな時間、俺はキュルケとカトレアさんを連れて湖の畔にやってきた。

ルイズは俺を手伝ってくれるようで先に行って準備をしてくれている。

４人でテーブルを囲い、朝に作ったアイスを出した。

「これが僕が作ったジェラートです。右側がスタンダードなもので左側が生クリームとメレンゲを加えたものです。さあ、召し上がって下さい！」

３人がアイスを食べ始めた。

ルイズに隠れて試食して味は問題ないと思うのだが、反応はどうだろう？

「あ！これはミルクを使ったジェラートなのね！冷たくて美味しいわ！」

反応は上々のようだ。

「この前食べたのは果物の酸味や甘味がありましたけど、これはミルクの濃厚な味わいと溶けるような食感がいいですね！」

前食べたのは果汁入りのアイスだったのかな？

「そうね。この前食べたのは冷えた果物の美味しさとシャリシャリ

した食感でとても惜しかったけど、このミルクを使った甘いジェラートもとても美味しいわね！」

・・・ん？シャリシャリした食感？

「え、えーと、1つ尋ねるのですがこの前食べたジェラートはどのようなものでしたか？」

「「「そう（です）ね・・・。」」」

3人の話を総合するとどうやらこの世界のジェラートはアイスではなく、シャーベットに近いものだということが分かった。

ちなみに俺が出したアイスのようなものはこれまで食べたことが無かったようだ。

3人はその後もアイスを何度もおかわりするくらいたくさん食べていた。

「ダーリンの作ったジェラート美味しかったわ！また作ってくれる？」

最後のアイスを食べ終わったキュルケが

「それはいいけど、ここのコックももう作り方知っているから頼んだら趣向を凝らしたものを出してもらえるかもよ？」

（餅は餅屋ということで食に関しては食べれればいいや的な考えの俺よりも1流のコックのほうが今後すごいものを出してくれると思う。）

「そうなの？じゃあ、今度何か頼んでみようかしら？」

「そうだ！ルイズも今回手伝ってくれたから今回出したものなら作れるはずだな。」

「そうなの？ルイズ？」

「は、はい。私はお義兄様の横でメレンゲをかき混ぜていただけですけど・・・。」

「でも作り方は見ていたのよね？今度、私に作り方を教えてね。」

「私がちぃ姉様に教える！？・・・は、はい！」

「あ！私にも教えてよね！」

女性陣の話が弾んできたのでメイドさんを呼んで、そのままお茶会になり昼まで過ごした。

それにしても同じ名前なのに俺の認識と異なるものがあるというのはやはりここは地球に似ていても別の世界ということなんだと改めて実感した。

まあ、魔法がある時点でいまさら何言ってんだ？って感じだけどね。

はぁ・・・まずいな、これからは名前を知っているようなものでも自分の目で確認しないとうかつなことは言えないな。

昼食を食べた後、俺はヴァリエール家の書庫にいた。

実家でもやっていたが本からなにかオリジナル魔法や既存のものを改良してさらに使い易く、より強力に出来ないかを考えるのが俺の趣味みたいなものになっていた。

そして今日も書庫を漁っていると、面白いものを見つけた。

『トリステイン釣り紀行』

まさかハルケギニアに釣りの本が存在するとは！

しかもその著者がなんと！ヴァリエール公爵！お義父さんである。

はじめのページに、公爵として貴族のパーティなどに招かれてトリステイン中を行き来するので、その旅の途中の気晴らしに釣りを始めた。と書いてあった。

釣りか・・・そういえばこの世界に来てからいままで魔法の訓練とかが忙しくて1度もしたことなかったな。

前世ではプラモ作りに並ぶ俺の趣味だったのにな。

俺は他の魔法やマジックアイテムの本と一緒にその本も借りていくことにした。

「今日は部屋じゃなくて外の木陰で読もうかな？」

書庫から部屋に帰る途中の廊下から湖の方を見ると、湖に1艘の船が浮かんでいた。

その船には顔は遠くて分からないがピンクの髪の人が乗っているのが確認出来た。

「あれは・・・ルイズか?そういえばアニメでルイズって落ち込むと湖に1人で行くという回想があったような?なにかあったのかな?」

本来ならそっとしておいたほうがいいのかもしれないが、気になったので俺はルイズのところに行ってみることにした。

湖の中ほどで漂っているボートにルイズは1人膝を抱えて座ってた。

「はぁ、またお父様に魔法で失敗したことを咎められちゃった・・・。どうして私は魔法を上手く扱えないのかしら?こんなに努力しているのに・・・。」

昼食が終わった後、ルイズはヴァリエール公爵に呼ばれ、そこでいまだに魔法が成功しないことについて話があった。

ルイズが10歳で杖と契約をかわしてから、もう4年経っていた。

その間ドットスペルどころか、その下位魔法であるコモンスペルさえも成功したことがなかった。

ルイズがスペルを唱えるといずれの魔法も例外なく爆発する始末だった。

はぁ、とルイズが何度目かのため息をつくと障害物は無いはずなのに影が刺した。

ルイズが顔を上げるとそこには『フライ』で飛んでいるヴァルムロートの姿があった。

「ルイズ、どうかしたのか？」

俺はそう言いながらボートに着地した。

「お義兄様・・・。私、お父様に魔法がいつまで経っても成功しないことにお叱りを受けたんです。それで・・・。」

ルイズはまた俯きながらそう言った。

「そうなのか。」

（あのお義父さんが叱ったのか・・・想像出来ないけど、ルイズがこれだけ落ち込んでいるから相当だったのか？）

俺は普段のお義父さんの、娘を目に入れても痛くない！みたいな態度しか見たことが無いのでルイズを叱る場面を想像出来なかった。

そして俺はその場面を見ていないので慰める言葉を出すことが出来ずにただ相槌を打つしか無かった。

「・・・どうして私は魔法が上手く出来ないのでしょうか？」

「そうだな・・・きっとそのうち出来るようになるんじゃないかな

？」

（ルイズは虚無だからな。虚無って覚醒しないとコモンスペルすら使えなかったんじゃなかったかな？）

俺は原作の知識でルイズがそのうち魔法がある程度使えるようになるのを知っていたので簡単にそう行ってしまった。

「っ！お義兄様までそんな気休めを言うなんて！皆そう！いつか、いつかって！でも、そう言われてもう４年ですよ！魔法の使えない貴族なんて貴族じゃないわ！」

ルイズが堰を切ったように大声をあげた。

（ルイズがアニメと違うこと言ってる！？アニメだと確か・・・。）

「ルイズ！？魔法が使えるから貴族じゃない、敵に後ろを見せない者が貴族なんだ！だろ？」

俺はルイズがルイズらしかなぬことを言ったので思わずうる覚えのセリフを言ってしまった。

「そんなの詭弁よ！公爵家の娘なのに魔法を上手く使えないなんて！スクウェアメイジのお義兄様には貴族なのに魔法が使えない私の気持ちなんて分からないのよ！お母様はお義兄様といるときはすごく楽しそうな顔をして、私にはそんな顔１回もしたこと無いのに！それに比べて私はお父様に少し魔法の練習を控えてみてはどうだって言われるし！このままでは私・・・お父様やお母様に見放されてしまします！ブリミル教の神様は信じれば救われるっていうけれど、こんなに信じて祈っているのに・・・神様なんてきっといないのよ！」

ルイズは今の自分の気持ちを全て吐き出すように取り乱すようにたてしまくった。

「ルイズ！」

俺は取り乱すルイズの肩に手を置いて、ルイズの声に負けないように大きめの声で名前を読んだ。

「あ・・・、お義兄様、今のは嘘です！神様がいないなんｔ」

「ルイズ！この世に神はいない！」

「え！？」

ルイズは俺がブリミル教を否定するようなことを言ったのでそのことについて咎められると思っていたようだが、次の俺の言葉にあっけに取られていた。

まあ、俺をこの世界に転生させた奴がいるけどあれは信じれば救ってくれるような存在じゃないと思うんだよね。

「ルイズ、もう一度言うよ。この世に神はいない。信じれば救ってくれるなんて“人間に都合のいい神様”なんていない、と僕は考えている。」

「お義兄様・・・。」

「でも人は皆自分の中に神を持っていると思うんだ。」

「え？え？どういうことですか？」

俺が神はいないとか、いるとか言っているのでルイズは少し混乱しているようだ。

「混乱させてごめんね。でも人には今を超える力、“可能性”っていう神を皆がもっていると思うんだ。」

「今を越える力・・・・可能性・・・。お義兄様！それって私にも！」

「ああ。もちろんあるよ！ただ今すぐはルイズの努力している結果は出ないだろうけど、後2、3年したらルイズ自身も驚くような形で現れるはずだよ！」

（・・・まあ、虚無という失われた系統だって知ったら驚くだろうな。）

「後2、3年ですか？まだまだ長いですけど、お義兄様！私頑張ります！」

「その意気だ！お義父さんにも今の意気込みを伝えよう！」

「はい！」

「良い返事だ。・・・あ！ルイズ、さっき言ったことは2人だけの秘密にして欲しい。ブリミル教の神がいないとか言ってることがバレたら異端審問にかけられちゃうしね。」

「あ！私も神様なんていない、と言ってしまいました！分かりました。このことは2人だけの秘密ですね！・・・でも、私の魔法の失敗を慰めてくれてお父様に一緒に話に行くのはワルド様のときと似

てます。あ！ワルド様は隣の領地の男爵で今は王宮の魔法衛士隊にいらっしゃるのでお義兄様はお会いしたことがないと思いますけど。」

「ワルド男爵かいつか会ってみたいな。・・・あ、そうだ。後これからの魔法の訓練だけど、ただがむしゃらにやるのではなくて何か目的を持って行う方がいいと思うよ。」

（ワルドか、会いたいような会いたくないような。そういえばもうレコンキスタに参加してるのかな？いまさら味方にするのは・・・無理だろうな。）

「目標ですか？」

「そう。今のルイズは魔法が失敗すると爆発が起きるだろう？」

「は、はい・・・。」

ルイズは俺の言葉に俯いてしまった。

「ああ、そのことでルイズを責めているわけではないんだ。だた爆発するにしてもその威力や効果範囲をある程度操作出来るようになった方がいいんじゃないかな？」

「あの失敗の時の爆発をコントロールするということですか？」

「そういうこと。もちろん魔法を失敗しないことに越したことはないのだけど、現に失敗して爆発は起きるわけだから、まずはその被害を抑えるようにしないとね。この前も大きな爆発をして服が焦げて、ちょっと火傷していただろう？」

「は、はい・・・。」

「もしかしたらお義父さんが魔法を控えるように言ったのはいつかルイズが失敗の時の爆発で大怪我することを心配したからじゃないかな?それだったら、爆発をコントロール出来るように努力して、私は爆発をコントロール出来るようになったのでこれからも魔法の練習を頑張りますって言えるだろう。」

「そ、そうですね。私頑張ってみます!頑張っていつかちゃんと魔法を使えるようになってみせます!」

ルイズはやる気に溢れていた。

さっきまでのボートで膝を抱えていたルイズはもういない。

「ああ。僕は応援しか出来ないかもしれないけど、頑張れ!」

「はい!・・・あ、お義兄様先程は私の気持ちなんて分からないといってごめんなさい。」

ルイズはさっき自分の言った言葉の中に俺を非難するようなことがあったと思ったようで、謝ってきた。

「ん?別に気にしてないからいいよ。それに人はニュートン、あ、相手の心は分からないからね。言葉にしてくれないと相手の考えていることなんて分からないよ。」

俺は慌てて言い直した。

「そうですね。それにしてもお義兄様、何か言いかけました?ニュ

ー？」

しかしルイズはしっかり聞いていたようで俺が言いかけたことを聞いてきた。

「あ、別に気にしないで関係ないことだから。」

（危ないな、ニュータイプって言いそうになっちゃったよ。ニュータイプなら言葉を交わさなくても相手を誤解なく分かり合えるんだけどね。・・・まあ、分かり合えても、納得出来るかどうかは別だからそれで戦争がなくなるわけじゃないんだけどね。）

「そうですか？そういうならこれ以上は聞かないことにします。」

ルイズは深くは追求しないようなので助かったと胸をほっとなでおろした。

「あ、そうだ。魔法の練習で失敗してもそれを悔やむことはない、むしろどんどん失敗したらいい。ただ認めて、同じ失敗をしないように次の糧にすればいい。それが子供の特権だよ。」

「むぅ！お義兄様！私もう子供じゃありませんよ！」

「ふふ、そう言っているうちは子供だよ。」

「うぅ・・・。」

「ごめん、ごめん。ルイズは立派なレディーだったね。」

「わ、分かればいいのですけど・・・納得行かないです。」

その後お義父さんの書斎に行き、今後ルイズが爆発をコントロール出来るようならその後も魔法の練習をいままで通りに行い、出来ない場合は練習時間を減らすという条件で了承してもらった。

「話は以上だな、2人とも下がりなさい。・・・ん!?ヴァルムロート、少しいいか?ルイズは行きなさい。・・・ルイズ、魔法の練習、頑張りなさい。」

ルイズの要件が終わったので、書斎から出ようとするとお義父さんに呼び止められた。

ルイズは嬉しそうに元気よく返事をして書斎から出ていった。

「お義父さん、どうしたのですか?やはりルイズのことで?」

「いや、ルイズのことはそこまで心配していない。ルイズは思い込んだら一直線な性格ではあるが頭がいいからな、今回のことで魔法のことも何か変わるだろう。」

「でしたらどうして?」

「う、うむ。お前のその手に持っている本のことが気になってな。」

俺は廊下でルイズを見つけてそこの窓から『フライ』で飛んでいったから本を部屋に戻す時間が無かったんだよね。

「これですか?魔法やマジックアイテムのことが書いてある本と後

は・・・この釣りの本ですか？」

俺は手に持っている本を一冊ずつ確認していき、最後もお義父さんが書いたであろう本を取った。

「そう、その本だよ！もしかしてヴァルムロートは釣りに興味があるのかい？」

「はい。釣りには興味ありますね。ただまだやったことは無いですが。」

（・・・この世界ではね。）

「そうか、そうか！興味があるか！」

「ええ。この本の著者がお義父さんと同名ですがやはりお義父さんが書かれたものなのですか？」

「如何にもその本は私が書いたものだ。それにしてもこんな近くに釣りに興味のある者がいたとは・・・。」

「トリステインでは釣りに興味のある者が少ないのですか？」

「そうなのだよ。貴族の間ではまだ釣りに興味を持っている者が少なく、平民は生活のために行なっているから私の趣向と違うからな。」

「生活のためではないとすると、趣味ということでしょうか？」

「そう！そうなのだよ！確かに釣りの目的は魚を釣ることだが、私はそれだけではないと思っている。釣りを通して自然を感じ、魚と

の戦いでスリルを味わい、そんな魚とその魚を育てた自然に感謝することなど言葉では言い表せないほどたくさんのことを感じたり、知ることが出来る最高の趣味だと思わないか！それを魚が気持ち悪くて触ることが出来ないとか水の近くは虫が多いから嫌だとか・・・。全くそんなことで釣りから遠ざかるなど信じられん！」

「そ、そうですね。」

（この人、かなりの釣りキチだったのか。まあ、俺も概ね同意するが・・・。）

「ヴァルムロートもそんな釣りを趣味にしてみようと思わないかい？釣りはいいぞ！一生ものだぞ！」

「そうですね。僕としても興味がありますから、道具があればやってみたいですね。」

（そういえばこの世界の釣りって何があるのかな？まだ本の内容を見てないから分かんないや。）

「そうか！その言葉を待っていたぞ！付いてきなさい！」

「は、はい。」

お義父さんは書斎の出入り口とは別の扉の方に歩いていった。

俺は以前からこの書斎の隣にはもう１つ部屋があるスペースがあるのに廊下側に扉や窓が全くないので不思議に思っていたのだが、それが今わかる時が来たようだ。

お義父さんが扉を開けて中に入り、俺もそれに続いた。

その部屋には窓が一切無いようで扉が閉まったら真っ暗だった。

俺は『ライト』を使い部屋を明るくすると、そこには大小様々な釣竿と多くの手のひら大の箱が机の上に置いてあった。

「どうだ！ヴァルムロートよ！このロッドの種類！数！すごいだろう！」

「ええ、すごいです・・・。」

俺も先程の話から釣りはまだ極少数の貴族しか趣味としていないようなにこれ程多くの竿があるとは思ってもいなかった。

さらにその竿をよく見ると糸を通す為のガイドがあることが分かった。

周りを見ると壁に設置された大きな棚にリールがあった。

リールといってもスピニングリールやベイトリールのように高性能のものではなく、フライ用のリールにとてもよく似ていた。

「お義父さんはどのような釣りをしているのですか？餌は川虫ですか？」

「ふふ。川虫など使わなくとも・・・そこの箱を開けてみなさい。」

お義父さんは机の上に置いてある箱を指さした。

俺はその中の１つを手に取り、開けてみた。

「これは・・・。」

「それは川虫などに似せて作られたフライというものだ。それがあれば生きた餌なぞ必要としないぞ！」

箱の中身は針に糸や動物の毛などを巻き付けたフライ、日本的に言えば毛バリだな、がキチンと整列して入っていた。

「私はそれを使って行う釣りをフライフィッシングと呼んでいる。」

「フライフィッシング、ですか。いいですね！」
（フライか・・・前世では道具は持っていたけど、ほとんどルアーが主流だったからな。）

「そうだろう！そこでだ、この度釣りを始めるヴァルムロートに私からのプレゼントだ！どれでも好きなものを選びなさい！」

「いいのですか！？」

「うむ！釣り仲間が増えるのに協力しないわけがないだろう！遠慮せずに選びなさい！」

「ありがとうございます！では・・・。」

そして俺はお義父さんのアドバイスを聞きながら1組のタックル（竿、リール、ライン、フライなどのつり道具のこと）を選んだ。

「選び終わったな？では次は実際に使ってみようじゃないか！」

「今からですか！？」

「そうだ！幸い家は裏に湖があるからな、練習にはもってこいだぞ。それに私が放流した魚もいるからな。」

「分かりました！行きましょう！」

お義父さんのハイテンションに釣られて、俺の釣りキチ魂に再び火が灯った。

俺とお義父さんは湖にやってきて、それぞれ準備をし始めた。

お義父さんに簡単に釣り方を教えてもらい、俺が知っているものとほぼ同じだったが、早速釣りを始めた。

フライフィッシングは飛ばすようの太いラインの重さで吹けば飛ぶような軽さのフライを遠くまで飛ばす釣り方をする。

その為竿を前後に動かしてラインが地面につかないようにしながら、どんどんラインを出していくという変わった方法でフライを飛ばす。

そういうわけで初心者では上手いようにラインを出せなかったり、ラインが地面についたりしてしまうが前世で経験のある俺には無用のことだ。

「む！ヴァルムロート、上手いじゃないか！これはうかうかしていられんぞ！」

そしてしばらくはお義父さんのいままで釣った魚の話などを聞きながら、釣りをした。

「お義父さんが一番良かった場所はどこですか？」

「一番良かったところか・・・。ラグドリアン湖がやはり魚の種類、大きさそして良い釣り場の多さで一番だろうな！」

「ラグドリアン湖、ですか。やはりハルケギニア１大きい湖は伊達ではないということですかね？」

「そうだな。しかし・・・最近は少し様子がおかしいと噂で聞いたな。」

「おかしいとは？」

「うむ。まだ詳しく調べられたわけでは無いのだが・・・どうやら水かさが徐々に増えているらしい。」

「そうなのですか？」

「ああ。原因はラグドリアン湖に住む水の精霊のせいだということらしいが、大方モモランシが無茶な開拓で精霊を怒らせたのだろう。釣り場が荒らされるから早く何とかして欲しいものだな！」

「そうですね、それは早く何とかして欲しいですね。」

（水の精霊が怒ってるってことはすでにあのなんとかって指輪は盗まれたってことかな？モンモンの家で何とかするのは無理だろうな。）

その後もトリステイン各地の釣り場の話をした。

夕方になって夕まずめ、別名爆釣タイム・・・上手くいけばだけど、

で俺とお義父さんは数匹ずつ釣り上げた。

釣った魚はその場でキャッチ・アンド・リリースした。それが紳士の嗜み？らしい。

メイドさんが夕食の準備が出来たと呼びに来たので釣りは終わりになった。

俺がもらったタックルは今後自分の部屋で管理していくこととなった。

「はあ～、今日も疲れたな。」

俺はベットにボフッと倒れこんだ。

「今日はなんだか忙しい休日だったな。でも楽しかったからいいか！釣りも出来たし！」

部屋に置いた竿を見ると顔がにやけてくる。

「・・・そういえばラグドリアン湖の水が増えるのが始まっているみたいだな。やっぱりレコンキスタいるのか。ストーリーへの関わり方を考えないとな。あまり積極的に介入せずに原作というかアニメ通りに進めるか、むしろ積極的に介入してアニメと恐らく違う展開になるだろうけど危機的な状況になるのを回避してみるか・・・どうするかな？」

湖の畔で（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回の話は多少蛇足感が否めないですが、まあ、趣味の話だったということで。

ルイズが8歳の時にヴァルと初めて会っているのですが、このときすでにワルドは魔法衛士隊に入っているので運が良いのか悪いのかヴァルトは1回もあったことはありません。
ワルドの方はヴァルのことをヴァリエール家の人からいろいろ聞いてそうですけど、だたし原作開始数年前、つまり今の時期くらいからワルドはヴァリエール家に来てないんじゃないかな?と思っています。レコンキスタで忙しいだろうし。だから原作開始までワルドは出ませんし、ヴァルのことは普通の強いメイジ位の認識です。

ちなみに午後からの話でキュルケ達が出てこないのはアイスの食べ過ぎでお腹を壊したからです。（）

次は「ＭＳの装甲越しに敵の殺気を感じとる・・・それが経験ってやつか!?」みたいな話かな?

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてみてください。

ゼロ魔の魔法にはかなり有効な回避方法か？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は主に回避方法についての話です。

ゼロ魔の魔法にはかなり有効な回避方法か？

週末のダエグの曜日、いつものように俺はカリンさんと模擬戦を行なっていた。

「『ファイアーボール』！」

今日は火の系統魔法を使った模擬戦だ。

俺は『ファイアーボール』を囮に使い、『トランザム』で素早くカリンさんの背後に回りこんでカリンさんに峰打ちで斬艦刀を振り下ろした。

「甘いですよ！」

カリンさんは俺の振り下ろした斬艦刀を後ろを向いたまま体を回転させながら避けて、そのままこちらを向いて『ウインド・ブレイク』を放ってきた。

「くっ！」

（またか！なんで後ろ向きながら避けられるんだよ！）

俺は『ウインド・ブレイク』で後に数メイル飛ばされたが、なんとか転ばずに態勢を立て直すことが出来た。

顔を上げるとカリンさんが何か魔法を放ったようだった。

俺は『フライ』で避けるのが間に合わないと考え、素早く出せるコモンスペルの『レビテーション』を使った方が良いとこれまでの経

験から判断して、『レビテーション』を使って右横に移動した。

さっきまで俺がいたところが派手に砂埃を立てて、俺は魔法を避けたことを確認した。

カリンさんに攻撃するために『レビテーション』を一旦解除して、『ファイアーボール』を行おうとした瞬間、俺に2発目の『エア・ハンマー』が直撃した。

「うわあぁ！」

俺はそのまま吹き飛ばされ、後ろに転がっていった。

「今日はここまでですわね。最近はあまり直撃を受けなくなったようですけど・・・それにしても最後のは防御すればよかったのではないですか？」

カリンさんが模擬戦の終了を告げて、さらに今日の反省点を挙げた。

「したいのはやまやまですが火の系統には防御系の魔法が無いので出来ないのです。」

「そうなのですか？あなたなら『Ｉ・フィールド』のように何かオリジナル魔法を考えているかと思いましたけど。しかしそれなら避ければよかったのではないですか？」

俺は確かにオリジナル魔法をいろいろ考えたけど防御用魔法を考え始めたのは最近だし、それに『Ｉ・フィールド』は元々存在した『ウインド・シールド』を改良したものだしな。

火の防御魔法ね・・・系統別で模擬戦しているから何か考えたほうがいいのかな？

それにしてもさっきの2発目の『エア・ハンマー』に直撃したことか。

「あれは1発目の『エア・ハンマー』を避けたので大丈夫だと思ったのですが、考えが甘かったですね。」

「1発目を避ける為に『レビテーション』を選択したのは良かったですが、その後の2発目が来るのを察知出来なかったのですか？」

カリンさんが以前教えてくれたメイジ特有の気配を察知する能力で攻撃を避けたらいいと言っているのだろうか？

「しかし師匠、僕はまだ空気の振動を感じる能力は低いですし、水や火では風系統の魔法を察知するのは難しいと思いますけど？」

最近はある程度この気配を感じる能力を使うのに慣れてきたが、それでも風はラインクラスなので効果範囲は狭いし、察知能力もまだまだ弱い状況だ。

「そうね・・・。それだったら、他の気配の察知方を行なったらどうかしら？」

「他の気配の察知方、ですか？」

「あら？教えてなかったかしら？」

「はい。初めて聞きました。そんな方法があるのですか？」

カリンさんはうっかりしていたと普段の“お義母さん”の顔になっていたが、俺が尋ねたことで“師匠”としての顔に戻った。

「そうです。気配を察するには３つの方法があります。」

そう言ってカリンさんはグーの手を顔の横まで上げた。

「３つもですか？」

「ええ。まず１つ目は以前教えたメイジ特有の察知能力のことです。」

カリンさんはグーの手から人差し指を上げた。

「２つ目は相手の動作や目線から次の行動を察することです。これはメイジや平民問わず行うことが出来ますわ。まあこれは厳密には気配を察すると言うよりも直後の行動を予測するものですけどね。ヴァルムロートもある程度は出来ていますよ。」

カリンさんは中指を上げて、チョキの形にした。

「そうでしょうか？しかし戦闘中に相手をそんなによく観察する余裕はないのでは？」

現にさっきの模擬戦で俺は１発目の動作を見て避けることが出来たが、２発目の動作を見ることが出来なかった。

「出来ますわよ！今それが出来ていないのは鍛錬不足ですわね。こ

れから意識して訓練していけば出来るようになるでしょう。」

「要訓練ということですね。」

「ええ。そして3つ目は殺気などの人の発する雰囲気や空気を感じることです。」

カリンさんは3本目の薬指を上げて、3つ目ということを表現した。

「え!?殺気などの気配ですか!?」

(漫画かアニメかよ!・・・あ、ここはアニメの世界だっかな?)

「そうです。この殺気などを感じることが出来れば風の魔法のように見えない攻撃も分かるようになりますよ。」

「いや、まあ、そうですけど・・・本当に出来るのですか?」

殺気を感じろとかそんなことが本当に出来るのか疑問だ。

「疑問に思うのも仕方ありませんね。では今から私があなたに向かって殺気を放つので何か感じたら言いなさい。」

そうカリンさんが言うと、その直後から表情は変わらないがカリンさんに黒いオーラのようなものを感じた。

その瞬間俺の体は硬直し、頬を冷や汗が流れ、呼吸は浅くなり、全身の毛が逆立って今すぐこの場所から逃げたい衝動に駆られた。

似たような感じは以前も感じたことがあるが、もしかしたらあれも殺気だったのかもしれない。

・・・勿論今現在受けているものとは比べ物にならないが。

「あ、はい・・・。師匠、殺気を感じることが出来ました・・・。」

（これが殺気か・・・。まるで俺の存在を押しつぶすような感覚、プレッシャーとはよく言ったものだな・・・。）

「そうですか！それは良かったわ。まあ、最大級の殺気を出していたからほとんどの人は感じることが出来るはずですけどね。」

カリンさんが明るく返事をすると黒いオーラは瞬く間に無くなった。

同時に俺に掛かっていたプレッシャーも無くなった。

「さ、最大級ですか・・・。な、何か特別なことを考えていたのですか？」

俺はまださっきの余韻で恐縮していたが、気になったのでカリンさんに聞いてみた。

「カトレアが、万が一もに無いとは思いますが、不幸になった時のことを考えました。まああなたがカトレアを不幸にはしないと信じていますけどね。」

カリンさんはにっこりと笑いながらそう言った。

「あはは、も、勿論ですよ！」

俺も笑いながら答えたが、内心では今後も下手したら殺されるのでは？と思った。

「今回は実感させるために意図的に殺気を出しましたが、普段はそこまでのものは出ていませんよね？」

「確かにそうですね。仮に相手に明確な殺意などがあれば、もしかしたら分かるかもしれませんが・・・。」

「そうね。戦争のように相手を倒せ！とある程度の殺意を持つことはありますが、模擬戦などでは殺意を持って攻撃することはそう無いでしょうね。それに戦い慣れている者は殺気を出さずに攻撃することも出来ますわよ。」

「殺気を出さない者って師匠みたいな人ですか？」

「まあそうですわね。」

「それだったらどうしたらいいのですか？」

「簡単ですよ。魔法を使う時はイメージすることが必要なので必ず魔法に気持ちを乗せますからね。当たれ！などと。それは戦い慣れて殺気を出さない者も同じですよ。それに一般的には気持ちを込めたほうが魔法の威力が強くなりますからね。」

カリンさんは説明しながら「当たれ！」のところでビシッと俺の方に杖を向けたので、ちょっとビビった。

「つまり相手の魔法に乗せた僅かな気持ちを感じろ、ということなのですか？」

「そういうことです。そういうことで相手の行動を予測する訓練は

剣術のときに主に行い、相手の気配を感じる訓練は魔法の訓練の時に徐々に行いますわよ！」

「はい！分かりました！」

こうして俺の訓練に新たな項目が加わった。

来週から忙しくなるな！と俺は思った。

「それでは早速やってみましょうか？」

「はい？」

何を？という風に俺は首を傾げた。

「訓練。」

「な、なんのですか？」

「だから、気配を感じるための訓練を今から行いますわよ！」

「え！？来週からでは無いのですか？それに今日はもう終わりってさっき言いませんでしたか？」

「そうなのですが気が変わりました。あなたは直撃を避けるのはまあまあなのですけど、他の系統と比べて火の系統のときは防御魔法がないのでダメージの貯まりが早いのよね。だから他の系統ならまだ模擬戦しているであろう時間を使って訓練します！」

「そう、ですか。しかし僕は今から直撃回数分だけ外周を走らない

といけないですし・・・。」

「直撃したのは2、3回でしょう?すぐに終わりますわよ。ささ!早く走って来なさい。その間にどんな訓練をするか考えますから。」

カリンさんは俺が走っている間に今から訓練を考えるという。

「は、はい!」

カリンさんに促されて俺は魔法訓練場の外周を3週回った。

「はぁ、はぁ・・・。お、終わりました。」

俺は走ったばかりで息が上がっていたが、走り終わったことをカリンさんに報告した。

「あら?意外と早かったわね。訓練内容は大体決まったので早速やってみましょうか!」

そうカリンさんが言い、何かスペルを唱えたと思ったら、カリンさんが5人になった。

「え?え!?」

「これは『ユビキタス』の魔法ですわよ。初めてみたのかしら?」

「これが『ユビキタス』・・・すごいですね!」

(こんなに詠唱時間が短いのか・・・これで出た分身は本体と同レベルだっていうんだからチートもいいとことだよな。)

「これから私たちがあなたの前後左右と空中に位置します。前後左右にいる私の分身はその場から、空中にいる私は上からあなたに『エア・ハンマー』を放つのであなたは避けるか防御するかしなさい。あ、全体防御はだめですよ！それとフェイクとして全員でスペルを唱えますが、その中で実際に魔法を放つ者だけ殺気を出すようにするのでそれを感じなさい。」

そう言うと４人のカリンさんの分身は俺の前後左右に５メイル位離れたところに位置し、恐らく本体であるカリンさんは『フライ』で俺の上の方に浮かんだ。

「お、お願いします・・・。」

俺はまだ戸惑っていたがもう訓練が始まりそうなので一応挨拶をしておいた。

「「「「「では、始めますよ！」」」」」

そして全員が杖を構えてスペルを唱え始めた。

カリンさん達は俺を惑わすためかわざと聞こえるくらいの声の大きさで普段よりもゆっくりとしたスピードで詠唱していた。

俺は全方向から聞こえる詠唱を聞きながらどのカリンさんから魔法が放たれるのか、その気配を感じようと集中した。

詠唱が終わる直前、右側のカリンさんから先程感じた黒いオーラのようなものを感じて、今の突っ立っている自分の状況では『Ｉ・フィールド』で部分防御して間違ったときに痛い目に合うと考え、回避

することを優先して『レビテーション』を使ったバックステップを行なった。

すると周りのカリンさんも付かず離れずの距離を保つように俺の動きに合わせて位置を移動していた。

俺が先程いたところから2メイル位離れた時、目の前をいやな感じの塊みたいなものが通過していくのが分かった。

「避けれた・・・のか？」

「今のは避けれて当然ですわね。では次々放つので避けなさい！」

カリンさんはこれは避けれて当然という風に言って、また詠唱が始まった。

しかも今度の詠唱は声は聞こえる位の大きさだが、普段通りのスピードで唱えていた。

今度は先程のように集中する時間は無かったが、先程と同様の大きな殺気を前から感じたので今度は『Ｉ・フィールド』を前面に部分展開してやり過ごした。

その後も『レビテーション』を使ったステップで避けたり、『Ｉ・フィールド』で防御したりしていった。

「もう昼食の時間ですわね。では今日はここまでにしておきましょう。」

「はぁ、はぁ、あ、ありがとうございました！」

ようやく告げられた終了の合図に俺は安堵した。

なにせ1時間くらいずっと避け続けて、もうへとへとだ。

しかも途中で攻撃してくるカリンさんが増えた時はかなり動揺してしまい、思わず『I・フィールド』による全面防御を行なったことでカリンさんに怒られてしまった。

「今日は初めてですから分かりやすいように殺気も大きく出しましたが、今後は少しづつ殺気を抑えていきます。最終的には殺気ではなくもっと一般的な、当てる！などの感情にするのでそれが避けられるように頑張りなさい。」

「わ、分かりました。努力します。」

数日後、火の魔法の訓練をしていた。

俺はこの前の模擬戦で言われた火の魔法の防御について考えていた。

これまでの既存の火の魔法に防御魔法は存在していない。

火のメイジは言わば防御を捨てて攻撃に特化したメイジなのだが、防御が無いのでは長期戦などでは不利になるだろう。

ちなみに火の魔法でそのまま『I・フィールド』のようなものをや

ってみても、魔法は全く防げないし、火で周りを囲んでいるのでやたら滅多に暑い！

あと見た目防御っぽい『ファイヤー・ウォール』も試してみたが、全くだめだった。

行き詰まったのを感じ取ったのかカリンさんから休憩の声がかかった。

やっぱり火の魔法で防御は出来ないかな、と休憩しながら何気なくルイズ達の方を見たらルイズが爆発していた。

・・・言い方が悪かった。

恐らく魔法の、というか爆発の制御するために訓練しているのだろうが爆発が近すぎてルイズが爆発に巻き込まれて、尻餅を付いていた。

爆発しているのは確かだが以前に比べて少し爆発の規模が小さくなっているように思える。

あれが以前のままのルイズならもっと大きな爆発で尻餅どころではなく、もっと吹き飛ばされていただろう。

なにせアニメでは教室を半壊したほどの爆発をあの程度の爆発まで制御出来ているのだからかなり進歩したのでは無いだろうか？

そういえばアニメではルイズが爆発のほぼ中心にいたのに服が焦げて、ちょっと火傷していた程度で吹き飛んだりはしてなかったな。

なんかさっきから爆発爆発ばかり考えているな。

・・・爆発、吹き飛ぶ・・・はっ！

そのときピキーンと脳内で効果音が鳴ったように思えた。

「この感じ・・・閃いたか！？」

「ヴァルムロート、そろそろ訓練を開始しますよ。」

謀ったようなタイミングでカリンさんがやってきた。

「師匠！閃きました！このような魔法はどうでしょうか？」

俺は思いついた魔法を地面に木の枝で図を描きながらカリンさんに説明した。

「なるほど・・・。それでしたらここはこの様にした方がいいでしょう。」

カリンさんが俺が書いた図に修正を加えていく。

「なるほど！それだったらここをこうして・・・。」

そうして暫くの間、カリンさんと意見を交換しながらオリジナル魔法について考えた。

「それでは師匠、お願いします！」

早速思いついた魔法を試してみることになった。

今俺の前には炎の壁がある。

一見すれば『ファイヤー・ウォール』とそう変わらないだろう。

「ではいきますよ！」

俺から少し離れたところにいるカリンさんが『エア・ハンマー』を放った。

カリンさんが放った『エア・ハンマー』が炎の壁に当たった瞬間、当たったところがドォンと派手に爆発した。

しかし『エア・ハンマー』は俺のところには届かなかった。

「おお、届いてない・・・！」

火の系統魔法で防御出来たことに俺はちょっと感動した。

「師匠！成功です！ちゃんと防御出来ました！」

俺がカリンさんに成功したことを報告すると、カリンさんがこちらに戻ってきた。

「良かったわね。それにしても話を聞いた時は本当に出来るとは思いませんでしたよ。まさか爆発することで防御出来るなんて。」

「そうですねよ。僕も出来るか半信半疑でした。」

この魔法は爆発反応装甲の魔法版と言うべきものだ。

仕組みは意外と簡単で爆発させる素となる炎の壁と攻撃が壁に当たったことが瞬時に分かるように『ディテクトマジック』を組み合わせて、攻撃が当たった瞬間に当たった攻撃と同程度の威力の爆発が起こるようにしたものだ。

最初は爆発は常に最大威力でいいかと思ったのだが、カリンさんから魔力、カリンさんはちゃんと精神力って言ったけど、の消費を考えたら少し複雑になるけど臨機応変に対応出来たほうがいいとのことだったので考えを改めた。

「それでこのオリジナル魔法にはどのような名前をつけるのですか？」

「この魔法の名前は『チョバム』にしようと思います。」

『チョバム』の名前の由来はガンダムに出てくるＮＴ－１アレックスのチョバムアーマーからとってみた。

あれも確か爆発反応装甲の一種だった、と思う。

「『チョバム』、ですか？まああなたが考えた魔法なので名前がどうとか言いませんが・・・。」

カリンさんはどこか歯切れが悪い。

「『チョバム』では何か都合が悪いのですか？」

「いえ、何でも無いですから気にしてはいけませんよ！」

俺はカリンさんがなぜ歯切れが悪かったのか気になったがカリンさんがこれ以上聞いてくんな気配を出していた、最近の訓練でさらにこのような気配に気がつくようになったのはいいことなのかどうなのか、ので追求は躊躇われた。

その後キュルケにも教えてあげるとそれはすごい喜びようだった。

やはりこれまで防御は専門外の系統を使うので威力や使い勝手がいまいちだったようだ。

そして魔法の名前を教えるとキュルケも歯切れが悪くなったので追求したところ、どうしてカリンさんやキュルケが歯切れが悪くなったのか分かった。

「ダーリンには悪いけど・・・ダサいわね。」

お、おう。

確かにそれだけ聞くとダサいけどちゃんとした理由が・・・いや、なんでもない。

ゼロ魔の魔法にはかなり有効な回避方法か？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ハルケギニアの魔法は思いの強さで威力が増すのでその魔法に乗せた感情を察知することが出来れば不可視の風魔法でも避けられるんじゃないのでしょうか。

まあ、この話は盆に実家に帰った時にドラゴンボールを読んでいて、ベジットとブウが戦っているときのセリフで思いついたんですけどね。

あと火の系統魔法のオリジナル防御魔法は以前から考えてはいたのですがガンダムに爆発反応装甲とかあったっけ？て感じだったのですが、アレックスのチョバムアーマーがそうだとどこかで読んだ記憶があったので、調べたらそうだったので使うことにしました。スパロボのロボの装甲厚い奴は本当に装甲が暑いだけだからね。あとバリア。

次は久々に領地経営の話を書くつもりです。

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてみてください。

帰省＋誕生会＝挑戦×2（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は舞台をトリステインからゲルマニアにしてヴァルが挑戦される話と挑戦する話です。

帰省＋誕生会＝挑戦×2

季節は夏の暑さを残しつつ秋へと移行し始め、ニイドの月、まあ8月みたいなものかな、ももう終わりで来週からラドの月になる。

そしてラドの月の5日は俺とキュルケの17歳の誕生日だ。

と言う訳で俺とキュルケはゲルマニアの実家で誕生会が開かれるので前後1週間の合わせて20日間の夏休み？をもらって帰ることになった。

ツェルプストー家の玄関前に3台の馬車が止まり、その中央の馬車の扉が開いた。

「ただいま戻りました！」
「ただいま！」

俺とキュルケは馬車から降りて待っていた家族に挨拶をした。

「おお！お前たちよく戻ったな！キュルケ、長旅で疲れてはいないか？」

父さんがキュルケに駆け寄って軽くハグをして、キュルケに旅の疲れがないか尋ねた。

「ええ。大丈夫ですわ、お父様。お父様もお元気そうでなによりです。」

そんなキュルケの言葉に「いやー、キュルケに会えなくて寂しくて

な。」とか答えていた。

「父さん、父さん。息子には何か無いのでしょうか？」

父さんに軽く無視られているようで少し不機嫌さを声に含ませて言ってみた。

「うむ。ヴァルムロートも元気そうだな！・・・というかお前の近況はキュルケからの手紙やカリーヌ夫人から訓練報告が定期的に送られてくるので大体把握しているぞ。だからお前が元気ならば特に言うことはないな。」

父さんは俺の肩に手をポンっと置いてからそう言った。

それから母さんや姉さん達と軽くハグしながら、１年ぶりに言葉を交わした。

姉さんから「背が伸びたね。」と言われ、この前実家に帰ったのは１６歳の誕生会の時だったのでもう１年経ったので成長期だし背も伸びるだろうな。

「ツェルプストー、２０日間と少し長い滞在になるがよろしく頼む。」

「まかせろ。お前はバカンスに来たと思ってゆっくり羽でも伸ばしていろ。」

「そうさせてもらおう。」

前の馬車からはお義父さんとお義母さんが降りてきて、お義父さん

は父さんに挨拶し、お義母さんは母さん達と楽しそうに話している。

「ここがツェルプストー家、ヴァルムロートさんのお家なのですね。」

後ろの馬車からカトレアさんとルイズが降りてきた。

周りをキョロキョロと見ながら歩いてくるカトレアさんをルイズが誘導しながらこちらにやってきた。

「おじ様、おば様方それにお姉様方、今日から２０日間よろしくお願いします。」

カトレアさんはスカートの端をつまみ、少しだけ持ち上げて微笑みながら挨拶をした。

「今年もお世話になります。」

と、ルイズもカトレアさんと同じように挨拶をした。

しかしこの挨拶はカトレアさんやお義母さんがやると気品に溢れているように見えるがルイスがやると可愛いと思えるのはなんだろう？

・・・背が低くて子供っぽいからだろうか？

そうそうエレオノールさんは研究所の方が忙しくなったから来られないそうだ。

これまでは行かない！の一点張りだったらしいので理由がある分ずいぶんマシになったそうだ。次回は来てくれるかな？

それから誕生会までの１週間は魔法や剣術の訓練をしたり、女性陣の買い物に付き合わされたりと、普通に過ぎていった。

あと誕生会が終わった次の日にヴァイスに視察に行くので、村の人口変化や紙作り産業などの現在の村の現状をまとめておいて欲しいと村長に手紙を出しておいた。

周りの貴族たちが口々に話すことが重なり合い俺の耳にはざわざわと意味を成さない音として聞こえてくる。

祝いの席に似つかわしくない雰囲気が周りに立ち込めていた。

誕生会当日、本来ならば家の中でパーティーが行われているはずだったのだが、俺を含めパティー参加者のほぼ全員が魔法練習場に集まった。

俺と俺から１０メイル離れたところにいる若い、というが俺より2、３個上だろう、貴族が練習場の中央に佇み、練習場の端に臨時で設置された観戦席に座っている。

「・・・まあ、いつかこういう時が来るとは思っていたけどね。」

俺はそんなことをつぶやきながら斬艦刀の持ち手のところに刻んだ

溝に杖をはめ込んだ。

どのようにして現在の状態に至ったか簡単に説明すると、

誕生会で俺がカトレアさんを婚約者として紹介する。

俺と決闘して勝てば、俺に変わってカトレアさんの婚約者になれるというのがゲルマニアの貴族の中で噂になっていると笑い話として出した貴族の言葉にお義母さんが反応し、決闘の件をわざわざ発表する。

若い1人の貴族が誕生会だというのに決闘を申し込んでくる。空気読め！

俺は今日は誕生会なので後日にしようと提案したが、家族、主に父さんとお義母さん、が誕生会の余興にちょうどいいとか言って練習場で行うことになる。

練習場に臨時観戦席を作る間家の中でパーティーを続け、観戦席が完成したので練習場に移動した。

そして現在に至る、と。

トリステインでは烈風カリンという虎の威があったから決闘を申し込んでくる貴族がいなかったけど、ゲルマニアだとそれも陰ったのかな。

それともあれか？ゲルマニアの人は恋愛事には積極的だというやつ

か？

そんなことを考えていると相手から声がかかった。

「ミスタ・ツェルプストー！準備はいいか？」

「ええ。構いませんよ！僕は剣を使いますがよろしいのですね？」

俺は手に持っている斬艦刀を軽く上げてアピールした。

「ああ、ミスタ・ツェルプストーの剣は軍の剣状の杖と同じものだと判断した。それにしても先程ミス・グナイゼナウに何か渡していましたがあれは良かったのか？あれも武器なら使ってもいいのだぞ？」

俺が決闘前にキュルケに渡したのはＩＦＧ（Ｉ・フィールド・ジェネレーター）とファングだ。

これらは暗殺対策で作成してもらったものなので決闘で使うのは野暮というものだろう。

「はい。問題ありません。では決闘のルールですが」

「ルールの確認は不要！相手に降参と言わせるか、杖を落とせばいいのだろう？」

俺が決闘のルールを説明しようとすると相手が俺の言葉に被せてきた。

まあ、決闘のルールなんて大体どこも同じなんだろうけどさ、もし

かしたら地方ルールとかあるかもしれないじゃん？

「それと相手の命を奪うような攻撃を直接相手に仕掛けない、もあるのでお忘れなく！」

「ええ、忘れてなどいませんよ。それではそろそろ始めましょう！」

相手が開戦を促してきたので俺もそれに同意した。

「では改めて・・・俺の名はザビーネ・シャル、土のトライアングルメイジ！二つ名は“黒壁”だ！」

ザビーネはそう言うとさっと杖を構えた。

相手が名乗りを挙げたので俺もやらないといけないのだろうな。

「僕の名はヴァルムロート・シュテルン・フリードリヒ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー、火のスクウェアメイジで二つ名は“炎剣”です！」

（ツェルプストーは火系統の家系だしな。・・・世間では俺は火のメイジで通ってると思うから火でいいよね。それにお義母さん、いやあれは師匠の顔だったな、師匠にいろいろ制限を設けられたからな。）

俺が今回の決闘でなぜかカリンさんから言いつけられたことが３つある。

？火の系統魔法とコモンスペルしか使用しないこと。

？『フライ』禁止。

？『トランザム』禁止。

なぜ制限を付けたのか聞くと、

「それくらいでも勝ってもらわないと鍛えた意味がないでしょう？」

だそうだ。

・・・まあ、負けそうになったら破るけどね。

俺も続けて名乗りを挙げたことで決闘が始まった。

開始早々ザビーネがスペルを唱え始めると周囲の地面に僅かな気配を感じた。

ザビーネは詠唱の声を小さく言うことや口をあまり動かさないといった対戦相手にどんな魔法か判断させない工夫を全く行なっていなかったのですぐにその魔法が『アーク・スパイク』だということが分かった。

対人戦闘である程度以上になるとスペル詠唱からどのような魔法が繰り出されるか判断されて、即対応策を取られるのでなるべく相手にスペル詠唱を悟らせないことは地味だが必要なものだと師匠からこれまでの修行で教えられた。

あ、あと早口による詠唱時間の短縮もね。

このことからザビーネは決闘を行なったことがない、もしくは決闘ごっこみたいなものしか行なっていないと考えられた。

因みに『アース・スパイク』は土のラインスペルで土の槍を地面から出現させるもので、槍の大きさや先端の形を自由に変えることで相手を突き飛ばしたり、突き刺したり出来る攻撃用の魔法だ。

俺は地面からの気配に気を配りながら攻撃を引きつけるためにわざと今の位置から動かず、すぐに回避出来るように僅かに利き足である右足を後ろにずらして体勢だけ整えた。

詠唱が進み発動直前になると地面の気配が俺に向かって伸びてくるのが分かった。

『アース・スパイク』を俺に直接当てて1発KOにするか、土の槍の檻で俺を閉じ込めるつもりなのかもしれないと瞬時に考え、その場から離れるために『レビテーション』を使って大きく前に踏み出した。

次の瞬間にさっきまで俺がいたところに土の槍が地面から飛び出していた。

「何！」」

ザビーネには『アーク・スパイク』の魔法を発動させるための詠唱時間の約5秒の間ヴァルムロートはほとんど動いていないように見えており、そのためにザビーネが勝手に動く気配が無いと思っていたヴァルムロートが突然動き出し、さらに当たると思っていた魔法を避けたことに驚いた。

驚いている間にもザビーネとヴァルムロートの距離は縮んでいった。
ザビーネとヴァルムロートとの距離が最初の半分以下になった時、
ザビーネは慌てて次の魔法を唱え始めた。

俺は最初に踏み出した勢いのまま真っ直ぐザビーネの方向に走った。
俺とザビーネの距離が縮まり、あと5メイル位になったのでザビーネの杖を叩き落す為に右手に持っている斬艦刀を半回転させ当たったときに峰打ちになるようにした。

さらに近づき後数歩で攻撃範囲に入るので斬艦刀を両手で持ち、横に水平に構えた。

俺はそのままの勢いで斬艦刀を横に振り抜いて杖をはじき飛ばすつもりだったが、ザビーネが詠唱を開始し、そしてザビーネの周囲に魔法を発動する気配を感じたのでとっさに『レビテーション』を使って後ろに飛んだ。

するとザビーネの周りをぐるりと取り囲むように土の壁が地面から現れた。

そしてさらにその壁の周りに魔法の気配がしたかと思うと、さらに土の壁が先程の壁を覆うように現れた。

「これは・・・土の壁？」
（『錬金』で土の壁を作り出したのか。防御に徹するつもりなのか

？・・・しかし！）

俺はこれくらいの土の壁なら『フレイムボール』を数発撃ちこめばなんとかなるだろうと思い、1発目を放った。

『フレイムボール』が土の壁に当たる直前に土の壁が光った。

光は一瞬で収まり、先程までの土の壁は黒い金属のような壁になっていた。

俺の放った『フレイムボール』はその黒い壁の表面を少し焦がしただけで消えてしまった。

その時壁の向こうからザビーネの声が響いてきた。

「フハハ！これが俺の二つ名が“黒壁”と言われる由縁だ！この厚さ1メイルにもなる鉄の壁は例えスクウェアメイジの魔法であっても壊すことは出来ない筈だ！」

ザビーネの声から自分の魔法に対する絶対の自信がうかがえた。

「確認します。その黒壁は完璧なんですよね？」

「もちろんだ！」

俺は『ディテクトマジック』でザビーネの位置を確認した。

俺が使える中で一番強い魔法はスクウェアスペルの『ヴォルケーノ』だが、この魔法は攻撃範囲が広くさらに微妙な操作が難しいので万が一のことを考えるとうかつには使えない。

そこで『ヴォルケーノ』の次位に攻撃力が高く、取り扱いも簡単な『ビームサーベル』で攻撃してみることにした。

「ではいきますよ！『ビームサーベル』！」

俺は斬艦刀を両手で持ち、上段の構えからビームサーベルを発動させると鍔から先の刃の部分が『ビームサーベル』に変わった。

実際は持ち手のところにはめ込んだ杖の先の方から『ビームサーベル』が発生していてそれが偶然的に鍔から先に出ているに過ぎないのだけど。

・・・でもこれやるといくら刀身に『固定化』と『硬化』の魔法が掛かっていても少し変形しちゃうんだよね。

でも多少の変形位だったら大剣モードに変形させてから元に戻せば元通りになるからすごいよね。

俺は上段の構えから『ビームサーベル』を発動させた斬艦刀をザビーネのいない黒い壁の俺から見て左側に振り下ろした。

「ミスタ・ツェルプストーがどんな魔法をして」

こようと無駄だとザビーネが言おうとした時、ザビーネの右側をゴオオ！という音と共に熱風が襲った。

さらにドスン！という重たいものが落ちる音と共に右側から光が差した。

何事かとザビーネが右側を確認するとなぜか外の様子を確認することが出来た。

野外にいて外の様子を確認出来るのは普通のことだが、ザビーネは今自身の周りを高い壁で覆っていてその為に外の様子が見えるはずがないのだがそれが出来るということはあることを示していた。

「ば、馬鹿な!?俺の完全防御の“黒壁”が!?」

“黒壁”の右側はなくなっていて恐らく上からみたら英語のCのようになっているだろう。

そしてザビーネの視線が地面の方に向くとそこには先程まで“黒壁”の右側の壁だったものが転がっていた。

ザビーネは“黒壁”を破壊されたことに動揺した。

動揺しながらも完璧な防御だと考えていた“黒壁”をたやすく壊したのは先程自分の右側を襲った音と熱風を持つ何かでそれをヴァルムロートが出したことは事前の「いきます。」という言葉で予想出来た。

しかしザビーネは自身の考えた予想に半信半疑だったがそれを確認するためにも“黒壁”の開いた部分から半身だけ出してヴァルムロートの方を見た。

そこには身の丈を優に超える巨大な赤く光る何かを構えているヴァルムロートの姿が見えた。

「み、ミスタ・ツェルプストー！君は一体何をしたんだ！？」

“黒壁”を破壊したのはヴァルムロートの魔法であったことはザビーネの予想通りだったがそれでも叫ばずにはいられなかった。

「何って、こうしたんですよ！」

ザビーネがどうやって完璧だと思っていた黒い壁を壊したのか知りたいようだったので俺は斬艦刀を上段に構え、今度は右側に振り下ろした。

『ビームサーベル』の刃が壁に当たると金属が瞬時に赤くなりみるみるうちに黒い壁を切断していった。

俺が斬艦刀を振り下ろした状態から元に戻るのと同時に壁の右側がバタン！と外側に倒れた。

先程もそうだったがどうやら最初の壁の素は地面から『錬金』して出したがその後の金属へ『錬金』したときに地面と分離させたようだった。

ザビーネは信じられないものを見るように目を見開き、口をあんぐりと開けていた。

「今度は真ん中にいきますよ！ミスタ・シャル！危ないのでちゃんと避けてくださいよ！」

そう言って俺は最後に残った真ん中の壁に向かってゆっくりと振り下ろした。

「うわあああ！」

黒い壁に半分隠れるようにしていたザビーネが慌ててそこから移動しようとして足元の黒い壁の一部だった破片に足を引っ掛けて顔面から地面に突っ込むように転んだ。

俺は黒い壁を切らずに『ビームサーベル』を解除して素早くザビーネのところまで移動した。

そして起き上がろうとしているザビーネの鼻先に斬艦刀を突きつけた。

・・・多少刀身が曲がっていてちょっとカッコつかないがしょうがない。

「ミスタ・シャル。降参しますか？」

「こ、降参です。」

ザビーネは額に汗をかきながらちらっと一度俺の顔を見てから降参という言葉を口にした。

俺はその言葉で一気に緊張を解くと先程までは聞こえなかった観客の声が聞こえてきた。

決闘が終わったので斬艦刀を鞘に仕舞おうとしたが変形していたので入らなかった。

俺は斬艦刀を左手に持ち、右手をザビーネに差し出した。

ザビーネは礼を言って、俺の手を取り、それを支えにして立ち上がった。

ザビーネを立ち上がらせているときに黒い壁の断面が見えた。

その断面は全て金属ではなく壁の表面の１０サント位が金属であとはそのまま土で出来ていた。

いくら『ビームサーベル』でも１メイル位の金属をアニメのビームサーベルみたいにさくさく切れる訳がないと思ったがハリボテだったのか・・・納得。

確かに考えればあれだけの質量の土を全て金属に『錬金』しようとすればかなりの魔力を消費してしまって戦いどころではなくなるだろう。

「ミスタ・ツェルプストーはあの烈風カリンのところで強さを磨いているとは噂で聞いていましたが、本当にお強いですね。俺も“黒壁”には絶対の自信を持っていましたがそれもまだまだだということを今回教えられました。」

ザビーネが起き上がってにこやかに話しかけてきた。

負けたことにあまり悔しがっている様子はないからそこまでカトレアさんとの婚約に必死だったわけでは無いようだな。

まあザビーネからしたら降って湧いた話で勝てたらラッキーっていうことだったのかもしれないな。

「いえ、僕もまだまだです。しかしあの“黒壁”は幾つか改善すればより強固な守りになると思いますよ。」

俺がそう言うとザビーネの目が少し真剣なものになった。

「ほう？どのような改善策が考えられるのですか？」

「本来この“黒壁”は土を全て金属に『錬金』したときにその完璧な防御を実現出来ると思うのですが、今回時間が足りないのかそもそもミスタ・シャルがそれだけの技量を持っていないのかは分かりませんが、あ、気を悪くされたのでしたらすみません。」

「い、いえ、続けて下さい。」

ザビーネは微妙な表情をしながら続きを促した。

（まあ、欠点を指摘されて喜ぶ奴はいないよな・・・。）

「将来的には全て金属に『錬金』出来るようになればいいのですが、現状は出来ていないとすれば他の方法で壁の強度を上げるのはいかがでしょうか？『固定化』や『硬化』の魔法を使えば比較的簡単に出来るのではないでしょうか。」

「なるほど・・・。」

ザビーネは小さく頷いた。

「あと地面と接している部分は無理に『錬金』しないほうがいいかもしれませんね。今回のように壁が分断されたときに一部の壁が倒れたら袋のネズミと言わんばかりにそこから集中攻撃されるかもしれませんよ。」

「・・・そうですね。今後よく考えてみることにします。」

「そうですね。僕が今言ったことは簡単なものだと思うのでよりご自身に合った方法で強化していくのが望ましいと思います。」

「ミスタ・ツェルプストーと戦えて良かったよ！ありがとう！」

そう言ってザビーネは右手を差し出した。

俺も右手を出して、ザビーネの出した右手を握り、がっちりと握手を交わした。

「おっと！引き止めてしまったかな？ささ、早く勝者はカトレア嬢の元に行かなとな！ささ！」

そう言いながらザビーネは俺の背中を観客席の方に押した。

「は、はい！それでは失礼しますね。僕の方こそミスタ・シャルと戦えて良かったです。」

俺は賑わっている観客席に向かって走りだした。

そんな俺の後ろでザビーネがポツリとつぶやいた。

「ミスタ・ツェルプストー、あなたは俺の・・・。」

離れていったので最後は何と言ったのか聞こえなかった。

家族の元に行くとみんなよくやったと褒めてくれ、カトレアさんは

俺が勝ってくれて良かったと照れながら言った。

その後もパーティーの続きがあり、決闘で俺が勝ったことで時間いっぱいまで俺はいつも以上に引っ張りだこととなった。

次の日、ヴァイスに向けて朝から出発した。

馬車は1台でその中に俺、キュルケ、カトレアさん、ルイズが乗った。

昨日は誕生会で今日のヴァイス視察も日帰りとそこそこハードなスケジュールなので最初は俺だけで行くつもりだったのだが、カトレアさんが是非見てみたいというと私も！私も！とキュルケとルイズも付いて来ることになった。

馬車の車輪がガタゴトと音を立てながら歩くよりは早くしかし走るより遅い速度でゆったりと進んでいる。

「ねえ、ヴァルムロートさん。今から行くヴァイスってどんな所なのかしら？」

と俺の前に座っているカトレアさんが聞いてきた。

「それ、私も知りたいです。ヴァイスってお義兄様が統治している村なんですよね？」

カトレアさんの横に座っているルイズが少し身を乗り出してカトレ

アさんの言葉に同調した。

俺は分かった分かったと言って説明を始めた。

「君達に最新情報を公開しよう！ヴァイスは家から約４０リーグ離れたとこころにある7年前に出来た小さな村だ！現在人口は２００人位、比較的に自然に恵まれ、近くに山があるのでそこの木を加工して生産される紙が主な特産物だ！基本的に自給自足だが足りない物は周辺の村や少し離れた街で補っているぞ！ヴァイスはその村の成り立ちから僕のアイディアを試す実験的な村という側面がかなり強いぞ！」

俺がガオガイガーのナレーションのような説明の仕方、出だしだけだが、をノリノリで行なった。

終わった後、３人の顔は目を丸くして口が半開き状態のポカーンという擬音語がよく似合うような表情をしていた。

「ま、まあ簡単に説明するとこんな感じかな。何か質問はあるかな？」

３人の表情をみてこれは外したと感じた俺は素に戻ってカトレアさんとルイズに聞いてみた。

「そ、そうですわね。ヴァイスは7年前に新しく出来た新しい村のようですがどうして作られたのですか？」

ポカーンという表情から戻ったカトレアさんが質問してきた。

「村が出来た理由は僕が領地経営に関わってみたいと父さんに言っ

たこと、ただそれだけですね。僕は小さな寂れた村を任されるのかとそれまでは思ってましたけど、まさか村１つ作るとは思いませんでした。」

俺は作るとは思ってなかったという行を少し苦笑いしながら言った。

「お義兄様は今回の誕生日を迎えて１７歳になったのだから、７年前は１０歳!?・・・お義兄様、私はもう１５ですけど領地経営に今からでも参加したほうがいいのでしょうか?」

ルイズが割りと真剣な顔で訪ねてきた。

「別に参加しなくてもいいと思うよ。領地経営って主にその土地を継ぐ嫡子や男兄弟が行うものだしね。女の子はそれとは別に礼儀作法などの女性らしさみたいなものを習うのが一般的でしょう?」

俺はハルケギニアの一般論?を交えてルイズの質問に答えてみた。

「そうそう私もダーリンの視察に付いていくこともあるけど口は出さないしね。お姉様達も参加してないわよ。だからルイズもそんなこと気にしなくていいのよ。」

キュルケがルイズを気遣うようにそう言った。

「でもそれだったらうちは姉妹だから嫡子はお姉様になるわね。お姉様はそういうのには興味なさそうですから領地経営に参加するのはお姉様のお婿さんね。」

「エレオノールお姉様の・・・。」

「お婿さん・・・。」

「か・・・。」

カトレアさんが何気なく言った言葉で馬車の中が一瞬にして静まり返ってしまった。

因みにカトレアさんの言葉の後につぶやいた順番はルイズ、キュルケ、俺だ。

「そ、そういえばお義兄様！ヴァイスはお義兄様が考えたアイディアを試す実験的な村ということですけど、どういうことを試されたのですか？」

ルイズは沈黙を破るようにわざと少し大きな声で言った。

「あ、ああ！最初に試したことはすでにツェルプストー領内の多くの街や村で採用されているよ。この前行った街でも行われていることだけど分かるかな？」

車内の重たい空気を払うために俺はわざとクイズ形式のような感じで言ってみた。

「わｔ」

「あ、キュルケは答えを知っているからちょっと黙っててね。」

キュルケが速攻答えを言いそうだったので口止めをしておいた。

「そんなぁ・・・。」

「ゴメンゴメン。でも折角クイズみたいにしたのだから答えを知っているキュルケが答えたら面白くないだろう？」

「それはそうだけど・・・。」

キュルケは面白くないといった顔をしたのでこれで機嫌が直るとはことは少ないかもしれないがごめんねと言って頭を撫でた。

「なんでしょうか？街の様子はトリステインのものとそう変わらないように見えましたけど？うーん・・・。」

ルイズは腕を組んでうーんと唸りながら考え込み、その様子をカトレアさんは楽しそうに見ていた。

ルイズはしばらく考えていたが答えに辿り着きそうもなさそうなのでヒントをあげることにした。

「・・・平民に見えたけど実は全員貴族、とか？ゲルマニアはお金で土地を買えば貴族になれるそうですし。」

ルイズが苦肉の策でとんでもないとこを言い出した。

「ルイズ、全然違うよ。それに確かにゲルマニアでは土地を購入できれば魔法が使えなくても貴族になれるけど、そのお金って莫大な金額なんだよ。全員がなれるものではないよ。・・・手がかりは臭いだよ。それを参考にもう一度考えてみて。」

「そうですよね・・・。臭いか。うーん・・・。」

とルイズはまた考え始めた。

「あら？あれのことかしら？」

しばらくするとカトレアさんが何かおもいついたようにつぶやいた。

「ちぃ姉様！？お願い！もう少しだけ私に考える時間を下さい！」

とルイズはカトレアさんに抱きつきながら頼んでした。

「ええ、心配しないでルイズ。ゆっくり考えていいのよ。」

とカトレアさんは微笑み、それに安心したルイズはカトレアさんから離れてまた考え始めた。

それからしばらく時間が経ったとき、ルイズがはっ！と声を出して顔を上げた。

「お義兄様！分かりました！」

ルイズが元気よく声をあげる。

「そうか。それで答えは何かな？」

「はい！それはうん・・・う・・・。」

ルイズは自分が今から何を言おうとしているのかに気付いて顔を赤らめた。

口ごもるルイズにこれは面白うものを発見したとばかりにキュルケ

はニヤニヤし、カトレアさんはあらあらとニコニコしている。

恥ずかしがっているルイズもなかなか可愛いけど可哀想だから手助けしてあげよう。

「糞尿がどうかしたのかな？」

「お義兄様！？ええ、それが街の中のどこの道の脇に無かったのです。それで街に嫌な臭いがしないと思いました。トリステインの街だと大通りから1つ裏に入ればどこにても散乱していてひどい臭いが漂っているのに。」

「正解！因みに糞尿は街のハズレやちょっと離れたところに集められて手を加えて、作物を育てる栄養剤みたいなものとして使っているよ。街中に糞尿があると衛生的に良くないし、それよりなにより臭いからね。」

（衛生的に良くなればペストなどの感染症が爆発的に流行したりすることもないだろうし。）

「エイセイテキ、ですか？」

ルイズは聞きなれない言葉に首を傾げた。

「ああ、衛生的っていうのは清潔ってことだよ。街がきれいだとそこに住む人も嬉しいだよう？」

「そうですね！あーあ、トリステインの街も同じ事をやってくれたらいいのに・・・。そうだわ！お義兄様！うちの領内の街でも同じ事をしてくれませんか？」

ルイズはいいこと思いついたと言わんばかりに目を輝かせてそう言った。

「うーん、そのへんはお義父さん、あ、公爵様の方ね、と相談してみないとね。でもまずゲルマニアに広げていくことも大事だけどね。」

（でも新しいことをするのにはまずそこに住む人の意識改革とかから始めないといけないからちょっと大変なんだよな・・・。）

「そうですか・・・。そうですよね、お義兄様はあくまでツェルプストー家の跡取りですし、国も違いますからね。」

跡取りでもなんでもない者が別の所の領地経営に口出しすることは良くないということがルイズもちゃんと分かっていたようで安心した。

そしてルイズの口から、お姉様の旦那様か・・・と小さくつぶやいたのが聞こえた。

それからの道中はキュルケがクイズ形式を甚く気に入ったようで皆でクイズを出し合って到着まで時間を潰した。

・・・ルイズが一番多くいじられていたのは気のせいだと思いたいね。

ヴァイスの街に着くと村長の出迎えがあり、時間が無いので早速村長の家で話し合うことになった。

いつものように家の中の机に村長と向かい合うように座り、さらに今回は俺の側にキュルケ達も座った。

村長が全員に紅茶を配膳し終わったところで話を始めることにした。

「それにしてもまた家が増えましたね。」

村長の家に着くまでの村の様子を見て、ここ数年前くらいから居住者をまた募集し始め、これまでに新たに約１５０人位を受け入れていた。

「はい。初めは５０人位で始まったこの村ですが、今ではその４倍の２００人位の人口です。どうしてまた居住者を募集したのですか？」

「ええ、紙作りも軌道に乗り始めたのでそろそろ次の段階に進もうかと思いまして。」

「次の段階、ですか？あっと、失礼しました！報告書をまだお渡ししていませんでしたね！」

村長は横にある棚の引き出しを開けて数枚の紙を取り出した。

「これが現在のヴァイスの状況です。あと幾つか住民の意見も入れておきました。」

そう言って村長は俺に紙を渡してきた。

「ご苦労様です。少し目を通させて貰いますね。」

俺は今貰った紙に書いてあることにざっと目を通した。

「ふむ。しかし子供だけで４０人弱もいるとは・・・人口の2割か。」

居住者には比較的若い夫婦や適齢期の独身の人など意欲に溢れた人を選ぶ傾向にあるのでそれが影響しているのは間違いないな。

「それと住民の声の中にちらほら、もっと仕事が欲しいという旨のことが幾つか載っているがそうなのですか？」

「え、ええ、はい・・・。一応順番に紙作りの仕事や材料の木材切り出しなどをしてもらってはいるのですが・・・その、畑仕事は問題ないのですが・・・。」

村長はハンカチを取り出して額の汗を拭き出した。

「働く場所が少ない、ということなんですね。」

「ねえ、ダーリン。仕事があるのに働く場所が少ないってどういうこと？」

「ヴァイスは元々５０人弱で働くことを前提に作られた村で紙を作る製作所もそれなりの大きさしか無いんだ。まあ、倍の１００人位ならまだ問題なかったのだろうけど、さらにその倍の２００人弱が働くとなると手狭になったんだろうね。畑は広げればなんとかなるけど、製作所の道具の方はそうはいかないしね。」

「はい、そうなのです。村にやってくる若者は皆やる気に溢れているので今の仕事が少ない現状は不満なのかもしれません。最近では

紙をこす為の道具の使う順番で言い争いになることもありますし。」

「それに仕事が少ないってことはそれだけ取り分も少ないっていうことだからね。」

村長ははぁとため息をついた。

「そうですか。それではやはり製作所を大きくするほかないようですね。」

「してくださるのですか！？」

村長はガタッと椅子から立ち上がった。

「ええ。それにそろそろ紙の販売をうち主体から村主体に移行させようと考えていたところですから。」

「おお！それが次の段階なのですね！」

「はい。すぐにというのは難しいかもしれませんが、徐々に移行させようと思います。製作所は今の場所から村の数リーグ離れたところに川があるのでそこの近くに移転させようかと思います。さすがに大きくなると井戸からの水では心もとないですからね。ただし川の水はそのまま使うのではなく布で濾すなどしてなるべく不純物が紙に混ざらないように注意してくださいね。」

「はい！徹底させましょう！」

「さらに今回はうちのメイジに道具を作って貰いますが、次からはこのような自体に村自体が対応出来るように紙をすくう為の道具を

修理できたり新しく作れたりする職人を育成することも必要になりますね。」

「分かりました。村の手先の器用なものを数名集めて研究させます！」

「あと・・・。」

「まだあるのですか！？」

「紙の販売を村主体にすることは商人との交渉を村が行うことになるのですがその為には文字の読み書きだけでなく計算などが必要になると考えられます。」

「確かにそうですね。しかし文字の読み書きは出来ても計算まで出来るものはほとんどいませんよ？」

「そうですね。これまではこの作物をこれだけ渡したらこれだけのお金になるとおおよそで行なっていたことをきちんと計算して出さないといけなくなります。しかし計算を出来るものがほとんどいない。・・・よって学校を建てたいと思います！」

「「「「学校！？」」」」

俺のこの発言には村長だけでなくキュルケ、カトレアさん、ルイズまでも驚いて声を上げた。

まあ事前に父さんに相談したときも驚いていたししょうがないのかな。

「が、学校というのは、あれですか？貴族様が通っておられる、あの学校ですか？それに私たち平民が通うということなのですか！？」

村長は声を震わせながら俺の言った言葉を確認した。

「いえいえ、あのしょうに立派なものではなくもっと小さいものですよ。教えるのは勿論魔法とかではなく、文字の読み書き、計算、簡単な歴史、一般的な社会常識と商人には貴族もいるかもしれないので礼儀作法ですかね。あ、将来的には商人を輩出してみるのも面白いかもしれませんね。」

（まあ学校というよりも昔あった寺子屋みたいなものだな。）

「はぁ・・・。その学校には私達も通うのですか？」

「そうですね、基本的には通って欲しいですね。目指せ！識字率１００％！ってね。学校のクラスは主に２つで１つは村長のような大人が通うところ。」

「もう１つはなんですか？」

「もちろん子供が通うところですよ。ただし大人とは理解力の差があると思うので大人のクラスに比べて授業の進行速度はゆっくりめになると思いますけど。」

（差詰め大人クラスは専門学校で子供クラスは小学校かな。）

「なるほど。しかし学校に通うとなるとかなりのお金が必要になるのでしょう？正直な話、平民にはそこまでのお金を出すことは出来ませんよ？」

「いえ、この学校はこの村に住んでいる限り基本的に無料としたい

と思います。」

「「「「え!?」」」」

またも村長、キュルケ、カトレアさん、ルイズが声を上げた。

まあ魔法学院は入学金や授業料のほかに莫大な金額の寄付を行わないといけないからな。

・・・仮に貴族でもこのお金が払えないところは学校にもいけないらしい。

「しかしそれでは校舎を立てる費用や維持費、講師の給料などはどこからでるのですか!?」

村長は少し興奮、いや混乱しているのかな、少し声を荒げて言った。

「校舎の建設費はこちらが出します。それくらいの先行投資は行いましょう。それから維持費や講師の給与は村の税収から出すようにします。」

「そ、それは・・・税率が上がる、ということですか!?それはいくらヴァルムロート様の決定でも認められません!」

村長はダン!と机を叩いた。

「落ち着いて下さい。そもそも税率は今まで通りですから。」

「そ、それではどうやって学校のためのお金を捻出するのですか?」

「それはですね。これまでは作った紙はうちが買い取ってそれから他の貴族に購入してもらったり、一部の商店で扱ってもらったので、紙から得た収入は村の税収とは別でした。しかしこれからは村主体で紙を販売し、その収益の一部を税として納める形になるのでこれまでの税収より多くなっているはずです。そこから必要な維持費や講師の給与を出して、残ったものを税収として納めてもらうので税率自体は同じですよ。ただ僕としても税収は多い方がいいのでしっかり稼いでくださいね。」

「はい！ありがとうございます！・・・それで講師の方はどうするのですか？」

「そうですね。とりあえずうちのものを臨時講師として派遣しますがどこかに良い人がいれば村に移住してもらって講師をして欲しいとこですね。」

「分かりました。私の方は無いのですがヴァルムロート様は何か他にあるでしょうか？」

「いえ、僕の方も今回はこれくらいですかね。」

そう言いながら俺はトントンと報告書をまとめながら言った。

「それでは今回もありがとうございました。そして今回は紙製作所の移転工事や商会との連絡、学校建築などいろいろよろしくお願いします。」

「ええ。任せて下さい。しかし私が出来るのはお膳立てまでなのでそれ以降は村の頑張りに係っていますよ。」

「はい！御期待に添えるように精一杯頑張ります！」

話し合いが終わり、冷めてしまった紅茶を入れ直して貰い、一休みしてから帰ることにした。

「しかし学校を立てて、さらに村の税収から出ているとはいえ実質無料とは・・・失礼ですがどうしてこのようなことを考えたのですか？」

紅茶を飲みながら雑談している時に村長が先程の学校の話題を出してきた。

「え？だって今回必要になったでしょう？それに学があるとその人の自信に繋がってくると思うんですよね。」

「確かに今回は助かりましたが・・・。そのようなものなのですか？いままほとんど畑仕事だけで勉強とはかけ離れた生活を送ってましたからあまりそういうことを考えたことは無かったですね。」

「そうかもしれませんね。まあ、貴族の戯言だと受け流して良いところだけ受け取っておいて下さい。」

紅茶も飲み終えてそうそうに俺達は家に帰ることにした。

村の入り口まで見送って貰い、待たせていた馬車に乗り込んだ。

帰りの道中は危うく質問攻めになるところだったが、またクイズ形式のように質問を質問で返して、このようなことをするのは本当はよくなのだけど、やり過ごした。

なんだかまたルイズがいじられていたような気がした。

（すまんなルイズ。）

「・・・それにしても先生決めないとな。臨時は家の人からだれか派遣するとして本採用をおいおい考えていかないとな。」

「誰か良い人いないかな・・・。」

帰省＋誕生会＝挑戦×2（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

正直決闘の話は初めは書く気なんて微塵もなかったというかプロットの時点で無かった。

・・・が、ゲルマニアの貴族って色恋沙汰に積極的だしあんな条件だしたら1人くらいダメ元でやってきそうな奴とか出そうだな～とか思ってたら書かずにはいられなかった。

・・・あと今回の話一回ほとんど消えた・・・。

タブを変えようと思って操作したら間違えて消した。慌てて復帰させたけど途中で保存してなかった。ｏｒｚ

だからという訳ではありませんが、テンションだだ下がりで書くペースも落ちまくった。

ゲームで何度も同じ過ちを繰り返しているのに・・・。

途中のセーブって大事ですよね。

あ、次で修行の話が終わりますね。

ご意見・ご感想があれば書いてみてください。

諸刃の剣は代償が大きいほど強いのか？（前書き）

こんにちは。こんばんは。

今回は訓練話の最後です。
まあ最後の仕上げですからテスト週間と期末テストだとでも思って下さい。

俺は魔法の訓練の為に練習場にやってきた。

「今日も寒いわね。しかし寒いからと言って手抜きはしませんわよ。」

そう言っているカリンさんは男物の厚手のコートと手袋で防寒対策はバッチリだ。

まあ俺も同じような格好なのだけど。

「はい！でも最近は少し暖かくなりましたね。そういえばもうすぐカトレアの誕生会ですね。」

季節は夏が終わり、秋が過ぎ、冬も山場を越えて段々と暖かい日が増えてきた。

数日前までは吐く息が白くなっていたが、今はそれもない。

模擬戦で寒い中『トルネード』の魔法を食らうと熱がどんどん奪われるので本っっ当に寒かった！

凍死するかと思う位ヤバかったね！

なにせ模擬戦中俺は『トランザム』ありきの戦闘スタイルだから上着着たままだと上着が焦げたり、ふさふさした毛のファーとかいうのが燃えたりしたので寒いけど脱がないといけなかったり、去年も訓練中はもちろん寒かったけど今年の方がカリンさんの攻撃が激し

かったような気がするし。

・・・しかしそれももう終わりだ。

あと1ヶ月もすれば気温、天候共にほとんど春といってもよくなるだろう。

と俺がこの冬の厳しさについて思い出しているとカリンさんが一言、

「今日からあと1ヶ月間毎日模擬戦を行いますわよ！」

「はい！・・・て、はい！？」

俺はカリンさんの言葉に条件反射のように返事をしてしまったが、カリンさんの言葉を認識したがすぐには理解出来なかった、いや・・・したくなかった。

「え！？あ、あの・・・どういう意味ですか、師匠？」

「意味とは？言葉通りの意味ですわよ？もう基礎的なことはほとんど教えたので後はそれの反復練習と応用だけですからね。そこでこれまでの訓練の成果を確認することと応用するなら実践の中でした方が身になりますから、今日から魔法学院の入学直前まで私と模擬戦を行いますわよ。いいわね？」

俺はもしかしたら別の意味かもと淡い期待を抱いて聞いてみたが、やはり言葉通りの意味だったようだ。

これは学校でいうならテスト週間、いやすでに期末テスト状態か・・・しかし。

「師匠、模擬戦するのは分かりましたが1ヶ月というのは長くないですか？」

「そうかしら？それに『ブリズ』を見ても期間が長いといえるのかしら？」

そういうとカリンさんはフフッと不敵に微笑んだ。

「師匠、『ブリズ』ってなんですか？」

俺は聞きなれない言葉が出たのでカリンさんにそれを訪ねてみたが、見れば分かるの一点張りでさっさと『フライ』を使って特別練習場の方に飛んでいってしまいました。

「『ブリズ』？そよ風って意味か。名前からして風系統の魔法か何かかな？」

俺は正体不明の魔法について考えながらカリンさんの後を追った。

特別練習場に着くと中央にカリンさんがいたのでその近くに降りた。

「来ましたね。それでは今日からの模擬戦の説明をしますよ。」

「え？いつもと同じではないのですか？」

カリンさんが“今日からの”と模擬戦の頭に付けたので俺はこれまでのカリンさんが「今日はここまで。」というまで続く模擬戦とは違うことをすることに驚いた。

「ええ。これまでは魔法が当たっても続けていましたが、本来魔法は一撃必殺！本気で放てばただではすまないでしょう？」

確かに今まではお互いに威力をかなり抑えて魔法を放っていたと思う。

・・・俺の魔法が直撃したことはほとんど無かったが。

「はい。そうだと思います。」

「そこで今日からの模擬戦はどちらかに一撃当たればそこで終了とします。魔法、剣なんでも構いません！ただし、威力はこれまで通り抑えることを忘れないように！威力を抑えることも魔法をコントロールするいい練習ですからね。」

「どちらかが一撃ですか・・・わ、分かりました！」

恐らく本当の戦い、命を懸けたものならば本気の一撃が致命傷になるだろうというのは想像出来た。

「よろしい。では始めますよ！」

俺とカリンさんはお互いに距離を取った。

俺は素早く上着を脱ぐと『レビテーション』を使って練習場の端まで上着を飛ばした。

「それでは私は先程言ったように最初から『ブリズ』を使いますからね。よく見ておきなさい。」

カリンさんが素早く小さな声で何かのスペルを唱え終えたであろう瞬間、練習場の中の風の流れが変わった。

さらにカリンさんの纏う雰囲気が変わったことに気がついた。

俺が斬艦刀を両手で握り直して正面に構えたのを見てカリンさんはにこりと笑うと俺の方に杖を向けて何かを放ってきた。

俺はこれまでの訓練から不可視の攻撃であろうとも気配を感じることが出来るようになっていたのでそれを『レビテーション』を使って横に滑るように飛んで避けた。

なんだ普通の『エア・ハンマー』かと思った次の瞬間、先まで１０メイル離れたところにいたはずのカリンさんが俺のすぐ横にいた。

「な！？」

何が起こったのか分からなかったが俺は左手を斬艦刀から離し右手だけで横に左から右に払いながら体をカリンさんの方に向けると同時に距離を取ろうとそのまま『レビテーション』で後ろに飛んだ。

しかしカリンさんは俺の斬撃を軽く躱し、さらに目にも留まらぬ速さで俺の左側を通って背後に回った。

俺はそれに反応出来ずに地面に足が着いた同時に背中に杖の先が押し当てられていた。

「ここまでですわね。」

後ろからカリンさんの声が聞こえた。

「・・・はい。参りました。」

俺がそう答えるとカリンさんは俺の背中に押し付けていた杖を下ろした。

俺はカリンさんの方に向いた。

「師匠！もう1回お願いします！」

「ええ、勿論いいわよ。」

俺が再戦を頼むとカリンさんはすぐに承諾してくれた。

再びお互いに距離を取った。

「それでは始めますよ！」

カリンさんが開始の合図を送ってきたので俺も「はい！」と返事を返した。

カリンさんが先ほど行なった高速移動がおそらく『ブリズ』という魔法だと検討をつけ、速さには速さで対抗する他ないと考えた。

つまり俺が選ぶことの出来る選択肢は1つだ。

「『トランザム』！」

さらに『フライ』を使い、カリンさん目掛けて一直線に飛んだ。

「フフッ、そう来ると思ってましたよ。」

カリンさんはすでに魔法を唱えていたようで先程のように纏う雰囲気が違っていた。

カリンさんに近づいた俺は斬艦刀を右上から左下に斜めに振り下ろしたがカリンさんは素早い動きで後ろに避けた。

逃すまいとカリンさんの後を追った。

しかしその行為で俺はあることに気づくことになるった。

俺の大まかな観測により『トランザム』状態の『フライ』はおよそ時速１００キロで飛ぶことが出来ているはずだ。

しかしその速度を持ってしてもカリンさんに追いつくどころか逆に離されていた。

「・・・師匠の『ブリズ』は俺の『トランザム』よりも速いということなのか！？」

前にいるカリンさんの杖に黄緑色の光る剣が現れた。

俺がカリンさんが『ブレイド』を使ったと考えたと同時にカリンさんはいきなりこちらに向き直り向かってきた。

カリンさんが杖を俺から見て右上に構える動作をしたので俺は咄嗟に斬艦刀を横にして振り上げた。

カリンさんとすれ違う時にガツンッと斬艦刀を持った両腕に衝撃が走り、なんとか攻撃を防ぐことが出来た。

「な・・・なんとか防げたか。」

「こら！一度攻撃を防げたからといって油断しないの！」

という声と共に背後から頭を軽く小突かれた。

「う、これも一撃ですか？」

「そうですわよ！油断大敵ね。」

「・・・はい。」

俺が降参して『トランザム』を解き、ふたりとも地面に降りた。

俺がカリンさんに『ブリズ』という魔法は高速移動を可能にする魔法なのですかと訪ねてみた。

「そうですよ。この素早く動く魔法が『ブリズ』という魔法ですわよ。この魔法はスクウェアスペルなのですがただ早く動けるだけなんですけどね。」

とカリンさんが魔法について説明してくれた。

「そうなのですか？でもすごいですよ！僕も『トランザム』を使え

ばかなり速いとおもっていたのですがそれよりも速く動けるとはびっくりしました！僕の『トランザム』と同じようなものですかね？僕はそのような魔法を聞いたことが無いのですがどこで習ったのですか？もしかして・・・師匠が考え出したのですか？」

俺は少し興奮気味に言った。

「まあまあ、落ち着きなさい。まずこの魔法はさっきも言った通り、ただ早く動けるだけ、ですわよ。ヴァルムロートの魔法のように魔法の威力を上げることはありませんわ。その代わり使用後に体が痛くなったりすることもありませんけどね。この魔法は私が考え出したものではなく、私の実家に古い書物があってそこに記されていたものを再現してみたに過ぎません。・・・まあ、名前が無かったので私が『ブリズ』と名付けたのですけどね。」

「そうなんですか・・・。その師匠は『ブリズ』をどのくらいの間使っていられるのですか？また魔法を使っている間に別の魔法は・・・使っていましたね。どれくらいのものが使えるのですか？」

今の俺が『トランザム』を使っていられるのは隊長が万全の状態で3分とちょっとだ。

さらに他の魔法も併用して使用するとそれだけ魔力を使うのでどんどん使用できる時間は減っていくことになるのだけどね。

さらに『トランザム』を使っているときはスクウェアスペルでも使用できるのだがさっきのように空中戦ですでに『フライ』を使っている時は他の魔法が使えないのが難点で接近戦は斬艦刀を使うことで補っているがどうしても中遠距離の攻撃ができないのが問題だ。

その点カリンさんが使っていた『ブリズ』は飛んでいる時に『ブレイド』の魔法を使っているところから察するに飛ぶのに『フライ』を使用せずに飛んでいる時であっても他の魔法が使える可能性が高いので、さらに使用時間まで長かったらこちらとしては打つ手無しといったところなのだが。

「そうね・・・。最近は全く使っていないからどうかわかりませんが、これまでの経験から言うと１０分以上は使えるのではないかしら？『ブリズ』を使っている間はラインスペル位までしか使えないわね。簡単そうに見えてかなり細かな魔法のコントロールが必要とされているのよ。そうそう衛士隊にいた時に何人かに教えたのだけど誰も習得出来なかったわ・・・なぜかしらね？」

『トランザム』よりもはるかに使用時間長いとか・・・俺オワタ！

「・・・そうですか、師匠しかその魔法を使えないのですね。因みにその魔法をワルド男爵には教えたのですか？」

（他に使える人がいないのが不幸中の幸いか・・・。こんなのポンポンやってこられたら対処出来ないところだったよ。・・・勿論ワルドには教えてないんだよね？）

「いいえ、教えてはいないわね。でもどうしてそんなことを聞くのかしら？」

「いえ、ワルド男爵は優秀な風メイジと聞いたので同じどうなのかなと思いまして。」

（のちのちワルドが敵になるかも、とは言えないよな。）

「そうね。教えてもいいのだけど、彼なかなか時間が取れないみたいね。ルイズの許嫁なのだからいくら衛士隊が忙しくてもルイズの

誕生会位顔を出してもいいと思うのですけどね。しかし彼には彼の事情があるのでしょうから無理強いはできませんわね。」

この約2年間ヴァリエール家に居候しているので勿論カトレアさんの他にもルイズやエレオノールさんの誕生会にも参加した。

その中でルイズの婚約者であろうワルドを一度も見かけなかったし、確か幼馴染という設定のあるアホリ・・・アンリエッタも見かけなかった。

ワルドは衛士隊が忙しいという名目でお祝いの手紙やプレゼントを郵送してきてはいたようだが。

アンリエッタの方は母親がまだ喪に服してしるから来れなかったのか？

あ、あと家の誕生会では極普通だったのだけどこっちでは誰もルイズやエレオノールさんに交際を申し込む奴がいなかったんだよね。

やっぱりゲルマニアとトリステインとの違いなのかな。

「そ、そうですね。仕事も大事ですよね！」

（ふう、ワルド強化フラグは建っていなかったか。良かった良かった。）

ワルドが下手に強化されていないようで俺は安堵した。

まあアニメでもそんなことしてないしね！

「それでは今日はここまでですかね。ありがとうございました！」

俺はペコリと頭を軽く下げた。

「何を言っているのですか？まだ終わりではありませんよ？」

「え？でも最初師匠が１回攻撃に当たったしりたら終了すると言っていませんでしたか？」

「ええ、でもそれは１回の模擬戦のことですわよ。一日最低でも１０回戦は行いますわよ！だから後８回ですわね！」

「ええ！？後８回！？」

「あ！お昼からは剣術の訓練があるので１０回戦終えるかメイドが昼食を呼びに来るまでにしましょうね。・・・ささ！早く位置に着きなさい！」

「はい・・・。」

そしてその後カリンさんが言った通り、どちらかに攻撃が当たるまで行う模擬戦を８回行なった。

後８回も行うにあたり俺はむやみに『トランザム』を使用するわけにはいかなくなった。

その代わりにカリンさんも常に『ブリズ』を使ってくることもなく、時折混ぜてきて緩急に富んだ攻撃を仕掛けてきた。

俺がそれに対抗するにはもはや気配を感じてさらにそれによってカリンさんがどう行動するかを予測して動くしか無かった。

今回は1勝9敗だったが、その1勝もカリンさんの攻撃をやり過ごしてカウンター気味に放った攻撃がたまたまカリンさんのマントをかすったことで得られた勝利とは程遠いものだった。

「今日はこれで終わりですわね。」

「はぁ、はぁ・・・あ、ありがとう、ご、ざいました。」

「明日からもこの調子でいきますわよ。」

「はい・・・。」

俺が息を整えて顔を上げるとカリンさんが何か考えているような顔をしていた。

「師匠?どうかしたのですか?先程の訓練で何か?」

「いえ、そうではありません。・・・ヴァルムロートは今年から学校に通うのよね?」

「はい。ゲルマニアの両親とも話し合ってトリステインの魔法学院に留学することに決めました。」

以前俺とキュルケの誕生会で実家に帰った時に両親と話し、正式にトリステインの魔法学院に留学することが決まった。

原作に関与するならその主な舞台であるトリステイン魔法学院に行かないといけないしな。

ただゲルマニアでもそこそこの地位のある家の息子が他国に留学するには何かしら問題が起こるのでは?と心配したが、それも含めて入学の手続き諸々任せろと両親が言ったのでそれに甘えることにした。

まあ原作的にはいいのかもしれないけど実生活で考えると俺の行為はゲルマニアでコネ作りにくくなるというのが欠点といえば欠点なんだよね。

「そう。・・・キュルケさんもこちらの魔法学院に行くことになるのかしら?」

「ええ。まあキュルケのことですからダメと言っても付いて来るでしょうし。それに今年はルイズも一緒に魔法学院に通うことになりますね。」

「そうね・・・。」

それからカリンさんは腕を組んで少しの間難しい顔をしていたが何かを決心したような顔をした。

「あの・・・」

俺が何について考えているのか聞こうとした時、タイミングよく訓練場の扉が開いてメイドさんが入ってきた。

「奥様、ヴァルムロート様。こちらにおられたのですね。昼食の準備が出来ていますのでお早めにいらして下さい。」

メイドさんは俺達に昼食の用意が出来たことを告げると礼をして戻

っていった。

「昼食が出来たようですわね。早く行かないと冷めてしまいますわよ。」

カリンさんはそういうと『フライ』を使って飛んでいってしまった。

俺の進学のことを聞いてくることといい、今の何かを考えていたことといい一体カリンさんは何を悩んでいるのだろう？

などと思いつつ、俺もお昼を食べに行くために『フライ』を使い飛んで戻った。

そしてそれから1ヶ月間、途中でカトレアさんの誕生会を挟みながら虚無の曜日を除きほぼ毎日カリンさんと模擬戦を行なった。

この訓練によって今まで以上に気配を読むのが上手くなったり、というかならざる得なかったり、いままでは剣術と魔法は別々で行なっていたのを上手いこと連携させることが出来るようになってきた。

因みに俺の勝率は3割がいいところだ。

あとこの期間に風のランクが1つ上がりトライアングルになることが出来た。

これも訓練のおかげだろう。

そして今日が最後の訓練の日だ。

どうして最後かというと明日から魔法学院に向けて出発しなければいけないからだ。

魔法学院に着くのは入学式の前日だということだが荷物の搬入や荷解きなどはすでにヴァリエール家やツェルプストー家で手配したメイドさん達がやってくれているらしい。

そして訓練最後と言うことはこれまでの訓練の成果をみるということでもある。

学校の勉強でいえば期末テストだな。

そして俺の期末テストは、

「ヴァルムロート、今日が最後の模擬戦ですわね。」

「はい！・・・でなんで皆が見てるのですか？エレオノールさんは昨日帰ってきたからいるのは分かります。しかしゲルマニアにいるはずの父さんや母さん、姉さん達までいるのはどういうことなんですか！？」

俺が家族の方に顔を向けると母さん達が手を胸の前で小さく振っている。

もう記憶の遥か彼方だが、前世の小学校の授業参観で同じような景

色を見たような気がする。

どこの親もすることはおなじなのだろう。

「それは今日来たんでしょうね。まあ、いいじゃないですか。最後くらいね。」

カリンさんも同じ母親として母さんの行動を微笑ましく思っているようだ。

「まあ、いいのですが。それで今日はいつものように1回きりの模擬戦を行うのですか？」

「いいえ。今日は以前行なっていたものに戻します。」

「前の形式ですか？それでは師匠がそこまでというまで続くのですね。」

「それはあなた次第ですわね。」

「終わるのが僕次第というのはどういうことですか？」

これまで模擬戦が終わる主導権を持っていたのはカリンさんなのに今回だけは俺にもその権利があるかもしれないというのはどういうことだろうか。

「それはですね。ヴァルムロート！今日は私を倒すつもりで戦いなさい！」

もしこれがアニメや漫画なら後ろに効果音としてバーン！やドン！

があったかもしれないなと俺は思った。

「いえ、いつもそう思って戦ってますけど？」

「そうではなくて、今日は魔法の制限を外して全力で行いなさいということですわ。これは模擬戦ではなくどちらかと言うと実戦に近いものですわね。勿論私は殺さない程度にしますけど。」

「しかし師匠！師匠はある程度手加減してくれるそうですが僕が全力で戦えばいくら師匠にも万が一ということがあるのではないですか？」

なんだかカリンさんは物騒なことを言っているが俺も全力全開で戦ったらカリンさんも無事では済まないのではないだろうかと思い、そのことをカリンさんに言った。

「その点は大丈夫ですわ。・・・『ユビキタス』！」

カリンさんは『ユビキタス』でもう1人のカリンさんを偏在させた。

「私が模擬戦を行うのでヴァルムロートも心置きなく実力を発揮しなさい。分かりましたわね？」

と偏在のカリンさんが言った。

「それにヴァルムロート、あなた全力で試したいことがあるのでしょう？知っていますわよ、あなたがたまにこそこそしているのを。」

と本体のカリンさんが言った。

（ありゃ、バレてたのか・・・。あれは強力すぎるというかいまいち威力が分からないから使い所がないと思っていたんだけどそれもお見通しなのか？）

「・・・分かりました！全力で戦いたいと思います！」

俺が返事をすると2人のカリンさんは満足そうに頷いて本体のカリンさんは偏在のカリンさんと2，3言葉を交わして観戦席の方に行った。

「『ユビキタス』で出した偏在は出した本人と全く同じということは知っていますわね？」

「はい！」

「よろしい！では位置に着きなさい。」

そして俺と偏在カリンさんはお互いに立っていた位置から5メイル位離れた。

俺は杖を斬艦刀に仕込み、両手で持ち胸の前で構えた。

観戦席ではこちらにやってきたカリーヌにツェルプストー辺境伯が椅子から立ち上がって尋ねていた。

「カリーヌ夫人、ヴァルムロートは訓練でどれくらい強くなりましたか？」

「そうですわね・・・。その答えはいまから始まる模擬戦を見ればお分かりになるとおもいますわ。」

「そ、そうですか。」

そう言われたツェルプストー辺境伯はまた椅子に座り、カリーヌもヴァリエール公爵の隣の椅子に座った。

そして皆が固唾を飲んで模擬戦が始まるのを待った。

「準備はいいようですわね！では始めますよ！」

偏在カリンさんが言ったのを合図にお互いにスペルを唱え始めた。

俺は早さを重視し、ドットスペルの『ファイアーボール』を連発して放った。

そして俺は距離を詰めるために『ファイアーボール』を放った直後に偏在カリンさんに向かって走りだした。

どうして距離を詰めるのかというと俺は訓練のおかげで相手の魔法をおおよそ避けることが出来るようになっているし、それを俺に教えたカリンさんの偏在も同じように魔法を察知して避けることが出来るだろう。

お互いがお互いの魔法を避けることが出来るので遠距離からの攻撃ではジリ貧なのだ。

遠距離からの攻撃がダメなら近づく他に方法はないだろう。

実際これまでの模擬戦で接近した方が勝率が良かったと俺は思った。

偏在カリンさんは俺が最初に放った『ファイアーボール』を横に移動することで交わしたと同時に詠唱が終わったのか偏在カリンさんの周りに氷の矢がいくつも現れた。

偏在カリンさんはその氷の矢を飛ばして向かってくる『ファイアーボール』を全て撃ち落とし、さらにそのまま俺に向かって飛ばしてきた。

「くっ！」

俺はこれまで偏在カリンさんに向かって一直線に走っていたが慌てて左側に避けた。

右手に偏在カリンさんを見るように大きく円を描くようにしながらこちらに飛んでくる氷の矢を避け、当たりそうなものは右手に持った斬艦刀で叩き落としながら『Ｉ・フィールド』のスペルを唱えた。

そして『Ｉ・フィールド』を発動させた俺はまたも一直線に偏在カリンさんに向かっていった。

向かってくる氷の矢が『Ｉ・フィールド』の表面を滑るように俺を避けた。

現在の俺は風メイジとしてはトライアングルなので風魔法としての『Ｉ・フィールド』はなかなかの防御力を持っており、手加減したカリンさんの攻撃ならある程度防ぐことが出来るようになった。

・・・まあ手加減してるといっても並のスクウェアクラスの力くらいは出していると言っていたけど。

そうして距離を詰めた俺はそのまま偏在カリンさんに斬りかかったが、偏在カリンさんは『ブレイド』を発動させてそれを受け止めた。

偏在カリンさんの口が少し動いたかと思うと突然風が襲い、俺は偏在カリンさんから離されてしまった。

さらに偏在カリンさんが杖をこちらに向けてスペルを唱えると見えない攻撃を行なってきた。

見えないがしかし気配を僅かに感じることが出来たのでその攻撃を『レビテーション』を使って左右に避けながら俺は『ヴェスミー』のスペルを唱えた。

攻撃が当たらない相手に接近できない時はどうすればいいのかと以前俺は考えたことがあった。

その時キュルケが「1発だから避けられるんじゃないの?もっといっぱい避けられないくらい撃てばいいんじゃない?」と言い、俺もそれは一理あるかもと思ったものだ。

俺の腰の左右に水が集まって玉が出来た。

そしてここからは俺の攻撃の順番と言わんばかりに両方の水の玉からいくつもの水の弾をガトリングのように連続で打ち出した。

偏在カリンさんは初め『エア・シールド』を使って水の弾を防いでいたが、俺が右の水の玉からは常に水の玉を連続発射し、左の水の水の弾から貫通力に特化した水の弾でその防御を貫いたことで『エア・シールド』を解除して『フライ』を使い飛んで避けることにし

たようだ。

俺は『フライ』で飛んでいる偏在カリンさんを追いかけるように水の弾を発射したが突然のスピードアップにより捉えることが難しくなった。

「『ブリズ』か！・・・うわっ！うわわ！」

背後に気配を感じたので咄嗟に横に飛んで避けると地面がドンッという音と共に砂煙を上げ、さらに四方から時間差で何か飛んでくるのが分かった。

右から来るものは後ろに避け、左後の上から来たにものは身を屈め、正面から来たものは右に避けたりととにかくいろんな角度からくる攻撃を『レビテーション』と体術を使い避けまくった。

次第に砂埃で視界が奪われていったが元から見えない攻撃なのであまり関係は無かったが心理的に相手が見えなくなるのは困った。

（偏在カリンさんが高速移動しながら魔法を撃ちまくっているのか。いつまでも避けていられないよな！）

「・・・『トランザム』！」

俺は砂埃の中から一気に飛び出ると偏在カリンさんに向けて『ファイアーボール』を数発放った。

そして俺自身は『フライ』を使って『ファイアーボール』を追い越しつつ偏在カリンさんに向かった。

偏在カリンさんは『ファイアーボール』を避けながら向かってくる

俺に対して『ブレイド』を発動させた。

俺と偏在カリンさんが交差する時、俺は斬艦刀を上から振り下ろし、偏在カリンさんは左下から『ブレイド』を発生させた杖を振り上げた。

「はああ！」
「はっ！」

斬艦刀と『ブレイド』が交わり、そして離れた。

俺は通り過ぎた偏在カリンさんの方に向き直り、また偏在カリンさんも俺の方に向かって飛んで来ていた。

それから数回切り結んで離れ、偏在カリンさんの放つ魔法を避けながら近づいて切り結ぶということをした。

この特別練習場は通常の練習場よりも広く作ってるけれどそれでも今の俺と恐らく偏在カリンさんも同じ事を思っているだろうがとても狭く感じた。

観戦席ではカリンさんを除いた全員が目の前の高速戦闘を見て驚いた顔をしていた。

「まあ、ヴァルは昔からすごかったけど今はさらにすごくなったわね。」

母さんがそういうと他の皆は頷くしか無かった。

そして右に左に移動する2人の動きを皆真剣に見つめていた。

その中で俺はどうすれば偏在カリンさん、しいてはカリンさんを上回れるのかを考えていた。

今このとき俺がカリンさんに負けている要素はいろいろあるがもっとも顕著なものはスピードだろう。

恐らく力ではこちらが優っているだろうからまともに斬撃を当てる事が出来ればあの偏在カリンさんを地面に叩きつけることは出来なくても地面に下ろす位は出来るかもしれない。

飛んでいるままだと他の魔法が使えないのが俺の弱点だしな。

そこで偏在カリンさんのスピードを殺すために1つ案を考え、実行することにした。

俺は一度『フライ』を切って地面に降り、『ファイアーボール』を偏在カリンさんには全く当たらないがその周りに行くように10数発放った。

そしてまた『フライ』を使い『ファイアーボール』を追い越して偏在カリンさんに向かって飛んだ。

「『伸びろ！斬艦刀』！はああ！」

俺がキーワードを言うと斬艦刀の鍔が開き、持ち手が倍近くに伸び、刀身が普段の60サントの大きさの刀状から長さ2メイル幅30サントにもなる大剣状に変化した。

この斬艦刀の大剣モードは重さは普段と変わらないのだが大きくなるがゆえに重心が変わり普段の筋力では自由に振り回すことが難しいが『トランザム』状態ならば今の俺でも自在に扱うことが出来るものだ。

俺は向かう途中で斬艦刀を普段の刀モードから大剣モードに変えて偏在カリンさんに上から振り下ろした。

偏在カリンさんは今度は受け止めようとせずに横に飛んで避けたが、その先に先程放った『ファイアーボール』の1発があり偏在カリンさんはそれを避けることになった。

掛かった！とばかりに俺は偏在カリンさんに向かった。

スピードでは『トランザム』状態の『フライ』では『ブリズ』に敵わないがそれは同じ軌道を取った時の話だ。

そこで俺はわざと偏在カリンさんの周りに『ファイアーボール』をばらまいて避けた時の障害になるようにした。

まあうまくいくかは賭けだったがあれだけ放ったのだし上手くいって良かったと俺は思った。

偏在カリンさんが『ファイアーボール』を避ける一瞬の減速により俺は一気に追いついて右上から左下に自分の体が回転するくらいの勢いで振った。

「くっ！」

しかし偏在カリンさんは素早く『エア・シールド』を発生させ俺の斬撃を防いだ。

「でやあああ！！」

だが俺はそんなことお構いないに全力で振り抜いた。

偏在カリンさんはそれに耐えられなかったのか吹き飛ばされ、そのまま地面に叩きつけられた。

地面を転がり壁にぶつかった後、ムクッと偏在カリンさんは壁い手を当てて起き上がった。

「アイタタ・・・。『ブリズ』の制御を失敗しちゃったわね。」

偏在カリンさんは服に着いた砂をパンパンとはたいて落としながらそう言った。

「あら？マズイわね・・・。さっきの衝撃が思いの外強かったのかしら？後少しで消えそうね。ヴァルムロート！次の魔法で決着を付けるわよ！降りてきなさい！」

どうやら偏在カリンさんはさっき地面に叩きつけられたダメージで実はかなりやばい状態になっているらしいが、こちらから見るとそのように見えないのは偏在が本体よりも脆いせいだろうか？

例えるならば偏在は能力値が本体とほぼ同じでも防御力と最大ＨＰが大幅に低い、みたいな？

このまま逃げてもいいんだろうけどその場合、今の偏在カリンさん

が消えた後にカリンさんが新たな偏在カリンさんを導入してくるかもしくは本人が来るかだろうけど、どちらにせよ終わった後に想像もしなくないようなことが待っているに違いないからここは素直に従っておこう。

などと考えた俺は地面に降りた。

「私がそろそろ消えそうなので次の1撃に全精神力をかけるわよ！一応死なないように手加減はしてみるけれど何かあればすぐにカミーユが来るはずよ！だから思いっきりいくわよ！」

「え？それって手加減してないんじゃ・・・。」

そんな俺の抗議も虚しく偏在カリンさんはスペルを唱え始めた。

これはマズイ！と俺も一番強いと思える魔法のスペルを唱え始めた。

唱え始めたのが早かった偏在カリンさんの方が先に魔法を発動した。

偏在カリンさんの前に直径１０メイルを超す程の大きな風の渦が俺の方に口を開けて迫って来た。

その横になった竜巻のようなものは地面を抉りながら着実にこちらに向かってくる。

背中に冷や汗が流れた。

逃げ出したいでもこの魔法の威力を試してみたいという気持ちのほうが強かった。

そして・・・

「あら？偏在の私は結構過激な魔法を繰り出したわね。」

と観戦席にいる本体のカリーヌが言った。

「過激な魔法とはあれはどういう魔法なのですか？」

ヴァルムロートの母親の1人がカリーヌに尋ねた。

「あれは『カッター・トルネード』といってスクウェアスペルの魔法なのですが、あの私以外と全力で魔法を出してるわね。」

うーんと少し困り気味な様子でカリーヌは答えた。

「カリーヌ！お前の『カッター・トルネード』は普通ではないだろう！昔オーク鬼討伐であれを使って小さな村を1つ更地にしたのを忘れたのか！」

ヴァリエール公爵が慌てて椅子から立ち上がった。

「あら？あなたなにをするつもりなおかしら？」

「何ってあれは危ないから止めさせるんだ！」

「そうかしら？ヴァルムロートは諦める気は無いみたいよ？それに今から言ってももう遅いわよ？」

「何！？」

全員がヴァルムロートに視線を向けた。
そこには大剣モードの斬艦刀を頭上に掲げるヴァルムロートの姿があった。

俺のスペルが終了した。
ヤバイ竜巻みたいなものはもう目の前まで迫って来ている。
俺は斬艦刀を頭上に掲げ、魔法を発動した。

「トランザム・ライザあああああああ！！！」

その瞬間斬艦刀を包む横幅約５メイル、そして長さ１００メイル位の大きなビームサーベルが出現した。

「うおおおおお！！！」

俺はそれを真っ直ぐ振り下ろした。

『トランザム・ライザー』は偏在カリンさんの放った『カッター・トルネード』とその延長線上にいた偏在カリンさんもろとも瞬時に消し飛ばした。

『トランザム・ライザー』が発動していたのはほんの数秒だったが、そこには『カッター・トルネード』のものよりもさらにえぐれた地面と何人ものスクウェアランクの土メイジにより幾重にも『固定化』と『硬化』がかけられた訓練場の壁がものの見事に破壊された痕だっ

た。

「も、『戻れ、斬艦刀』。はあ、はぁ・・・。」

俺は『トランザム』を解除し、斬艦刀を刀モードに戻した。

俺は斬艦刀を地面に刺して体を支えようとしたがそれでは支えきれず地面に膝をつき、さらに左手を地面についてそのまま地面に倒れないように体を支えた。

『トランザム・ライザー』はその強力、いや強力すぎる威力と引き換えに仮に魔力が満タンであっても１０秒も使用できないような代物でその魔力消費は他の魔法の比ではないものだった。

俺の体は『トランザム・ライザー』によりほとんど魔力を消費し、さらに大剣モードの斬艦刀を思い切り振り回したせいか体の特に上半身に痛みが走った。

声がするなと思ってそちらをみると皆がこちらに来るのが見えた。

家族からすごく強くなったとかよくやったとか弟子にしてよかったとかいろいろ言われたが、ものすごく魔力を消費したことと疲れたことにより抗えない睡魔が襲ってきた。

父さんに寝室まで運んでもらい、シーツにくるまった時に珍しく素直に父さんにほめられたような気がした。

その日の夕食は明日から魔法学院に出発することを祝したささやかなパーティーが開かれる予定だったのだが俺はその間ずっと寝ていたので出られなかった。

次の日、俺は睡眠時間も十分だったこともあり最高の目覚めを迎えた。

ただまだ魔力はゲームのように1晩寝ただけでは回復し切らないのが残念だが。

家の家族も昨日はヴァリエール家に泊まっていたようで直食を皆で食べた。

朝の会話は昨日の模擬戦とこれからの魔法学院の話が全てだった。

そして出発の時がやってきた。

馬車は1台用意してあり、その前後に護衛としての兵士が馬の脇で待機していた。

そしてトリステイン魔法学院にいく者が馬車の前に並んだ。

馬車の前には俺、キュルケ、ルイズそしてなぜかカトレアさんもいた。

「え？カトレアさん！？カトレアさんも魔法学院に入るのですか？」

俺はついカトレアさんを2度見してから聞いてみた。

「ええ！私学院って初めてですから楽しみですわ！」

カトレアさんは嬉しそうに答えた。

「キュルケ、ルイズ！カトレアさんが学院に行くって知ってたのか？」

また俺だけ仲間はずれなのかと思い、２人に聞いてみた。

「知ってたといえば知ってたけど、まあ私が聞いたのは昨日だけどね。ダーリンは寝てたから知らないだろうけど。」

「そうなんですお義兄様。私も昨日のパーティーで聞いて驚きました！なんでも１ヶ月くらい前に急に行くことになったとかで、どうしてですかね？でも私はちぃ姉様も一緒で嬉しいです！」

キュルケが答えた後にルイズがどこで聞いたかを教えてくれた、後半はカトレアさんの方を向いていたけどね。

「そっか昨日のパーティーでそんな重大発表があったのか・・・。」

そんなことがあったなら起こしてくれればよかったのにと言うと、気持ちよさそうに寝ているのを起こすのが忍びなかったと２人は答えた。

俺は見送る側にいるお義父さんとお義母さんに近づいた。

「でも、本当によかったのですか？」

と小さな声で２人に聞いた。

「ま、まあいいのではないかな？」

「そうですわよ。それに魔法学院に入るのに年齢制限は無いのですから。」

「・・・そうですね。」

2人の反応を見て、このことを考えたのは恐らくお義母さんの方だろうと俺はなんとなく思った。

まあここでぐだぐだ言ってももう遅いのでカトレアさんも魔法学院に行くことを割り切ることにした。

そして俺達4人はそれぞれ家族と言葉を交わして、ハグをした。

俺は家族から「気をつけてね。」という一般的で嬉しいものから「魔法学院に行っても訓練を続けて、夏にはどれくらい強くなったか模擬戦をしますからね。」「もし決闘申し込まれてもちゃんと手加減をするのよ。」などと俺いまから勉強しに行くんだよね？と少し不安になるような言葉をもらったりした。

「「「「では、行って参ります！」」」」

元気よく挨拶をして俺から順番に馬車に乗り込んだ。

馬車の操車がビシッと馬の手綱を引くとゆっくりと馬が歩き出した。

外ではメイドさんたちが声を合わせて「行ってらっしゃいませ！」と見送ってくれた。

ここから馬車で数日かけて目的地であるトリステイン魔法学院に向かうことになる。

俺を含め馬車の中は期待に胸を膨らませている。

まあ約1名ぺたんこだけどね。

・・・俺？俺は、ほら！大胸筋で結構がっちりしてますよ。

しかしカトレアさんが一緒に来るとは予定外だったな原作的に考えれば俺がいるだけでも結構道外しちゃった感があるのにね。

これからどうなるんだろうか？

神のみぞ知るってやつか・・・いや、あんなポケモン初代に苦戦しているような神にどうこうされたくはないな。

頑張ろう・・・とにかくどんな結果が待っていようと俺が出来ることをやろう！なんくるないさ！ってね。

「まあ、なるようになるか！」

「「「どうしたの？突然？」」」

3人が不思議そうにこちらを見た。

「いや、学院生活楽しみだなと思ってね。不安もあるけど、やっぱ

り期待の方が大きいし。」

「「「ええ！そうね！」」」

学院に着く数日の間馬車の中の話題が尽きることはなかった。

諸刃の剣は代償が大きいほど強いのか？（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

既存の魔法として『ブリズ』という移動速度アップ＋『フライ』の効果付きという魔法を出しましたがこれも勿論のことオリジナルですので。

因みに私の考えている現在のハルケギニアの速い生物をランキングにすると

１位　虚無の『加速』　時速？キロ（ネギま！の瞬歩に近いので音速並？）
２位　『ブリズ』を使用したカリン　時速１５０キロ
３位　風竜・ヒポグリフ　時速１００～１２０キロ
４位　『トランザム』状態で『フライ』を使ったヴァル　時速１００キロ
５位　火竜・ワイバーン・グリフォン・マンティコア　時速４０～６０キロ
６位　フネ・馬　時速３０～４０キロ（馬は競走馬でないためそこまで速くない）
７位　人　足の速い人が時速３０キロ前後

といった感じでしょうか。ゼロ戦はまだ動いてないのでこの時点では時速０キロです。動いたら時速４００キロ以上はいくんですけどね。
亜人は基本人と同じです。ただ精霊魔法でどれくらいスピードアップ出来るのかはそこにいる精霊の種類と数によるでしょうね。自分

の陣地だと大量の精霊と契約出来ているので強いけど、他のところではそうもいかないらいいですし。

『トランザム・ライザー』はヴァルの最強魔法です。これはいままで『ビームサーベル』がラインスペルでやっていたのでそれをスクウェアスペルに強化したらどうなるの？というところからコツコツ隠れて（威力が威力なのでヘタに近くに人がいると危ないと思ったため）試行錯誤していたものです。ただ魔力がフルでも１０秒しか使えない、出力制御不可なので使い所が難しいなどの欠点がありますけどね。

次は魔法学院の入学式です。

ご意見・ご感想があれば良ければ書いてみてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3743t/

弟が俺で姉がキュルケ

2011年12月12日06時46分発行